

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On democracy for Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 邦夫, Murata, Kunio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/311

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ISSN 1345-8604

神戸市外国語大学 研究叢書 第41冊

「日本人」と「民主主義」

—エッセー風モノグラフ—

村田邦夫 著

神戸市外国語大学外国学研究所

「日本人」と「民主主義」

—エッセー風モノグラフ—

村田邦夫

目 次

はじめに (1)~(3)	1
〈第一部〉 「民主主義」研究からみた「靖国」問題 (1) ~ (45)	6
〈第二部〉 「民主主義」モデルからみた21世紀の「日本」と「日本人」 の行方 (1) ~ (20)	115
〈第三部〉 「民主主義」へと向かう歩み（「民主化」）を「比較」とい う「意味」と「意義」 (1) ~ (22)	177
結びに代えて	237
あとがき	237
〈補論〉	239
(1) ~ (12)	

はじめに(1)

タイトルを「日本人」と「民主主義」にしたのは、私にすれば自然のナリユキであった。やっとその時がきたのだらう。私ももう年である。これまでの「研究」を、できるだけわかりやすく「翻訳」して、多くの読者に私の考えてきたことを伝えておきたいと切に思うようになってきた。去年の2月に拙著『覇権システム下の「民主主義」論——何が「英霊」をうみだしたか』（御茶の水書房 2005年）を世に問うてから、自分にしてはエラク「精力的」に書いている。とにかくいつ目が見えなくなるかわカラナイという恐怖がある。まだまだ伝えきれナイモノが私のなかに残っている。このままでは終われない。死ねない。その思いだけで書いているのかもしれない。年のせいなのか、書きながら腹が立ってくる。自分に対して、世間に対して、「日本」と「日本人」に対して。「日本人」の一人である、と私が自分自身のことを「自覚」して以来、正面を向いて歩くのがどこか気恥かしく難しいものとなってきた。いつかこの「汚名」をそそがねばならない。これが私の「研究」のバックボーンとなっている。「人道にたいする罪」、「平和に対する罪」で日本の軍国主義の指導者たちは「東京裁判」で裁かれたのだが、そのことは、実は、「日本人」も同様に裁かれたということを意味しているし、またそのように理解すべきだと、私は30過ぎた頃から思うようになってきた。それを少し「自覚」してから、自分の中に抜けそうで決してトレナイ棘（とげ）のようなものがあるのに気付くようになったのだ。

あれほど「健康」的で「健全」であった私はアレ以来もはや死んでしまったのだらう。気がついたときには、別のチガウ自分になっていたようだ。これも不確かな記憶なのだが、どうもそうであるラシイ。それは私の「研究」の歩みにも何か出しているようだ。そしてはっきりとそれを「自覚」したのは40過ぎたあたりだった。書くものも以来それを「自覚」したものと変わっていったのだ。私は「民主主義」についての「研究」をズット一貫してやってきたのだなあと、今から振り返ればそう思うのだが、そのことをハッキリ

と意識したのは30の半ばを過ぎた頃である。ある時、ある瞬間のことだったが、自分も「日本人」の一人として、一員として「戦犯」のマツエイだと「自覚」したのだ。私の研究テーマである「民主主義」によって、「文明としての民主主義」によって、私の父や母は裁かれたのだと思い始めるや、何かイシレヌものが私の五体を駆けめぐらせたのを感じたのだ。私は、自分自身の父や母から「東京裁判」を、そして「A級戦犯」を、そして「民主主義」を見つめ直していたのだった。そのとき、やっと自分の「研究」がハジマツタのを記憶している。当然そこにはイロイロと苦しい、また逆の意味で楽しい複雑な思いが錯綜していたのだが。

それ以来、私の「研究」は毎日が「発見」のレンゾクであった。そしていつも結論は、「日本人」の研究者が、「民主主義」ナルモノをはっきりと自分自身の掌中にツカンデナイとの私の思いであった。ミンナが「民主主義」について「ウソ」を言い続けている。その思いが強まればツヨマルほど、私の「研究」は、いつしか「日本人」のフツウの感覚からほど遠いところに来てしまったようだ。いつも「コンチクショウ」、「コレデモカ」との気持ちで訴え続けてきたが、私の思いはまったく読者には届かなかったのだ。まあ、仕方のないことだ。そしてこの「研究叢書」でもそれは再現されるのかもしれない。しかし、そうした歴史は繰り返したくないものだ。それでここでは私なりに工夫をしている。できるだけわかりやすく伝えたい、書きたい。まずはそれが一番大切だと考え、文体は話し口調で、随所に私なりのコダワリを演出したのでみた。「べらんめえ口調」アリ、その他ナンデモアリだ。とにかく最後までお付き合い願いたい。

それでは、イヨイヨ本論へとナルノだが、また〈はじめに(2)〉。にモデルことを断わっておきたい。それが終わると、また〈はじめに(3)〉となっている。このような調子で書いているというか、話しているので、まあそれなりに心の準備をして、お付き合い願いたい。

はじめに(2)

この研究叢書をまとめるにあたり、とくにこだわった点は、これまでの「民主主義」に関する私の研究をよりわかりやすく読者に伝えられる内容にまとめ直すということです。正直なところ、少々オーバーになるかもしれませんが、このままではやはり死にきれないとの私の思いがこの「民主主義」研究についてはあります。「日本人」は「民主主義」について十分に理解できていない。いやまったくわかっていない、今もこの思いは変わりません。それは最近私が目にした上坂冬子さんの靖国問題についての議論においてもあらためて感じたことでした。これについては少し後にふれるとして、先に話を進めます。よく「国際貢献」といったかけ声を耳にしますが、私は日本人や日本の国際貢献として、何よりも「あの戦争」と「民主主義」との関係についての理解を深めることではないかと日頃から思っています。手前味噌ながら、私の大学における講義は私自身の日常の国際貢献、地域貢献の日々の実践にほかならないとの自負があります。私は「日本人」としての「民主主義」の理解や学習の仕方があると考えています。「あの戦争」を語り継ぎながら、戦争の悲惨さや犠牲者の霊を慰めることは大切ですし、加害や被害の歴史についても学び続けていくことも重要だと思いますが、しかし同時に、それらが「民主主義」の「歴史」とまったく切り離されて理解、学習され続けていることに対しては深い失望を禁じ得ません。簡単にいいますと、「戦争」と、「民主主義」あるいはそれと結びついた「平和」とが関係づけられないままにいつも議論されてきました。たとえば、日本は「あの戦争」の時代から、「平和」な「民主主義」の時代へと戦後になって入っていったとか、「あの戦争」を二度と繰り返してはならない。この「民主主義」と「平和」を大事にしなければならないと。このような議論の繰り返しではなかったかと、私はみています。そこには、「あの戦争」と「民主主義」の関係、つまり「民主主義」になるために、ひょっとして諸国は「戦争」に巻き込まれるのではないのか、といった見方を検証しようとする姿勢がはじめからみられ

ません。私のこれまでの「民主主義」の研究は逆にそうした観点から行われてきたとあってよいものです。ここで述べている「民主主義」とは、「自由民主主義」のことです。

こんな風に二回目の〈はじめに〉は、「デス・マス」調となっている。まあ、気にしないことにして、次の〈はじめに〉行こう。

はじめに (3)

書き始めはいつでもそうなのだが、あれやこれやと思案してしまい先へ進まない。これが長く続くと今度はそれが楽しくなってしまう。非常にこまったことである。しかも今回はいつもに増して深刻な状況下にある。母の介護である。今この原稿をベッドに横たわっている母の横の机で認めている。とくに今年6月は病状は相当に悪化してしまい、今度ばかりはもうタメだと、私も覚悟したほどだ。それにしてもこの人はしぶとい。また何度目かの奇跡(蹟)のカムバックであった。同じ大正生まれの父も寝た切りになった母のそばで十年近く介護し続けている。二人はともに「あの戦争」世代である。私が生まれたのは昭和28年(1953年)であるから、戦争が終わって8年が過ぎている。今からふり返ってみると、まだ8年しかたっていなかったのだと思いを強くしてしまう。そこに朝鮮戦争(1950年~53年)を入れて考えると、5年ということだ。日本が直接に戦禍に巻き込まれることはなかったものの、大変な時期に生まれていたのだ。さらに日本は「あの戦争」後、GHQによる占領政策の下で独立国として生きることを許されないまま、1951年のサンフランシスコ講和条約の締結により、やっと翌年に独立国としての日本が復活したことを踏まえると、まだ6年しか経っていない。とにかく大変な時代に私はこの「日本」で生をうけて、「日本人」となったのである。とにかくあっという間に52歳となり、父や母のそばでの生活が長くなるにつけ、自分もいずれ母のように寝た切りとなり十分に話もできなくなる日もそう遠くはないとの思いを強く抱くようになった。と同時に、「研究者」として「学者」として生きてきた証となるものを何が残しておきたいとの思い

もまた強まってきた。もとより自分から偉そうに「研究者」であるとか「学者」であるとか口外するのも^{はばか}憚れるところだが、ここは開き直って挑戦したいものである。

この研究叢書において私は日本人にぜひとも「民主主義」について伝えておきたいことがある。それはもうこれまでに「民主主義」について何度となく主張してきたことだが、あらためてこの機会を使って述べてみたい。もっとも、私の主張したいことは多くの日本人には受入れ難いものだろう。なにしろ、高校の政経の時間で教えられている「普遍的人権」とか「デモクラシー」を批判し続けてきたのだから。おそらく戦争世代の父や母にも伝わらないと思いながらも、彼らの傍で書いている。このままでは死にきれないとの一念だけが私を突き動かしている。それにしても悲しいものだ。話している内容が全く相手にはわからないだろうと思いつつも、それでもひょっとすれば、なにかのきっかけで伝わるかもしれないとの淡い期待感をもってこれまで日々語ってきたものだ。絶望の中でモノを書いたり、それを話すことがこんなにも辛いとは、そうした感慨が年々に深まり、それを感じる自分自身にまた疲れていく。

そうしたなか、決意もあらたに私の「民主主義」論を以下に展開しようとするのは、やはり「日本人」としての私がなおまだ身体はどこかに残っているのだろう。また母の介護でずっと母と父の横にいることにより「あの戦争」世代の「歴史」が脳裏に浮ぶことも、その「日本人」を感じることに役立っているのだろう。私は30を少し過ぎて以来、どこかで「日本」と「日本人」にとっての「民主主義」論が存在してもいいのではないかと考えるようになった。「あの戦争」を経験した「日本人」だからこそ、つまり「侵略」による「加害」の「歴史」と核（原子）爆弾を世界ではじめて被弾した被爆の「歴史」をともに経験した「日本人」だからこそ世界に向かって訴えられる「民主主義」論や「平和」論があってしかるべきではないだろうか、と思案するようになったものだ。あまりにも私たち「日本人」は、「普遍的人権」であるとか、それと結びついて語られてきた「民主主義」であるとか、「平和」

であるといったものを、「日本人」の「歴史」と真正面から格闘させることなく、いわば「日本人」としての「身体」の中を無造作に素通りさせるような恰好で受入れてきたのではあるまいか。それで本当にいいのだろうか。大仏次郎のいう「カメレオンの人間」としての「日本人」の「民主主義」論が日本中を席捲することに私は異議を唱えたいのである。

〈第一部〉 「民主主義」研究からみた「靖国」問題

(1)

どこの「世界」にも「タブー」(禁忌)とされることが存在している。『毎日新聞』の「世界の目」(2006年7月10日前後?)でアメリカ合衆国でイスラエルを公然と批判したり非難する者は言論の世界から消え去る運命にあるといった趣旨の記事が目についた。おそらく今日の世界で「自由民主主義」(リベラルなデモクラシー)を批判したり非難する者はどこか頭の中身に問題があるとされるのが落ちだろう。私のこれまでの研究は「タブー」への挑戦であったといわざるをえない。そしてそのことは当然ながら無視される運命にあるものと覚悟してきた。しかし自分の研究が「タブー」に対する「挑戦」であると自覚するにつれて、「あの戦争」もまた「タブー」への「挑戦」であったと見るようになってきたのだった。そう考えてみると、私の研究は「あの戦争」とそれを遂行したとされる「A級戦犯」を擁護するものとして、「自由民主主義」(以後ことわりのない限りは「民主主義」と略す)を批判するものとして簡単に位置づけられてしまうといった危惧を抱いてしまう。とくに戦後の日本人の多くは「マッカーサー万歳」「マッカーサーは神様だ」、「民主主義」の世の中になって良かった」云々の大合唱をしていたことから、またその是非については問われないまでも、戦後の「民主主義」教育を踏まえるとき、私に対する見方は最初から容易に想像がつくというものだ。これもまた悲しい現実には変わりはない。

しかもさらにより一層高いハードルが目の前にある。研究者も含めて、多

くの人々は「民主主義」の国家と「ファシズム」や「軍国主義」の国家とは水と油の世界であり、各々がはじめから分離独立したかのように、あたかも別個のフラスコの中で形成、発展したとの見方をしている。研究者にあっても、「ノーマル」な世界と「アブ・ノーマル」な世界とを位置づけ、前者を「民主主義」の世界として、後者をそうした世界に反旗を翻したり、否定する「全体主義」の世界として区分しているのが一般的であり、政治学「世界」における「常識」となっている。そうした思考法に特徴なのは「ノーマル」とされる世界と「アブ・ノーマル」とされる世界とに存在する厳然たる断絶あり、「境界」の遮断である。その二つの世界の「関係」や「関与」性をみようと目がある存在していないのである。卑近な例を挙げるならば、フランス革命の前後の歴史、すなわち絶対王制の時代と「市民革命」後の時代の連続性とか関係性に十分な配慮をしない。また日本における明治維新以降の戦前、戦中の時代と戦後の時代の連続性と関係性を問おうとしない。中国の1949年以降の毛沢東の時代と1978年以降の改革開放政策の時代と今後展開していくことが予想される政治的「自由化」の時代との連続性と関係性についても同様である。またロシア革命以後のソビエトの社会主義体制とその崩壊後のゴルバチョフからプーチンへと続く体制との「連続性」と「関係性」についても同様である。

それゆえ何よりも問われなければならないのは、「ノーマル」と呼ばれている「民主主義」の「世界」と「アブ・ノーマル」と呼ばれる「非・民主主義」の「世界」との「関係」性である。たとえば「あの戦争」へと日本が突入していく際の日本の政治体制と、その戦争の相手国であったアメリカ合衆国やイギリス、フランス、オランダといった「民主主義」体制の「政治体制」間の「関係」についてである。はじめから「ノーマル」対「アブ・ノーマル」といった観点から両者を捉えるのではなく、従来そのように扱われてきた「ノーマル」と「アブ・ノーマル」を別の異なる枠組のなかで捉え直すことが大切である。そのためには、「ノーマル」「アブ・ノーマル」とされてきたものを測り直す「物差し」をつくらなければならないだろう。なぜなら、比

較する際に、あらかじめ「ノーマル」なものを設定してそこから「アブ・ノーマル」なものを決めていくやり方は当然だとしても、ここで問題となるのは、その「ノーマル」とされるものをどのようにして「ノーマル」と評価できるのかということである。

(2)

その際、私にはこの「物差し」なるものにこだわらなければならない大きな刺^{とげ}のある存在にたとえられる理由がある。それは私が「日本人」であり、「あの戦争」に敗北して、「東京裁判」によって裁かれた「国民」の血を引き継ぐものだからだ。その「東京裁判」で「日本」と「日本人」が裁かれた基準となった「物差し」こそが、「ノーマル」とされた政治体制としての「民主主義」であったのだ。それゆえ私のこだわりは当たり前だと自覚するのだが、どうも様子が違うのだ。いや違い過ぎるといった方が適切かもしれない。なぜなら私からすればほとんど確かめもしない、徹底的な論証もしないままに、「民主主義」を「ノーマル」な「物差し」(基準)とすることに、ほとんど「日本人」が満足しているように思われるからである。不思議なことに、これは政治(比較政治)学、国際政治学、国際関係論の「世界」においても該当するのだ。政治学という学問の「世界」に従事している研究者の多くは、「日本」と「日本人」がそうであったように、「連合国」を構成したアメリカ合衆国やイギリス、フランスといった「民主主義」の母国、「民主主義」諸国の「民主主義」に関する研究とその成果を後生大事にして、それに依拠し続けた姿勢をあらためようとはしない。「あの戦争」を経験した「日本」と「日本人」の「歴史」を継承しているとの自覚が残念ながら日本人の研究者には乏しいか、あるいは欠落しているように思われる。日本において「優秀」だとか「大家」と呼ばれる研究者の研究には、あの欧米産の、とくにイギリス、フランス、アメリカ合衆国の「市民革命」にその起源を求められる「普遍的」な性質や性格を見出すのは簡単なのに対して、逆に「土着的」な「地方的」なそれらを確認することは極めて困難である。換言すれば、「世界的」に注目される「日本人」研究者の「研究」は、その名声に反比例して「日本」

的色合いを薄めていく内容になって行くと言えは言い過ぎであろうか。

私がこのような思いを強めていった経緯として、今から数年前の出来事がある。それは私の心の中に一生消せない傷跡を残すと同時に、これまで私自身の「民主主義」研究とその学問的態度における甘さと愚かさを痛感させる経験であった。中国遼寧省瀋陽の北郊に柳条湖というところがある。瀋陽とはあの張作霖が日本の関東軍による列車爆破によって殺害された奉天のことであり、柳条湖とは1931年9月18日に始まる満洲事変の発端となった柳条湖事件のおこった場所である。そこに戦争記念館が建っている。江沢民が力を入れて造営させた施設である。文字どおり、中国共産党が主導した中国人民が日本帝国と帝国軍隊から中国国土と中国人民を解放したことを内外に知らしめるとともに国威発揚を図る文化的装置である。私はそこで不覚にも「ナショナリスト」としての自分自身の存在それ自体を清算しきれていないことを悟ったのだ。記念館の中をいろいろと回って外に出る頃には既に「日本人」であることを、これからも生きていく限り「日本人」であり続けることを自戒をこめて誓わざるをえなかった。この記念館が地球上にある限りオレはずっと下を向いて歩かざるをえない。なんてことだ。此畜生と力のない声で呟いていた。と同時に、誰にもいえないような、とんでもないと思われるようなことが脳裏をよぎったものだ。この記念館を跡形のないようにしなければと。そうもしない限り、私は大手を振って通りを歩けないのだと。と、その瞬間であった。また「日本人」になってしまったのだ。「東京裁判」で「平和に対する罪」、「人道に対する罪」という罪状の下に裁かれたのだと。そう考えるとこの私は実はもっと以前に、物心がついた頃には、そうした罪で裁かれた「日本人」の血を引くものとして、白日堂堂とニコニコしながら顔をあげて前を向いて生きていけなかったのだと。

それではなぜ私はそれに気がつかないままに、今日まで生きてきたのだろうか。それは私自身が直接には「あの戦争」にかかわらなかったからだろうか。私は政治学の研究者としてこれまで「民主主義」についていろいろと勉

強してきたつもりであった。どのような問題についても私なりの考え方や答え方を準備、用意してきたのだが、それにしてもあの記念館での出来事はまるで不意打を食らったようであった。記念館のあるコーナーでのことだ。

そこでは日本軍によって捕えられ処刑された中国共産党麾下であった勇婦烈士が顕彰されていたが、そこで彼女が私に語っているように思われたことが忘れられない。確かに彼女は私に話しかけていた。〈なぜあなたは私の前で日の丸の旗を持って、君が代を歌わないのですか。「国際人」であるかのように、「世界市民」であるかのように、私の前で振舞わないでください。私の怨みを、悲しみを真正面から受け取めてください。そのためにはあなたは未来永劫、「日本人」として生きてください。〉 そう彼女は伝えたのだ。

(3)

私はまたいろいろなことについて思いを巡らしながら、あらためて「民主主義」について自分自身の研究を深めていく必要性を感じていた。中国ではこの記念館の他にも北京の軍事博物館、日中戦争の発端となった盧溝橋事件の盧溝橋にある記念館をも訪れた。これらの戦争記念館でも同様に私は「日本」、「日本人」、「日本民族」といったことに思いをはせていた。いくら私自身が「日本人」とか「日本民族」といった「ナショナル」なものに拘泥しなくなっても、この記念館を訪れるたびに、この記念館によって私は「ナショナリスト」としての「日本人」、「日本民族」を構成する一員に創造されていくだろうと思ってしまったのだ。少しこの言い方は極端な誇張のように受け止められるかもしれないが、ここで私が述べたいのは、日本国内において「日本人」としての、「日本民族」としての教育とか、誇りについて教えられなくとも、ここ中国において十分に教えられてしまうということだ。しかも、それは日本の右翼勢力がよく好んでいうところの「自虐史観」を無批判に受容した結果としての素直すぎる反動としてつくり出される「ナショナリスト」としての「日本人」であるように私には思われる。21世紀の日本において、戦前、戦中は勿論のこと、1950年代、60年代と比べても、「ナショナル」な

ものを教えていくことは大変難しくなっている。なぜなら、「グローバル化」の時代のなかで「国民国家」（「民族国家」がまずつくり出され、その支配的力をもつ「民族」（エスニック・グループ）によって、「国民」がつくり出されていく）の維持とそれを担う「国民」の育成が期待できないような環境に置かれているからである。そうした間隙を縫うように、中国の戦争記念館の存在が日本の「ナショナル」なものを、「ナショナリスト」を育成する役割を担っている。皮肉といえば皮肉である。

ところでこの日本の「ナショナリズム」と中国の「ナショナリズム」とは一体どのような「関係」にあるのか、そんなことを考えてしまう。よく今の中国は「人権」を抑圧、否定して、「民主主義」に背を向けてひたすら経済発展に邁進していると批判、非難されている。付言すれば北朝鮮に対しても同様な批判、非難がされている。もっともここは経済発展からもほど遠い状況下にあるのだが。こうした中国や北朝鮮においては、「国造り」は大変に重要な国家目標である。「国家」が存続できないような状況において、そもそも「人権」も「自由」も「民主主義」も手に入れることはできない。国家の基盤、すなわち、国民国家、国民経済、国民文化が確立、発展もしないなかで、どうやって「人権」「自由」「民主主義」が確立、保証されるのだろうか。日本の「歴史」をふり返っても、そのことは一目瞭然ではないか。それなのに私たち日本人は、中国や北朝鮮の今の姿をみて、私たちの過去にはそのようなことはまるでなかったかのように、「人権」を抑圧しているとか、「自由」が欠如しているとか、「民主主義」が根づいていないといった批判、非難を繰り返している。逆にそうした批判、非難が平気でできるのは私たち日本人が「国造り」についての歩みについての流れを「学習」していないからだと私はみてしまう。これは厄介なことだが、非常に重要な問題である。それゆえ、もう少し後でこれについては論を展開してみよう。

それにしても、あれほど「日本人」とは、「日本民族」とは何たるかといった類のことを国の内外を問わず鼓舞してきた歴史をもつ日本において、それらがまるでほとんど過去のほんの一時の出来事であるかのように、21世紀

の日本からみえるのは一体どうしてなのだろうか。その日本とはまったく違って、現在の中国や北朝鮮は、かつての「日本」と「日本人」の歩みを、その程度の差はあるものの、髣髴^{ほうふつ}とさせるような歩みを示している。今の中国には、日本の1950年代、60年代のはじめの、そして北朝鮮にはまさに戦前、戦時中の「日本」と「日本人」の姿を垣間見るようである。それゆえ、私はこうした「ナショナリズム」の歩みを、「国造り」の歩みを、「関係」づけて見ることが大切になってくると主張したいのである。もう少し具体的にいうならば、日本の「ナショナリズム」と中国の「ナショナリズム」とを「関係」づけて論じてみたい。その際、そうした「ナショナリズム」の歩みを「民主主義」の形成、発展の歩みとも結びつけながら語ってみたい。

(4)

取留めもなくここまで書いてきたが、これまで述べてきたことを踏まえながら、もう少し掘り下げて議論を展開していくことにしよう。冒頭においてもふれたのだが、書きはじめはいつも迷ってしまう。その書き物は「研究叢書」として刊行される。その意味でやはりそれに相応しいスタイルがあり、書き方があるだろう。しかし今回は、私なりにこだわったやり方で書いてみようとしている。あまり従来のように「研究」とは、「叢書」とは、といった形式ばった、ある意味で型にはめ込んだ仕方とはとるまいと考え、ここまでそのような思いで「取留めもなく」書き続けてきたわけである。しかし、そうはいっても私のこれまでの研究書のスタイルがやはり、見え隠れているのも事実である。この著作において何を自分はこだわり続けてきたのか、例によっていつものごとく、また「民主主義」について、ああでもない、こうでもないあたかも荒野でただ一人泣きそうな情け無さそうな声で喋り続けて、訴えようとしているのは変わりのないところである。

ただし先にも述べたように、この研究叢書では、これまでの私自身の「民主主義」研究に関する、あるいは、研究を踏まえたさらなる「研究」を論じるのではなく、それらについての「感想」を述べてみたい。これは「研究」の周辺を अच्छに行ったり こっちに行ったりの「エッセー」的研究を、いやそ

んな曖昧ない方はよそう、「エッセー」を書いてみよう。そう思っているし、ここまでそのように私なりになんとか努力してきたのだが、何しろ自分でいうのもなんだが、小心この上なく、表面上は研究者のように装いながら、この歳まで自分は勿論のこと他の同業者、学生諸君を欺いてきたから、逆に、今さら地で行けばよいと自分を叱咤激励してもなかなか勝手が違って旨くない。ただここらでやっとエンジンが少しかかりそうなところである。それではまず何から話してみようか。「比較」がどうか、「民主主義」（「民主化」）の比較研究のあるべき姿とか方向性についてといった堅い、難しそうな話題はもうちょっと後の方にして、「日本」と「日本人」にとって避けて通れない「靖国」問題から始めることにしよう。いやはやこれも難しい問題だし、とてもじゃないが「エッセー」風にはおさまらないと思いつつ、重い腰をあげるとしよう。

(5)

「エッセー」と断りながら、〈序〉なんて付けてしまった。まあ勘弁願いたい。何しろ打っつけ本番で、次はどうしようと考えながら書いているので。

ここでは上坂冬子「経済同友会代表に問う。北城さん、靖国は商売の邪魔ですか 中国の意向に沿って隠忍自重せよ、とは方腹痛い」（『文芸春秋』2006年7月号）を取り上げて、そこでの議論を私のこれまでの「民主主義」研究から批判的に考察していこう。

〈はじめに〉でもふれてきたのだが、中国での戦争記念館での経験は私にはとても憂鬱ユウツツかつ疎ましいものであった。そこで遅蒔きながらも、私自身も「日本人」であり、「東京裁判」で裁かれた「日本民族」の一員であることに気付かされたと同時に、ここに来るまでなんの恥ずかしさにも思い至ることなく生きてきた自分自身に対して、恥を感じるやら、情け無いやらでどうしようもなかったのであった。記念館に入るまでそのように気持ちを抱くことなく過ごすことができたのは、私が「日本人」として生きてこなかったからであろう。もっとわかりやすくいえば、日本の、少なくとも幕末の「開国」以来の日本の「近代化」の「歴史」を知覚することのない「日本人」であっ

たからにはほかならない。このように言い切るのはいくらなんでも私自身に対してであるとはいっても、ちょっと言い過ぎると思うものの、それでも「あの戦争」を経験した「日本」で暮らす「日本人」であり「日本民族」なのだという「自覚」が欠如しているか、欠落しているのだ。そのことは同時に「民主主義」に対してもそうした自覚のないままに向き合っていたことを意味している。もっとも自己弁護のためにいっておくと、私のこれまでの「民主主義」研究が示しているように、「自覚」の欠如とか、欠落といっても、その辺の研究者や日本人よりは、あるいは自称右翼だとか、マスコミにおいて過激な「ナショナリスト」ぶりをしている人たちよりは、よほど自覚していると認めているし、そう自認してきたものだ。だが、それにしてもなのだ。

それだから、何度もいっているように、「そんなこと」で動揺してしまった自分が信じられなかったのだ。私のみるところ、戦後の日本人のほとんどは先に私が述べたような意味では、まったく「自覚」のないような「日本人」ばかりである。たとえば以前の著作において引用した松本健一さんのような人でさえも、戦後の日本が「民主主義」の世の中になったのはよかったといったことを述べていたのだから。少なくとも私からすれば、松本健一さんのような人には、夏目漱石が語っていたように、強いものと交際すれば、弱いものは強いものに従わざるをえない。良いも悪いもない。日本は敗けたのだから、「民主主義」の世の中になったまでだと、語ってほしいものだ。もっとも、いろいろな事情があり、状況も考えるべきだから、誰かがどこかで話したり、書いたものそれだけに注目して、解釈や注釈することは、ひょっとして見当違いのことをいっているかもしれないから、慎むべきかもしれない。ただ松本さんのような人でも上述したような見方を示したのだから、^{あと}後は推して知るべしだろう。当然のように戦後日本は「民主主義」の社会となって良くなったとか、「人権」や「自由」が保障されるようになって大変いいとか。またこうした発言とは逆に、戦前、戦中の日本では「自由」がなかったとか、軍国主義体制の下に国民は抑圧され続けていたとか云々。とにかくすこし前の「天皇陛下万歳」から「マッカーサー万歳」であり、見事といって

よいほどの「変り身」の速さであり、順応ぶりである。これはやはり「カメレオン」でしかできないような芸当ではないか。正直こんな「生き方」ではできれば遠慮したいものだし、このような「国民」であることを拒否したいのだが、どっこい弱いのがから、敗けたのがからそうもいかない。それゆえ下を向いて、苦渋に満ちた人生を歩いて行くしかないのだが、それもままならない。何しろGHQの占領下にあり、「民主主義」へと転換したはずなのに、どういうわけか、なお「占領」されていて、それゆえ「占領民主主義」の社会の下で、アメリカ合衆国の政治方針に従う限りでの「自由」、「人権」が保障されているといった始末である。それに反抗するものは、戦前、戦中の日本と同様に厳しく取り締まられるのだ。

(6)

突然だが、今のイラクをみると、日本との違いは歴然としている。未だにアメリカ合衆国の「民主主義」という名の「抑圧」に対して、「占領政策」とその「統治」の進め方に対して、公然と反旗を翻している。毎日どこかで「自爆テロ」がおきている。考えてみれば、あれほど戦前、戦中の日本において、「鬼畜」米・英とか、「欲しがりません、勝つまでは」とか、「一億総玉砕」と叫んでいたわけだから、今のイラクのように日本がなっていたとしてもおかしくはない。ところがだ。本当に日本の「知識人」はかしこい。そこを突かれると「プライド」が傷つけられると思ったのか、感じたのか、一切それについてはノーコメント。ただひたすらに、日本の「占領統治」がイラクなどとは比べものにならないほど迅速に進み、それによって世界平和の安定に日本は米国とともに貢献したのだとくる。やはり日本人としてのプライドがあるのだ。占領されていたはずの日本なのに、それをもう忘れてしまったかのように、米国とともにとか、米国と「同格」ででもあるかのように話をしてしまう。そもそも「プライド」とは何のために持つのか。自分を、自分の尊厳を保持するためではないか。それがどうも日本ではちょっと違うようだ。現実を隠して生きているのに、現実を直視しないままに、「虚偽」であるにもかかわらず、その虚偽のためのプライドとなっている。見苦しいし、

悲しい、辛い自分を、日本を、日本人をさらにそうした状態に置き続けてしまう。なぜ言わないのだろう。宗教間の対立とか、経済的貧困とか、あるいはサダム・フセイン体制下の問題とかをいう前に、「イラクの国民はそれでも立派だ」と。私ならまずそれをいう。と同時に、私自身の不甲斐なさと、あらためて「日本民族」のここぞという時の一貫性の無さ、実行力のなさ、決断力のなさ、それでいて外に向かって大きな声で威勢のいいことだけは言ってしまう夜郎自大な性格を今さらながら思い出してしまう。

もちろん、「自爆」して多くの人間を巻き添えにして殺してしまうことを礼賛しているわけではない。それゆえ「立派」などとは述べてはならない。確かにそうだ。それはよくわかっている。ただあれだけ米国との（米国だけではないけれども）、徹底交戦を叫んだわけだろう。またたとえ多くの国民が圧倒的な力をもつ日本帝国の軍事力に逆らって帝国日本の愚かしい軍事行動に異議を唱えることができなかつたとしても、またそれで赤紙一枚でイヤイヤながらも戦争に行ったのだとしても、それでも「自爆」してその帝国日本の愚かしさに反対しなかつたのだろう。ということは、戦後になってあの時はこうだったといくらいつても、仮にそうした言い分が「本当」であったとしても、戦時中に戦争を、米国との戦争を、たとえ不承不承なりとも支持して遂行したのも、それも「本当」だったのではないか。それならば、そうだとしたら、たとえ圧倒的な軍事力をもって占領されていたとしても、コロリと自分自身の「生き方」に対して、寝返るのはそれはいくらなんでも恥ではないか。恥を忍んだのではない。恥と感じたのではない。そのようなものとは一切まったく関係なく「軍国主義」の日本よりは、「民主主義」の日本の方がよいから、そちらを選択したのだ。おそらくそう考え、答えるのだ。そこにはまったくあの「自覚」とやらは存在しない。そのような「高尚」なものとは無縁だったのだろう。もし読者がすべてそのような人たちであれば、私の話は伝わらない。

(7)

話を本題の方へともどそう。「靖国」問題で私が一番大切だと思うのは、

それが「民主主義」の形成、発展の問題と切り離せないという点だ。ここでいう「民主主義」とは、日本のそれだけではない。またイギリスのそれだけでもないし、フランス、アメリカ合衆国のそれだけでもない。日本や中国や韓国やインドやインドネシアや、イランやイラクやトルコや、スーダンやナイジェリアや南アフリカ共和国や、ブラジルやメキシコやアルゼンチンといった世界のすべての諸国（諸地域）と、そこに暮らす人々によって作り出された「民主主義」という構造（仕組み）をいっている。いわば「一つ」の大きな「民主主義」の構造があるのだ。それが500年以上もかけて形成、発展している。今もその構造は発展し続けている。私たちが日本の「民主主義」とか、欧米諸国の、たとえばイギリスとか、アメリカ合衆国の「民主主義」という場合、そうした構造を構成する「一要素」として、すなわち、ある特定の国の、一国の「民主主義」として語っていることを忘れてはならない、と私はいいたいのだ。したがってそうした「一つの」構造で示される「民主主義」の形式、発展と、その構造を構成する担い手としての「一つの国」の「民主主義」の形式、発展との「関係」をみるのが重要となる。もう少し話をわかりやすくするために、ここで私の研究してきたことについて紹介しておきたい。

すぐ上でも指摘しているように、「民主主義」なるものを理解する上で私はまず「一つの」大きな、つまり「世界的」な、「民主主義」の構造が形成、発展してきたという「歴史」を念頭に置くことを強調しておきたい。たとえリンカーンのいうように、「民主主義」の「定義」を、「人民の、人民による、人民のための政治」だと理解するにしても、換言すれば、「民主主義」とは、すべての国民が政治に参加して、自由に発言し、投票できる制度であるというように考えるにしても、まずは私のいうように「単一の世界的な構造」としての「民主主義」なるものを大前提として議論をはじめたいのだ。理由はいたって簡単だ。リンカーンのいう「人民」、つまり「people」とは誰なのかを考えると、それは「国民」であることがわかる。ゲチスバーグでのリンカーンの有名な演説は南北戦争というアメリカ合衆国の内乱（内戦）の最中

におこなわれた。その内乱はまさにアメリカ合衆国という「国民国家」の^{カジ}楯取りを北部がとるか、南部がとるかをめぐる戦争であり、その戦争によって、「国民国家」の建設の在り方を、「人民」に問いながら、同時にその「人民を」、これまで以上に確固とした意識をもった「国民」へと創造するものであった。その「国民国家」とか「国民」はそれでは一体とどのようにしてつくり出されるのだろうか。またアメリカ合衆国においてなぜ南北戦争という内乱までおこしても「国民国家」の建設が求めざるをえなかったのだろうか。

勘のいい読者なら、また、「自覚」した「日本人」であるなら、このアメリカ合衆国の「南北戦争」なるものが、日本の「戊辰戦争」という内乱に相当することに気づかれるかもしれない。またそこからあの靖国神社につながる物語りがはじまることに気がつくだろう。忘れないうちにここで述べておくことがある。1648年の「ウェストファリア条約」なるものによって、以来今日に至るまで、国際社会において「主権国家」の地位が確認され、国際舞台において発言権を有するためには主権国家としての地位を獲得すべきことが第一要件となることが承認されたのだ。その「主権国家」の「主権」を国王が独占していた時代から、やがて国民が担ういわゆる「国民国家」の時代へと歴史は移っていくが、いずれにせよこの「主権国家」の地位獲得を各地域に住む人々は求めて、対内的、対外的に争いを繰り返していくことになる。先の南北戦争も、また戊辰戦争も、その性格上において変わりはないのだ。それゆえ、なぜ「戦争」とならざるをえないのかを考察しなければならない。

(8)

いずれにせよ、私は、「靖国」問題を「民主主義」の形成、発展の問題と結びつけて考えることを指摘したが、またそこから「主権国家」の問題へ、さらに「ウェストファリア条約」の締結「ウェストファリア体制」の成立へと至る問題に話はつながることとなる。「自覚」した「日本人」と私になるためにも、ここで私に少々お付き合いをお願いしたい。

私たちは「国家」の中で生きてきたし、また生きている。それはいわば

「空気」のような存在である。たとえ「グローバル化」の時代だの、「国民国家」の時代はもう終わったのだとの声をよく聞くようになった現在においても、なお「国家」は、「主権国家」は、21世紀中にその役割を、使命を終えることはないであろう。先進諸国においても、この日本においても未だにそうであるのだ。それに対して、中国や北朝鮮、さらにはインド、パキスタンさらにはあのアフガニスタンやイラクをはじめ、アフリカの諸国は、なお当分の間にわたり、「主権国家」の存在に加えて、これから「国民国家」として発展していく歩みを「国家」は辿らざるをえない。そのようなことを鑑みると、なおのこと私たちは、なぜかくも人類は「国家」に、つまり「国造り」にこだわり続ける歴史を継承してきたのかといった問題と向き合わざるをえないのだ。繰り返しになるが、「靖国」問題もまずはこうした「国造り」の、「主権国家」と「国民国家」の建設をめぐる問題と密接に関係しているのである。そしてそこから「民主主義」の問題とも関係してくるのだ。

議論をわかりやすくするためにここでまずは「ウェストファリア体制」なるものについて高校の「政治・経済」の資料を使ってみておこう。東京法令出版『2003 政治経済資料』によると、「ウェストファリア条約」の説明として次のようにある。「1648年に締結され、三十年戦争を終結させた条約。戦後ドイツにおいては各領邦諸侯に宗派選択権以外にも同盟締結権が認められ、中世ヨーロッパにおいて絶対的だった神聖ローマ帝国皇帝やローマ教皇の権威は失墜した。会議には延べ66カ国が参加し、「最初の国際会議」とも呼ばれた。(158頁。)

また、清水書院『2000資料 政治・経済』では、大きな見出し（「Ⅰ 国際社会と主権国家」）の下に小見出し（「Ⅱ ナショナリズムの発展と国際社会の誕生」）があり、その中で「1644～48年ウェストファリア会議～主権国家の確立」として、「30年戦争の締結にむけて開かれた会議。当時のヨーロッパの指導的国家がすべて参加した。この会議の結果ウェストファリア条約が結ばれ、ヨーロッパは、旧教国と新教国に分けられた。この結果、神聖ローマ帝国の皇帝とローマ法皇の権威が否定され、各構成国に主権が認められた。

ここに主権国家を中心とする国際社会が誕生した。(184頁。) ここからわかるのは、1648年の「ウェストファリア条約」によって、「主権国家」なるものが、国際社会の中心的構成主体となったという点である。

次に問題となるのは、なぜ「主権国家」としての存在が国際社会において必要とされたかということである。これについて、先の資料で紹介されている臘山政道『国際社会における国家主権』(講談社学術文庫)の一節をみてみよう。それは「⑤国際社会における国家主権」の小見出しがある中で引用されている。「政治的事実として国家主権が存在する理由は、その社会形成として国民社会を形成している人類が国家をその機関としてそれに対して種々のことを要求し期待していることに存する。その人々の期待するものが国家によって満たされなくなったとき国家主権の存在理由は喪失する。これが政治的事実としての国家主権の意義である。」臘山のこのような説明はわかったようで、正直なところ今ひとつわからない。ここで今日の日本が韓国や中国との間でその領有をめぐり、すなわち「主権」の所在をめぐり争っている竹島や東シナ海のカス田地帯を念頭に置いて考えてみよう。

たとえば、なぜ私たちは、「竹島」にこだわるのだろうか。その領有権、つまり日本の主権に、国家主権になぜこだわるのか。先の臘山に従うならば、その理由は、「人類が国家をその機関としてそれに対して種々のことを要求している」からだということになる。だがこの場合は、「人類」といってしまふとあまりにも抽象的すぎるし、「人類」がそれではなぜすべて「国家主権」を要求し期待しなければならないのかを、その理由考えなければならぬだろう。また「竹島」にこだわるのを、仮に「種々のことを要求し期待している」からだといってみても、その「要求」とか「期待」の中身は、「人類」のなかでもやはり特定されざるをえないし、ましてや日本の中でもその「要求」と「期待」についての「強度」は、韓国と同様に、各々の環境——たとえば「竹島」に近いか遠いか、直接的利益を得ているかそうでないか等々——によって異なるであろう。さらに、はじめから「人類」を構成するすべての人が、「国家主権」を同じレベルで必要としたとはやはり考

えられないだろうし、「人類」の中でも、特定の誰かであったとみる方が自然であろう。付言すれば「種々のことを要求し期待している」といっても、最初はより具体的な何かであったと考えられるだろう。

(9)

なぜ領有権に、すなわち「国家主権」にこだわるのか。いろいろな答え方があるものの、否定できない一つの見方として、「領有権」を、「国家主権」を当然とする、あるいは当然とさせるそうした「空間」のなかで生きてきた、生きているということが指摘できよう。まさに「文化」となっているのだ。そしてそれが「当然」としてみなされるようになったのが、1648年の「ウェストファリア条約」の締結によってであった。少々まわりくどくなかったが、臘山の国家主権についての説明をまつまでもなく、いやもっと露骨にいうと、まったく彼の説明と関係なく、この1648年頃には既に、国際社会で発言権をもつためには「主権国家」としての資格を有していなければならないとの見方が支配的なものとなりつつあったことだ。それ以来、主権国家を当然とするような「歴史」のなかでわたしたちは生きてきたわけだから、あらためて、なぜ国家を、主権国家をわれわれ「人類」が求めるようになったのか、その理由を考察しなければならないのだ。

(10)

それではここで話の都合上どうしても必要なので、私のモデルを紹介しておきたい。すぐ上でもみたように、1648年以来、「主権国家」としての資格をもつことが、国際社会の中で発言権を確保するために重要になったと述べたのだが、それではどの国においても、どの地域においても、そうした「主権国家」としての地位を手にすることが可能だったのだろうか。これについては、拙著でも指摘したので、ここに再度そのくだりを掻い摘まんで紹介しておく。それをみればわかるように、臘山の主権国家の必要性についての説明がいかにピントハズレなものかがわかるだろう。こんな批判めいたことを、いや批判そのものだが、あまりエッセーでしたくはないが、また既に亡くなられた人を、その意味で反論の余地もないことをわかった上で批判するのは

卑怯この上もないのだが。何しろ天下の臘山先生だったと思われるので、浅学菲才の若蔵だと、いや申し訳ないけど年だけはいかんせんとり過ぎているけど、「世間」の人はおそらく私を、私のいうことなど相手にしてくれないだろうから心配ないかもしれないが。ついでにここで前もって読者をはじめ、私によって批判される羽（破）目に直面する諸先生方にもご寛恕を乞いたい。とくにもうこの世にいらっしゃらない人たちにはこの他、ご勘弁をお願いしたい。

それではもとに戻ろう。拙著『覇権システム下の「民主主義」論 何が「英霊」をうみだしたか』（御茶の水書房 2005年）の第二章（90～91頁）のところで、次のようなことを書いている。ウェストファリア条約から140年～250年近くも経過した時点で、主権国家として存在していたのはわずかに16カ国であったということだ。つまりこの地点において「人類」とは、「人類」を構成したのは、16カ国の構成員であったということになってくる。その他のものは、植民地や従属地であるとか、あるいはなお主権国家の建設途上にある「人類」を構成していた人々であったということである。つまり「国家主権」の必要性について先に示した「種々のことを要求し、期待している」といった抽象的な理由ではない「理由」が見えてくるのだ。すなわち、あるところでは国家主権を主張できるのだが、別のところではまったくそれを主張したり、要求することができない。またあるところでは、このような両者の中間に位置している状態にあるといったことが想定できよう。そうした仕組みのようなものが存在していると考えられるのではないか。もちろん、はじめからそうした仕組みのようなものができているなどと私はいっているわけではない。ただし、確かに、そのような仕組みはつくられてきたと私はみているし、そのように主張してきたし、またそうしたいのだ。それでは一体どこの誰が、そのような仕組みを作り出せる「力」をもつことができたのか。またどのようにして。それが可能となったのか。

また読者に「ウソ」をいっているかもしれない。エッセイといいながら、少しマジになってきた。自分でもわかる。肩に力が入ってきたから。そうい

う時は、少し気分転換がいいのだが、いやここは大事なところだから、もう少し、私にお付き合いをお願いしたい。

(11)

ここで突然だが、「帝国主義」という用語を使って話を進めなければならない。申し訳ない。「帝国主義」なるものを『広辞苑』で調べると次のように説明している。「帝国主義」(imperialism) ①軍事上・経済上、他国または後進の民族を征服して大国家を建設しようとする傾向。②狭義には、19世紀末に始まった資本主義の独占段階。レーニンの規定によれば、独占体と金融寡頭制の形成、資本輸出、国際カルテルによる世界の分割、列強による領土分割を特徴とする。この「定義」からは、わかりにくいのは少しお許し願うとして、あまりピンとこないと思われるが、私が「ウェストファリア体制」の下での「主権国家」の話をしているときに、なぜ「帝国主義」についての話へと読者を導いたのか、まずは②よりも①の「定義」を頭に入れてほしいのである。ここでもう少し我慢してお付き合いをお願いしたい。『ロングマン現代アメリカ英語辞典』で今度は「帝国主義」を引いてみる。

<imperialism>

- 1 a political system in which one country *rules* a lot of other countries.
- 2 the desire of one country to *rule* or *control* other countries
 《DISAPPROVING》 methods by which a rich or powerful country can *influence* poorer countries or *get* political or trade *advantages* over them (なお、イタリックは筆者による。)

ここで話の展開上、「植民地」(colony)についても辞書を引いてみる。

「植民地」(colony) ある国の海外移住者によって、経済的に開発された地域。本国にとって原料供給地・商品市場・資本輸出をなし政治上も主権を有しない完全な属領。

<colony (colonies)>

- 1 a country or area that is *ruled* by a more powerful country, usually

one that is far away. (なお、イタリックは筆者による。)

このように、「帝国主義」とか「植民地」の意味を調べたのは、少なくとも、「強い」国 (country) によって支配 (rule) されたり、影響力の下に置かれたりした「弱い」国 (country) は、属領として主権を保持できないということを確認するためであった。その意味で、1648年のウェストファリア条約の締結によって、「主権国家」が国際社会における構成主体として認知されるようになったというとき、そのような「主権」も手にできないで属領となる国や地域が存在していたかどうかを確認しなければならない。その確認は既に中学校や高校で学習した歴史によっても存在していたことを知ることができるのだ。すなわち、「主権国家」が一方につくられていく中で、「帝国主義」とか「植民地」という「定義」からもうかがえる「支配－従属」の「関係」がつくられているという点はぜひとも押さえておく必要がある。「地理上の発見」にはじまる「大航海時代」以降の歴史はまさにスペイン、ポルトガルを皮切りとして、オランダ、イギリス、フランスといった西欧諸国が絶対王制や「市民革命」を経た政治体制の下で「主権国家」としての基盤を確立、発展させていく歴史であった。

(12)

ところで、私はそうした歴史の中で以下のような図式で示される「関係」が形成、発展していくようになったとみている。その「関係」の成立の中で実は「主権国家」が、「民族国家」が、そしてそこから「国民国家」がつくり出されていくと同時に、そうした「主権国家」や「国民国家」の建設の歴史がまたそうした「関係」がつくり出されていったと、私はこれまで語ってきたのである。その図式とはこうである。その一番目は、[経済発展 → 民主主義の発展] - ①と示す。その次に [経済発展 ^(X) → 民主主義の発展] - ②として、そして三番目として [経済発展 ^X → 民主主義の発展] - ③として描いたものである。また^{あと}後で説明するが、矢印 (→) の上の (X) は、経済発展から民主主義の発展へと十分に導かれていない状態を、また X は民主主義の発展の可能性がない状態を意味して使っている。①で描く「世界」の意味

するところは、「衣食足りて(「経済発展」が実現して)、礼節を知る。(「民主主義の発展」が実現する。」という内容に他ならない。わかりやすくならべてみる。

[経済発展 → 民主主義の発展] — ①

[経済発展^(x) → 民主主義の発展] — ②

[経済発展^x → 民主主義の発展] — ③

あくまでもこの①②③はある程度の期間というか年月が経ってからの結果として目に見えた「歴史」を描いているのであって、はじめからすべてこのように分類されるわけではない。ここで私がみなさんに伝えておきたいのは、ある国が①のような歴史を経験していく上で必ず②、③の図式で描かれるような国との「関係」が存在していたということである。それは、②においても、①と③との「関係」が、③においても、①と②との「関係」が存在することによって、②で描かれる、③で描かれる国や地域となっていたということである。たとえば、①のように[経済発展 → 民主主義の発展]といった国とその歴史がつくられていくためには、必ず、[経済発展^(x) → 民主主義の発展]のように、また[経済発展^x → 民主主義の発展]のように図式で示される国や地域の存在が必要不可欠であったという点である。もう少しわかりやすく述べるならば、すなわち、二国間の、二地域間の「関係」で描くならば、①と③の図式に示される国とその歴史はいつも以下のような図式で描かれる「関係」が成立しているのだ。

[経済発展 → 民主主義の発展] → [経済発展^x → 民主主義の発展] — ④

この④の図式を使ってイギリスとインドとその歴史を考えてみたい。イギリスを仮に左のように[経済発展 → 民主主義の発展]の図式で描くとすると、インドは右側のように、[経済発展^x → 民主主義]の図式で描かれる。このように描かれる「関係」は、実際に目に見える形で、17世紀から20世紀半ば頃まで続いていたのだ。

もちろん、こうしたイギリスとインドとの「関係」は、イギリスがいわゆる絶対王制の時代から「市民革命」を経験して、そしてそれからなお300年

以上にわたって続いていったわけなのだが、その間に、先の図式で描かれる「関係」が次第次第にはっきりとした形となって作り出されていったのである。このような「関係」をつくり出していくために必要とされたものがまさに「帝国主義」として理解されるものなのだ。これについてさらに論究していく前に、ここでもう少し立ち戻って、先の「帝国主義」について考えてみよう。いわゆる「大航海時代」の幕開けによってまずスペイン、ポルトガルが世界の頂点に君臨するようになった。「覇権国」の誕生だ。この「覇権国」を頂点として、他のヨーロッパ諸国がその後塵こうじんを拝するように、従っていき、そしてそのさらに後の方に、アジアやアフリカ、ラテンアメリカなどの地域や大陸を構成する国や地域が仕えていく、勿論それは仕えさせられるようになるわけだが、そのような「関係」が形成、発展していく契機となったのがまさに「帝国主義」と呼ばれる「支配-従属」関係であったのである。これを図式で示すならば、やはり先述したように①②③の図式を使って示すならば、次のように描くことができるだろう。

[経済発展 → 民主主義の発展] → [経済発展^(x) → 民主主義の発展] → [経済発展^x → 民主主義の発展] (なお、共時態モデルである。)

これを便宜的に左の図式の「世界」を、「覇権国」を頂点とする当時の先進諸国として、一番右の図式で描かれる「世界」を同様に当時の後進諸国として、この時代においては後進諸国のほとんどが植民地や従属地の属領地であったが、またこの真ん中の「世界」を当時の中進諸国として理解している。なおこの図式は先にも示したように、「共時態」モデルであるので、次のように理解できる。その説明の前に、左側の図式をAとして、右側のそれをCとして、そして真ん中をBとして位置づけ解説しよう。

(13)

またまた読者のみなさんにはここで謝っておかねばならない。またややこしい話となりそうだ。それでもこれまでの私の書いてきたものと比べれば、

それは比較にならないほどわかりやすくなっている。いや、なりつつある。もう少し、ご辛抱のほどをお願いしたい。それと、この話のくだりは、あくまでもあの人の、ええと、誰だったか、あの人の、ああ今また思い出したのだが、上坂冬子さんの「靖国」についての論考を手がかりとして、上坂さんの議論の問題点がどこにあるのか、さらにそれをとおして、日本の「靖国」を護持しようとするいわゆる「右翼」的と呼ばれる人たちの論考の問題点がどこにあるのかを、読者とともに考えていくという「本題」から派生したものだということを、ここでまた確認しておこう。私は以前も拙論を書きつつ、これじゃまるで政治学の「世界」の中里介山であり、「大菩薩峠」みたいだと自分自身に対して苦笑したのだが。もっとも急いで言っとかねばならない。中里さんに失礼だったと。

ここからさらに気を引き締めて「帝国主義」とその問題について考察していこう。ここから [経済発展 → 民主主義の発展] の経済発展を、経に、民主主義の発展を、民に略してみる。それゆえ、先の図式 ($\overset{A}{[経済発展 \rightarrow 民主主義の発展]} \rightarrow \overset{B}{[経済発展 \overset{(\times)}{\rightarrow} 民主主義の発展]} \rightarrow \overset{C}{[経済発展 \overset{\times}{\rightarrow} 民主主義の発展]}$) は、次のように省略した形となる。 ($\overset{A}{[経 \rightarrow 民]} \rightarrow \overset{B \overset{(\times)}{}}{[経 \rightarrow 民]} \overset{C}{[経 \overset{\times}{\rightarrow} 民]}$) それではこの省略した図式をもとにさらに話を進めていく。ここでこの図式で示される「世界」は「共時態」モデルであると述べた。『広辞苑』で「共時態」をみると、次のようにある。

「共時態」(synchronie<フランス>ソシユールの用語。言語学だけでなく、一般に科学が対象とする現象を時間の流れに沿って変化するものとして見る通時態に対し、時間軸上の1点において捉えた状態を指す。

つまり、A, B, Cの「関係」を、すなわち、「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」によって織り成されて形成、発展してきた構造(仕組み)を、「時間軸上の1点において捉えた状態」として取り出したときに、 $\overset{A}{[経 \rightarrow 民]} \rightarrow \overset{B \overset{(\times)}{}}{[経 \rightarrow 民]} \rightarrow \overset{C}{[経 \overset{\times}{\rightarrow} 民]}$ の図式に描かれる「共時態」の構としてみるができるのだ。それゆえ、この「世界」では、[Aの経 → Bの経]、[Aの経 → Cの経] [Aの経 $\overset{(\times)}{\rightarrow}$ Bの民]、[Aの経 $\overset{\times}{\rightarrow}$ Cの民] の

図式で描かれる「関係」（「世界」）がつくり出されているのである。

また、この図式で描かれる「世界」を今度はCの方から見るとき、以下のような「世界」となる。

$[C \xrightarrow{x} \text{民}] \rightarrow [B \xrightarrow{(x)} \text{民}] \rightarrow [A \rightarrow \text{民}]$ の図式で描かれる「世界」である。それゆえそこからまた、 $[C \text{の} \text{経} \rightarrow B \text{の} \text{経}]$ 、 $[C \text{の} \text{経} \rightarrow A \text{の} \text{経}]$ 、 $[C \text{の} \text{経} \xrightarrow{(x)} B \text{の} \text{民}]$ 、 $[C \text{の} \text{経} \rightarrow A \text{の} \text{民}]$ といった図式で描かれる「世界」（「関係」）がつくり出されているのだ。そして、これがまた重要なのだが、 $[A \text{の} \text{民} \xrightarrow{(x)} B \text{の} \text{民}]$ $[A \text{の} \text{民} \xrightarrow{x} C \text{の} \text{民}]$ 、さらに逆からみれば、 $[\xrightarrow{(x)} C \text{の} \text{民} \xrightarrow{(x)} B \text{の} \text{民}]$ 、 $[\xrightarrow{x} C \text{の} \text{民} \rightarrow A \text{の} \text{民}]$ といった図式に示される「世界」がつくり出されているわけだ。これらのことは一体なにをわれわれに教えているのだろうか。この点について考えてみよう。

(14)

今日はこれから、今から、2006年7月28日の朝9時過ぎから書き始めるのだが、もし何も話さなければ読者にはこの前の段落とこれから後の段落の内容に至るまでに、一日間の「空白」があるなんてことはわからないことだ。やっと母の栄養の補給（朝食）と薬を胃にとおしたチューブへと流し込んだところだ。その途中に、少し朝刊（『愛媛新聞』2006年7月28日付け）に目をやると、そのB面で「核心評論」と銘打った論説があった。そこでは、「丸山真男没後10年」との小見出しがあり、少し大きな見出しとして「各国で思想解説の試み」とあり、共同通信編集委員の会田弘継さんという方が紹介していた。

ああ、そうそう、またここで読者に謝罪である。勝手に内容を少し変えている。昨日の続きを今日もと頭の中である程度のところ、構想みたいなものを練っていたのだが、ここで少し展開を変えてみる。もっとも「エッセー」だとすればそれもまた楽しからずやではないか。これまでが、「エッセー」だと断りながら、〈序〉だとか、その（一）、（二）、（三）——というように、一つのテーマをあまりにも長く引っ張り過ぎているように読者には思われるかもしれないから、この「中断」も一息、いや二息ついて丁度いいかもしれ

ない。しかし、あくまでも「小心かつ不器用なぱっとしない研究者」でいることが唯一の取得（柄）と思っているので、論の展開の一貫性だけは見失うことのないように心がけるのでご安心願いたい。

なぜここにこの「丸山真男没後10年」の記事を紹介したかは、私がこれまで述べてきたものとの、その内容との、まさに「筆舌に尽し難い」ミゾというか、キョリを、読者に示してぜひとも考えてもらいたいからなのだ。記事に次のようなくだりがある。引用しておく。〈丸山は敗戦翌年の1946年に「超国家主義の論理と心理」で論壇デビュー。日本軍国主義の背景には「個人」が確立せず民主主義が根付かなかった日本「近代」の未成熟さがあつた、とする明快な視点で喝采（かっさい）を浴びた。〉会田さんは、このくだりをドイツ・ハイデルベルク大学のウォルフガング・ザイフェルト教授という人の口を借りて書いている。その内容については、すなわち日本の軍国主義の背景についての丸山の見方についての紹介については、多くの日本人研究者も異論はないと私はみている。しかし、丸山は、またその丸山に賛同した研究者も、この教授も含めて、またおそらく、このような言い方をしたくないが、いかんせんこの記事を書いた人の「民主主義」論を読んだことでもないのだからわからないのではあるが、会田さんも、答えてこなかったのではないか、問いただそうとしなかったのではないか。次の問いに。そう、「個人」というものが確立して「民主主義」なるものが根付くためにはどのような「歴史」を歩めばよいのか。どうすれば「民主主義」なるものが実現するのか。この問いである。「民主主義」は、「人権」や「個人」を大切にする「民主主義」は、一体どのようにして作り出されてきたのか、この問題に対して、これまでほとんどといってよいほどに、「日本人」は向き合えないできたのだ。そのくせ、いつもきまって、丸山が論じたことを何百回、何千回と言ってきたのだ。つまり、最初に「民主主義」とはこうだという「定義」をもとにして、そこから日本の「歴史」は、「近代化」の「歴史」は「正常」ではない、おかしいとみてきたのだ。その「定義」されている「民主主義」が、それではどのような「歴史」の中で、「近代化」の「歴史」のなかで、

つくり出されてきたのかという点についてはまったく不問にし続けてきたのである。

(15)

ところで、この会田さんは、米国の代表的社会学者ロバート・ベラーを引合いに出しながら、また次のように述べている。すなわち、＜日本では丸山を「近代主義者」と呼ぶが、丸山は英米型近代を尺度に他国の発展度を測る「近代化論者」とはまったく違ふとベラーは言う。丸山は、フランスの思想家トクビルと似て近代社会に批判的で、むしろ混乱しているが活力ある「近代初期」にひかれたというのがベラーの丸山理解だ。＞ 私は会田さんに質問したいものだ。それでは丸山さんのいう「民主主義」はどここの「産」なのだと。英米産ではないのか。英米仏産ではないのかと。「英米型近代を尺度」にしない「民主主義」とは一体なんなのか教えてもらいたいものだ。いずれにしても、会田さんもこのような記事を書くためには、「民主主義」なるものが、一体どのようにしてつくり出されてきたのか、あるいは、私たちはどのようにして、どのような「近代化」の「歴史」のなかで、「民主主義」なるものを、「個人」が確立した「民主主義」社会をつくりだしてきたかの問いに答えられなければならないはずだ。丸山が＜混乱しているが活力ある「近代初期」にひかれた＞とベラーが丸山を理解していると会田さんはいつているが、それではまた尋ねてみたいものだ。「混乱しているが活力ある」という「近代初期」において、「民主主義」なるものはどのような姿、形をしていたのかと。「近代中期」、「近代後期」という区分があるとしたとき、「民主主義」は各々どのような姿、形をしているのかと。残念ながら、この問いかけに誰もおそらく答えられないのだ。私が十分に、答えられないにせよ、この問いかけに対しても答えられるような思考の枠組みを、「民主主義」理解のための枠組みをこれまで思案してきたという自負があるので、——相変らず偉そうな物言いで、本当にあきれほど馬鹿な私だと思うが——ぜひともこの先もなんとかお付き合いを乞いたいものだ。ああ、それに丸山先生、申し訳ありません。丸山、丸山と呼捨てにして、ご容赦のほどを。

少し「中断」して、今日の朝刊の記事をここまで紹介と解説してきたが、正直あまりにもヒドイとしか言いようのない「民主主義」理解なのだ。ここでまた思い出した記事があるのでそれを紹介しておく。これも『愛媛新聞』（2006年5月4日付け）で、それもまた共同通信編集委員の土屋美明さんという人の論説「(国造りの理念を示せ)」ですから、何か愛媛新聞や共同通信者にお前は恨みでもあるのかと思われそうだが、続けよう。ごくごく簡単に要約すれば、日本国憲法にある「平和国家」としての特徴を生かして「国造り」を考えるべきことを説いているものだ。私がそこで注目したのは記事にあった以下のくだりであった。「西欧で最初に憲法が作られたのは、国王の専政から市民を守るのがきっかけだった。暴走しがちな国家を縛ることこそが憲法の役割とされた。個人の内心の自由に干渉したり、国民が守るべきことを数多く列挙するような発想は、歴史に逆行している。」ここにある土屋さんの見方は、別に土屋さんだけでなく多くの人々も納得する内容だろう。これにまた私は異議を唱えたい。というよりは、少し、もう少し納得する前に考えてほしいのだ。それについてはすぐ後に述べよう。

ところで、「中断」する前の私の例の「主権国家」や「ウェストファリア体制」の話から続いたあの図式を思い出してもらいたい。あの省略形で示した $[\overset{A}{経} \rightarrow 民] \rightarrow [\overset{B}{経} \overset{(\times)}{\rightarrow} 民] \rightarrow [\overset{C}{経} \overset{\times}{\rightarrow} 民]$ で描かれた「世界」である。これをもとにして、先の新聞の記事にあった丸山真男の＜「個人」が確立せず民主主義が根付かなかった日本「近代」の未成熟さ＞と、すぐ前で取り扱った＜西欧で最初に憲法が作られたのは国王の専政から市民を守るのがきっかけだった。暴走しがちな国家を縛ることこそが憲法の役割とされた。＞とをさらに考察してみたい。もう一度わかりやすくいうと、この記事の紹介した内容を、私のモデルで描いた「世界」と結びつけて論を掘り下げていきたいのだ。

(16)

それではここで、日本の「開国」前後から話をはじめてみたい。丸山のいう＜「個人」が確立せず「民主主義」が根付かなかった＞いわゆる「超国家

主義」の「論理」と「心理」がつくり出されていたとされる戦前、戦中の日本の「起点」として、この「開国」を私は位置づけることができるとみている。私は、その「開国」に際して日本が押し付けられたいわゆる「不平等条約」の問題から、まずは論を展開してみたい。

1853年にペリーが浦賀沖に「出現」してからその翌年について日本は「鎖国」から「開国」へとその進路を転換していったのだ。そして、1854年、58年に締結した条約によって、列強に対して「治外法権」を認めさせられ、また「関税自主権」を奪われる、そうした事態に直面したのであった。いわゆる「不平等条約」と呼ばれるものである。私はこの「治外法権」、「関税自主権」といったものをもっとわかりやすい言葉に、用語に置き代えてみたいのだ。「治外法権」を『広辞苑』でひくと、「①外国の領域内にいてその国の法律、特に裁判権の支配を受けない特権。～②領事裁判権の俗称。」とある。要するに相手方に対して自分の「勝手さ」を認めさせる権利ということができるだろう。相手の「世界」があるにもかかわらず、まるで自分の「世界」の一部であるかのように行動を許される「権利」とでも位置づけられよう。これをもっとわかりやすくいうと、政治的自己決定権とでも言えるかもしれない。政治的に自分が、「他人の世界」であろうとも、あたかも「自分」の「世界」の出来事として決定する「権利」として、または「権力」として位置づけてかまわない。もっと一般的に理解される言葉を使うならば、「政治的自由」としての「権利」である。同時にそれは、「自由」な「権力」であることを意味しているわけだ。つまり日本は「開国」によって「政治的自由」としての「自己決定権」を、その「権利」としての、「権力」としての両方の側面をもつ「自己決定権」を、くどい言い方で恐縮だが、「権利」としての、「権力」としての「政治的自由」を奪われたということなのだ。誰がそれでは奪ったのだろうか。まさに丸山さんの言葉を使うと、「個人」が「日本」よりは確立して「民主主義」が根付いていたように思われたアメリカ合衆国やイギリスやフランスやオランダによってである。もちろん「列強」の中にはそうではない諸国もふくまれていたが、ここでの問題はそうした諸国

ではない。それではなぜなのか。なぜ「個人」が確立して「民主主義」が根付いている、少なくとも「日本」より先にそういう「歴史」を歩んでいた諸国が、しかもそれら諸国は「市民革命」の母国とされ「普遍的人権」というさまざまな「自由権」を謳っていたはずではないのか。なぜそうした諸国が、日本にはそうした「自由」を許さなかったのか。これを問わねばならないのだ。

くどいけどまた続けていっておく。大事な話だ。彼らは「不平等条約」を締結したと、どの程度「自覚」していたのだろうか。まさか彼らが「世界」に向かって、自分たち「文明」圏の国がそんな「不平等」な状態に日本を追いやるような「条約」を、結んだなどとは言えないのではないか。とすれば、「不平等」、「不平等」といっているのは、それが「通用」しているのは、この「日本」の中だけではないのか。またなぜ「治外法権」として理解してきたのか。確かにそのような「条約」なのだが、それだってれっきとした、正真正銘の「政治的自由」権ではなかったか。なぜそのように「日本人」に教えてこなかったのか。はっきりその理由がわからないのだ。それゆえ、今度は逆に日本がどこかの国にそうした「不平等条約」を押し付けたときに、それは「政治的自由」の権利を奪っているのだ、「普遍的人権」を奪っているのだ、許していないといった大切なことを理解できないままにきたのではないか。またさらにそこから、いわゆる「普遍的人権」とか「自由」(権)といったものが、そのような「カラクリ」をもつ「仕組み」のもとで存在している、つくられていることを理解できないで今日に至るまできたのだと、私はみているのだ。

(17)

同様に「関税自主権」についても言及しておこう。同様に『広辞苑』でその「意味」というか「定義」をみると次のようにある。「国際法上、一般に国内事項に属する関税について、独立国家が任意に規律し得る権利。日本では安政の仮条約(1858年)以来、1911年(明治44)まで、認められていなかった。」ここにもあるように、日本は長い間にわたり「独立国家」とは完全に

いえなかったのだ。つまり「主権国家」として十分にその「主権」を、換言すれば、「自己決定権」を自らの手に握っていなかったということになるのだ。つまりここにも垣間見ることができるのだ。[A→B→C]の図式で描く「世界」の中で、この「主権」をめぐり、「自己決定権」をめぐり、つまり「自由」をめぐりいつも「争い」が展開しているということ。つまり日本が幕末期の1858年にこの「関税自主権」を奪われたということは、つまり認められなかったということは、「経済的」な「自己決定権」が、「権利」の面でも、また「権力」といった面においても、認められなかったということだ。逆にいうと、その「経済的自己決定権」を、「経済的主権」を、十分に手に握ることができなかったということなのだ。「経済的自由」を実現できなかったという話なのだ。本当はここまで「関税自主権」の問題だって掘り下げなければならないのだ。つまり、「経済的自由」が大切だ、「自由」な「市場経済」が大切だといっている先進諸国（「文明」）が、現実にはそれを裏切るような「歴史」をつくってきたのだということ。私たちは「自覚」した「日本人」となるためにも学ぶべきなのだ。その「自覚」の欠如が、同じ「歴史」を別の地域に対して、諸国に対して繰り返していくのだ。もっともすぐ付け加えておかねばならない。私は何度も「自覚」という言葉を使ってきたが、「自覚」すればそれでは何かできるかということ、そうではない。逆なのだ。「いかんともしがたい」ことばかりだということが、「自覚」することによって学べるだけだというのに過ぎない。「アホクサー」そう思われた読者も多いはずだ、実は私もそうだから。自分で話しておいてそうなのだ。しかし、これだけはわかるし、伝えることができるのだ。つまり、このような[A→B→C]の図式で描く「世界」で私たちは「民主主義」が大切だ「人権」が大切だ抑圧政治や軍国主義は悪いといった「スローガン」を空しく叫び続けたのであり、また同様に、「国のために個人を犠牲にするのは尊い」とか、「私」を優先し過ぎて「公」の世界を大切にしない今の風潮をヒステリックに、あるいはナショナリストぶっては批判したり、嘆いたりしているのだ。私にいわせれば、それらはすべてこの私のモデルの[A→B→C]

の図式で描かれる「世界」においてつくり出されたものであり、結局のところ、こうした図式の「世界」を支える「差別」や「排除」を生産、再生産するだけのものなのだ。人や国家を「差別」したり「排除」したりするために、君の尊い命を犠牲にするようなことを私は断固として許せないのだ。また「エラソー」なことを言ってしまった。妻や子供を自分の意のままにできない男が「エラソー」なことを言ってしまった。許しを乞う。

私がいいたいことは、丸山のいう「個人」や「民主主義」はこの[A→B→C]の図式で描く「世界」が存在しなければ実現できない「代物」だったということなのだ。そのことを私は「わかってくれ」と、これまで絶望的な仕事をしてきたわけだが、また、まだそれは無理かもしれない。わかってももらえないかもしれない。しかし、私はこれまでの研究で、「民主主義」なるものと、この[A→B→C]の図式で描く「世界」との「関係」について考察してきたので、私の研究を続けざるをえない。まさに「不退転」の決意。これもまたオーバーな表現であって、現実には「バカの一つ覚え」にこれだけを語ってきたからもう他にないのだ。これもまた仕方がないのだ。またこの後で、「民主主義」に関する私のモデルの残りの一つが紹介されるが、これもまた聞いてほしいと願っている。読者にはもう少しそれは後の楽しみにしてもらって、この続きに戻ろう。

(18)

日本は幕末期に「開国」をした途端に、まさにとんでもない「仕打ち」を受けたのだ。それは、先述した「不平等条約」という名の下に行われた政治的、経済的「自由」の略奪であったのだ。これは当時の日本にあっては大変であったとみた方がよい。たとえ江戸時代の日本が長い間にわたり優れた文化、文明をつくってきたとはいえ、「開国」してからの日本がたどった「歴史」は、「近代化」の「歴史」は相当に苦難の連続であったとみてよいのだ。それについては長谷川三千子さんが「難病としての外国交際——「文明論之概略」考」が見事に描いている。まさに「難病」であり「難事」であったのだ。それはどうしてなのか。何度もこれまで述べてきたように、「ウエス

トファリア体制」以来のあるいはその前後に形成、発展していた [A→B→C] の図式で描く私のモデルの「世界」の存在である。そこで「日本」と「日本人」が生き残るためには、同じように「日本」と「日本人」も、この図式で示される「世界」の「ルール」をよく学習し、応用力を身につけてこの「世界」をうまく渡り歩いていかねばならなかったのだ。そのために「日本」と「日本人」が選択したのは、できるだけ早くAへと「上昇」していくことであった。そのためには、Aが「日本」と「日本人」に押し付けた「不平等条約」を、別の地域（諸国）に押し付けることであり、それができるための「力」を育成することであった。つまり、「日本」も、「日本人」もやはり、[Aの経→Bの経→Cの経] \xrightarrow{x} Cの「民主主義の発展」、あるいは [Cの経→Bの経→Aの経] → Aの「民主主義の発展」といった図式に示される「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」をつくり出すことであった。その実現に「成功」することが、「個人」を確立させて、「民主主義」が根付いていくことに「成功」することだったのだ。この他の選択肢はなかったのだ。これだけは断言できるのだ。この地点では、少なくとも無理だったと言わざるをえない。

ところで、少し前で紹介した土屋さんの <「国造りの理念を示せ」> のくぐりで紹介した <「西欧で最初に憲法が作られたのは、国王の圧政から市民を守るのがきっかけだった。暴走しがちな国家を縛ることこそが憲法の役割とされた。」> のくぐりをもとに [A→B→C] の図式の「世界」を見ると、BやCの人たちは、「開国」期の「日本」と「日本人」もいうのではないか。いったのではないか。すなわち、Aの暴走を、AがBやCから「自由」を略奪することをしないように、Aの「圧政」を縛る「憲法」はできなかつたのかということ、またそれはすぐさま樋口さんのいう「近代立憲主義」という「光の部分」に対しても向けられるものだろう。「影の部分」なんていうのとまったく関係なく、このような「光の部分」は本当に「光」といえるのかと。やっぱりおかしいだろう。やはり土屋さんも、樋口さんもそうだと私はみているのだが、[Aの経→Bの経→Cの経] \xrightarrow{x} Cの「民主主義の発展」

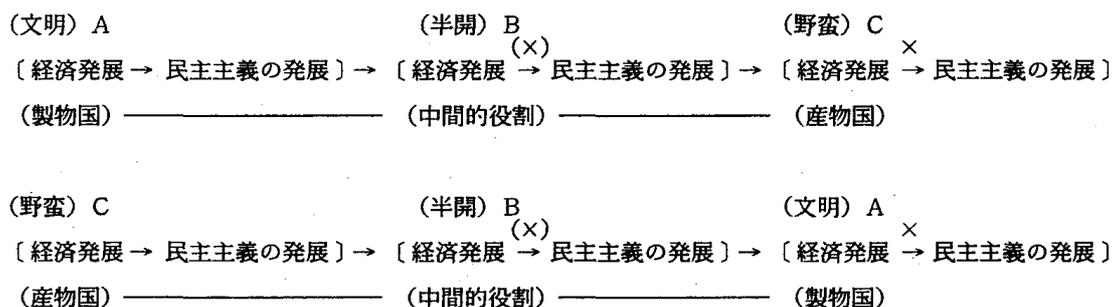
に示される「関係」を見ていないのだ。そのCの「民主主義の発展」のところを「憲法」と置き代えて考えてもいいのだ。逆にこれも何度もいうようだが、[Cの経→Bの経→Aの経]→Aの「民主主義の発展」という図式にもみられるように、「帝国主義」の「関係」をもとにして、つまりAのBやCに対する搾取や「人権」抑圧をもとにして、Aの「人権」を保障する「憲法」がつくられるといった「関係」を、結局は土屋さんは、樋口さんらは肯定していることになる。もっともお二人はそんなことは言っていないと必ず述べるであろうが。それでもやはりそのような「関係」を認めている、許しているのだ。それを私は「クヤシイ」思いをしながら告発しているのだ。もっともまた「エラソー」である。「エラソー」な私も実は「告発」されているのだから、誰にも聞こえないように話すべきなのだ。まったく力の入らない、締りのない話だなあ。本当にいつもこんな調子でイヤになってしまう。イヤ、元気を出してなおまだイヤになるようなことを自分に言い続ける、聞かせなくては、少なくともその「ポーズ」ぐらいはとらねば。

とにかく、「日本」と「日本人」は「開国」によって、この私の省略形の[A→B→C]の図式で描く「世界」の中で、その担い手の一人となったわけである。なおここで、拙著(『覇権システム下の「民主主義」論』でも紹介したもう少しきちんとしたモデルその<図式I>の(ア)を参照されたい。

図式I<「民主主義」の構造>

※^(x)→は、矢印で示される[経済発展]から「民主主義の発展」への移行が、その可能性はあるけれども、十分に実現されないことを意味する。また、^x→はこの移行がそもそも実現不可能であることを意味する。

(ア) <1970年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」>



(イ) <今日の「民主主義」の「秩序」>

(半開) B 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (製物国) への転換をはかる。 なかには金融・サービス化の 転換も視野に含めた国もある。	(野蛮) C (X) 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (産物国) なかには製物国へ の転換をはかる。	(文明) A X 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (金融・サービス) への転換 をはかる。
(文明) A 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (金融・サービス国への転換 をはかる。	(野蛮) B (X) 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (産物国) なかには製物国への 転換をはかる。	(半開) C X 〔経済発展 → 民主主義の発展〕 → (製物国) への転換をはかる。 なかには金融・サービス化の 転換をも視野に含めた国もある。

結局のところ、仮に丸山のいう「個人」の確立」とか、「民主主義」なるものができたとしても、またそれらが実現できなかったとしても、いずれもこの [A→B→C] の図式の「世界」を支える「担い手」ということに変わりはないのだ。私には本当に不思議なのだ。なぜかくも、「自立」だの「個」だの、「人権」だの「民主主義」だのと礼賛し続けてきたのか。もちろん誤解のないように。これらは各々が大切なことだということは私もよくわかっている。しかし、私が説くように、それぞれがもしこの [A→B→C] の図式で描かれる「世界」の中で、それを前提としてはじめて実現できるものだとしたら、おそらく話はまた違ったのではないか。なぜこの「違ったであろう」まで、そこに至るまでもう少し「哲学」し続けなかったのか。これがわからないのだ。先にも紹介したように、竹山道雄も「ハイド氏の裁判」のなかでそれらの問題については示唆していたのではないか。なぜ丸山真男の<「超国家主義」の「論理」と「心理」> だけが注目され続けてきたのか、同じ1946年に発表されながら、一方はGHQによる検閲にひっかかり、他方は耳目を集め過ぎるくらい集めてきた。そして今度は、この丸山のような「民主主義」論が中国の「学界」を席卷していくのだろう。丸山さんには悪いし、怨みはないが、「クヤシイ」ことだ。しかし、それは当然ともいえることなのだ。私のモデルで描くような「世界」が、すなわち、<図式I>と

〈図式Ⅱ〉で描く「世界」がますますはっきりとその輪郭を示していくだろうが、そうした「正体」をつかまれないためにも、はぐらかすためにも、丸山さんのような「民主主義」論や、樋口さんのような「近代立憲主義」の見方や「光の部分」と「影の部分」との「表裏一体」関係であるとか、「帝国主義」と「民主主義」とは「本来は‘水’と‘油’の関係だった」といった類の議論がこれから、まさに[B→C→A]の図式で描かれるような「世界」の形成と発展がみられていくにしたがって、それに「比例」するかのように読者の、「自覚」できない読者の支持を増やしていくであろう。その意味でまた「中国よ、お前もか」であり、「毛沢東さんよ、今のあなたの心境はいかばかりか、私には少しわかるよ。」と好き勝手なことを言わせていただくとしよう。

(19)

ところで、「開国」以降の日本の「近代化」の「歴史」の中で私が注目している出来事といえば、戦前の「公害」と、戦後の「公害」の類似性である。つまり「大日本帝国憲法」の時代であろうと、「日本国憲法」の時代であろうと、まるで同じ「歴史」をみているような「公害」の「歴史」をみるのである。どうしてそうなったのかを考察しながら、「民主主義」の形成、発展についての問題を読者と一緒に考えていく。その議論の前に、「開国」によって、日本はあの私のモデル[A→B→C]の図式の「世界」の中でアップアップしながら、そこで「主権国家」を、「民族国家」を、「国民国家」を形成する必要に迫られるのだ。つまり、「主権」の獲得が、すなわち「自己決定権」(「自由」)を少しでも多く手に入れることが必要となってくるわけだ。付言すれば、この「自己決定権」とは、個人レベルではいわゆる「人権」を、国家レベルでは「主権」を、「国家の権利」(「国権」)を意味するのだ。何しろこの[A→B→C]の図式で描く「世界」は、その「自己決定権」の争奪が行われている「舞台」であり、またその結果をも示している。CよりはBへ、BよりはAへと「上昇」することをめざす「力」(「動き」)と、そうはさせじとする「力」(「動き」)との「ぶつかり合い」の「世界」を示している。

それは福沢諭吉の言葉を借りれば、「平時は物を売買して互に利を争ひ、事あれば武器を以て相殺すなり」の「世界」を示している。まさに[A→B→C]の図式が描く「世界」で生きていくことは難事この上ないことなのだ。それはこの21世紀に入ってもまったくなんら変わっていない。そのため、そこで生きていくために、まずは「主権国家」を建設しなくてはならなかった。なぜなら、その「主権」を少しでも多くもったものが、Aに位置でき、「文明」の地位を手にしたのであり、それを多く失ったものは、Bとして、Cとして、とくにCの「野蛮」として、植民地や従属地となったからである。それゆえ、幕末期に「内戦」(「内乱」)を日本は経験したのだ。いわゆる「戊辰戦争」である。それに勝利した日本の「北軍」が、明治維新を断行して、「近代化」のカジをとっていったのである。それに敗けた「南軍」は旧幕府側であった。会津藩のイタイケな子供たちがこの内戦の巻き添えとなったが、この姿は、今もこの世界の至るところで見られるのだ。

この「エッセー」の本題というか主題となっている、少なくとも大きなテーマの一つである靖国神社のもとの招魂社はこの戊辰戦争による犠牲者を奉っている。ここできちんと辞書にしたがっておく。『広辞苑』によると以下のようにある。招魂社「明治維新前後から、国家のために殉難した人の霊を祀った神社。1868年(明治1)各地の招魂場を改称。1939年さらに護国神社と改称。靖国神社も招魂社の一で護国神社と改称しなかった。」ここで靖国神社も辞書でみておく。靖国神社「東京都千代田区九段北にある元別格官幣社。明治維新およびそれ以後に戦争など国事に殉じた者250余万の霊を合祀。1879年(明治12)招魂社を改称。」ここからもわかるように、靖国神社の起源は招魂社であり、その招魂社は「日本」という「主権国家」を、そして「民族国家」を、「国民国家」をつくっていく途上で生起した「内乱」というか、「内戦」による犠牲者の霊を祀ったところであるということであった。この「犠牲者」は確かに日本の国内で生じた戦争の、その意味では「内戦」の「犠牲者」ではあったが、私がここで読者に目を向けてほしいのは、私のあのモデル[A→B→C]の図式で描く「世界」とは、この「犠牲者」はそ

の「霊」は一体どのような関係にあったのか、ということである。それについての私の答えというか主張したいところは、まずはこの図式で描く「世界」の中でつくり出された「犠牲者」ではなかったかということなのだ。つまり、「内戦」による、日本における「南北戦争」による「犠牲者」とみる前に、この[A→B→C]の図式で示される「世界」によって引きおこされた「犠牲者」だということだ。それはアメリカ合衆国の「南北戦争」の「犠牲者」も例外ではないのだ。

それゆえ、もし仮にこの戊辰戦争が終わった後で、もしもの話だが、「もう二度とあのような戦争はしません」とか、「もう二度と犠牲者は出しません」とかの「誓い」をたてるようなことがあったとしたら、その「誓い」を実行、実現するためには何が一番大切な、重要なことになるのだろうか。それを読者に考えていただきたいのだ。その答えの一つとして、人を殺すような武器をまったく持たないことや、攻撃しないことや、攻撃されても反撃しないことなども考えられようが、それよりも何よりも、まずは、この私のモデルで描く[A→B→C]の「世界」の「在り方」を、今のものとは違うものへと代(変)えていくことが、その「営み」が求められるのではないのか。つまり、[Aの経→Bの経→Cの経]^x→Cの「民主主義の発展」とか、[Cの経→Bの経→Aの経]→Aの「民主主義の発展」とか、[Aの民^(x)→Bの民^x→Cの民]とか、[Aの民^x→Cの民]とかに導くような「世界」を許さない、そのような「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」を思案していくことが、本当はまず何よりも大切ではなかったか、そう私は考えるのだ。これらの図式は、何度もいうが「共時態」である。すなわち、この[A→B→C]の図式で描く「世界」の中で、そこで生活していく中で、「犠牲者」がでてくるわけだから、その一番大きな「構造」というか「仕組み」には目を向けないで、武器をもちませんだけではダメではないかと。つまり、この図式で描く「世界」そのものが「武器」なのだということ、つまり、相当な破壊力を持つ戦力となっていることの「自覚」をもつことが大事だろう。何しろ、この図式の示す「世界」は、「自己決定権」というまさにその

人なり、集団なり、国家なりに関する「生命」の維持と生産、再生産にかかわる「権利」を相互に争奪し合う関係なのだから。

(20)

ここでもう一度、あの福沢の「平時は物を～戦時は～」ではなかった、「事あれば～」であったが、それを思い出してほしいのだ。戦前の足尾銅山と、戦後の水俣をどう考えればいいのか。私がいいたいのは、この足尾の犠牲者も、水俣の犠牲者もともに[A→B→C]の図式の「世界」がつくり出した、引きおこした「犠牲者」だと考えるのだ。つまり「第9条」をもった、さらに何よりも「人権」を、「個人」を大切にする「日本国憲法」をもった日本において、なぜ、水俣を、水俣病の犠牲者を生み出してしまったのか。これを私たちはもう一度、本当にこの辺で真剣に考えた方がいいだろう。もし読者の中で、「第9条」は「戦争」に関係するものでそれは水俣病のような「公害」とは「関係」がないなどと思う人がいたら、先の福沢のいうことはわからないだろう。もちろん、私のいうことも伝わらない。福沢は「平時」と「事あれば」を便宜的にわけたが、それはまさに同じものなのだというをよくわかっていた。また「エラソー」に。あの福沢さんに対して、ここでは「さん」をつけてもいい。これは失礼。つまり「戦争」なのだ。いつも「自己決定権」をめぐる「自由」をめぐる「戦争」なんだ。それを福沢さんはよくわかっていたし、私も、「エラソー」によくわかっている。「第9条」も「戦争」の中での、その中での「憲法」なのだ。「第9条」を守っても、「戦争」による犠牲者を守れないのだ。だから水俣病の犠牲者が、生まれるのだ。まったく「第9条」が機能していないのだ。なぜか。[A→B→C]の図式で描かれる「世界」によってそれはつくられたということ、それが最たる理由である。だから、もしそうだとしたら、それが出生の「秘密」だとしたら、それをきちんと受けとめて、それでは、この第9条をもとにどうすれば先の「世界」を変えられるかを考えていくしかないだろう、そう私は思うのだ。言っておくけど、この「第9条」の「憲法」の下で、戦後の「日本」と「日本人」は、相当に多くの「人殺し」をするのに手を貸してきたと

の「自覚」をもつべきだ。つまり、日本と外国（他の国）、「内戦」の「内」とか、「外」とかを区分しても、いつも[A→B→C]の図式で示す「世界」に生きているのだ、暮らしているのだといった「感受性」をもつことが、感受性を育むことが大事だ。

そのためにも、ここで戦前の「足尾」と戦後の「水俣」を取り上げて、「民主主義」の形成、発展との関係から、「公害」の問題につき、「公害」をつくり出す「経済発展」の有り様の問題について、もう少し考えていこう。それにしてもどこにいったのかなあ。「靖国」問題だ。上坂冬子さんの論考についてもうそろそろ取り上げてもいいのではないか。そのように読者も思われているかもしれないが、ここはもう少し待ってほしい。この際ついでに言っておくと、先に何度も[A→B→C]の図式で描かれる「世界」の中で私たちすべての人々は、集団は、国家は生きてきたし、これからも生きて行かざるをえないと語ったが、それは当然のことながら、受験生であろうと、企業の社員であろうと、政党の党员であろうと、国家の国民であろうと、すべてみな同じなのだ。同じ「自己決定権」をめぐるその「争奪」戦を行っているのだ。ただ国家の場合には、その「自己決定権」を「主権」とも呼び換えることができるということだ。だから、国家を単位とした、「主権国家」、「国民国家」を単位とした「関係」を、わかりやすく私たちの普段の身の回りの「関係」として捉えるために、私は、「主権」とかという用語に代えて、「自己決定権」なる言葉を考えそれを使ったわけだ。このように考えると、私たちの日常の出来事は、本当は、福沢のいう「平時は～事あれば」といった仕組みが該当する適用するといった意味で、国家と同じように、相当に「コワイ」ものであり、かつ「ヤバイ」ものなのだ。だから私たちはいつも笑顔で会話したり、なんと「エライ」ことをしているのかと思うと、私はまた不思議になるのだ。

(21)

話を先の「公害」の、それをつくり出す「経済発展」の問題に戻そう。田中正造という人物で有名な足尾鉍毒事件は、「古河財閥の経営する足尾銅山

より流出する鉍毒によって災害を受けた渡良瀬川下流の農民たちが鉍業停止・損害賠償を求めて請願・反対運動を起し、特に1890年以降、大きく社会問題にまで進展した事件」(『広辞苑』)であった。何度も述べているように、私はこの「公害」を、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の示す「世界」がつくり出した「事件」としてみるのだ。つまり、この1890年という時期の日本は、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の描く「世界」のBのどこかはわからないにせよ、Bの下かBの中か、Bの上かはわからないが、とにかくBに位置づけられるようなところにあったと私はみているのだが、そのために、一方において、Aの「圧力」を受けると同時に、他方ではCから「圧力」をも受ける状態にあったのだ。Aの「圧力」とは、Aにより「自己決定権」を奪われているということだ。 $[Aの経 \rightarrow Aの民] \rightarrow [Bの経 \overset{(\times)}{\rightarrow} Bの民]$ の図式で示されるように、Aの民が、すなわちAの当時の先進諸国の「文明」の「民主主義の発展」が、日本の足尾銅山の経済発展を「許し」、つまり $[Aの民 \rightarrow Bの経]$ でそれは示される「関係」であるが、そのことが、足尾の農民の「民主主義の発展」を、つまり「人権」という名の「自己決定権」を、自由を、十分に手にすることができない状態へと追いやっているわけだ。

もっと単刀直入にいうと、Aの「民主主義の発展」が、つまり、Aの「人権」が、「自己決定権」が、「自由」が、Bの、つまり日本の、足尾の「民主主義の発展」を、「人権」を、「自己決定権」を、「自由」を、うまくいかないようにしているのだ。 $[Aの民 \overset{(\times)}{\rightarrow} Bの民]$ で描かれるそうした「関係」をつくっているのだ。ここに本当は「メス」を入れなければならないのだ。つまり、「市民革命」以降の、「民主主義」の歴史における「民主主義」の「構造」に、その「仕組み」にまずはじめに「メス」を入れて、批判、非難しなければならないのだ。

ところがなんだ、いつもそこには「メス」が入れられない。「普遍的人権」とか「天賦人権」というものと結びつけた「民主主義」として、敬われ、崇められるのだ。そして当然のように、「明治新政府」とその政治スタイル、つまり例の権威主義というか、抑圧的専制といった政治スタイルが批判され、

またそれが庇護する古河財閥なるものが俎上に載せられるのだ。これはまったく「アベコベ」なのだ。これは今日のビルマ（ミャンマー）の軍政とその軟禁状態（その程度は私にはわからない。ひょっとして「軟」なんかではないかもしれない。監禁はやはり監禁だから。）にあるアウンサン・スーチー女史との関係そのもの、そのままだと私は思っている。つまり、明治新政府がビルマの軍政に、スーチー女史が足尾の農民にそれぞれ対応、該当しているのだ。そしてここでもやっぱり $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で示される「世界」の $[A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}]$ の図式で描かれる先進諸国の「経済発展」と「民主主義の発展」の有り様が、その「民主主義」の問題点が不問に付される、看過され続けるのだ。誤解のないように言っておくが、私は古河財閥からも、ビルマの軍事政権から一銭ももらっていないので。私の言いたいことは、この私のモデルで描く $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」を批判することなく、ただ明治新政府は、ビルマの軍政は「自由」を抑圧して困ったものだ、けしからんと非難するだけではダメではないかと、そこなんだ。つまり、本当の意味での明治政府、ビルマ政府の批判とならないのだ。それを強調しておきたい。

このようなことになぜなるのか、なぜ足尾鉍毒事件はおきてしまったのか。もう少し考えよう。水俣とも結びつけて論じてみよう。わかりやすく読者に解説してみたいと思っている。ここで少しだけそれについて話をしておくと、私のモデルで描く \langle 図式 I \rangle の(ア)における「お国のため」とか「国に尽す」といった内容（中身）と、(イ)におけるそれとはやはり異なるということをここでまず確認しておきたいのだ。つまり、(ア)の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」で日本は、「あの戦争」の敗北後にGHQの、もっとごく簡単にハッキリといえば、アメリカ合衆国の占領下に置かれ、1950年代、60年代Bの先頭か、Aの下位の方に位置しながら、とにかくAのリーダー格であった、覇権国であったアメリカを積極的に支持して、味方して、アメリカの言うことならとにかくまずは従って行動するというスタイルをとって、この図式の「世界」の維持と発展に努めたわけだ。その意味で、「お国のため」、「国に尽

す」とはとにかくアメリカを「ヨイショ」することであり、そのことによって私のモデルの「世界」の「平和」に貢献することを意味したわけだ。つまり、(ア)のときの、1970年代までの、「国のため」、「愛国心」なるものは、「米国」のために、そして、それが私のモデルの(ア)の「世界」の「平和」のために導くことを意味していたと、私は考える。

これに対して、〈図式 I〉の(イ)のモデルの「世界」、つまり $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」の中での「国のため」、「お国に尽す」、そうした「愛国心」とか「ナショナリズム」は、この「世界」の、つまり1970年代を境として、21世紀のはじめにかけて、そしてこれから2、30年先も続いていく $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式の「世界」の形成と発展において「日本」が占めている、位置しているAにおいてつくられるものだというをまず確認しておきたい。日本もAの仲間入りをやっとはたしたのだ。名実ともにだ。ところが、サミットに参加して「世界の日本」なんかのようなところに来たと思った瞬間、本当に運の悪いことに、もう $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」の中のAは、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で示す「世界」の中のAへと、その立場を転換してしまった。イヤ正確には、これから、その転換はマスマスはっきりとしてくるのだが。言ってみれば、これから(イ)の「世界」の形成と発展は本格的になってくるのだ。それが証拠になお、(イ)の「世界」の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描くBの $[経 \rightarrow 民]$ の実現を中国は経験していないのだ。何度もいうが、これから2、30年かけて中国はBの頂点に位置するリーダーに、覇権国となるだろう。ここは「だろう」としておく。私は今の年が52才だから、私の80才くらいの頃を基準にして、どうしてもそこから計算（逆算）してしまうから、「2、30年」となるが、もう少し遅いのもかもしれない。それは断っておく。しかし、この(イ)の「世界」のように動いていくことは「断定」しておく。その意味で、(イ)の「世界」のAに位置する「日本」において、「国のため」とか「国に尽す」とか、「愛国心」、「ナショナリズム」の「カケゴエ」は、実は、このBの先頭にくるであろう「中国」の、「中国」という「国のため」であり、「中国」に尽すためであり、「中国」のための「愛国心」

であり「ナショナリズム」になるのだ。そして、そこから、(イ)の「世界」の形成と発展と、その(イ)の「世界」の「平和」のためにと結局のところはなっていくのだ。そのような「国のため」「国に尽す」であり、「愛国心」であり「ナショナリズム」なのだ。だからもし、「中国」なんか大嫌いだとか、中国人は「ブー・ハオ」だとかいっているくせに、経済界を中心に巻き起こっている「愛国心」に踊らされる、踊らされているような読者がいたら、そんな「日本人」がいたら、私はいいたい。現実には本当に「アホ」な「世界」だから、まずは、私の本を読むべしと。また「エラソー」なことをいってしまった。

(22)

ところで、簡単に話をしておくといいいながら、また長い要約となってしまうが、よーく、よくよく、気をつけた方がいい。経済界のリーダーたちが説く「愛国心」とか「ナショナリズム」とかいった話は、「ウラでいくらおカネ」が動いているか、それを頭に入れた方がいい。悲しいねえー。やはり「金」で「心」も買えるのか。売れるのか。私も「エラソー」には言えない。「カネ」には非常に弱い。「力」にも弱い。よく言われてるだろう。「色男金と力は無かりけり」と。しかし、上坂さんではないけど、本当に経済界は、おカネのために「靖国」を売ったと言われても仕方のないようなことをしている。イヤ、経済界だけではない。「日本人」の多くがそうだ。本当に残念というか、とにかく、戦前も戦後もまったく変わらないままというか。ここで新聞記事を参照、引用しながら話を進めていこう。私の住んでいる地方紙(『愛媛新聞』2004年10月23日付)に、シリーズ企画で「非戦の回廊―揺らぐ三原則」としての連載があった。その記事の中で、経済界のリーダーらのいわゆる「愛国心」にまつわる話が紹介されていた。非常に「キナクサイ」ではなく、「カネクサイ」のだ。彼らは、「憲法」を改憲して、「教育基本法」を改正して、「愛国心育成を主張」しているのだ。もう一度、私が先に要約した私のモデル<図式I>の「世界」を思い出しながら、財界リーダーの「見解」をみてほしいと読者には伝えておきたい。

さて、どこのくだりを紹介していくか、ちょっと気乗りしないのだ。正直なところは。だってやはり彼らの「見解」はどう見ても健全ではない。不健全なものだ。私はそうみてしまうから、どうしても消極的になるのだ。先の『愛媛』の「非戦の～」の最終⑳にある話（記事）では、お金をもっている財界リーダーが、高校生を対象としたセミナーでの「イサマシイ」内容が紹介されている。なんと福岡県宗像市で初めて開いた13泊14日の「日本の次世代リーダー養成塾」で、奥田さんが塾長となってその当時は、経済同友会の代表幹事で日本IBM会長の北城さんとか前三重県知事の北川さんらが講師となって、憲法9条改正や武器輸出改正（武器輸出三原則見直し）について語っているのだ。なんとおそろしい「センノウ」計画なのだろう、そう私などはエラク感心してしまう。この逆をいわゆる「左翼」と呼ばれる人々はできないから。13泊のお金は誰が工面するのか。そちらの方が知りたいし、参加者の親の職業や収入の方が気になってしまう。私なんかはついこんな「イタイケ」な「純真」な子供たちをダマサナイデと、記事にある写真をみながら思ってしまうが、ひょっとして、この高校生たちも「シタタカ」で、将来の就職先の確保に動いていたりとまた思ったり。私はやはりというか、かなり性格が悪いのだとついつい自分にエラク感心してしまうのだ。

それでは肝心の記事を引用しておく。もう一回その前に述べておきたい。念のために。彼らの発言や見方がどのようなものであれ、それを私のモデル〈図式I〉〈図式II〉の描く「世界」から見直してほしいのだ。そうすれば、上坂さんの「靖国」論の問題点がどこにあるかがわかるだけでなく、上坂さんが批判、非難している経済同友会の北城さんの方が、一枚も二枚も上だということがわかる。もっとも誤解のないように言うておくが、それは北城さんの方が上坂さんよりも優秀だといっているのではない。少なくとも私の〈図式I〉の(ア)から(イ)へと描くように、「世の中」が動いていることをキャッチして、それに乗り遅れまいとする「商売人」としての本能というか、嗅覚において、上坂さんより優っていると言っているだけだ。しかし、やはりこの差は大きい。もし上坂さんが、私のモデル〈図式I〉、〈図式II〉で

描く「世界」をよくわかった上で、「靖国」の「英霊」をどうするかといった論を展開していれば、もう少し「経済界」に一太刀浴びせれたかもしれないのだが。もっとも、かくいう私も、上坂さんも、この経済界のリーダーが中心となってつくってきた商売の仕組みに依拠してそこで衣食住にかかわる恩恵を受けているのだから、「勝負」ははじめから見えているのだ。もちろん、タダではない。金を払った上で恩恵を受けているが、やはりそれはどうにもならない。だからここにもヒントがあるのだ。自らが、自分自身の力で、私の<図式 I><図式 II>で描く「世界」から少しでも離れていく、それを可能とする「経済発展」の在り方を、手探りでもいいから、作り出していかなければならないのだ。「経済発展」というと少しわかりづらいかもしれないが、先にもいったように、衣食住にかかわる仕組みといったものをとにかく前提にすればよい。それがすべてである。それを他人の提供するものにすべて「オンブ」するかで、自分の「独立」の程度が決まってくるのだ。つまり、「自己決定権」という「自由」は、いつも「他人」との「他国」との「関係」のなかで作り出されるものだが、そしてこれまでの歴史は、その他人を、他国をどれだけ自分の意のままに動かせるか、そうした「関係」をつくり出せるかを判断にしてその「自己決定権」というか、「自由」を、付言すれば、国の場合はそれは「主権」に該当するのだが、測ってきたが、これからはそうした「他人」や「他国」との「関係」をできるだけ少なくしていく、それについて、普通のお付き合いは十分にできる、そうした「自己決定権」というか「自由」が求められるべきかもしれない。とくに「日本」と「日本人」の21世紀の歩みは、どうしても私の<図式 I>の(イ)の [B→C→A] のAにおいて、Bのトップにいる「中国」と「中国人」と付き合っていかなければならないから、そこのところをもう少し真剣に考えた方がよいだろう。

(23)

このように話すと「皮肉」ではないかと思ってしまう。私の「中国」と「中国人」に対する見方の方が、何か「ナショナリスティック」に響くから。愛国心とかナショナリズムに否定的、消極的な私の方が、「中国」や「中国

人」に対して「カベ」をつくれといった内容の話になっているのだ。逆に、財界のリーダーの説く愛国心や国に尽せといった、「カベ」をつくっているような動きが、現実には、「中国」と「中国人」を支えるそうした内容の話になっているのだ。不思議といえばそうだが、まったくそうではない。当然なのだ。私の愛国心とかナショナリズム批判は、それらが、結局のところ、〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉で描く「世界」を支持し、その逆ではまったくないからなのだ。私は別に日本が「他」の国や「他」の人々と仲良くしてはダメだと言っているのではない。こうした「世界」の中で生きていることを「自覚」すれば、仲良くしようにもできない時期があり、逆に仲良くしたくないのにそうしなければならない時期があるということ、それゆえそのような「友好」関係は相当に無理があること、それを述べているだけなのだ。少し記事の紹介の順番が逆になるが、同じ『愛媛』（2004年10月24日付）の「現論」でも北城さんが写真付きで載っていて、その小見出しが「成長する中国経済」、「豊かさ求め挑戦果敢」、「格差もばね。甘えの日本と対照」とあり、そのような内容の話を、そこで北城さんが語っているのだ。私がいいたいのは、読者が学ばなければならない点は、この北城が教えているのは、中国や中国人と「仲良く」するための、日本の「愛国心」「ナショナリズム」憲法改正、教育基本法改正の主張であるということだ。つまり、北城さんや財界のリーダーたちは、決して中国や中国人が嫌うようなことはしないのであり、それを前提として、愛国心を語っているのだ。ここをよく見つめておかねばならない。なぜなら、あれほど威勢のイイような中国をバカにして、中国人を無視したように靖国参拝を「当然」とした行動をとっていた、またそのような言辞を弄していた「右翼」的政治家がどんどん「日本」から消えていっているのだ。この政治家連中は、私と同じで、行動パターンははっきりしている。いつも財界から活動費をもらっているから、そのスポンサーの「鶴の一声」には弱いのだ。だから、財界の政治的「発言」ではなく経済的「行動」だけを見ていればよい。それで次に「日本」と「日本人」はどう動くかがよくわかるのだ。それをもっと大局的にとらえて描いたのが、私の

<図式Ⅰ><図式Ⅱ>の「世界」だと考えていただければよい。(なお<図式Ⅱ>については第Ⅱ部 頁に紹介している。)ただし、私はそうした「世界」から一刻でもはやく「足を洗う」にはどうすればよいかとアクセクとできもしないことを思案しているのに対して、財界リーダーたちは、そうした「世界」でどうやってこれからも金を儲けるかと、それこそ夜も寝ないで、衣食住の世界大のネットワークに、「鎬^{しのぎ}を削る」ことヒタスラなのだ。質(タチ)の悪い私は、そのネット・ワークの恩恵に与りながら、「頭」だけのキレイゴトで、なんとかあの「世界」の「外」へと出ていくことを考えているだけだから、これは始末に負えない。

しかし、読者諸氏、こんな私でも、イヤこんな私だからわかったことがあるのだ。日本の「左翼」的政党のどこがイケナイのか。それは、共産党にしても、社会党(社民党)にしても、非常にイイコトはいうが、「行動」してこなかったのだ。あー、民主党さん、公明党さんゴメン。ここは「左翼」だから、一応のところ。つまり、たとえば、「共産党」がそれこそ「経営」する会社があってもよかったのだ。どれほどそこで社員が働き、どれだけ利益をあげ、どのように分配しているか。それが共産党の描く明日の社会へどのようなにつながるのか。こうした「行動」がなかったのだ。とくに私は共産党が、農業にもっと腰を入れて、「農場」をこれも直接経営しなければならなかったのだ。確かにそう思う。

社会党もあれだけ「第9条」にこだわるのなら、それを「日常」の生活で実践すべきだったのだ。「第9条」を守ろうとする人は、自民党を支持する人々とは異なって、衣食住においてこれはダメだとか、イイとか。そうした実践があってもよかったのだ。「第9条」を守る人の農業では、この肥料は使わないとか。「第9条」を守る人の「胃袋」も、それに反対する人の「胃袋」も、ブッシュさんや、財界のリーダーたちがつくりあげてきた衣食住のネットワーク(またこのカタカナを使ってしまった。反省。)をもとにして、それが提供するもので満たされていたのだとしたら、これはモウアカン、はじめから守れないではないか。ブブブブ。

(24)

やっとここで先の先述した記事の紹介に戻ろう。シリーズ企画「非戦の～」の⑰回目（『愛媛』2004年10月20日付）で、日本経団連会長の奥田さんが、「東富士夏季フォーラム」での報道陣の最初の質問で憲法改正への考え方を聞かれた際に、「改憲論者と思っていただいていい」「……9条を抽象的でなく実体的に掘り下げた表現に変えられないか考えている」といった答えを示している。そのときに、「武器輸出三原則見直し」の発言も飛び出したとある。また⑳（『愛媛』2004年10月23日付）において、奥田さんは、＜日本の武器産業はいろんな物をつくれる。だが三原則があってインセンティブが沸いてこない。なかなか技術の進歩が認められないので、少し緩やかにしよう、と。武器を売るとか戦争をするとか考えていない。＞と記事にある。もう少し奥田さんについて引用しておく。＜高校生約百八十人に「国際化の時代だからこそ、生まれ育った日本の歴史文化を正しく理解してほしい。リーダーを目指すなら、自分が日本人であることに誇りを持つことが絶対必要」と説き、質問を受けた。＞とある。この最後のくだりをここに書きながら、私はまたあの＜図式I＞の(i)の「世界」を思い浮べてしまっていた。すなわち、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ のAのグループに属する「日本」と「日本人」のことである。そして、このAに位置しながらも、それこそ「自由」にBやCのグループに、＜ヒト・モノ・カネ＞を「移動」できる財界リーダーや大企業の幹部タチのことを思ってしまった。つまり、Aだけにいることはないし、イヤむしろ、この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式の「世界」のBにいる時間の方が圧倒的に多くなる人々から、「エラソー」にAのなかにいる「日本」と「日本人」に対して、国にホコリを持つなどと、よくいうよなあ。「Bにいる時間の方が圧倒的に多くなる」とは、現実にはそこに住んでいなくてもかまわない。そこを中心としてモノを考える。つまり「世界」を考える、そのような時間を意味していると考えてイタダキタイ。

またまたツライと感じてしまった。考えるまでもないが、「日本の歴史文化」などといっても、私にいわせれば、この財界のリーダーらは圧倒的な金

を使って、私のモデルの $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描く「世界」をうまく形成、発展していくために、「日本の歴史文化」をそれこそまた「正しく」内外に「翻訳」していくだろう。それは、 \langle 図式 I \rangle の (ア) の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く B に位置していた頃の「日本」と「日本人」、そしてほんのツカノマではあったが A に位置していた頃の「日本」と「日本人」にとっての「正しい」とされる「日本の歴史文化」とは、その「内容」とはやはりドコカチガウのだ。もっとも、私がいくらそれこそ「エラソー」にいても、トホトホ、私には「軍資金」がないから、勝負は最初からツイテイル。ただそれはそうだがやはりそれでも「マケカタ」がある。日本文化のタダシイ解釈は、「武士は食わねど高楊枝」だろう。それで思い出したというか。ここでやっと上坂冬子さんのあの論説、「北城さん、靖国は商売の邪魔ですか」を取り上げるとしよう。やっぱり、それは言うまでもないが、「商売の邪魔」以外のナニモノでもないのだろう。イヤないのだ。これもまたオカシイネー。「日本の歴史文化」の「正しい」理解をなんて、あれは一体なんだー。上坂さんはそう思うだろう。怒るだろうし、腹立つだろう。だからこのような論説の形をとって上坂は訴えたのだ。「正しい」理解のために。その気持は、私も少しわかるのだが、上でも述べたが、やはり、私のモデル \langle 図式 I \rangle 、 \langle 図式 II \rangle の描く「世界」で私たちが生きてきたことを「自覚」して「靖国」を語らない限り、オカネにはカテナイ。

(25)

それでは上坂さんの話をここで要約してみよう。その論説の一番はじめのところで、経済同友会が首相の靖国参拝の「再考」とか「自粛」を求めているとの新聞報道の紹介を上坂さんはしている。今このくだりを私は8月10日の朝方に書いているわけだが、おそらく8月15日に小泉純一郎首相は「公約」を守るということで、つまり自分が総理・総裁として選ばれたなら、必ず8月15日に靖国に参拝するとの約束をしていたので、行くと私はみている。しかし、もう総裁の任期が切れる、したがって総理の職を辞するといったこの終わりの年の「8月15日」とは、なァ。それよりなにより、小泉さ

んは「靖国」に行く「資格」などないのだから、行ってはダメなのだ。「日本」の中で小泉さんの靖国参拝を批判したり、非難できるものなど一人もない、イヤこれは言いすぎだが、ほとんどいないのだ。もちろん、逆に、靖国参拝の「資格」のある人だってほとんどいないのだ。これもサビシイというか、カナシイものだよ。戦後61年も過ぎているのに、同じことしか繰り返せないのだから。批判するのも、賛成するのも。「余計」なことで、嫌われるのをわかっていうのだが、今の「中国」も、「中国人」も、小泉さんの「靖国参拝」についてトヤカク言う「資格」はない。その理由はもうこれまで述べているが、私のモデル〈図式 I〉の(イ)の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描く「世界」の先頭に立って、「世界」を率先垂範していく立場にあるのだから。かつての中国と中国人を苦しめた〈図式 I〉の(ア)の「世界」とまったく「構造」は変わらない、そうした(イ)の「世界」のリーダーになる国や人たちに「靖国」のことはなんら語れないはずなのだ。もちろん、誤解のないように言っておくのだが、私は「日本」と「日本人」の中国やアジアへの「侵略」を否定したりアイマイなものにしようと思っていないし、そんなことを一度だって書いたり、話したりしたことはない。私がここでいいたいのは、中国や中国人の「靖国」への首相を含めた日本の政治家の参拝を批判する理由が、「A級戦犯」を「合祀」しているからだといったことから批判しているその「マヤカシ」さにあるのだ。私の、〈図式 I〉で描く「世界」($[A \rightarrow B \rightarrow C]$)の形成と発展には、連合国はもちろん枢軸国もかかわっていたのだし、そこには「A級戦犯」だろうが、一般の兵士だろうが、一般の普通人もかかわっていたのだ。中国や中国人を苦しめ、侵略していく「仕組み」をつくり出した、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」こそがまず何よりも糾弾され批判されてしかるべきものなのだ。それとともに存在した「A級戦犯」なのだ。先の小泉さんをはじめ、戦後の「日本」と「日本人」は、日本国憲法と第9条の下に、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」の形成と発展にススンデ協力し、貢献してきたわけだ。靖国に護持、奉られている「英霊」というか「犠牲者」は、こうした「世界」がつくり出した「犠牲者」であり、それな

のに、そこへそれをつくり出した生み出した「加害者」が参拝することによって、彼らをジュンキョウシャへと見事にその意味を転換させるのだ。それがヒドイ、ワルイことなのだ。

ところでこの「加害者」とは一体それでは誰なのか。私のモデル〈図式 I〉の描く「世界」の形成と発展を担っている国や地域とそこで暮らしている生活している人々である。その意味では、「靖国」へ参拝しようがするまいが、この「世界」の中で生きていく、そこでメシを食っているという意味では私も含めて「日本人」は「A級戦犯」なのだ。「A級戦犯」には悪いのだが、いくら「大東亜共栄圏」なんていっても、まずはその前に[A→B→C]で描く「世界」のリーダーシップを握らないといけないのだから、やはり同じやり方でBからAへと「上昇」、「高度化」していかなざるをえないのだ。その意味では、「親分」と「子分」の「戦争」であったわけで、「同じメシ」の取り分を、分配の仕方をめぐっての「争い」だったわけだ。そういう意味での「殉教者」なのだ。だから、もう一度いうが、「自己の信仰する宗教のためにその身命を犠牲にすること」として定義される（『広辞苑』）「殉教」ならぬ、〈図式 I〉で描かれる「世界」の形成、発展とその維持のためにその身命を犠牲にされたのが「A級戦犯」であり、その「犠牲」となったのが中国であり、中国人なのだ。しかし、同時にこれも忘れてはならないのだ。「中国」と「中国人」は、「日本」が「開国」して以来そうであったように、1842年のアヘン戦争の結果の南京条約によって[A→B→C]の図式の「世界」の中に組み込まれることにより、「侵略」されると同時に、シンリャクする側へと自らを転化していく動きを始めざるをえなかったのだ。これが大切な点だ。その意味では、「中国」と「中国人」は、〈図式 I〉の[A→B→C]の描く「世界」で、日本と同様に、「上昇」し、「高度化」していく道を探していたのだ。

(26)

また話が長くなったが、「靖国」の「A級戦犯」の「合祀」とそこへの日本の政治家による参拝に対する「中国」による批判は、その意味では、まず

彼らが[A→B→C]の図式の「世界」の形成、発展に寄与し、貢献したことで、中国と中国人を苦しめた、侵略したという事実を無視あるいは看過しようと考えていることに由来している。中国によるこの批判に私はまったく異論はない。しかし、同時にその「批判」は、自らにすぐハネ返ってくるものでなければならないはずだ。なぜなら、中国と中国人も、1842年以降は、既にこの〈図式I〉の描く「世界」において、「一方的」にヤラレテキタわけではないからだ。日清戦争の前後をみてもそうだし、それ以後も機会を見つけてはナントカしようとしていたのだ。つまり、「中国」と「中国人」も次第次第に、[A→B→C]の図式で描く「世界」の「文法」を学習していったのだ。だからまさに「あの戦争」でも「日本」と「日本人」から自らを「解放」できたのであり、またさらに今日の「中国」と「中国人」があるわけだ。その点では、やはり「中国」と「中国人」もかなりの「犠牲者」をつくり出してきたのだ。それを「英雄」と呼んで、「中国」のリーダーの「責任」をスリカエルのであれば、それは小泉さんらの日本のリーダーのやってきたこととそう変わらないのではないか。「責任」とはなにか。それは[A→B→C]の図式で描く「世界」に暮らさなくてもいい生活、生き方を保障することではないか。そのために「英雄」は戦ったと私は思いたい、やはりこの思いは違うのだ。「中国」の指導者たちは、この「英雄」を「日本」と「日本人」の侵略からの解放のための「犠牲者」としてずっと「戦争記念館」に奉ってきたが、私に言わせれば、実はこの「英雄」たちは、〈図式I〉の(ア)の[A→B→C]の語る「世界」の形成、発展のための「殉教者」であり、その「世界」のシンリャクからは中国と中国人をカイホウすることはできなかったのだ。つまり彼ら「英雄」は、「日本」と「日本人」に対してはギセイシャとして奉られ、私の描く「世界」に対してはジュンキョウシャとして奉られるようにその「死」の「意味」を勝手に解釈（翻訳）される存在なのだ。

結局のところ、靖国の「英霊」も中国の戦争記念館の「英雄」も「犠牲者」なのだ。つまり、私の描く〈図式I〉の(ア)(イ)のモデルの「世界」の「犠牲者」

なのだ。ところが、「日本」においても、「中国」においても、ともに、彼らはジュンキョウシャとして奉られているのだ。それを多くの「日本人」と「中国人」はわかっていないし、わからないままなのだ。そこをうまく、政界や財界のリーダーらに「利用」されるわけだ。もっとも彼らリーダーも、私の描く「世界」がはっきりわかっていないことは確かだ。また「エラソー」にいつてしまったが、仕方がない。こう書きながら、また自分に腹が立ってきた。わからない人々に、なぜわかっていると「エラソウ」なことをいう私が指導されているのか、そう考えると。これまた仕方がない。私の前に「カネ」が置かれていて、それを拾いながら生きているから。イヤハヤまた前置きが長くなってしまった。また余計なことを述べてきた。もっと簡単に言っておけばよかった。「中国」は、日本の政治家に対して、日本人に対して、あなた方は、〈図式I〉の描く「世界」で生きていながら、その「犠牲者」となった「A級戦犯」を、「日本」のジュンキョウシャに仕立て上げている。それはオカシイのだ。その「世界」のまさに殉教者なのだから。まずはそう語るべきだったのだ。それから次に、そのような殉教者の存在でいいのかと。オカシイだろう。A級戦犯をつくり出した「世界」の中で生きている「日本」と「日本人」の自分の「都合」にあわせて、自己を正当化するために彼らをジュンキョウシャのような存在にしていることはやはり許せない、卑怯キワマリナイと。彼らは「犠牲者」なのだから、そうした奉り方を考えたらどうか。「日本」の「英霊」も「中国」の「英雄」も、実際のところは、[A→B→C]のモデルの描く「世界」に貢献した、寄与したという点では、「合祀」されてシカルベキ存在なのだ。その意味では「中国」と「中国人」も「靖国」を、トヤカク言う資格はないことはよくわかっている。とにかく、今は誰も「靖国」参拝できないだろう。これくらいでいいのだが。勿論、こんなことは言わないし、言わないだろう。

(27)

話を今度こそ戻すとしよう。上坂さんは、「商売」と「靖国」をテンピンにかけることが許せないのだろう。上坂さんは、「今後の日中関係への提言」

を発表した経済同友会の北城さんに面談を申し入れたが断われたと述べている。それで、その同友会の「提言」を上坂さんは直接読んでこの論説にそれを紹介したということなのだ。私の上坂さんのくだりの引用は、それゆえ、「紹介の紹介」となるが、ここに示しておきたい。＜A四判十三ページに十四枚の資料が添付された膨大なものだが、経済界の提言らしく「はじめに」として数字があげてある。まず、その数字に私は圧倒された。いま、十万人近い日本人が中国に在住し、三万五千社の企業が設立されているという。日系企業による直接・間接の雇用人員は九百二十万人に上るというから、日本は一千万人近い中国人の協力を得ながら彼らを食わせていることになる。いつのまに、これほどの協力体制ができていたのか。しかも二〇〇五年の対中貿易額はほぼ二十五兆円で（二十五兆円といえば日本の歳出総額の三割強だ）、対米貿易額を三兆円ほど上回っており、いまや中国こそ日本にとって最大の貿易パートナーなのだそうだ。＞この後もまだ少し引用しておく方がよいので続けて上坂さんのくだりを紹介しておこう。＜政権の滑り出しから靖国参拝にクレームがついてぎくしゃくしながら今日にいたっているというのに、経済活動はどこ吹く風といわんばかりに順風満帆だったとは。小泉総理の「商売と政治は別」という言葉の意味と真実を実感させられる。・・・日中の貿易額がアメリカを超えた現状を明らかにした上で、いずれマイナス状況が“想像”されるといわれても、上りつめれば下がることもあるのは世の常だとしか受け止めようがない。根拠もなく案じることを杞憂という。そもそも売上高の減少は各社の企業努力によって解決すべき問題で、これを国益の破綻のごとくみるのは錯覚ではないか。政界や世論が靖国参拝賛成派と反対派に二分されているのに危機感を抱いて、いまこそ日本は国家を総動員し、中国の意向に沿って貿易の絆を守れ、といわれてなびくほど国民は単細胞ではない。＞

上坂さんはこのように述べているのだが、残念ながら、「日本人」は「単細胞」だから、やはりナビクのだ、そう私は言いたい。また、たとえ「靖国参拝」賛成派、反対派と対立していても、私の＜図式I＞の(ア)の[A→B→

C] とイ)の [B→C→A] で描く「世界」の形成、発展とその維持、安定といった点ではほとんどすべての「日本人」の「利害」は「共通」しているのだ。イヤ同じなのだ。この点こそを踏まえなければならない。上述したように、この「世界」の形成、発展と維持、安定といった点では、「日本人」だけでない、「中国人」も同じなのだ。共通した、同じ「利害」の多いか少ない、誰が生産するか、させるか、誰に分配するか、どのくらいか、「タダ」そこだけが違うのだ。イヤ、それが大問題ののだが。それにもかかわらず、「カネのなる木」というか、この「世界」は同じ「構造」でできているし、それを「一緒」に保持、発展させようとする「心」というか、「ココロ」というか、それを「アイシテ」いく「ココロ」(別の表現を使うと、少しハズレルのだが、「愛国心」とか「ナショナリズム」になる)も同じなのだ。それじゃなぜ「争う」、「戦争」するのかとなるだろう。「アホ」なのだ。ヤッパリ。この「構造」の、「仕組み」の「カラクリ」というか内実をやはり私は読者にもっとわかりやすく伝えなければならない。「エラソー」だが、それが私の「学者」としての「天職」だ。ナニカオカシイ。さらに付言しておく、確かに中国は日本にとって大きな貿易の相手国だが、中国からすれば、別に日本でなくてもかまわないのだ。その二十五兆円なる「おカネ」は、別の国や地域に求めることができるのだ。ここもよく頭に入れておくべきだ。日本がその「おカネ」を別のところで探そうとすれば、これは中国よりもより一層の努力が求められるだろう。なにしろ、今は、[B→C→A] の図式で描く「世界」へと向かっている、ますますその「世界」が本格化している最中だからだ。ここをしっかりと踏まえた議論をすべきだ。くれぐれも中国人を食わせてやっているなんて、上坂さんのような見方をしているはダメなのだ。

(28)

とは言っても、私はやはり、「天邪久」だから上坂のいうことにも納得することは多々ある。しかし、そうは言っても、これはやはり違うというか、オカシイと思うことがあるのだ。そのくぐりをここに紹介しておく。〈そも

そも戦争犯罪人をめぐる問題はサンフランシスコ平和条約締結によって、すべて終わっている。やれ植民地支配だ、それ侵略だというけれど、そのことの裁きを受けて日本の指導者は判決通り処刑され、すでに半世紀余が経過した。償いは済んでいる。これを蒸し返してA級戦犯を差別するのは、いわば違憲（判決の不遡及・一事不再理）であろう。つまり戦勝国は一方的に戦争犯罪人と名づけたが、結果からみてA級戦犯らは平和への生贄とあっていい。処刑された人々の命と引き換えに条約が締結されて平和が訪れたからだ。でなければ彼らの死は何だったというのか。彼らの命と引き換えに日本は独立し、真の平和が訪れてこんにちに至っているのである。＞ 私はこのくだりの「平和」、「真の平和」と上坂さんが説いているところに驚いてしまった。私がこの「靖国」の論考において、一番これでは「ホンマにアカン」と腹が立ってしまったというか、まさに驚愕^{きょうがく}したのは、ココなのだ。それでは上坂さんがいう「平和」とか、「真の平和」を私のモデルで描く〈図式I〉の「世界」からみるとき、どう位置づけられるのか。何度も語ってきたように、1970年代までは、[A→B→C]で、また1970年代以降は、[B→C→A]の図式で示される「世界」が、私たちの日々暮らしている世界なのだが、上坂さんのいう「平和」、「真の平和」は、この「世界」の形成、発展とまたその維持、安定とまったくムジュンしないものなのだ。換言すれば、この「世界」が要請した、必要とする「平和」なのだ。つまり、この「世界」の維持、安定こそが「平和」であり、「真の平和」だと上坂さんは説いているのだ。よくまあ、これで「靖国」とか「英霊」とか、「A級戦犯」とか語るよなあー、こう、正直なところ私はアキレルのだ。それはやはりオカシイし、チガウと叫んでしまう。イヤ、叫びはしないが。静かに「これはまいった。」とブツブツと沈黙していく。

やはりこれでは浮かばれない。もう一度ここで確認しておきたい。「A級戦犯」とか日本の「軍隊」が朝鮮、中国をはじめアジア各国、各地域を侵略した。あのハワイをはじめ、太平洋の諸島とそこに暮らす人々も「日本」の「犠牲」となった。この他にも多くの人々がやはり「犠牲」となったのだ。

「A級戦犯」を先頭として、「日本」と「日本人」は、すべて彼らを「犠牲者」とすべく行動したのだ。しかし、同時に、「日本」と「日本人」とは、すべて、私の描く〈図式I〉、〈図式II〉の「世界」のギセイシャでもあったのだ。それゆえ、この「犠牲者」と「ギセイシャ」とをきちんと整理して論じる必要がある。この「ギセイシャ」をつくり出した「世界」は、「日本」と「日本人」をまずは分離・分割して、「すべて」を「一部」と「その他残り」といった構図に置き代えるように、「すべて」の「ギセイシャ」を、一部の「A級戦犯」と「その他残り」の「犠牲者」とに区分けしてしまった。この区分は、あの中国共産党も同様に試みたのだ。それは、戦争に勝利した「連合国」を構成するものにとっては「当然」だったのだ。つまり、「戦争」に「勝利」したという「意味」は、「デモクラシー」が「ファシズム」に「勝利」した云々よりも、まず何よりも、あの図式で描くあの「世界」が、トニモカクニモ、「安泰」であったことなのだ。それはいたるところ破壊され、多くの人命や財産やその他のものがナクナリ、キズツケラレタものの、あの「世界」の「構造」は、「仕組み」はまったくフヘンであり、普遍的たり得たのだ。つまり、あの「世界」がショウリしてしまったのだ。アトアラル罪をつくり出した「犯罪者」がショウリしてしまったのだ。竹山道雄に従うと、それは「近代文明」なるものだ、それをつくり出した流れは、漱石に従うと「西洋の潮流」なのだ。この「近代文明」なるものには「文法」があって、それこそが、中江兆民にいわせれば、「進化の理法」ということになるだろう。その「進化」とか「理法」を村田邦夫によれば、(ここに村田をもってきたか、また「エラソー」に。)〈図式I〉、〈図式II〉で、とくに後者のモデルで語られるI期、II期、III期(付言すれば、各々の時期はさらに、前、中、後期と三区分別できる)の「段階」が、まさにその「進化」であり、〈図式I〉のあの[A→B→C]で描く「世界」が「理法」となるだろう。

いずれにせよ、あの「世界」がショウリしたことが問題なのだ。ところが、この「世界」は、〈図式I〉、〈図式II〉で描くように、はっきりと結びつけて語られるならば、それをジックリと考察したならば、その「問題」とい

うか、そのオカシサを理解できるはずなのだが、どうもそれができないのだ。それゆえ、「民主主義」VS「抑圧体制」とか、「戦争」VS「平和」、「ノーマル」VS「アブノーマル」といった単純な図式で描かれる議論に終始してこの「世界」にまでたどりつかなかったのだ。また「テキもさるもの」で、この「世界」(あの「世界」)の「平和」とか「真の平和」を心がける人々は、というか、集団は、というか「勢力は、いつもそれを主張してくれる喧伝できる「知識人」、「学者」「マスコミ」をみつけるのだ。圧倒的な資金で、彼らは動くから、そうした人々の「意見」はまさに支配的なものとなる。ここにこの「世界」を支えるヘグモニーは微動だにしない。この中に、広島の上市長も、長崎の上市長も、上坂さんも、当然のことながら含まれている。これを皮肉といわないでなんというだろうか。もちろん、小泉首相もそうである。こうして、結局のところ、「すべて」の「日本人」は、「A級戦犯」を代表とする一部の「戦争犯罪者」と、その他大勢の、無理矢理に戦争へと、無謀な「あの戦争」へとシブシブ、イヤイヤナガラ引張り込まれた「戦争責任」のない「善良な無辜の民」とされたわけだ。私の描くあの「世界」のひとしく同じギセイシャである「すべて」の「日本人」が、一部の「戦犯」と、その「戦犯」の、またその「戦犯」が指導していた「日本」国とその軍国主義の犠牲者であるその他の大多数の「日本人」にミゴトに区分されてしまったわけだ。そして、戦後この両者の「関係」についての「自覚」ができないままに、なされないままに今日に至っている。「靖国」問題における「合祀」、「分祀」、あるいは非政府組織建設等をめぐる論争はその反映としてあらわれたものである。こうしたロンソウも、あの「世界」をきちんと見据えないままに、あるいは見据えることができないままに展開されてきたのだ。「軍人」ではないいわゆるフツウの「民間人」を考えてみると、その「あの戦争」によって「犠牲者」となった「民間人」の「命」を、それでは奪ったのは誰だったのだろうか。その「答」を考える際に、「日本人」はいつも「あの戦争」へとその答を求めるのだ。「戦争」が悪いのだ。「勝者」も「敗者」もない。「戦争」が多くの犠牲者を生み出すのだと。そこから、それでは、「あの戦争」

は「誰がはじめたのか」といった問いを発するのだ。あるいは、「どのように戦われたか」の「戦況」に行きつくのだ。しかしメッタ二次の問いには至らないのだ。「なぜ、ドウシテなのか」といった問いは発せられないのだ。もし発せられたときにも、その答えは「日本」の「軍部」（「軍国主義」）とか、天皇（制）とか、日本社会の「貧しさ」に求められるのがセイゼイで、私が問うように、あの「世界」の形成、発展とそこで織り成される「経済発展」と「民主主義の発展」（これらはともに「資本主義」社会をもとに展開する）との「関係」とそれによって作り出されてきた「構造」それ自体を問うには至らないのだ。こうした「関係」をもとにした「民主主義」の実現を考察しない限り、私は、「民主主義」についてまったく語っていない、語れていないと思うのだ。つまり、福沢諭吉が『文明論之概略』においてその当時の世界が<「文明」－「半開」－「野蛮」>の三つの世界（地域）から構成されていることを、まさに「関係」として描いているわけだから、それを踏まえて、<「文明」－「半開」－「野蛮」>の「関係」としての「一つの世界」を「単位」とした、「舞台」とした「民主主義」について語る事が重要なのだ。

(29)

ところが、私がかくいう視点というか、視角が見事といってよいほど、どこかにいってしまい、逆に何かわからないウヤムヤにされてしまうのだ。大江健三郎さんは「アイマイ」な「日本」と「日本人」を批判していたが、その大江さんも、私からみると、コト「民主主義」の見方については、スコブル曖昧なのだ。大江さんはまァイイ。問題は「プロ」とされる社会学者、あるいは歴史学者の見方である。私からみればほとんどのものが「アイマイ」というよりダメである。また「エラソー」な物言いをしてしまった。

したがってはじめからそうした「問い」かけがたどりつくところは見えている。すなわち、「民主主義」（デモクラシー）の社会へと、日本が明治維新あるいは「開国」以降、歩みをとっていたなら、「あの戦争」は避けられたはずだと答えるのだ。イヤそのとおり答えてきたのだ。しかしこれまた不思議

議なことだが、それではその「民主主義」の社会はどのようにスレバ、実現するののかについてはまったく考えてこなかったのだ。その代わりに、いつも、「イギリス」、「フランス」、「アメリカ」の「市民革命」とその後の「民主主義の発展」はどうであったかという話がなされ、日本もソレを模範として歩むべきといったことが繰り返し語られたのだ。私がいつも思うのは、それは「民主主義」がどのようにすれば実現するのかといった私の問いかけに答えるものではなく、「イギリス」の、「フランス」の、「アメリカ」の場合を、各々コベツに述べているわけだ、それゆえ、そのコベツに語られる「民主主義」では、イギリスとインドの「民主主義」の、少なくとも二国間の「関係」をもとにした「民主主義」の歩みを語ることはできないわけだ。それは同じように、フランスとインドシナとの、アメリカとインディオ社会との「関係」をもとにした「民主主義」の歩みを語るができないものなのだ。それは何故か、政治学者は、「政治体制」を「比較」分類して、「自由民主主義」体制、「権威主義」体制、「全体主義」体制と位置づけるわけだが、たとえば、先の福沢の<「文明」－「半開」－「野蛮」>は「関係」として「存在」している「世界」であり、その三つの圏域に便宜的な線引をするにせよ、「関係」をまず前提としたセンビキ、つまりヒカクにしなければならない。ところが、これがまったくはじめからできないのだ。なぜなら、「関係」の枠組が存在しないからだ。いきなり、一方は「民主主義」体制で、他方は、「全体主義」体制で、その中間に「権威主義」体制といった議論をしてしまうのだ。それも仕方がない。「関係」を捉える枠組がないのだから。「エラソー」にまた言っている。これもまた仕方がナイか。話がマタマタ本当にエライところへときてしまった。反省しているがこのまま先に行ってから、また読者が何を論じていたかを忘れた頃に、「本題」に戻ることにしたい。

(30)

少し私の「民主主義」を「関係」として捉える枠組を紹介しておきたい。というよりももう何度も読者がウンザリしている例の私のモデル<図式Ⅰ><図式Ⅱ>である。しかし、私は何度でも書いて、書いて、そして誰かに伝

えて、このモデルを残しておきたいのだ。そうでないとやはり死にきれない。シネナイのだ。私は、たとえばイギリスの「民主主義」についてのこれまでの「見方」というか「常識」にいつもトマドイを覚えていたし、それは今もそうなのだ。なぜかという、イギリスが17世紀から20世紀の半ばにかけて、いわゆる「市民革命」を経験して「民主主義」を実現していく歩みを顧みるとき「インド」なる地域というか国はイギリスを語る際に忘れてならないところであったにもかかわらず、イギリスの「民主主義」を語る際に、インドとの「関係」を踏まえた「民主主義」論がこれまで提示されてこなかったとみているからである。もちろん、「大英帝国」とか、「植民地」とか「帝国主義」といった観点からイギリスとインドとの「関係」を語ってきたことは、私もよく理解している。しかし、そのことはインドの「民主主義」を直接とり上げて語ったということにはならない。インドとイギリスとの「関係」としての「民主主義」を語ったということの意味していない。いつも語られてきたのは、イギリスの「民主主義」が一方でみられ、それに対してインドはイギリスの「大英帝国」の下に組み込まれた「植民地」であったという話だ。私がジレットタイと思っていることは、インドは「植民地」だから、それではインドの「民主主義」の歩みはどのようになっているのか、その点なのだ。少しくらい述べてもいいではないかと思うのだが、語られないのだ。ここで言うておこう。インドは植民地となってイギリスの大英帝国の重要な一員となるのだが、民主主義の歩みはみられない。そのインドの民主主義を、その実現を阻止しているのはイギリスであり、イギリスの「民主主義」だと。しかし、このようには語ってこなかったのだ。こういうのだ。こう述べてきたのだ。インドを植民地として、インドに民主主義を実現させないようにしていたのはイギリスの「帝国主義」なのだと。ここには、「民主主義」と「帝国主義」を「概念」上、二つに区別して各々まったく異なるものとして理解する「思考」法が垣間見られる。この見方は、「民主主義」の実現に「帝国主義」(のカンケイ)なるものが必要であるかどうかの考えを、最初からそれこそモノノミゴトにスパッと切り取ってしまうのだ。まことにアブナ

イ、アブナイのだ。両者をいつも「水と油」の関係として語るわけだ。そこからまた話はヤヤコシイものとなる。それでは、イギリス人はどのような「生活」のなかで彼らの「胃袋」を満たし、生きてきたのか。つまりどのように衣食住のネット・ワークをつくってきたのか。ここが重要だ。孔子もいうように「衣食足りて礼節を知る」ではないが、衣食がないと、ついでに住がないと、生存それ自体もできない。それがうまく確保できて、「民主主義」云々であるから、まずここが話の出発点だ。たとえ「理念」としての「民主主義」を語る場合であれ、腹がスイタでは頭も働かないから、やはり、「理念」のレベルでも、この「現実」の衣食住のネット・ワークとの存在との「関係」が不可欠となってくる。私はこのネット・ワークを「経済発展」というよく聞きナレタ言葉を使って、[Aの経→Bの経→Cの経]、逆に[Cの経→Bの経→Aの経]といった図式で描いたわけだ。しかし、このネット・ワークはそのままでうまくいかない。なぜなら、その経済発展とその果実を他人に対して、他国（地域）に対して、正当なる財産として、権利として、人権として、それこそ普遍的にアツカマシクも宣言しておかないと、自分のモノにならない。なるべく「力」を節約できるところはソフトな「力」でうまく対処したい。そう考えた福沢のいうところの「文明」の人々は、まさにブンメイ（civilization）を創造したのだ。それを私は「民主主義の発展」として描いたわけだ。それをもとに、[Aの経→Aの民] → [Bの経^(X) Bの民] → [Cの経^X Cの民]として示される「世界」を提示したのだ。ここに私のいう「関係」としての「民主主義」が示されている。私は、[Aの民^(X) Bの民^X Cの民]といった「関係」としてつくられてきた、つくられる「民主主義」と示したのだ。すべて「民」が、「民主主義の発展」という用語を使って語っている。仮にAをイギリスに、Cをインドにあてはめて、先の17世紀から20世紀半ばの頃のイギリスとインドの「関係」としての「民主主義」は、[イギリスの民^X インドの民]として、また逆に示すと、[インドの民 → イギリスの民]として、描かれるのだ。ここにもあるように、イギリスの「民主主義」が、その歩みがインドの「民主主義」の歩みを

阻止しているのだ。またインドの「民主主義」の歩みは、イギリスによって一方で阻止されながらもそれにもかかわらず、イギリスの「民主主義の発展」を支え導くような「関係」に置かれているのだ。こうした「関係」の存在は、まさに「民主主義」そのものの問題(点)をコクハツしているのだ。ところが、それにもかかわらずなのだ。「あの戦争」の原因は、日本に「民主主義」(デモクラシー)の社会が根付かなかったとか言ってしまい、戦後は、「あの戦争」の敗北後、GHQによって「憲法」を押し付けられたが、押し付けられたのは「一部」のリーダー(旧リーダー)たちでありその他大勢の「日本人」は、その「憲法」の下で「民主主義の実現」に向けて歩むことができシアワセだとかなんとか。「すべて」の「日本人」がこうした「民主主義」の「構造」の中で生活することを、生きていくことを「強制」されたのだ。その「枠」の中でのオシツケタ、オシツケジャナイとの論争をしているのだ。まさに「民主主義」の「構造」という「コップ」ならぬ「桶」の争いなのだ。本当にドウシヨウモナイ現状、イヤ惨状だ。

付言しておくことがある。「水と油」の「関係」について。[Aの経→Bの経→Cの経] \xrightarrow{x} Cの「民主主義の発展」、あるいは[Cの経→Bの経→Aの経] → Aの「民主主義の発展」といった図式に描かれているのは、まさに「帝国主義」と「民主主義」との「関係」である。この図式とこの関係についての説明は、この「エッセー」のずっと前の方でおこなっているので、ここではごく簡単にとどめておく。「水と油」の「関係」どころか、[Aの経→Bの経済→Cの経] = 帝国主義 \xrightarrow{x} 民主主義 = Cの「民主主義の発展」であり、[Cの経→Bの経→Aの経] = 帝国主義 → 民主主義 = Aの「民主主義の発展」なのだ。ここのところを読者はきちんと確認してイタダキタイ。このようにみると、私には、ノーベル経済学者である、インド人のアマーティア・センさんを思い出してしまう。彼の話はこうだ。インドは「植民地」の時代にはたびたび飢饉の被害にあったが、独立して、「民主主義」の社会になると、「複数政党の民主主義と言論の自由が確立するや飢饉が突然消えてしまった・・・」。正直なところ、私にはワケもわからない内容だ。「選挙に

直面し野党やマスコミから批判を受ける民主主義国の政府は、飢饉を防ぐために真剣に努力せざるを得ない。」メダシメダシの話だ。しかしこれは相当にオカシイ。「植民地」の「危険」は。被害は。どこの国がそのインドを「植民地」にしたのか。インドを「植民地」とした国は「民主主義」国ではなかったのか。もしそうであれば、センのいう「民主主義」とは、一体どのようなものなのか。やはり相当にヤバイ。それゆえ、再度ここで言っておきたい。「あの戦争」の「犠牲者」をもし本当にその意味における「犠牲者」として「慰霊」したいのであれば、このアマーティア・センのいう「民主主義」はダメだという「社会」を、いえる「社会」をつくらなければならない。戦後の日本は「民主主義」の世の中になったからイイなんていう「日本人」とそうした人々が暮らす「日本」ではダメなんだ、といえる日本人と日本になるべきなのだ。つまり、そのためには、まず「あの戦争」でなくなった人は「すべて」が私の描くモデルの「世界」によって生み出された「ギセイシャ」としての「自覚」をもつべきであり、その「世界」が作り出してきた「民主主義」（「連合国」の「デモクラシー」である）の形成と発展とその維持、安定によって生み落とされた「ギセイシャ」とであると「自覚」すべきなのだ。

(30)

もう一度いっておく。もし本当に「あの戦争」の「犠牲者」として、戦争でなくなった人たちをイレイしようとするのであれば、私の描く「世界」の「ギセイシャ」だと、誤解を恐れないでいうと、「あの戦争」ではなく、あくまで「あの」世界の、モデルで描く「世界」の「ギセイシャ」だとはっきりと理解すべきことが大切であり必要なのだ。そうしない限り、「あの戦争」の「犠牲者」として慰霊などできないのだ。してはならないのだ。その意味で「靖国」のイレイではアカンのだ。合祀だから、分祀だから、神道だから、そんなことは、二の次、三の次の問題なのだ。そこにずっとコダワル限り、私たちは、あの「世界」の「ギセイシャ」であり続け、さらに多くの「ギセイシャ」を生み出していくのだ。今もそれは世界の至るところでおきている

のだ。私も含めて、「日本人」は相当にズルイ。狡猾なのだ。戦後、生き残ったものは「すべて」私のモデルの「世界」で生き続けているくせに、そこ（その現実）から逃げているのだ。それを見ようとしないでいるのだ。やはりそれは卑怯なオクビョウな「生き方」だ。また「エラソー」な物言いだ。

これまでの話の流れを踏まえながら、ここで丸山眞男さんの「超国家主義の論理と心理」（『世界』岩波書店（1946年））について、私なりの感想を一言しておこう。この論文で、丸山さんは「日本人」の無責任性について厳しく批判し、「日本人」は、あの戦争を遂行した軍人も含めて、戦争責任を「主体的」に、自分自身の問題として引き受けることのできる「個人」が存在していなかったと強調して語っているのだ。ここに丸山の「主体的な個人」とか、「責任ある個人」といった問いが以後もずっと発せられることになるが、その背後には、丸山の「民主主義」、とりわけ「市民革命」を経験したイギリス、アメリカ、フランスにおける「民主主義」への「信仰」に似たようなものが垣間見られる、と私はみている。この丸山さんの「民主主義」観というか、その見方を、私のモデルの「世界」から見直すとき、どのようなことがいえるのだろうか。これについて言っておきたいことがある。丸山さんの「主体的」な「責任」を担う「個人」（の存在）は、私のモデルの〈図式I〉の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描く「世界」とどのように向き合ってきたのだろうか、あるいは、向き合っているのだろうか。もし、この図式で描く「世界」の形成、発展とその維持、安定に、「主体的」に「責任」をもって、それこそ「自覚」した「個人」が「参加」する、かかわるような捉え方をするならば、その「主体的」、かつ「責任」ある「個人」は、あるいは「市民」は、私の図式にあるような $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{x} C$ の「民主主義の発展」と、 $[C \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow A \text{の経}] \rightarrow A$ の「民主主義の発展」とに描かれる「世界」を、そうした「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」を支持していくわけだから、いくらなんでも丸山さんがそうした「世界」や「関係」を支持するとは私には思われぬのだ。またこれとは逆に、あの「世界」と、その中の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」を、

とくに [Aの民^(x) → Bの民^x → Cの民] と、[Cの民^(x) → Bの民 → Aの民] の図式で語られる「関係」を、コレデハダメだ、コレハアカンと拒否反応を示して何か別の、私のモデルで描く「世界」とは異なるものへと、「主体的」かつ「責任」ある「個人」として目覚め（「自覚」して）思案し、行動していくことを、丸山さんが「表明」しているとも決して思われたいのだ。だが、私の結論めいた見方をあえて、ここで示すとすれば、丸山さんの思考の枠組みは、「主体的」、「責任」ある「個人」とそれが担うとされる「民主主義」なるものが、それでは一体どのようにして「実現」するのか、形成されるのかといったことがらについての考察を許すものではなかったとみている。本当に大先生に対して「エラーソー」で、申し訳ないのだが。とにかく、「主体的」、「責任」ある「個人」がなにかステニ「先天的」に存在しているはずだし、「日本」と「日本人」はそのようではなかったはずであると語っているとしか読みとれないのだ。なぜならそれ以上のことは言及していないからだ。しかし、丸山さんは福沢諭吉をよく引用しているのだから、やはり次の一点だけは最低限どうしてもどこかに書いておくべきではなかったろうか。すなわち、<「文明」－「半開」－「野蛮」>の図式で描かれる「世界」の中において、この「主体的」かつ「責任」ある「個人」はどのように位置づけられるのか。福沢は、「製物の国」と「産物の国」といった観点から、先進国と後進国との間のいわゆる「南北関係」を、「文明」と「半開」、「野蛮」との間に、とくに後者との間に見い出しているのだ。つまり、「産物の国」とされる「野蛮」の「経済発展」が、「製物の国」とされる「文明」の「経済発展」に一方向的に「利用」（サクシュ）されていて、そうした「関係」から脱け出すことは至難の業であるとみていたのだ。それゆえ、こうした「関係」が続く限り、「野蛮」での生活は相当に苦しいことが予想されたばかりか、事実そうであったのだ。だから問いたいのだ。丸山さんのいう「主体的」で「責任」ある「個人」とか、「市民革命」の経験をもった、まさに「私」と「公」の関係について「近代立憲主義」にもとづいて「権利」を享受できる

「市民」なるものが、「野蛮」に暮らす人々の「生活」を苦しめるような「経済発展」の「関係」を、少しでもカイゼンしようと、マシナモノにしようとそれこそ言葉の遊びではないのだが、「主体的」かつ「責任」をもった「個人」として取り組んだのか、取り組もうとしたのかどうか。まさにこの問い(かけ)である。丸山さんは見事なカタスカシをするのだ。私がこだわるのは、ここなのだ。この「カタスカシ」は日本の「知識人」「学者」「マスコミ」のどうも「御家芸」であるかのようだ。もう少しイヤミな言い方をすると、右翼でアレ左翼でアレ、「政治学者」は「民主主義」や「人権」の問題を「経済」の問題と「資本主義」の問題と切り離して研究することをココロガケタのだ。逆に右翼でアレ左翼でアレ、「経済学者」は、「資本主義」や「経済発展」の問題を批判するにせよ、擁護するにせよ「民主主義」を前提としながら語ってきたのだ。やはりナニカこのあたりにはイロイロとクサイものがあるようだ。というよりも「オキテ」みたいなものだ。この「一線」を超えるとどうもダメな、つまり読まれないように、スミに置かれるようだ。もちろんこれは、私の「ヒガミ」だ。嫉妬からの発言だ。

(31)

ここで上坂さんの「靖国」問題についての論考に対する私の結論めいた感想というか意見を述べておきたい。小泉首相をはじめ「日本」のリーダーならびに私を含めた「自覚」できないできた「日本人」は、私のモデルで描く〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の(といってもここでは、〈図式Ⅰ〉がほとんどではあった)「世界」の中で生み落とされてた「犠牲者」である「A級戦犯」らの「英霊」を、「日本」と「日本人」の「犠牲者」として奉ることができなかったばかりか、逆に、その「世界」の「殉教者」として奉り続けたのである。これほどの「ペテン」がどこにあるだろうか。「広島」、「長崎」の原爆記念式典も、8月15日の「終戦」記念日も、「日本」と「日本人」が「お互い」まるでペテンに掛かっているかのように演技し続けてきたのだ。61年間もそれをしてきたものだから、もうエンギも相当なものとなり、もはやペテンに掛けられたなどとはいえないほどシラジラシイものと化したのだ。

「靖国参拜」も例外ではないのだ。もはや「靖国」も、「原爆」も、あの「世界」の形成、発展と維持、安定のための「観光産業」と成り果てたのだ。当然の結果だ。ギセイシャとジュンキョウシャの区別がつかないのだ。もし本当に「犠牲者」として「死者」を弔おうとするココロがあれば、(付言すれば、この「心」こそ「愛国心」だが)、その「犠牲者」を生み出した「原因」を真剣に探し出したはずなのだ。それをしないで、「日本」と「日本人」は、「あの戦争」をいつも1年のうちでも8月という月においてのみ語るのだ。そしていつもいうのだ。「もう二度と戦争はしません。」「あの不幸な時代を忘れてはならない。」「民主主義、人権、平和を守り続けなくてはならない。」と。よくこんなことが平気で言えるもんだ。カロウシ(過労死)とは一体なんだ。企業「戦士」とは、受験「戦争」とはなんだ。ここにある言葉は、日常生活の中に「戦争」が今も続いていることを見事に示している。そのくせ私たちは、こうした「戦争」をみながら、「あの」戦争とは違う、イヤまったく別の「世界」のことだと理解しているのだろう。「だろう」としか言いようがない。なぜなら、こうした使いワケをしない限り、オカシイだろう。これこそ「口約」に反しているからだ。ウソを言っているからだ。

だが、「日本」と「日本人」は「ウソ」を言ってきたのだ。日常の中の「戦争」と、「国際法」の中の「戦争」と、どこがそれでは違うのだろうか。もちろんいろいろな違いは指摘できる。それではどこが同じなのだろうか。私からすれば、その二つとも、私のモデル<図式Ⅰ>、<図式Ⅱ>の描く「世界」を前提として、その「中」で繰り返されてきた、いまも進行中であるといった「戦争」なのだ。その「戦争」の担い手が、個人であろうと、国家であろうと、その「強度」がまったく測定できないものでであろうと、「低・中・高」の強度として測定されるものでであろうと、「最後通牒」が提出されようが、宣戦布告がまったく行われなからうが、そうした「戦争」をつくり出していく「構造」というか、「仕組み」は「同一」なのだ。先の「カロウシ」が「広島」や「長崎」でおこるとしたら、そこで訴えられ続けた「平和」とは、その願いとは一体なんだろうかと、私は思わざるをえない。それが

「東京」で何度も何度もマスコミで報道されるのを知り、「靖国」とは一体なんのための「創造物」なのかと考えてしまうのだ。「日本」と「日本人」の「第9条」と「平和憲法」なるものの存在は、私の〈図式I〉のあの「世界」($[A \rightarrow B \rightarrow C]$)をまったく別のものに置換しようとするものではなかった。これだけはいっておきたいのだ。 $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{x} C$ の「民主主義の発展」といった図式で描かれる「世界」を私たちはよく理解できるだろう。Aを先進国、Bを中進国、Cを後進国に、Cの「民主主義の発展」を、もし「人間」として生活するのであれば、享受する必要のある「権利」と考えてみてほしい。そうすれば、私たち先進国の「経済発展」が、つまり衣食住のネットワークの「力」がBやCのそれらをAに都合のよい方向に利用するように導き、そのためにCの人々の権利が容易に保障されない「世界」を示している。このA、B、Cを、大企業、中小、下請にそれぞれ置き換えて、Cの「民主主義の発展」を下請の人々とその家族の権利に考えてみよう。みんなこのような「世界」はよくわかっているのだ。それゆえ、できるだけCに行かないように、BやAをめざして行動するのだ。生きていくのだ。私が読者に言いたい、訴えたいのは、こうした「構造」の中で、「あの戦争」や日常の「戦争」がつくり出されてきたということであり、もし本当に「口約」を実現しようとするれば、この「構造」($[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」)の中から一步でも「外」へと脱け出すことである。たとえCからBへ、そして、BからAへと特定の個人なり国家が「上昇」できたとしても、その「上昇」は余裕を実感させるものではないし、その「上昇」それ自体が許されるものではないはずなのだ。「あの戦争」の「歴史」はそうした点を学ぶためのレキシにしなければならない。

(32)

もちろん、これは相当に難しいというか、実現を期待できないといってよいほどである。だから逆に、まずは「広島」、「長崎」そして「靖国」の「儀式」を、あまりにも「生活」からカケハナレタ「象徴」を、日常のわれわれの「生活」の中に引き寄せるギンキに変(代)えていかねばならない。たとえ

ば、「広島」の「平和」と広島受験「戦争」とは結びつけて考えられる、そこから「平和」をみつめる、そのような市長の「平和宣言」であるべきなのだ。「1年に1回」の「儀式」であるから、「1年365日」を考えさせる、イヤ、1年365日の生活を「平和」に営む、営ませる、それを感謝できる、そんな式に変えて、代えて、いくべきだ。「広島」、「長崎」、「靖国」は「特定の地域」のモヨオシではないはずだ。当然ながら、この私にも「関係」がオオアリだ。ところが、それがいつもクウキョでビジレイクな「宣言」で「終わり」となる。いつも「人類」はとか、「未来」はとか、「核兵器」とか、「廃絶」とか、そのような格調高い文句でオワリなのだ。

そうではダメなのだ。1年365日のまさにハジマリとしなければならない。そこにある日常の生活が舞台となって語られるセンゲンにする必要がある。「実践報告」にしていかなければならない。61年間の「実践」の積み重ねにしていかなければならなかったのだ。「遅い」のは確かだが、まだ遅スギルコトハナイ。これからだ。この「エッセー」のどこかで書いているが、「広島」、「長崎」、「東京」の金融機関は「立場」上、「もう二度と〜」を訴えているバシヨにあるから、私のモデルで描く<図式I>の「世界」にできるだけテイコウする姿勢をとって、[Aの経→Bの経→Cの経] $\overset{\times}{\rightarrow}$ Cの「民主主義の発展」に導かないように、BやCを「守る」金利政策を積極的にコクサクに採用するよう働きかける。それをその首長と県民、都民も協力して、その「成果」を、実践報告する。いろいろな取組みが可能だ。もちろん。

このように見てくると、「あの戦争」を経験した「日本」と「日本人」にとって、「もう二度とアヤマチは繰り返しません」といった誓いをその「口約」どおりに実現しようとするれば、それはこれまでの「ユートピア」とされた「社会主義」や「共産主義」社会の実現に匹敵する、そうした社会を創造することになるのだ。これは本当に難しいことだが、それはまさに「日本」と「日本人」にヒトとしてのユメを与えるものであること疑いをえない。「社会主義」や「共産主義」を実現するためには、「民主主義」の実現の仕方と同様に、まずは私のモデルで描く「世界」を前提として、とにかく[A→

B→C]で描く「世界」の中でAをめざさなければならなかったのだ。そしてその後で、Aにおけるテキセイなコウヘイな分配をおこなうわけなのだ。それではやはり「戦争」は避けられない。それではダメだと私は主張したいのだ。[A→B→C]の図式で描く「世界」ではなく、つまり[Aの経→Aの民]→[Bの経^(×)→Bの民]→[Cの経[×]→Cの民]で描く「世界」ではなく、それとは異なる別のセカイを、すなわち、[Aの経→Aの民]→[Bの経→Bの民]→[Cの経→Cの民]となるようなセカイを創造していくことをメザス必要があるのだ。これがもし仮にすべてできないにせよ、そうしたビジョンを示して、それに向かって一步でもススムのだといった「宣言」をして、いわゆる「実践」に導くことができれば、その時こそ、「靖国」に参拝できる「資格」をもてることになるのだ。ひょっとすればそのような「資格」を得るようになるときには、また「靖国」をみつめる「日本」と「日本人」の国と態度も従来と変わったものになっているかもしれないが。トニカク、まずはそこへ向かって歩むべきなのだ。そう私は読者に伝えておきたい。

本当はここで話を次へとうつしたかったが、もう少し、上で述べた私の話をわかりやすく伝えれそうな「記事」(『毎日』2006年8月12日付)があったので、それを参照しながら述べてみる。その記事とは、シリーズ企画「縦並び社会—広がる多重債務」であり、小見出しとして、「もう何人死んだとやろ」、「借金で自殺急増」、「生活苦で消費者金融」といったフレーズがあり、「長崎県・対馬」が紹介されている。少しだけ要約かつ引用してみる。次のようにはじまっている。<大都市の景気回復から地方が取り残されていく。その縮図が国境の島にある。人口3万9,000人の長崎県・対馬。かつて真珠養殖やイカ漁で繁栄したが、今は多重債務にあえぐ。自殺率は10年前の3倍に増え、去年は18人に上った。企業の撤退、三位一体改革による公共事業削減、金融機関の破たん……。生活に困窮した島民が最後に頼るのは、消費者金融だった。> このくだりの中に私は、例の<図式I>のモデルで描いた「世界」([A→B→C])を思い重ねている。つまりAを大都会、Bを中

小都市、Cをこの対馬としてみる時、[Aの経→Bの経→Cの経] \times Cの「民主主義の発展」として理解できないかと、思うのだ。もちろん、手前勝手な見方をしているかもしれない。ここでいたいことは、国と国との、世界的規模の「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」の中に、各々の国の中の自治体の「経済発展」と「民主主義の発展」が行われていて、それらはまさに「関係」づけられていて、[A→B→C]あるいは、[B→C→A]で描く「世界」を構成しているといった点だ。たとえばいうと、1970年代までの日本にあっても、いつも[A→B→C]のCに位置する後進国に対比される存在としての集団（地方自治体、企業、家庭）はやはりみられたし、逆にこの反対もある。（Cに位置していてもAの平均と同じような、それ以上の生活を享受している集団もある。）対馬もそうした例としてみていい。ところが、今の日本は、[B→C→A]で描く「世界」のAに位置しているわけだ。そのAを[大企業→中小企業→下請]といった図式で仮に描くとすれば、対馬はこの「下請」としての存在である。こうみてほしい。対馬だけではないのだ。このAの「日本」、「日本人」にあってもなおこの「下請」に属する集団は多いのだ。これからこの集団はますますその量を増やしていくし、その生活レベルはますます「低度化」していくことが予想される。

記事に戻ろう。その終わりは以下のくだりとなっている。＜戦後最長の「いざなぎ景気」超えが確実とされる日本は自殺者が8年連続3万人を超え、うち8,000を「生活・経済苦」が占める。多重債務問題が深刻化する中、国会ではグレーゾーン金利の撤廃論議がヤマ場を迎える。格差社会で何が起きているのか報告する。＞この「くだり」にも示されているが、日本はいまもとも長期の「経済発展」が展開しているのだ。そして、それにもかかわらず、イヤ、だからとここであえて強調しておきたいのだが、自殺者の増加である。私はこうした事態を防止できる「平和」論の必要性をみている。第9条の下にあるのと、そうでないところでの「生活」が、まったく同じであれば、それでは、「第9条」は国民の生命、財産を守らないで、一体なにをマモルの

だろうか。こうした「記事」の中にある「生活」から身を守れる「第9条」となるには、逆にいうと、「第9条」によってこうした「生活破壊」をクイトメルためには、どのような「憲法」でなければいけないのか。こうした方向からの論議を行うべきだろう。長崎の対馬でおきていることは、「広島」、「長崎」でも当然おこっていることであり、「靖国」のある「東京」でも日々繰り返し経験していることなのだ。私はこの「自殺者」は、「犠牲者」だとみている。それは、別の意味の「戦争」の「犠牲者」だとみている。彼らは、意味は異なるものの、同じ「構造」の下でつくり出されたのだ。私はその意味でも、私のモデル〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉とその描く「世界」に、「日本」と「日本人」が目を向けてケンケンガクガクの論争を展開することを切に望んでいる次第である。トニモカクニモダ、私たちの「日々の生活」そのものの中に、「戦争」と「平和」の問題がいつもあるということ、その意味で、「戦争」と「平和」(の問題)は、私たちの日常の暮しのなかの「生活」と背中合せにあることをまずは知ることが大切だということ、私は読者に伝えておきたい。そのために、何度も私のモデルの「あの世界」を語ってきたのだから。「広島」、「長崎」の原爆投下の記念式典の「式辞」の内容がいつか変わって、「日常生活」の中の「戦争」と、国家間の「戦争」とのアイダには本来「カベ」など存在してないにもかかわらず、それがまるで異なる「空間」の中の「出来事」であるかのように「実感」されているそのコトを問いタダセルものになることが大切なのだ。そしてそのことは、日常生活の中の「平和」と国家間相互の「平和」との間にも、本来は「壁」など存在していないことを意味しているのだ。

(33)

私のモデルの「あの世界」をわかりやすく解説できる資料が本当にいいタイミングで出てきた。今日(2006年8月19日)の『毎日』の記事〈視点 小泉時代考〉にある〈規制緩和バブルとホリエモンの暴走〉(論説委員 児玉平生)である。そこに次のようなくだりがある。〈……小泉政権が掲げたもう一つの課題の「貯蓄から投資へ」については、……〉この記事では、

こうした流れにともなう〈株式投資はいかがわしく危ないという印象を改めて認識させる結果となった〉と指摘しているように、〈貯蓄から投資へという小泉政権の金融構造改革は、足踏みが続いている〉と結論づけている。これまでも小泉改革と規制緩和、「勝ち組」と「負け組」の二極分解化について私のモデルを使って説明してきたが、ここでもやはりというか、記事は表面的な流れを語っているだけで、小泉改革のもつ意味と意義（すなわち、小泉改革の目玉は「郵政民営化」であり、郵便貯金を投資へと回すことであり、そのための「貯蓄から投資」を導く小泉改革だということである。そしてその投資先は、私の〈図式 I〉で示す $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の B グループ、とくに中国であるということなのだ。そしてこうした小泉改革は私のモデルで描くように、「民主主義」の（新・旧）「構造」転換によって生み落とされたものということなのである。）を理解できていないと、またまた「エラソー」に私は思ってしまうのだ。大胆に言うと、「小泉政権の金融構造改革」というよりは、私のモデルで描く「あの世界」が引き起した改革（「貯蓄から投資へ」）なのだ。つまり、〈図式 I〉の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ から $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式に描かれる「世界」への変容というか、転換のために用意された改革なのだ。また、この B グループとその先頭を走っていくことがイヤ、トップをだが、確実視される中国の「民主主義」の「発展」の「段階」とその「方向性」とが、〈図式 II〉の (ウ) $\langle I \text{ 期} \rightarrow II \text{ 期} \rightarrow III \text{ 期} \rangle$ へと向かうために、換言すれば、〈権威主義的性格の政治 \rightarrow 経済発展 \rightarrow 分厚い中間層の形成 \rightarrow 民主主義の発展（高度化）〉の「流れ」をエンカツにするために準備された改革なのだ。「日本」と「日本人」とが「貯蓄」をヘラシてその分を「投資」にまわし、その資金が、この図式の I 期から II 期の「経済発展」に投下されるためにダンコウされた改革なのだ。そして、その流れを、日本にあっては、 $\langle I' \text{ 期} \rightarrow II' \text{ 期} \rightarrow III' \text{ 期} \rangle$ の流れに示される「民主主義」の「発展」の「段階」と「方向性」とがまさに相互補完的な「一体的」関係をつくりだすように支えていくための改革なのである。つまり、「民主主義の発展」（高度化） \rightarrow 経済発展 \rightarrow 分厚い中間層の解体・断片化 \rightarrow 民主主義の発展（低度

化) > の「流れ」を導き出す「改革」なのだ。ここでの「経済発展」は、Bグループの、中国のそれが、「重厚長大産業型」の産業構造を基本とした「経済発展」であるのに対して、「金融・サービス(化)」を産業構造の中核としたものなのだ。その意味で、日本の「経済発展」は、1950、60、70年代の高度経済成長期に特徴的だった労働集約型から、資本集約型へとその中身を変えているわけだ。そのことが「貯蓄から投資」の改革と相重なっているのだ。しかし、この「流れ」は当然ながら、日本における中間層を解体させていくことにつながる。「貯蓄から投資」の改革は小泉政権以前に既に始まっていたわけで、いわゆる1985年の「プラザ合意」がその象徴として位置づけられる。日本の大手の自動車、鉄鋼産業が「円高」対策として海外へとシフトしていったが、まさにそこに <Ⅰ'期→Ⅱ'期→Ⅲ'期> へと向かう「流れ」が見え隠れしていたのだ。小泉改革はいわばその「流れ」の「追認」として理解したほうがよいわけだ。それゆえ、「規制緩和バブルとホリエモンの暴走」は日本のみならず、1970年代以降において米国や英国など先進国に共通する現象であったのだ。小泉改革とそれに伴う結末はいわば先進国に共通したものであり、それはまたここでみたような「流れ」によって生み出されたものだったのだ。またそれゆえココでも厄介なことになるのだ。「日本人」が「改革」のイタミをできるだけ少なくするにはどうすればいいのか、といった問いを考えるにしても、私の「あの世界」を簡単に別のモノに代えたりはできないのだ。また「セーフティネット」づくりといっても、「あの世界」を前提としたものだから、今後もますます「犠牲者」は次々と生みだされていくことにハドメがかからないのだ。そしてそこへ「日本」と「日本人」の「あの戦争」という「歴史」が重なってくるのだ。つまり、「民主主義」とかに対するゼツタイ的な信仰というか、ジュバクというか、「民主主義」を「理念」でしかイメージできないのだ。その「民主主義」を「経済発展」と結びつけて考えられないのだ。いつも「平面的」なとらえ方、理解のままで、それが「立体的」なものにならないのだ。そう「生きモノ」であり、「民主主義」も人間と同じく、赤んぼうの時もア

れば、少年期、青年期、そして老年期もあるといった見方ができないのだ。口をアケレバ、まるでチホウのように、「市民革命」「普遍的人権宣言」「民主主義はファシズムに勝利した」といったことばかり。本当に厄介なんだ。また私の「あの世界」がわかってこれまた大変だから。しかしヤハリわかっておくことにコシタコトハナイのだ。

(34)

このエッセーは、いわば書下ろしの形で、とにかく先へと、はやく私の伝えたいことをできるだけわかりやすい内容でとの一心で書き進めている。もっともそうはいっても、やはりあっちへいたり、またこっちへと話が展開しているかもしれない。ご容赦のほどを。ただこれだけはわかっていただきたいのだ。今後の「日本」と「日本人」がどのような「流れ」の中を泳いでいかなければならないのか。またそこをどのようにして「目的地」へと渡っていけばよいのか。それに対して私の研究がひょっとしてお役に立つとしたら、これまで何度となくお話ししてきたあの「モデル」で描いた「経済発展」と「民主主義の発展」との関係によって織り成されつつ形成、発展してきた、そしてまたこれからも発展し続けていけよう「仕組み」というか「構造」(の存在)である。それは1970年代を境としてはっきりと変容している。そう私はみている。いわば新・旧の二つの構造があって、それを私は「民主主義」の新・旧の構造と呼んでいるが、その旧の構造は、まさに「地理上の発見」といわれた時代から約500年にも及ぶ年月を重ねて形成、発展してきたのだが、それに代わって、現在は、1970年代のはじめから、新しい「民主主義」の構造が形成、発展していく、そうした「流れ」の形成、発展が緒に就いたばかりだと、私はみているのだ。この「流れ」が旧の構造と同様に500年にわたり続いていくかは定かではないものの、それでもはっきりと私には見えている。こんないい方は、もちろん不遜な物言いだと読者には思われようが、何しろ誰にも相手にされないで研究してきた哀れな研究者だとやはりこのような言い方しかできないのだと、大目に見ていただきたい。さらに付言すれば、この「民主主義」の構造という呼び方は少し不正確である。

より正確かつ、丁寧に表現すれば、「経済発展」と「民主主義の発展」との関係によって織り成されながら形成、発展してきた「民主主義」の構造ということにある。少し長すぎるし、たびたびこの構造についてはふれるので、省略した形で使っていることを、ここでお断りしておきたい。なお、この前でもこうした呼び方があれば、それはこのような意味で使っているとご承知いただきたい。

その際、大切な点はこれまでの「民主主義」の旧の構造を、夏目漱石の表現を借りて「西洋の潮流」の下で形成、発展してきたものと位置づけるならば、これからつくられていくであろう新しい「民主主義」の構造は「非・西洋の潮流」の下でつくられていくということになる。そのために、いま米中の「覇権連合」を形成、発展させるために、米中の関係は展開しているとみなしなければならないのだ。簡単な図式を使っていうと、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で示される旧の「民主主義」の構造が、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式に示される新しい「民主主義」の構造へと推移しているということだ。つまり、「西洋の潮流」から「非・西洋の潮流」へとまさに潮の流れが変化しているのだ。 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描くようにである。そしてこのBの先頭に位置するのが、中国である。そしてそれをロシアやインドやブラジルといった諸国が支えるような構図となっている。いわゆる「ブリックス」と呼ばれる諸国である。

これからも世界の至るところで論争なり衝突があったとしても、「日本人」は、「自覚」した「日本人」ならば、この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描かれるように「世界」が変容していくことを、またそうした「世界」を、すなわち $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ のモデルで描かれるように、世界が形成、発展していくように、そのために、紛争や衝突あるいは大小さまざまな戦争が生起しているのだということを銘記しておくことが大切なのだ。この潮の流れを見誤ってはならないのだ。

この点に関して私は日本の言論界の、とくに右翼的な言説を弄するものに対して、相当に腹立たしい思いがある。今日の朝刊（2006, 7, 26付けの『毎日』）の公告にあった雑誌『WILL』9月号ワック出版の見出しの紹介を

見てのことである。よほど「中国」と「中国人」が嫌いなのだろう。私もこの雑誌はよく買って読むのだが、これほど中国のことを、中国人のことをことさら取り上げて、「馬鹿か間抜けか阿呆か」と言わんばかりの、いや実際に言っている、言い続けているのだが、そうした類の発言というか、議論に終始しているのだ。よほどヒドイ目にでもあったのだろう。そうじゃないと、そうでもなければこんなものは書けないだろうし、言えないだろう、なんて私は思うのだ。しかしそうは言いながら、私も相当にアホだから、人の悪口をいったり、書いたりしているのを読むのは悪くないのだ。いや大好きなのだ。楽しいのだ。私もこの世の中にあまり楽しいこと、おもしろいことを経験していないのだろう。なにせ他人や他国のことを悪し様に言っている雑誌を読んで自分の人生における憂さを晴らしているのだから。もっとも私のような人間は一人だけではない。たくさん私の友だちはいる。日本人ばかりでもない。中国にも、逆にこの手の言論があって、同じようにして「日本」と「日本人」に対して罵詈雑言を吐いているのだから「お互い様」なんだ。中国人の中にも私と同じように憂さを晴らしている哀れなものがいて、私と、いやかなりの日本人と結構、「友だち」になれるんだよ、本当は。しかし、そうなってもらうと困る人や集団が存在しているのだから、厄介だよ、世の中は。

そうだろう。この『WILL』という雑誌もみんな仲良しになったら、読まれなくなるからね。たとえば、「同じ憂さを晴らしたい同士の友だちなのに、なんで中国や中国人の悪口をいうのか、許せない」なんて叫ぶ私のような馬鹿がでてきたらしようがないだろう。それでも、このくらいの馬鹿なら私はなっても許せるのだ。「自覚」した「日本人」になるためにも、なっちはいけない「馬鹿」があるのだ。それは、私のモデルで示したこれからの「世界」の流れが、つまり $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」がまったく見えないで、見ようとしなくて、「中国」や「中国人」を相手にすることなのだ。そしてまた、そうした「中国」や「中国人」を馬鹿にしたり、悪し様にののしるような言辞を弄するような言論人の存在も私は決して許すことができないのだ。

おそらく彼らは、今は日本にいて威勢のいいことをいっているのだが、ひょっとして中国が日本を占領したときに、「自爆テロ」までやって、その中国と中国人に対して、威勢のいいことを言い続けるのかと考えたとき、私は断言してもよい。「絶対はない」と。社会科学を志しているものが輕輕に、「絶対はない」なんてことは口に出してはいけないのだが、これだけは自信をもって、だから猶^{なお}の事^{こと}かなしくなっちゃうのだが、「絶対はない」と言い切れるのだ。それは「日本」の「歴史」をみればよくわかる。そう、「あの戦争」へと至る経緯とその結果である。「あの戦争」の顛末をみればよくわかるだろう。それを「日本」と「日本人」は「歴史の教訓」として肝に銘ずるべきなのだ。一度あったことは二度ある。いやこの「日本人」は何度でも同じことをしてしまうのだ。そしてすぐに忘れてしまうのだ。「水に流して」だ。「日本人」の誇りも、無念の思いも、流してしまったのだ。

(35)

最近の出来事に目を転じてみよう。「靖国」問題でもそうだ。この『WILL』に書いているような「右翼」的な論者も「靖国」の「合祀」か「分祀」でもう分裂している。石原慎太郎が、テレビで血相変えて、「A級戦犯」の合祀に異を唱えていたが、わからないのは、それでも靖国神社の参拝は止めないというのだ。私なんか単細胞の人間は、この石原さんの威勢のいい右翼的な話しにすっかりいかれていたので、当然この人は合祀に賛成で、というより、靖国神社は「A級戦犯」がいるから靖国であり、そのところを当然わかった上で石原さんも靖国だ、靖国だといっていたと思っていたのだ。ところが、先の「天皇陛下」（「昭和天皇」）が1978年以降、「A級戦犯」を「合祀」した靖国神社には行きたくないとか述べた「富田メモ」なるものが最近になって出てきて、それで先の石原のような発言へとつながるのだが、これもわからないのだ。何故このようなメモを今になって、それも中国との「金儲け」の話がいよいよ大事になってきた頃に、出されるのか。これがわからないのだ。あまりにも「日本」と「日本人」の世界の国々との付き合い方が手にとるように、私のようなものにもわかるから、なおさら「わからない」

のである。「日本人」というのはやはり「金」のためなら、「商売」のためなら、何がなんでもこれまでの、それこそ生死をかけた出来事であっても、あっけらかんとして水に流してしまうのだろうか。上坂冬子さんのように、商売のために靖国を中国に売ってしまうのだろうか。もちろん、結論はそうでも、結果はそうでも、やはりストレートにそうすることはできないから、ああだ、こうだといろいろと弁解や、理屈をつけて時間をかせぎながら、私のような単細胞の人間の不満のガス抜きをしているのだろうか。これもやはり見苦しいなあの一言である。

「靖国神社」は「合祀」してきたわけだから、それを今さら止める必要はない。そこに「政治家」が行くからおかしくなるのだ。首相や国家議員やとにかく税金で給料をもらっているものが行くところではない。「靖国神社」は宗教法人であるから、また政教分離の原則もあるから、そこに「政治」が介入してはならない。「心」の問題だといって、一国の総理大臣が行ってはいけないのだ。小泉純一郎という現在の総理大臣が参拝することによって、東条英機という戦時中の総理大臣が犯してしまった過ちを、加害の責任を、戦争遂行をして、あろうことか敗けてしまったという敗北の責任を、有^う耶^や無^む耶^やにしてはならないのだ。水に流してはならない。ましてや米国のブッシュ大統領と仲良くして、エルビス・プレスリーの館にまで行って「ラブ・ミー・テンダー」の歌などを口^{くち}遊^{ずま}むようなものが参拝してはならない場所なのだ。靖国神社とは、「日本」と「日本人」であるならば、「自覚」した「日本人」ならば、「覇権システム」とその「秩序」のもとでつくり出された「民主主義」の構造の中でおめおめと生き続けている「姿」を恥として写し出す「象徴」として理解されるものである。私はその意味で、はやくそのような生き恥を曝^{さら}す生き方を一刻でもはやく止めるべきだと考えている。つまり「覇権システム」とその「秩序」の下から少しでも遠くへと歩を進めることを「日本」と「日本人」が「自覚」することを期待しているのだ。そのためには、今日あるような、いや500年以上もかけて続いているような「経済発展」と「民主主義の発展」とにより織り成されて形成、発展してきた「民主主義」

の構造を別のものへと代えていくことが大切だとみている。少なくとも、これまでと違った「経済発展」が求められるとみている。具体的にいうならば、大企業が一人勝ちして、その残りカスに中・小企業が、またさらに下請けやそのまた下の下請けが、まさに死活をかけて「競争」(「戦争」)しなくてもいいような「経済発展」をめざすべきだと主張したい。それと同時に、こうした「経済発展」の問題にまったく目を向けることなく、第9条を、日本国憲法を守りさえすれば、「戦争」のない世の中になるといった本当に馬鹿な議論を多くの読者がしないようにと切に望むだけである。この点については、また別のところでしよう。だが急いで申しておかねばならない。1956年の「水俣病」に代表される「公害」を、私はその「公害」とは形を変えた「戦争」であったとみるのだが、憲法第9条をもつ戦後の日本において防ぐことができなかったということ、われわれはどう考えればいいのか、そこである。

(36)

先にまた戻るとしよう。それで私がいいたいのは、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描くような流れに「世界」は進んでいくということをゆめゆめお忘れなくということだ。そうであれば、先の雑誌『WILL』の小見出しで、石原慎太郎・葛西敬之「中国は五輪後に分裂、崩壊する。」とあるが、そのようなことにはならないということを知っていただきたい。本当に残念なのだが、この石原のような議論をなお真面目にしている人々が多いのである。どうしてなのか。それは、私たち「日本人」が、私の描いたように、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ から $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ へと世界の仕組みが変化、変容していることを理解できないところにある、そう私はみている。ごく簡単にいうならば、「覇権」の興亡についての「歴史」がみえていないのだ。また何か偉そうなことをいつてしまった。何しろ、わが家の中の「覇権」争いにも敗けてしまう男がこんなことをいう資格はない。それは認める。だが、少し聞いてほしい。これまであれほど日米関係は大切だ、日米同盟は何よりも優先されなければならないといていた「先生」も、中国も無視できないとか、中国との関係も大切

にとかいう仕末ではないか。また北朝鮮への日本の強硬な対応についてもだ。私はそれは当然だとは思っているのだが、誤解のないように、くれぐれも。「思い」や「腹立ち」はわかるのだが、その「表現」の仕方はまた別の問題だということ。例によって日本の政治家、それも防衛庁長官とか幹事長が、「自衛」のために北朝鮮にあるミサイル基地を先制攻撃する必要があるとかの発言を、世界のメディアに向かっていったのけたから、これまた大変である。またそのときに、日本は米国と共同で、国連安全保障理事会に北朝鮮に対する「制裁決議」を提案しようとしていたからなおのこと、日本の政治力というか外交力は御粗末である。いやそれよりもだ。日本のリーダーをはじめ、他の議員はもちろん、この『WILL』の知識人も、私がいうように今後の「世界」の流れが $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ へと描くように変容していくことをまったくとほいはわないが、読めていないのだ。また、この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ のBの中でも中国は、「必ず」や「覇権国」となることももちろん理解できていないのだ。さらに今や「米・中覇権連合」が形成、発展している最中であり、今後のこの両国は相互に太いパイプを築いていきながら、中国が名実ともに「覇権国」となっていく日を見守ろうとしているなどとは、おそらく頭にはないのだろう。もしこの「流れ」が読めていたら、北朝鮮に対しても、六カ国会議への対応にしても、それよりも何より、中国に対する向き合い方が、そのことはまた米国にたいしてもなのだが、まったく異なるものとなっていたであろう。この図式の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ のBの頂点に中国が達するために、このAのなかの今の覇権国たる米国が、他のAの先進諸国をなんとか束ねながら、覇権連合を中国との間に形成、発展させているのだ。今のEU諸国をはじめ、アフリカや中東との米国の関係は、すべてこの $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描く「世界」をスムーズにつくり出していくためなのだ。

ところがここに困ったことが見え隠れするようになった。それは日本の動きである。日本だけがこの流れを読めていないのだ。それゆえ、米国は、その中のかつての親日派は大変動きにくくなるだろう。米国内での親中派との関係もあるからなおさらだろう。しかし、はっきりと読めるのは、今後2、

30年内にほとんどすべてのものが、共和党、民主党ともに親中派へととなっていこう。そのことを今から考えて、「日本」と「日本人」とは行動していくべきである。ここで付言しておかねばならない重要なことがある。取扱いを誤れば、世界の中で生きていくのが大変となるような大問題である。それは「靖国」に関することである。もっとも、正確には、「民主主義」の構造に関係してくるのだが。「政治体制」の議論でよく「自由民主主義体制」「権威主義体制」「全体主義体制」と三類型され、各々の特徴について説明される。ごく簡単にいうと、「自由民主主義体制」と「全体主義体制」はそれぞれ対極に位置していて、その中間に「権威主義体制」があるとみてよい。靖国神社には、1978年の「合祀」によって、「全体主義体制」の支持者が含まれたとみてよい。それを日本の、すなわち「自由民主主義」（「民主主義」）の陣営にある総理大臣が参拝するとなると、「政治体制」の話では「対極」にあるとされるものが、この靖国神社とともに「和解」してしまうことになる。日本の場合は、「和解」からさらに「融合」してしまう。このように、これからは[B→C→A]の図式で描く「世界」をつくり出そうとするBやCのリーダーたちに、日本の靖国は理解され、捉えられるだろう。

さらに付言すると、中国において「文化大革命」に関する研究が「当局」によって禁止されているが、その理由は、中国共産党への批判、あるいは毛沢東のリーダーシップとの関係云云というよりは、やはり私は、「中国よ、お前もか」といった事情が働き出しはじめたとみている。すなわち、何度も述べているように、[B→C→A]の図式のBの頂点へと中国がいずれ来ようとしている。そのBは、「経済発展→民主主義の発展」といった図式で描かれる「世界」である。もちろんまだ中国をはじめ、インドも、ブラジルも、ロシアも、この図式で描く「世界」は該当していないし、やはり2、30年先であろう。少し早く想定してみても。しかしそのような方向へ中国を、ブリックスをもっていこうと、[B→C→A]の図式のように描かれる「世界」をつくろうとする勢力は努力しているのだ。それに中国も自ら答える努力をしなければならない。「自由民主主義」に逆らった、挑戦した毛沢東や彼の

下での「文化大革命」の「歴史」はもはや疎ましくなっていくのだ。そこに欧米に留学してそこでの政治学や国際関係論を学んで「学位」を修得したエリートがますます加わっていくから、その「歴史」は忘れられていくのは必至である。

「靖国」問題も然りである。そうであるからこそ、私は、「民主主義」の問題とからめてこの「靖国」を論じたいのであり、同時に、上坂冬子氏のような見方では、「靖国」を守り切ることは決してできないと考えている。それゆえ、「靖国」をこのまま「政治」や「経済」の「力」の綱引きだけで終わらせたくないのだ。かつての「日本」と「日本人」が、「あの戦争」が終わって、「民主主義」の問題をそうした「力」の強いか弱いかといったことで簡単に片をつけたようには終わらせたくないのだ。私にとってこの「靖国」問題は、まさに1946年に竹山道雄が「ハイド氏の裁判」の中で、「日本」と「日本人」に発した問いかけが、まさに「ブーメラン」のごとくわれわれの眼前に出現したごとく思われるのだ。まさに千載一遇の機会である。だが私がこれまでみた限り、右翼的立場にいる人はもとより、左翼的立場の人も、竹山が「ハイド氏の裁判」において後世の「日本」と「日本人」に託することとなった「宿題」に対して、その意味をきちんと理解して答えられたものはいないように見受けるのだが、私の判断はどんなものであろうか。私の解答は、その一部は既に少し前の「経済発展」に関係する形で出しているが、残念ながら、自民党という正真正銘の「右翼」の政党も、あの靖国神社の「合祀」にこだわる人でさえも、今や「市場経済」、「自由化」、「自由主義経済」に諸手を挙げて支持しているのである。私の頭では到底のところ理解できないし、信じられないのだ。正直な気持をいうと、なぜ靖国神社の参拝にこだわる小泉さんが、あの首相が「市場経済」、「グローバル化」万歳なのか。これはいくらなんでも靖国参拝支持者を愚弄しているではないか。逆に、靖国参拝支持者において、「自由主義経済」、「市場経済」、「自由化」、「グローバル化」、「民営化」万歳とか、支持するものが、靖国に参拝すること自体、たとえ「分祀」の立場であっても、「英霊」を愚弄しているのだ、そう私は

強調したい。そもそも、その「英霊」なる存在はどうやって作り出されたのか。この問題をほとんどの「日本人」は真剣に考えなかったし、今もそうである。だからこそ私は「民主主義」と「靖国」を結びつけて議論しているのだ。少しでも多くの日本人が、「自覚」した「日本人」になるようにとの願いから。

(37)

もう既に何回か私のモデルを使って話をしてきたので、読者には少しだけでも、そのモデルへの賛否はともかくとして、私がそのモデルを使っていいこと、伝えようとしていることについてはご理解いただきつつあるのではと勝手に解釈している。時々このモデルの「特許権」を得なければと、独り悦に入っている自分に気がつき、何もそんな心配は無用だし、この世の中を引っ張っているような経済界や、その命に従って^{しよくしよく}肅肅と業務を遂行している政界や官界の人たちにはまったく相手にされていないので、このモデルで描く「世界」を真剣に私と一緒に^{けんけんがくがく}喧喧諤諤と付き合ってくれるのはおそらく日本では靖国神社の「英霊」として表面上は、このようなリーダー達によって恭しく扱われている「戦犯」であろう。なぜなら、「A級戦犯」「B・C級戦犯」を含めて戦争を遂行した人々は、当然のことながら、私の父も含めて、すべて「戦犯」である。本来ならば、勝利した連合国側であろうが、敗れた枢軸国側であろうが、「戦争」を遂行したということにおいては「犯罪者」だと私は考える。勝利した連合国側の都合で、かつ戦後の国際秩序を担うGHQの思惑でもって、敗北した日本の「戦争犯罪人」のなかで、「普通」の軍人や「一般人」は無罪放免となって許され、さらには彼らは圧倒的な暴力の下で無理矢理に戦争に協力させられたあるいは騙されたのだという誠に有り難いご託宣によって、「天皇」から「マッカーサー」へと、自らの「責任」を預け直したのである。

それゆえ、いわゆる普通の、一般の人々であると許された、区分された軍人や一般人は、天皇を頂点とした「軍国主義」という抑圧体制であろうと、GHQのマッカーサーの、いやアメリカ合衆国トルーマン大統領の「民主主

義」という「自由」な「解放」体制であろうと、私のモデルで描く「世界」をともに支持していたということにおいては、靖国神社の「戦犯」たちと等しくなんなら変りのない存在であったということ。「自覚」できないままにあった。おそらくそれを「自覚」していたのは竹山道雄のような考え方をしていたごく限られた人々であったろう。当然そのような「自覚」はGHQによって厳しく思想統制されたのである。

議論をわかりやすくするために、また私のモデルを後世の人々にわかってもらいたいので、ここでもくどくどと紹介しておきたい。今度はまずは省略した形から話してみよう。私は、「大航海時代」から約500年の歳月をかけて $[\overset{A}{\text{経}} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{B}{\text{経}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経}} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}]$ のモデルで描かれる「世界」が作り出されてきたと述べた。A、B、Cは、それぞれ先進諸国、中進諸国、後進諸国でもよいし、あるいは単独で一国を示していると考えてもよい。あるいは、福沢諭吉が『文明論之概略』で語ったように、Aを「文明」、Bを「半開」、Cを「野蛮」としてみてもよい。あるいは、I・ウォーラーステインのようにAを「中心」として、Bを「半周辺」として、Cを「周辺」として位置づけてもよい。さらには国際関係論の説くように、Aを「覇権国」をその頂点として含めた他の「中心国」グループとして、Bを「準周辺国」グループとして、Cを「周辺国」グループとして捉えてもかまわない。またここで注意しておかねばならないのは、モデルで [] を使ってA、B、Cのそれぞれ $\text{経} \rightarrow \text{民}$ 、 $\text{経} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}$ 、 $\text{経} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}$ を包み込むように描いているが、この [] を私は「政治共同体」としている。そしてその政治共同体は、「主権国家」、「国民国家」としてその完成した形態をみると考えている。

いわゆる最近よく聞く「グローバル化」の時代の下で「国民国家」がその揺らぎを示しているのだが、もっともそれはあくまでこれまでAとして位置していたグループにもっぱら該当すると私はみているのだが、それにもかかわらず、1970年代まではこの $[\overset{A}{\text{経}} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{B}{\text{経}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経}} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}]$ の図式で描かれる「世界」において、[] で示す「主権国家」「国民国家」の、担った役割は計り知れないものだ。[] の枠の中で、「経済発展」と「民

「民主主義の発展」の両者の「関係」の「調整」を取ることがはじめてできたのである。「調整」するも何よりも、もし [] がしっかりとした基盤を固めることができなければ、すなわち、「主権国家」として、「国民国家」としての基礎固めから、その後の「順調」な「発展」が望めない限り、「経済発展」はおろか、「民主主義の発展」など望めるものではなかったのだ。

しかしここでよくこのモデルをみてほしい。Aは [経→民] で、Bは [経^(x)→民] で、Cは [経^x→民] となっている。すべてにおいて、[] は同じように同じようなレベルで形成、発展したと考えられるだろうか。否である。福沢もみていたように、Cは「野蛮」として植民地や従属地としての存在になっている。そこではそもそも「主権」など存在しえないし、ましてや、「国民国家」などほど遠い夢のまた夢のものである。なぜか。Cの上のBの存在があり、Bの上のAの存在が、「主権」を許すような「関係」を認めてくれないからだ。なぜ、それではCに「主権」を許さないのだ。なぜCにも「主権」を許すような「関係」をつくれなかったのか。そんなことは私に聞かないで、スペインやポルトガルにまず聞いてほしい。少し緊張をほぐすために、また「エッセー」ということを思い出したのでこんな書き方になってしまった。お許しを。なぜ許されなかったのか。すぐわかることは、「大航海時代」以降の歴史において、私のモデルで描いた「世界」をつくり出すようにスペイン、ポルトガルが「努力」した、がんばったということなのだ。それを征服欲とか、強いものはいつも弱いものを求めるとか、いろいろな説明をつけて解釈するのは勝手だが、ここで一番大切なのは、とにかく、私のモデルで描く「世界」の「原型」ができたということだ。そして「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」を中心において「歴史」を、「近代化」の「歴史」を描くことが何よりも大切だということだ。M・ヴェーバーの「文化」の観点からの考察も大切だし意義深いのだが、私は敢えていっておきたい。まずはこの「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」を、A(文明)、B(半開)、C(野蛮)との三地域間との「関係」と重ね合わせてそれらの比較関係を問うことが重要だということ。

(38)

話を戻そう。それゆえ、スペイン、ポルトガルの時代は、スペイン、ポルトガルにもA [経→民] で描く「世界」は該当していないのは確かだ。それは、Bにおいても、Cにおいてもそうだ。しかし、スペイン、ポルトガルが、Aの他の諸国やB、Cのグループ構成国と違うのは、[] で示す「主権国家」としての「存在力」というか、「主権国家」という存在としてスペイン、ポルトガルを前面に押し出していく「力」であることは忘れてはならない。スペイン、ポルトガルの属するAグループの「経済発展」とまたたとえ「民主主義の発展」にはなお十分に達する「能力」が育っていないにせよ、その「経済発展」と「民主主義の発展」のレベルにはBやCと比べて「格段」に高いし、すぐれている。それは、AのスペインのCのアステカ族のアステカ王国に対する征服をみてもすぐわかることだ。その「力」をそれでは、スペインやポルトガルは、あるいはAは、どこから獲得したかということを考えなければならない。それこそ、もう既に私が何度も語ってきたように、 $[\overset{A}{\text{経}} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{B}{\text{経}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経}} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}]$ の図式で描かれる「世界」をつくり出すことによってである。はじめから、Aに [経→民] の図式が該当したわけではないことは、スペイン、ポルトガルが示しているとすぐ上でも指摘したが、この図式で描く「世界」を、とにかくなんとかつくり出すことに「成功」することによって、「力」を獲得できたのである。また、その「力」を手にするによって、「主権国家」を、すなわち、[] の記号で示す政治共同体の基盤固めに成功したのである。

少しここで議論を整理しておこう。私が読者に注目してもらいたいのは、私のモデルで描く「世界」が形成、発展する中で、はじめて「主権国家」とか「国民国家」とよばれる政治共同体がつくり出されるということだ。それゆえ、すぐわかるのは、CよりもBが、BよりもAの方が、「主権国家」や「国民国家」をつくり出すことに「成功」しやすいということだ。それゆえ、もしある国がBに該当しているとき、そのBはAをめざして、この図式にあるように、Bの下位、劣位をつくり出していくと同時に、そのことによって

Aへと上昇していくことに努めるだろう。当然そのことはAへの「挑戦」を意味することもあるだろう。妥協や交渉の余地がある限り、またこの図式で描くCが、その存在が、無数に無限である限り、さらに、AとBとの間でCをめぐる争奪戦を回避できる次善の策がある限り、「平和」は保持されるであろうが、とにかくAにとっての「平和」とは、あくまでも、この[経→民] → [経^(x)→民] → [経^x→民] のモデルで描く「世界」が、Aの思うとおりに「順調」に維持、発展していくことにほかならない。その「平和」は、BやCにとって大変に「窮屈」な、しんどいものであることは論を俟たない。なぜなら、「平和」という名の下でCは植民地、従属地として「主権」を認められていないからだ。たとえ、戦後になって植民地が「独立」しても、「主権国家」となっても、[経^x→民] のような状態に置かれ続けるとなれば、これもまた「悲劇」と言わざるをえない。問題は、その悲劇をつくり出したのは誰かということだ。確かに第二次世界大戦後に独立したこうした新興国家では、一般に「抑圧型」の軍事政権や権威主義体制と呼ばれる、「自由」を「抑圧」し「軽視」する政治が見出されたものだ。それでは何故、これらの新興独立諸国においてこのような自由を抑圧する「強権」政治があらわれたのか。私のモデルで描く「世界」のAとその[経→民]が、またその程度は低いもののBとその[経^(x)→民]が、Cに対して、Cの「強権」政治下の「抑圧」でもまったく歯が立たないような、「抑圧」を強いるからである。この「抑圧」は本当に質^{たち}の悪いものだ。日本の徳川時代のよく映画でみた「ヤクザ」の親分でありながら「十手」を持って「正義」とその履行の任に与る、そんな状況だろう。「覇権国」の「親分」が、一方で「暴力」を独占しながら、他方で「自由」、「人権」、「民主主義」、「平和」のヘゲモニーを握っているのだ。ああこんな恐ろしいことがあるだろうか。この覇権国の「親分」の「正義」を^{ただ}糺す「鞍馬天狗」は出現することはないから、新興途上国の人々は「絶望」の時代をひたすら堪えなければならない。その「絶望」から「希望」へと這い上がるには、これまた、CからBへ、そしてBからAへと至る「階段」を登っていくことが大前提である。それゆえ、Cが、ある

いはBが、Aのこれまで占めていた地位を奪いとることが必要となる。それは決してすぐに実現できるものではない。しかし、1970年代以降、少しずつではあるがそのような兆しが見えてきたのも事実である。その流れが、私のモデルで描く $[\overset{B}{\text{経}} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経}} (\times) \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{A}{\text{経}} (\times) \rightarrow \text{民}]$ の「世界」である。なおこの図式で描く「世界」はこれから形成、発展していくものであるから、なおBには $[\text{経} \rightarrow \text{民}]$ の図式で描く世界は該当しない。しかし、そのBのグループの頂点へと、すなわち「覇権国」へと雄飛しようとしているのが隣の国の中国である。この話はまた後にするとして、話題を変えよう。

(39)

日本の靖国の「英霊」なる「戦犯」は、私のモデルで描く $[\overset{A}{\text{経}} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{B}{\text{経}} (\times) \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経}} (\times) \rightarrow \text{民}]$ の形成、発展していく「歴史」のなかで、すなわち「近代化」の「歴史」のなかで、作り出された人々である。日本はこのBについて一方でAとともに、Cに $[\text{経済発展} \xrightarrow{\times} \text{民主主義の発展}]$ の図式が該当し続けるように抑圧し、差別、排除し続けると同時に、Aへと、すなわち、 $[\text{経済発展} \rightarrow \text{民主主義の発展}]$ の図式が該当する世界の仲間入りをはたそうと必死になってAのグループと対立、敵対しながら妥協しつつ、Aへの入り口を探していたのである。その入り口は、より多くのCの存在を見つけることであった。しかも、この私のモデルで描く「世界」は、日本の「近代化」の「歴史」のなかで、少々難しい状況にあったのだ。「親分」の交替がおきつつあった。「パックス、ブリタニカ」から「パックス・アメリカナ」へと覇権国が移っていく時期に、まさに日本の「近代化」の「歴史」が重なったのだ。それゆえ、私のモデルで描く「世界」の「順調」な維持、発展を願う歴代の覇権国にとって、またそうした覇権国が中心となって形成、発展してきた「覇権システム」とその「秩序」の維持運営において、日本の「法外」な「要求」に譲歩したり妥協する余裕はなかったとみられるのだ。日本が、このBにおいてもう少し辛抱すればよかったのだが、なにしろ、覇権国が交替していく時期だから、ある点においては「団栗の背競べ」と錯覚

をおこさせる「力」の流動化が働いたのだ。余裕のない状況において、こうした力の錯覚が重なり、日本はドイツ、イタリアに従ってしまった。後の祭とはこのことだ。しかも、「近代の超克」とか、「大東亜共栄圏」といって世界に向かって叫んで訴えようとしたものの、結局のところ、その問題点も含めて問い質^たそうとした「日本」と「日本人」の「問い」それ自体も、戦後の日本経済の高度成長のなかでどこかに置き忘れられてしまった、そう私はみている。

ここで聞いてほしいのだ。私のモデルで描く「世界」をもとに、もう一度、「日本」と「日本人」が問い質したかった「近代の超克」とか「大東亜共栄圏」にまつわる問題をここで再考してみてもどうだろうか。そのためにここでもう一度、私のモデルを示しておきたい。もっときちんとしたモデルを示してみよう。その序^{ついで}でいとなんだが、もう少し先の図式について、項目をあらたにして話しておきたい。

弁解しておきたいことがある。なにしろ書き下ろしであり、母のベッドのすぐ横で「仕事」をしているから、いろいろ突発的なことが重なるから、あそこで何を書いたのか、ここではどうしたらいいかをある程度は頭に入れているのだが、途中でわからなくなって同じようなことを話している場合があると確信している次第だ。しかし正直、私はもうそれで善しとしなければとある程度開き直っている。先へと進もう。

ズベイン、ポルトガルのところで述べたが、例の図式 [経済発展 → 民主主義の発展] → [経済発展^(x) → 民主主義の発展] → [経済発展^x → 民主主義の発展] で描いた「世界」は約500年の年月をかけて形成、発展していったものであり、はじめから図式で描くような「世界」ができていたわけではない。また付言すれば、はじめからこのような A(文明) → B(半開) → C(野蛮) といった序列で描かれるような「世界」が存在していたわけでもない。当然ながらそれは「人間」によって、「人類」が長い歳月のなか営々とした「努力」の下で「創造」していった「人為」の産物であることはいうまでもない。それゆえ、はじめは、スペインやポルトガルとどこかの国や地域

との二国間で、たとえば [経^(x) → 民] → [経^(x) → 民] とか [経^x → 民] → [経^x → 民] で示される「世界」がつくられたのだろう。また「経済発展」を経に、「民主主義の発展」を民に、省略して書いてしまった。しばらく省略して使うとしよう。先述したように、同じ経や民のレベル(水準)ではない。やはりそれなりの「格差」はつくられている。つまりこうした図式で描かれる「世界」をつくることによってますます「格差」がつくられていく。そしてそこに「力」の差がはっきりと生じてくる。こうした二国間のあるいは二地域間での「関係」がはじめは一つであったのがやがて二つ、三つ、そして、~~へと多数、生まれてきたと考えてみたらどうだろう。それがやがてしばらくして、先の私のモデルで描いた「世界」になっていったと、すなわち、[A → B → C] へとになっていったと考えたらどうだ。これもまた省略形である。何度も使うからもう一度ここに書いておく。[経済発展 → 民主主義の発展] を、[経 → 民] へと省略したが、それを単にAと省略した。Bも同様に [経済発展^(x) → 民主主義の発展] を [経^(x) → 民] として、それをさらにBと略した。Cも [経済発展^x → 民主主義の発展] を [経^x → 民] に、そしてCと略した。これを念頭においていただきたい。

もっともこのスペイン、ポルトガルが覇権国であった時代の [A → B → C] の図式で描く「世界」において、本来ならば、Aに該当する [経 → 民] は、すなわち [経済発展 → 民主主義の発展] として描かれる「世界」は、なおスペイン、ポルトガルには該当しなかったのだ。少なくとも、Aにおいてこの [経 → 民] の、[経済発展 → 民主主義の発展] の図式が該当し始めるのは、オランダが覇権国となる17世紀の中期以降のことである。もっとも、その際も、その「民主主義の発展」の「段階」は、今日と比較することができないような「段階」であり、そのオランダもやがてはフランス革命を経験したフランスによって「主権」を奪われた、植民地状態となってしまう。あくまでも当時の「世界」の他の諸国、諸地域と比べてのことだ。ただこれも忘れてはならないのは、オランダがスペインから独立を回復して「市民革命」

をおこなった「舞台」は、私のモデルで描く「世界」であったという点である。後のいわゆるイギリスやアメリカ合衆国、そしてフランスのいわゆる「市民革命」とあの有名な「普遍的人権」を世界に向かって高らかに宣言した「舞台」も等しく私のモデルで描く「世界」を舞台としていたことになんら変わりはないのだ。つまり、イギリスやアメリカやフランスは、「市民革命」をやりとげ、「普遍的人権」を宣言することで、「民主主義の発展」の「段階」を、先の覇権国であるオランダの「歴史」を、すなわち「近代化」の「歴史」を継承することによって、さらに引き上げることに成功したと考えてよい。ただし、彼らはそれによって、「覇権国」、強大国となって、私のモデルで描くあの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の「世界」をさらに発展させていくわけである。

それによって次のような図式で示される「関係」が形成、発展していく、あるいはより強固なものとなっていくのである。その「関係」とは、 $[A$ の経 $\rightarrow B$ の経 $]$ 、 $[A$ の経 $\rightarrow C$ の経 $]$ 、 $[A$ の経 $\overset{(\times)}{\rightarrow} B$ の民 $]$ 、 $[A$ の経 $\overset{\times}{\rightarrow} C$ の民 $]$ といった図式に示されるものであり、また $[A$ の民 $\overset{(\times)}{\rightarrow} B$ の民 $]$ 、 $[A$ の民 $\overset{\times}{\rightarrow} C$ の民 $]$ といった図式に描かれる「関係」である。この点について、もう少し掘り下げて論じてみよう。これは、このエッセーの中で述べていることだが、重複を恐れないで、イヤ、二度、三度となく私が読者に話したい、伝えたいと切に思うところなので、以下に述べておきたい。まずはそのために、もう少し図式をきちんとしたものを書き直してみたい。

$\overset{A}{\langle} [\text{経済発展} \rightarrow \text{民主主義の発展}] \rightarrow [\text{経済発展} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民主主義の発展}] \rightarrow \overset{C}{[\text{経済発展} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民主主義の発展}]} \rangle$ この図式をもとに省略形を使って話すので、読者の注意を喚起してほしい。 $[A$ の経 $\rightarrow B$ の経 $]$ とか $[B$ の経 $\rightarrow C$ の経 $]$ 、あるいは $[A$ の経 $\rightarrow C$ の経 $]$ といった図式で示される「関係」こそが実は「帝国主義」の「関係」なのだ。つまり「帝国主義」とか「植民地」の意味を『広辞苑』や『ロングマン現代アメリカ英語辞典』で調べれば、そうした「定義」で教えられるような「関係」が、この私のモデルで描く「世界」の中に確認できるのだ。問題は、これがこの「エッセー」でもっとも大

切であり、「あの戦争」や「靖国」を、そしてこれからの日米中関係を読み解く作業においても重要となってくるところだが、「帝国主義」を前提として「民主主義」が、「民主主義の発展」が導かれてきたことを、このモデルが示しているところなのだ。これが、私の一つ目のモデルの一番いいところ、ポイントなのである。つまり「帝国主義」（あるいは「植民地主義」と「民主主義」とは分離できない「関係」にあることをこのモデルは示しているのだ。そしてこのモデルは、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」の中で、はじめて「民主主義」が、「民主主義の発展」が実現可能となることを教えているのである。つまり、あの「普遍的人権」の宣言とか、「市民革命」の「舞台」となったのも、また、いわゆる「自由民主主義」の、つまりこの「エッセー」では「民主主義」であるが、その形成、発展の「舞台」となったのも、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」を抜きには語れないのだ。日本の戦後の高度経済成長も、戦後の「民主主義の発展」もこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で示される「世界」を前提にして実現できたわけなのだ。だから、それを礼賛する日本人は、私にいわせれば、「自覚」できないままにある「日本人」なのだ。靖国の「英霊」を合祀しようが分祀しようが、憲法第9条を護持しようが、改憲しようが、もしこの図式で描かれる $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の「世界」にメスを入れないのであれば、もう少しわかりやすくいうと、「経済発展」と「民主主義の発展」の中身をこれまでとは別のものへと代えていく動きを全く選択しようとしなければ、何のための護憲か、改憲か、分祀が合祀かと私は叫ばざるをえないのだ。

(40)

少し、ちょっとだけ悲しくなってきた。こんなことを私はずっとこれまで書き続けてきたわけだが、今日の『毎日』（2006年7月30日付）の「今週の本棚」で新刊が紹介されている。「マガジンハウスの本」で『この国が好き』（鎌田實・文 木内達朗・絵）が、学芸部の桐山正寿という人によって紹介されていた。あまり野暮なことは言いたくないと思いつつやはり書かねばならないのだ。この鎌田さんのような「善良」な人が、実は本当は罪つくりな

んだと。イヤハヤ言ってしまった。もう遅いかあ。でも仕方がない。こんな馬鹿なことをあまりにも平気でよく真面目に書いてるなあって、「くそあきれなのだ。」下品な物言いで悪いのだが、ちょっとだけ、この書評を読んでみよう。～～～鎌田さんは諏訪中央病院で地域医療にかかわっているお医者さんだ。ずっと人間の命と向かい合ってきた人が、どうしても伝えたいことを孫のBAKUさんに語りかけた物語。冒頭から、＜君が生きている、この国が大好き＞でその理由は、＜日本国の兵隊として60年間、ひとりも人を殺していない＞からだと明快に述べられる。そして、そういう国でいられるのは現在の憲法を守ってきたからだ強いメッセージが届けられる。～～～

ああ、また少し先に話がいったしまった。この鎌田さんの「60年間、ひとりも人を殺していない」について「難癖」を付ける前に、先の大切な話、そうあの「帝国主義」と「民主主義」が、「民主主義の発展」が切り離せないことについて、モデルを使って述べておこう。少し上の図式に戻ってほしい。そこで[Aの経→Cの経]といった「帝国主義」の関係が示されると述べたが、そこから[Aの経→Cの経]^x→Cの「民主主義の発展」へとつながるだろう。つまり[Aの経→Cの経]にみられる「関係」を「帝国主義」に置き代えて、先の図式に戻すと、「帝国主義」^x→Cの「民主主義の発展」となるではないか。つまりAのCに対する「経済発展」の「関係」によって、Cの「民主主義の発展」が阻止されるということがわかる。私はここで、すぐさま[Aの民主主義の発展^x→Cの民主主義の発展]といった図式に示される「民主主義」の「関係」についてふれようとは思わない。まずは「帝国主義」と「民主主義」との「関係」についてである。今度は、この[A→B→C]の図式を、逆にして[C→B→A]へと置き代えて、再考してみる。同じ「構造」(「仕組み」)を、逆からみようというわけだ。例によってもう少しきちんとモデルを書いてみる。

$$\begin{array}{c} C \\ \leftarrow [\text{経済発展} \xrightarrow{x} \text{民主主義の発展}] \rightarrow [\text{経済発展} \xrightarrow{(\times)} \text{民主主義の発展}] \rightarrow \\ A \\ [\text{経済発展} \rightarrow \text{民主主義の発展}] \end{array}$$
 >これを省略形を使って示すと、[Cの経→

Bの経]、[Cの経→Aの経]の図式で描かれる「関係」がまさに「帝国主義」の「関係」である。そして、[Cの経→Aの経]→Aの「民主主義の発展」へとつながる。つまり[Cの経→Aの経]→Aの「民主主義の発展」へとつながる。つまり[Cの経→Aの経]=「帝国主義」→Aの「民主主義の発展」の「民主主義」を導くことがはっきりと確認できたのではないだろうか。つまり、ここでも「帝国主義」と「民主主義」とは切り離せないということが。そしてこの逆のモデルによって、「帝国主義」から「民主主義」が導かれていくことがしっかりと目に焼き付いたのではないかと私は切に願うのである。それゆえ、こんな「関係」からつくり出される「民主主義」や「民主主義の発展」はぜひとも御免蒙^{こうむ}りたいものだ。当然ながら、[A→B→C]のモデルで描く「世界」の中で生きてたくない。本当にご勘弁をお願いしたい。私はそう考えてきた。しかし、現実には、私の非力さから、勇気のなさからなんとも仕様がな^い。ところがだ。多くの「日本人」はまるで私のいうことなどまるで「ウソ」のように、この図式で描く「世界」を礼賛しているように思われるのだ。

たとえば先のあの鎌田さんの本の紹介にあるように、鎌田さん^{いっ}曰く、「この国(=日本)が大好き」なんだとか。日本国憲法が非常によくて、誰一人殺してないのだと、日本の兵隊さんはこの60年間ずっと、といった調子なのだから。それでは、戦後の日本国は、日本の主権国家、国民国家はどうやってつくられたのか。日本の国民経済はどうやって。この[A→B→C]の図式で描く「世界」とまったくカケ離れた「舞台」でつくられたのか。誰一人殺さなかったと、仮定しよう。それじゃ、鎌田さんは医者だから聞くが、あの「水俣病」で何人死んだのか。彼らは「戦死」したのではなかったのか。私はそう思う。私を含めた、そう、鎌田さんも実は、自衛隊だけでなく、この[A→B→C]のモデルで描く「世界」の中で日々戦っている「兵隊」ではないのか。その兵隊は、相手方だけでなく味方も殺してしまう。誤って殺したのではない。死ぬとわかっていて殺したのだ。殺し続けたのだ。それを可能にした「人権」だったのだ。そう、そのように私は考えるのだ。これに

ついては、もっと掘り下げなければならない。

(六)

今日は7月30日の月曜日である。昨日少々ああだこうだと言い過ぎてしまった。反省している。知人から「お前は左翼的な人の書いたものを批判するが、右翼的な人ののは取り上げないなぁ」とよく揶揄されてきた。それを思い出しつつ、苦笑している。昨日の続きへと入っていく前に、私の「立場」をここではっきりとさせておきたい。もっともこの「立場」はすこぶる怪しい。いくら「頭」の中でこうだとその表明をしても、実際の「生活」というか「生活態度」が品行方正ではないから、この政治的な「立場」とやらも信用できないのだ。始末に負えないのはこれはなにも他人様のことでなくて、自分自身のことだからだ。おもしろいなぁとよく思うことがあるのは、一般に「君の立場はなにか」と問うものも、問われるものも、大抵は「政治的」なそれを指してのことであり、「経済的」とか「文化的」なものではないという点だ。つまり、現実に「生活」していることは、たとえばどんなものを食べているとか、何を着ているとか、どこに住んでいるといったことは「頭」の中のことでないから目に見えるから、とはいえ本当はそんなものもわからないのだが、また同じような「生活」をしているとの前提に立ちたいというか、相手を「尊重」したいのか、「経済的」立場は聞かない。しかし、今日の「市場経済」化万歳という大合唱の中で「生活」していて「政治的」立場もへったくれもないだろうが。

(41)

また本題に入るのが遅くなった。私の「立場」について表明しておこう。もう読者の方にはおわかりかもしれないが、私のモデルで描いた例の[A→B→C]の「世界」を支持することに反対の「立場」が私の「政治的」立場であり、同時に「経済的」立場でもある。私からみれば、これまでの共産党とか社民党、民主党や公明党、そして自民党を支持する人々や、朝日とか産経とかの「新聞」論調を支持する人々はともに左翼的であれ、右翼的であれ、このモデルの[A→B→C]で描く「世界」と向き合わないできた人々であ

る点では、もっと意地悪くいえば、このモデルの「世界」を前提とすることによって、認めることによって、そこから左翼となっていく、あるいは右翼となっていくという点では、まさに「同床異夢」の「立場」であったに過ぎないのだ。私は共産党や社民党にいいたい。もし21世紀の「左翼」をめざすのなら、この[A→B→C]の図式で描く「世界」からどうやって脱け出していくか、その戦略、戦術を語らなければならない。ところが、いまこの地点においても「憲法」を守ろう、第9条を守らなければならないとか、まったくお話にならない議論にもならない「タワゴト」を繰り返すだけだから、どうにもならない。ちょっと考えればわかることをしようとしな。 「第9条」を守ることと、この図式の「世界」との「関係」とは一体どのようになっているのか。まずはこれぐらいは考えたらどうなのか。それができない。「自由」、「民主主義」「人権」、「平和」といったものが、私のモデルで描く「世界」の中で、それを前提としてつくられてきたなどと考えられないから、それは最初から無理な相談なのだ。むしろ私が「タワゴト」を言っているように思われ相手にされない。

それでは「右翼」については、21世紀の「右翼」のあるべき姿についてはどうだろうか。私はあまり「右翼」には心情的に支持できないのだ。「右翼」的な威勢のよいことをいっては頭のちょっと足りない人々を動員して、彼らを使えるだけ利用して、煽るだけ煽って、事が急変するようなことでもなれば、誰かに責任を転嫁する、そして責任を引き受けないし、結局のところ有耶無耶で終わらせてしまう。もちろん、これは「右翼」だけでもない。「左翼」にもよく見られるし、「自覚」しないままの「日本人」の特技の一つかもしれない。このような人が指導者となれば困るのは誰か。あまり「右翼」に注文をつけるようなことはない。というもまた「お前は右翼に甘い」といわれるか。ただ「右翼」の「立場」を貫くこと、従来の「立場」を貫くことを望むだけである。「靖国」問題であまりにも見苦しいと思われる態度だけはとらないことを望むだけだ。私は上坂冬子さんとその「政治的」立場は異なるものの、お金のために、経済的利害の損得勘定だけが動いているように

思われる、イヤはっきりと見える「経済界」への苦言に対しては共鳴できる。「右翼」的立場における大切な「象徴」である靖国神社の在り方が、いとも簡単にその損得勘定で変えられてしまうなんてことがあれば、これまた寂しい限りである。もっとも、「愛国」とか「愛国心」とか、「ナショナリズム」とかいても、「腹が減っては^{いくま}軍はできぬ」から、腹を満たす必要がある。言うまでもないことだ。それゆえ、「経済発展」が大切となる。問題は、この「経済発展」と「愛国心」（「愛国」）とがどのようにうまく結びつくかであろう。さらにいうと、「経済発展」と「靖国」とがどう結びつくかである。さらに忘れないでここで付言すると、私のモデルで描く「世界」と「愛国（心）」、そして靖国神社とがどう結びついているか、それを考察することが重要である。

(42)

ここで忘れないうちに今後の話の流れを書き留めておきたい。まずは、この話の続きである。また話を戻して、「帝国主義」と「民主主義」との「関係」について、私のモデルを使ってもう少し論を進めてみたい。そしてその議論とのつながりで松永昌三著『福沢諭吉と中江兆民』（中央公論新社、2001年の中公新書）にある「文明の“光”と“影”」（178頁）にあるくぐり」と結びつけて論を展開していきたい。私のモデルを使って、「帝国主義」と「民主主義」の「関係」を論じたが、ここでもう一度、紹介かつ整理しておきたい。省略形で $[Aの経 \rightarrow Cの経] \xrightarrow{X} Cの「民主主義の発展」$ の図式から、 $[Aの経 \rightarrow Cの経] = 帝国主義 \xrightarrow{X} Cの「民主主義の発展」 = 「民主主義」$ に示される「帝国主義」 \xrightarrow{X} 「民主主義」の「関係」を確認した。これは、 $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経] \xrightarrow{X} Cの「民主主義の発展」$ の図式に置き代えても、もちろんかまわない。どちらにしても、 $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経]$ であろうが、 $[Bの経 \rightarrow Cの経]$ であろうが、 $[Aの経 \rightarrow Cの経]$ と同様に「帝国主義」の「関係」を示していると私は述べたいだけである。次にこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ を逆にして $[C \rightarrow B \rightarrow A]$ からみた話を紹介した。すなわち $[Cの経 \rightarrow Aの経] \rightarrow Aの「民主主義の発展」$ の図式から $[Cの$

経 → Aの経] = 「帝国主義」 → Aの「民主主義の発展」 = 「民主主義」に示されるように、「帝国主義」 → 「民主主義」となることについて私は紹介した。これについても同様に考えてほしい。すなわち、[Cの経 → Bの経 → Aの経]であろうが、[Bの経 → Aの経]であろうが、[Cの経 → Aの経]と同じで、それらは「帝国主義」の関係を示しているということをわかっていただきたいだけだ。そしてそこから大切なのは、「帝国主義」 → 「民主主義」との「関係」が見られるということだ。このように、[A → B → C]の図式からは、「帝国主義」^x → 「民主主義」に導く「関係」が確認できたのに対して、[C → B → A]の図式からは、「帝国主義」 → 「民主主義」に導く「関係」が確認できたという点である。これがこの「エッセー」で最も大切な、私が後世の人々に伝えておかねばならない点なのだ。と同時に、この「帝国主義」^x → 「民主主義」と「帝国主義」 → 「民主主義」の二つの図式が示している「関係」は、「民主主義」 → 「帝国主義」という「関係」を導いていることを教えているのだ。これらの点を私は読者に伝えなければならないために、この「エッセー」を書いているのだ。またこれまでの私の研究の目的はすべてそこにあったといっても過言ではない。

この「民主主義」 → 「帝国主義」を導く「関係」について述べておこう。あの省略形の図式を使っていうと、[Aの経 → Aの民] → [Bの経^(x) → Bの民] → [Cの経^x → Cの民]の図式の中にある、このAの民 → [Bの経 → Cの経]の図式で示される「関係」を確認してほしいのだ。この図式からは、「民主主義」^x → 「帝国主義」といった「関係」は決してつukられないのだ。いつも、「帝国主義」 → 「民主主義」や「民主主義」 → 「帝国主義」として描かれる「関係」がつukられるだけなのだ。そのことは、[Aの民^x → Cの民]として、Aの「民主主義の発展」は、Cの「民主主義の発展」を許さない、そうした「民主主義」として描かれることになるのだ。私たちがこれまで実現してきた「民主主義」も、「民主主義の発展」もそうしたものであったということを、繰り返し私は主張し続けてきた。それは、そうでない「民主主義」とは一体なんなのか、それを読者に考えてもらうためである。この

ような「関係」をつくり出してきた「民主主義」がああ靖国神社の「英霊」としてまつられている人々をつくり出してきたのだ。そして、その「英霊」によって侵略され、その戦いの中で犠牲となった多くの人々をつくり出してきたのだ。こう私は考えている。その「仕組み」は基本的にまったく変わっていない。21世紀になってもそうである、私ははっきりと断言できる。

ところで、こうした私のような見方から、先に紹介した松永昌三さんの「文明の“光”と“影”」のなかで説明している見方はやはりわからないのだ。というか、このような見方ではどうしようもない、と失礼ながら言わざるをえないのだ。すぐ後でどのような「見方」かは紹介するが、その際、よく似た「見方」を他の文献からも引用して一緒に批判的に検討してみる。松永さんは次のように語っている。「明治日本は、非西洋世界にあっては、西欧近代文明の受容にある程度成功し、独立した近代国家建設をなしとげた唯一の国といってもよい。これは世界史上の特筆すべき出来事として、外国人史家のひとしく注目するところである。しかし西欧近代文明には、世界全域にその恩恵をもたらした、いわば文明の“光”の部分と非西洋地域全体を侵略し植民地として支配した、いわば“影”の部分とがあって、この両者は表裏一体となっている。非西洋世界は、西欧近代文明から、人権、民主主義、議会制、憲法、機械、技術等さまざまなものを学んだが、その反面、長期にわたりその植民地支配の下に呻吟し、資源の略奪や生産消費の強制を受け、いまだにその弊害から脱け切れていない。日本は、西欧列強から圧迫されながらも、西欧近代文明の恩恵を受けつつ、しかも他の地域を武力でもって支配するという複雑な道を歩んだ。本章では、その“光”と“影”を、福沢と中江がどうとらえていたかを問題にしたい。」

(43)

やはりこの引用したくだりを読んでも十分にわからないことがある。簡単にいうと、松永さんはこの“光”と“影”として表裏一体の関係にあるとみている「人権」とか「民主主義」の“光”とされるものと、“影”とされる「植民地支配」とが「どのような形」で「表裏一体」なのか、わかってい

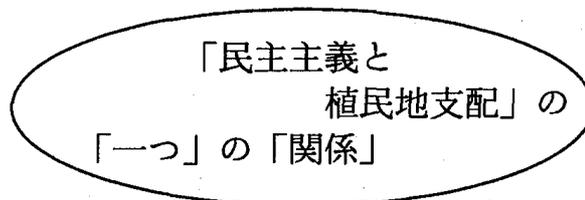
ないのだ。少なくとも、私のモデルで描いたような「関係」として、この“光”と“影”を描いてはいない、捉えてはない。そもそも「表裏一体」とはなんだろうか。『広辞苑』には、「二つのものの関係が、密接で切り離せないこと。」とある。それを素直に解釈すれば、「民主主義」と「植民地主義」とは「密接で切り離せないこと」となる。しかし、ここから先へは、松永さんは、松永さんの論の展開では、先へと進めない、こう私はいわざるをえないのだ。なぜなら、松永さんは、「密接で切り離せない」関係を具体的に語っていないからだ。私のように、「帝国主義」→「民主主義」とか、「民主主義」→「帝国主義」といった図式で示される「関係」を語っていない。ここまで踏み込まないでいるのだ。「民主主義」と「植民地支配」との関係は、私は松永さんのいう「植民地支配」を「帝国主義」に代えて使っているが、決して「光」と「影」ではない。表裏一体ではない。なぜなら、そもそも「二つ」に切り離せないものだからだ。それゆえ、私は“光”と“影”といった各々が別個の独立した事象として「民主主義」と「植民地支配」「帝国主義」とを捉えていない。捉えられないし、そうしてはダメだとみている。私のモデルで示した「関係」は、すなわち $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ は、また逆からみた $[C \rightarrow B \rightarrow A]$ は、「一つ」の「関係」として捉えられる「歴史」である。そもそも $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}]$ の「関係」がCの「民主主義の発展」を許さない「関係」となるのであり、また $[C \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow A \text{の経}]$ の「関係」が、Aの「民主主義の発展」を導く「関係」へとつながっていくのである。またAの「民主主義の発展」が $[B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}]$ にみられる「帝国主義」の「関係」を、換言すれば「植民地支配」へ導く「関係」をつくり出していくのであり、「民主主義」と「帝国主義」といった事象がはじめから、各々が独立して存在しているわけではない。独立して存在することなど不可能なのだ。

ところが松永さんのいう“光”と“影”との「表裏一体」の関係は、あたかも“光”とされるものと“影”とされるものとが、それぞれ「独立」して存在しているかのように、そしてそれをもとにしながらも「両者」は密

接に切り離せない関係にあると説いているのである。もしこのような論を説く決意があるのならば、やはり語らなければならないのだ、松永さんも。つまり“光”とされる「民主主義」や「人権」はどうやって実現していったのかを。また相当に意地の悪い言い方をすれば、この手の議論は、「詐欺」のような論の展開なのだ。もっとわかりやすく図（絵）を使って話してみよう。松永さんは以下のような図を頭において述べている。



このように、別個の存在としてまずは両者を位置づけておいて、それら（両者）をみながら、「表裏一体」の関係があったと説明しているだけなのだ。これに対して、私のモデルで描く「民主主義」と「植民地支配」（「帝国主義」）との関係は以下の図（絵）で示されよう。



松永さんの論の進め方を「詐欺」的と指摘したが、もちろん松永さんは心底そう考えている、理解しているのだ。だから先に引用したくだりにあるように、「西欧近代文明には、世界全域にその恩恵をもたらした、いわば文明の“光”の部分」として、「人権」「民主主義」を紹介しているのである。もし仮に私のように、「帝国主義」→「民主主義」や「民主主義」→「帝国主義」といった図式で示される「関係」が存在していると理解していれば、恩恵などとは断じていけないだろう。なぜなら、その恩恵なるものは世界の人々が同時に享受できないような「仕組み」をもとにして手に入る「代物」であるからだ。「光」を残して、「影」を無くせるならば、それができればま

だしも、決してそうならないのだ。だから私はこの種の論を展開する人には本当に腹が立って仕方がない。もっともそうした人たちは、松永さん一人ではない。二人、三人、いや違う。相当に多くの人々がいる。「左翼」ばかりではない。「右翼」と呼ばれるような「立場」の人もかなりいるのだ。ここで齊藤孝さんの見解を紹介しておこう。何回みても正直私にはわからない。理解できない。いつも独り言のように、「本当にそうかなあ」と。とにかく、紹介してみよう。

(44)

齊藤孝著『ヨーロッパの一九三〇年代』（岩波書店 1990年）において次のように述べる。「・・・西ヨーロッパは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカを犠牲として発展したが、そこにある人間の個人としての確立と自由の原理は、はじめその適用が有産者層に限られたとはいえ、人間の理想として提示された。資本主義を批判する社会主義さえも先進国の文化であった。先進国は後進諸地域の未来像を示すものとなった。こうして西ヨーロッパは後進地域の自覚的青年にとっては、怨恨と羨望、敵対視と理想化という両面的価値の共存する場となったのである。」ここで論を進める前に読者にお断りしたい。この齊藤さんの引用した箇所は、以前の拙著において使ったものであり、また同じものをここでも使っている。研究に進展がないと批判されても仕方ないかもしれないが、逆にやはり「いい」引用をしているのだ。一番それに適したものを使っていると考えてほしい。それを願うだけである。それでは戻ろう。ここで齊藤は、ヨーロッパ資本主義の発展がアジアやアフリカ、ラテンアメリカといった諸国を植民地として、従属地として、その原料の供給地、商品の市場として確保することによって実現したことを認めている。このような視点は、政治学と政治学研究者が「民主主義」の「定義」として学んだあのJ・シュンペーターが「平和的—少なくとも反軍国主義的—傾向や自由貿易的傾向」のみられる「ブルジョワ社会」なるものの発展を、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国を犠牲として発展したと結びつけなかったという点を踏まえるとき、さすが齊藤さんといいたいのだが、それに

もかかわらず、J・シュンペーターと同様に、「平和的」「反軍国主義的」「自由貿易的」といわれるものの抱える問題にまでは、齊藤さんもメスは入れようとししないのだ。むしろここからは、逆にというか、それどころというべきかといった調子で齊藤さんは「人間の個人としての確立と自由の原理」をつくったとして西ヨーロッパの「歴史」をというか、「近代化」の「歴史」を、またそれとの関連から「民主主義」を賛美しているのだ。イヤハヤと私は言いたい。

ここには先の松永さんのところでもみたような、同じような見方が垣間見られるのだ。そうそうここでまたそのときにでた「表裏一体」の『広辞苑』の「定義」に戻りたい。こうあった。「二つのものの関係が、密接で切り離せないこと。」と。ここで読者にもう一度、注意を促しておきたい。「二つのもの」とある。また「密接で切り離せないこと」としつつも、それが「一つのもの」となったとは決して語っていない点は要注意である。くどい話で恐縮だが、ここは本当に大事なところなのだ。もう一度いおう。「二つのもの」の「関係」が「密接で切り離せない」としながらもやはり「一つのもの」とはならないで、「二つのもの」なのだ。それでも「密接で切り離せない」から、「表裏一体」となるので、ここにも「表」と「裏」といった「二つのもの」が存在していることには変わりはない。私はそれに対して、「民主主義」と「帝国主義」の「関係」は、「二つのもの」の「関係」として捉えてはダメなのだと言っているのだ。確かに、「辞書」には、『広辞苑』だろうが、『ロングマン現代アメリカ英語辞典』だろうが、政治学の事典であろうが、すべてに「二つ」の独立した事象として扱われていることは事実である。しかし、それは「一つのもの」を「二つ」に区分したまでだと、私はみている。本来それらは区分できないものなのだ。結局のところ、齊藤もやはり「民主主義」なるものと、「帝国主義」なるものを切り離して別個の存在として、「二つのもの」として位置づけ、それを前提として論を展開するのだ。それゆえ、アジアやアフリカの「民族の独立解放」が、それを抑圧して植民地をつくってきた相手側の、すなわち西ヨーロッパ側の「民主主義」、「人権」、

「平和」を「目標」として結びつけることに対してなんの違和感も抱かないかのような議論を平気で展開していくことになるのだ。この「罪」は学者として相当に重いのではないか。また私ごときが偉そうなことを言ってのけてしまった。斉藤さん、ご容赦を。こんなことを言うのも、逆に卑怯な語り方だ。反論を待つとしよう。

前にも述べたが、このような見方は斉藤さんだけではない。猪口邦子さんも、また彼女がその著書『戦争と平和』（東京大学出版会 1989年）の中で引用紹介している従属論者も然りである。本当に恐るべき見方ではないか。A・グラムシ流にいうと「ヘグモニー」の圧倒的影響力の前で、多くの知識人や学者がなんとも身動きがとれない状況に置かれているのだから。ここで自分の宣伝もかねて、この猪口さんと従属論者の「民主主義」の理解の仕方については、拙著『覇権システム下の「民主主義」論』（78～81頁）を参照されたい。もう一人、ここで紹介しておきたい。憲法学者の樋口陽一さんだ。確かにずっと前の頁で紹介引用している。樋口さんもまた「光の部分」と「影の部分」といった区分をして、「西欧近代文明」の、樋口さんはそれを「近代立憲主義」として位置づけているのだが、その「人権の理念」を「光の部分」として、はっきりと述べていないものの、「植民地主義」を「影の部分」として捉えながら、斉藤さんと同様にここでもまた、その「光の部分」を大切に、「準拠」モデルとして目標とすべきことを説いているのだ。後でもう少しだけ補足するつもりだが、樋口さんにおいても、同じような「見方」が垣間見れるのだ。つまり「二つのもの」の「光の部分」と「影の部分」といった「民主主義」（「人権」）と「帝国主義」（「植民地主義」）との「関係」についての理解の仕方である。ここでもう一度だけ、イヤもう何度でも伝わるまで言い続けたいのだが、私はそれらの「見方」に対してこれまで主張し続けたように、あくまで「一つのもの」として「民主主義」と「帝国主義」を捉えて、その「関係」を描いているのだ。すなわち、その「関係」は「大航海時代」から今日にかけてずっと「一つの」構造（仕組み）として形成、発展してきたのだ。確かに「定義」ではあたかも「二つのもの」が存

在しているかのように理解されてきたが、あくまで「一つのもの」なのだ。その「一つのもの」の「光」と「影」として、もし「光」とか「影」という言葉を使いたいのならば、あくまで「一つのもの」としての存在である、そのような存在としての「光」と「影」として捉えなければならない。

何かここにきて、やっともどかしかったものが、少しトレたように自分では納得している。やはりこれまでのように「表裏一体」の関係として描いてはダメなのだ。私はそれを言いたいのだ。伝えたいのだ。

何度もその「定義」を紹介したように、「表裏一体」とはあくまでも「二つのもの」の「関係」について語っている。「民主主義」なるものと、「帝国主義」なるものは、「二つのもの」ではない。なぜなら、私のモデルの図式でも示したようにあくまでも $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ といった「一つの構造」として

つくり出されたものなのだ。付言すれば、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の外枠の $[\quad]$ は、「覇権システム」を意味している。 $[\overset{A}{\text{経}} \rightarrow \text{民}]$ とか、 $[\overset{B}{\text{経}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}]$ とか $[\overset{C}{\text{経}} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}]$ の図式で示した外枠の $[\quad]$ は政治共同体であると既に述べたが、その政治共同体としては、「主権国家」が、またこれをもとにした「国民国家」が、1970年代に至るまでは、最終目標とされていたのだった。先に戻ろう。「二つのもの」として従来、描かれてきたものを、私は、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の中に位置づけ直して捉えたのだ。すると、 $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \overset{\times}{\rightarrow} C$ の「民主主義の発展」となり、逆にそれは、 $[C \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow A \text{の経}] \rightarrow A$ の「民主主義の発展」となった。そのことは、「帝国主義」 $\overset{\times}{\rightarrow}$ 「民主主義」と「民主主義」 \rightarrow 「帝国主義」の図式に描かれる「関係」が存在していることを教えてくれている。それは「帝国主義」なるものによって「民主主義」がつくられないことを示していると同時に、「民主主義」なるものによって「帝国主義」がつくりだされることを示しているのだ。それは「帝国主義」なるものがつくられることによって「民主主義」なるものが同時につくり出されることを、また「民主主義」がつくられることによって、「帝国主義」もまた同時に生み出されることを意味しているのだ。つまり、同時に、換言すれば、「共時態」として「一つのもの」として

描かれる「関係」が、すなわち $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ や $[C \rightarrow B \rightarrow A]$ の図式に示される「関係」が、私はその「関係」と別のところでは「構造」と呼んだり「仕組み」と呼んできたが、つくられてきたのだ。このことをぜひとも確認していただきたい。「表裏一体」ではなく、強いて言うならば、「コイン」の裏表の「関係」であり、もちろんこのコインは「一枚」である。竹山道雄が「近代文明」なるものを「ジキル」と「ハイド」に譬^{たと}えたのと、ここで紹介している松永さん、斉藤さん、樋口さんらの「見方」とは、一見したところ同じように思われるものの、それらはまったく「似て非なり」なのだ。

(45)

ここでさらに「持論」を展開しておきたい。私が本当に「なんなのだ、これは」と思わざるをえないのは、「光の部分」と「影の部分」があるといいながら、それでもその「光の部分」は大切にしていかなければならないと主張し続ける知識人の「知」の在り方である。「表裏一体」という言葉を使うことによって、何がそこで言いたいのか、それが伝わってこないのだ。そこから私がわかったことは、結局のところ、西欧が非西洋を植民地にした事実が残るが、それでも西欧で花開いた「民主主義」、「自由」、「人権」（近代立憲主義）なるものはすばらしいものであったではないか。それを後進地域の人々も「目標」にしているではないか云々、これくらいだ。つまり、彼らは、「表裏一体」として、「光の部分」と「影の部分」をみている、捉えている、私がこれまで何回も語ってきたように、その「光の部分」ができるために「影の部分」が前提となっていた、あるいは、逆に「影の部分」が存在しないと「光の部分」だってつくられないのだ、なんてことは言わないし、そのように思っていないのだ。だから彼らに言わなければならないのだ。「あんたらの学問とは一体なんだよぉー。」もっと「真面目に」、イヤこの人たちが真面目でないとしたら、誰が他にいるのか、とあってよいほどの真面目な学者たちですよ。念のために言っておくのだが。私のいう「真面目」とは、この「表裏一体」の「関係」について、もっと向き合うべきだと言いたいのだ。

私がいうように、もしこの「光の部分」である「民主主義」なるものが、「植民地主義」を「帝国主義」を伴いながら形成されてきたのかどうかを、つまりもっと単刀直入にいうと、私の「人権」なるものは、植民地人の「人権」なるものを「否定」することによって、手にすることのできたものなのかどうかの「確認」作業をするべきだと言っているのだ。彼らは「光」と「影」には相当にこだわって、いろいろと頭を捻^{ひね}って論を展開するのだが、おもしろいことに、イヤまったく面白くもなんでもないのだが、西欧の「光」が、非西洋の「光」とどのような「関係」にあったかについては述べないのだ。西欧の「光」と非西洋の「影」の「関係」についてはそれこそああだ、こうだと言っているのにもかかわらずだ。私は、あのモデルでこう述べている。すなわち、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式にある $[A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の民}]$ の「共時態」モデルからもわかるように、西欧の「光」と非西洋の「光」の「関係」は、 $[A \text{の民} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}]$ 、 $[A \text{の民} \xrightarrow{\times} C \text{の民}]$ といった図式に示される「関係」として、「共時態」として、存在しているのだ。つまり、西欧において、福沢の言葉を使ってそれを「文明」とすると、そこで「民主主義の発展」が実現することと、非西洋において、同様に福沢の用語を使っていうと「半開」や「野蛮」において「民主主義の発展」がうまく進まない、まったく進まないこととは、まさに「表裏一体」の「関係」となっているのだ。ここで皮肉っぽく「表裏一体」なる言葉を使ったが、この表現もまたおかしいのだ。「二つのもの」ではないからだ。やはり「一つのもの」として捉えなければならない。ここで一番私が訴えたいのは、もし本当にこのような「民主主義」の、「民主主義の発展」の「関係」が存在しているとしたときにおいても、それでも、樋口さんや斉藤さん、松永さんは、その「光の部分」をつくり出してきた西欧の、西洋の「民主主義」を「準拠」枠として、「目標」として、他の非西洋諸国がめざすべきだと説かれるのか、どうかである。

読者のみなさんにも私はぜひとも尋ねたいのだ。もし私のモデルで描いた「世界」を前提として、戦後日本の「民主主義」の歩みが続いてきていたと

したら、あなた方はそのときどうするのか。このままでよいとは思わないとすれば、そこからそれではどうすればよいのか。この問題を考えるにあたり、私は読者のみなさんに提示してともに考えていきたい「モデル」を紹介したい。私は「民主主義」についての研究のなかで、「民主主義」を理解する上でぜひとも大切だと思われる見方や考え方を、できるだけわかりやすい、といってもそれはこれまでのところあまり良い評判を得ていないが、「モデル」のようなものを思案して、なんとかつくってきたわけだ。それはもう拙著にも何度となく紹介しているものだが、この「エッセー」でもまた懲りもしないで書いているわけだ。「民主主義」に関する理解を深めるために「有益」な、さすがに自分のつくったモデルを「有益」なんて言うのは、「お前そんなに偉いのか」とあきれてしまうが、お許しアレ、「モデル」は、大別して二つある。その一つをこれまでの話の中で使ってきたが、これから先の話の中では、他の一つの「モデル」を使って話を進めていこう。と、ここに来てまた思ってしまった。確かにこのずっと前で、樋口さんの「見解」については後で少し述べるなんてことを書いたような気がした。ま、あまりこだわるまい。こんなやり方で話を進めていくのもいいではないか。そう自分に言い聞かせている。とにかく楽しんで書こう。それがベッドに横たわる母のせめてもの「親孝行」にでもなればと思うだけだ。ああ、また思いだした。「21世紀の右翼の在り方」云々てことも確か書くなんて、どこかにまた飛んでしまったが、気にスルマイ、ドンマイ、ドンマイ。この「エッセー」のどこかに書けばいいではないか。論の流れだとか、整合性とか、お前自身の生き方そのものが、「チャランポラン」なのだから、何もこんなところで、一オー、読者諸氏ゴメンー恰好を付けるのはヤメタ。そう、それでいい。とにかく、こころで気分転換ならぬ話題を少しだけ変えよう。とは言っても、あまり変わらないのだが。次はとにかく以下のようなタイトルで論じてみたい。

〈第二部〉 「民主主義」モデルからみた21世紀の「日本」と「日本人」の行方

(1)

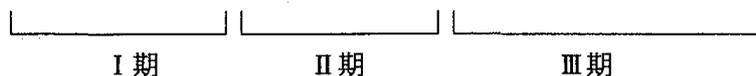
一応のところ、こうしたタイトルを書いてみたが、思わず、行方なんてそんなもの行方「知らず」にきまっとるわいと叫びそうなのを我慢してこらえた。ま、いまなにしろ始まったばかりだから、ここでの一番大切なことは、とにかく読者の皆さんに、「自覚」した「日本」をつくるために、その担い手としての「日本人」となるために、私の「民主主義」モデルのもう一つを紹介することである。ぜひとも、これまでの続きとして聞いてほしいものだ。それではとにかく「モデル」をここに書いておきたい。既に拙著や拙論で何度も述べてきた「モデル」だが、その都度気がつくのは、私の頭にあるものが、少しずつそのままの形で、伝えたいと思っているまさにそれに近い形で、「モデル」となっていることだ。これもまた進行形の状況にある。もちろんそうはいっても、その「全体像」はオオヨソのところできあがっている。以下のように描いた「モデル」をまずは見ていただきたい。

図式Ⅱ：「覇権システム」とその「秩序」の下での「民主主義」の形成・発展過程（通時態モデル）

(ウ) <1970年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」(図式ア)の下での「民主化」の方向>

・(文明)・(半開)・(野蛮)すべてに共通する図式

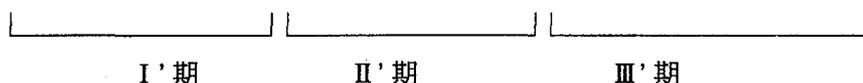
[権威主義的性格の政治→経済発展→分厚い中間層の成長→民主主義の発展(高度化)]



(エ) <今日の「民主主義」の「秩序」(図式イ)の下での「民主化」の方向>

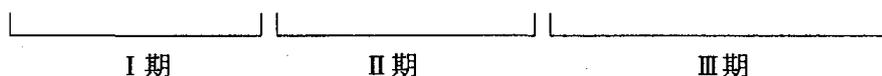
・(文明)の場合

[民主主義の発展(高度化)→経済発展→分厚い中間層の解体・断片化→民主主義の発展(低度化)]



・(半開)・(野蛮)の場合

[権威主義的性格の政治→経済発展→分厚い中間層の成長→民主主義の発展(高度化)]



このI期、II期、III期、およびI'、II'、III'のそれぞれの時期を、さらに前期、中期、後期と区分して考察していくことを考えているが、ここではしばらくこのモデルで描いたものをもとにして話をしていく。

読者には正直にしておく、実は<図式Ⅱ～>とある私の「民主主義」に関するモデルをここで示しているが、それは拙著の、『覇権システム下の～』のなかの140頁の図式をコピーして原稿用紙の上にそのまま糊付けしたものだ。あらためてその図式の「小見出し」をみて驚いた。そこには、<図式Ⅱ：「覇権システム」とその「秩序」の形成・発展過程（通時態モデル）>とあるではないか。ここもまた訂正できないままに、そのまま活字となって印刷されていたとは。勿論、ここは正確には、「覇権システム」とその「秩序」のといった後に「民主主義」が入ってなければいけなかったのだが、それに気がつかないままにいたのだ。本当に情けない。訂正しておく。またこの第二部の冒頭でこの拙著の図式を使ったので、第一部でも、また別の一つの「モデル」はそれを使うとしよう。後で原稿を整理する際に入れておく。

それではこれから先へといいたいたいところだが、また第一部のところで紹介していた「モデル」のことが気になってきた。それで少し時間と頁を割いて、その気になる点を指摘しておきたい。またここで、第一部で何度も話した「モデル」を思い出してほしい。まずは省略形の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式を、そしてその少し丁寧な形の $[A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \overset{(\times)}{\rightarrow} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \overset{(\times)}{\rightarrow} C \text{の民}]$ を、そしてさらに丁寧な $[\overset{A}{\text{経済発展}} \rightarrow \text{民主主義の発展}] \rightarrow [\overset{B}{\text{経済発展}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民主主義の発展}] \rightarrow [\overset{C}{\text{経済発展}} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民主主義の発展}]$ の図式を思い出してほしい。そこで私は、 $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}]$ を、また逆からみた $[C \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow A \text{の経}]$ を「帝国主義」の意味で示される「関係」として何度も、何度も述べたのだが、おそらく読者の中にはその「帝国主義」という捉え方というか、言い方に少しトマドウといった感じをもつ人もいるだろう。その人々に対して私はそれならこう考えてくれたらと思っている。この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で示したモデルの「世界」は、なにも国際関係の「世界」にだけに該当するものではない。この日本の国家の、社会の中にも該当、適用するものだ、と私は考えている。たとえば日本の企業社会をみると、そこには大企業 \rightarrow 中・小企業 \rightarrow 下請企業 \rightarrow 孫請企業 \rightarrow ……といった「経済発展」の「関係」があり、上にいくに従ってより「有利」となるそうした仕組み（構造）が歴然と存在している。そのことは大企業としてみられている「会社」がいつもその地位を維持するかどうかに関係なく、一般にこうした構造がいつも「手を替え品を替え」ながらも、つくり出されてきたのである。それゆえ大企業をAとして、中・企業をBとして、そして下請（孫請等を含む）をCとするとき、 $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}]$ の「関係」がつくられているのであり、そのCの下請や孫請の従業員の「人権」状態を念頭に入れるとき、 $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \overset{(\times)}{\rightarrow} C$ の「民主主義の発展」の図式に描くことが十分可能だと、私はみるのである。だから、その「帝国主義」とか「植民地主義」という呼び方にこだわらなくてもよいのだ。とにかく私がいいたいの、私たちの「民主主義」とかと呼ばれているものは、いつも $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式に示される「一つの」「関係」の中で

しかつくられてこなかったということだけ、それだけでも読者に伝わればいいのだ。

話のついでに言うておく。またこの後で、この第二部の「モデル」を使って、政治的「自己決定権」や経済的「自己決定権」といった問題について言及したいと考えている。なにか「自己決定権」というと難しそうだが、いわゆる「自由」のことだと考えてほしい。政治的「自由」、経済的「自由」のことだ。しかし、この「自由」なるもの、「自己決定権」とその「自己」なるものは、いつもこの[A→B→C]の図式に示される「関係」のなかではじめて手に入れることのできるものだというのを、逆にいうと、手に入れることが難しいものであり、手に入れることができないものであることを、読者に理解してほしいのだ。Aの大企業とその社員の「自由」は、すなわち「自己決定権」は、Bのそれに対して、Cのそれに対して、やはり有利な状況、状態にあると私は考えている。それは読者が一番よくわかっている。だから、読者の多くは、その子供たちも含めて、このAを、換言すれば「坂の上の雲」をめざしてきたわけだろう。これこそが日本の「近代化」の「歴史」の重要な命題であったのだ。しかし、どのような「道」を歩いていくかが、そこではまた大きな意味をもっていたのだ。そのAへと至る道は絶望的なほど険しいものであり、多くの政治共同体とそこで暮らす人々がその「道」の途中で呻吟し、後退するか、前進することを断念せざるをえなかったのである。その「道」とは私の「モデル」のこの<図式II>である。またなぜ多くの政治共同体が、またそこで暮らす人々がこの「道」を進むことで苦勞したかといえば、<図I>の「世界」が、すなわち、[A→B→C]の図式で描く「世界」がもう既に1648年以前にできあがっていたため、その「舞台」において多くのライバルたちとの「競争」を一方で強いられながら、その「勝者」になることによってはじめて、この<図II>の「道」を、すなわち「近代化」の「階梯」を登り進めることでもあったからである。

このように<図式I>と<図式II>のなかで描かれる「世界」について、私はこれまで研究してきたわけだが、これからはしばらく<図式II>の、す

なわち、「近代化」の「道」について読者とともに考えていきたい。その際、「靖国」問題を頭のどこかに入れておこう。少なくともこの〈図式Ⅱ〉には二つの「道」を紹介してあり、1970年代を境として、それらはその「ベクトル」を異にしている。少し話がややこしくなったが、言いたいことは、1970年代までの「民主主義」の形成、発展モデルに示される「道」における「靖国」問題と、1970年代以降の先進諸国が、そして日本が、辿っていく「民主主義」の形成、発展モデルにある「道」における「靖国」問題は、その意味することがらがやはり違ってくるのではないかという点である。勿論のことだが、その議論の前に、「民主主義」とか「民主主義」を守るといっても、その「民主主義」なるものも、1970年代を境として大きくその「性格」と「内容」を変えているのだということをおさえて置かねばなるまいが。それを、残念ながら、多くの日本人は、知識人、学者もマスコミ関係者も含めてわかっていないと、また「エラソー」に私はここで言わざるを得ないのだ。しかしこれがわからなければ、本当に「エライ」ことになるのだ。なんとか努力して、わかりやすく話してみたい。またここで繰り返して断わっておくが、第一部で語れなかったことをこの第二部に入れて話すかもしれないが、ご容赦のほどを願いたい。

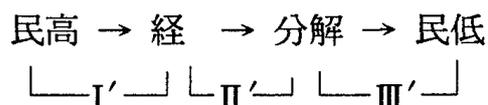
(2)

よく「格差社会」なるものだがここにきて話題となりマスコミで取り上げられている。それではまず、〈図Ⅱ〉のモデルをもとに、この「格差社会」なるものについて、オイオイと考えてみようか。やはり、〈図Ⅱ〉の省略形をこらでつくっておかねばならないだろう。さて、どう書くか。まずは、「権威主義的性格の政治」は権に、経済発展は経に、「分厚い中間層の成長」は分成に、「民主主義の発展」(高度化)は民高に省略してみよう。それで、この(ウ)の図式は、以下のようなになる。

権 ^(x) → 経 ^(x) → 分成 ^(x) → 民高
 ┌── I ─┘ ┌── II ─┘ ┌── III ─┘

あまり省略しても意味を感じさせないような、わかりにくさだ。残念だ。ま

これで続けてみる。この(ウ)の図式で描かれる「民主主義」の形成・発展においては、この「格差社会」なる用語はあまり使われなかったというか、私はあまり聞いていないのだ。不勉強かも知れないが。しかし、この(ウ)から(エ)へと、その<(文明)の場合>で描かれる先進諸国における「民主主義」の形成、発展の中でこの「格差社会」なる言葉はよく聞かれるようになったと私はみている。例によって省略してみる。「民主主義の発展（高度化）は、民高に、経済発展は経に、ここで念のためにいっておくと、(ウ)の経とこの(エ)の経とはその中身というか内容が異なることは確認してほしいのだが、「分厚い中間層の解体・断片化」は分解に、「民主主義の発展」（低度化）は民低に省略する。これもまたわかりにくいな。 (エ)は以下のようなになる。もちろん(文明)の場合についてである。



このようにみていくと、どうもこの「格差社会」なるものは、「民主主義の発展」が「高度化」から「低度化」へと移っていくところで生まれている。とくに「分解」というか、「分厚い中間層の解体・断片化」がそこに大きく影響していることがわかる。またすぐ後でもみるように、(半開)、(野蛮)といった中進諸国、後進諸国での「分厚い中間層の成長」がこの先進諸国の、また日本における「格差社会」なるものの形成に関係していることがわかるのである。

この「格差社会」の意味を『広辞苑』で調べると「商品の標準品に対する品位の差。また、価格・資格・等級などの差」とある。ここで私は次のように考えたりする。たとえば「民主主義」とか「人権」とかいった「商品」があるとして、それが悪くなった、あるいは「劣化」したとみれると。また、先述したようにいわゆる政治的、経済的「自由」、私はそれ（「自由」）を、「自己決定権」として位置づけ直したが、その「自己決定権」が次第に失われてきたとも解釈できるだろう。こう考えていくと、私のモデルの<図式 I>のあの [A→B→C] の図式の「世界」は、この<図式 II>の(エ)の(文

明)である先進諸国における[民高→経→分解→民低]の流れとどのように結びつけられるのか、またその(エ)の(半開)(野蛮)の[権→経→分長→民高]の流れとどのように結びつけられるのか。勘のいい読者の中にはそう思った人がいたら、それは私には本当にウレシイことだ。それは、〈図式I〉の(イ)の(今日の「民主主義」の秩序)でも紹介しているように、省略形を使って示すならば、[B→C→A]で示される「世界」として描けるのだ。すなわち、かつての先進国はこのAにあり、Aの特徴である[経済発展^x→民主主義の発展]として描かれる状態、状況に置かれているのだ。無論、この「民主主義の発展」とは、「低度化」を意味している。この[経^x→民]の民は、〈(ア) (1970年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」〉にある[A→B→C]の図式にあるCの[経^x→民]の民とはまったく異なっている。この点だけは、念のために注意してほしい。

とにかく、この21世紀に入ってまだ間もない時期というのに、この「日本」と「日本人」の現状はなんと散散とした悲惨な国家に、社会になったのだろうかと思ってしまうのだから不思議である。エラソーに国家や社会の在り方を問うことなど本来、私にはできない。自分の家庭や家族、親のことすらママナラナイのだから。そのような御粗末な私のようなものでもこのように今の「日本」と「日本人」をみてしまうのだから、さぞ日本のリーダーたちは、政・財・官界の御歴歴たちが、これでは日本はダメだ、なんとかしなければならぬ、そうだ憲法が悪い、戦後の教育がおかしかったのだ、伝統文化がすたれてしまった云々と、その内容の是非はさておくとしても、騒ぐのも無理はないと私はイタク同情してしまう。たださらに同情してしまうのは、どこに今の「日本」と「日本人」が置かれているのかもわからないでタダタダ大号令をかけているから。私の「モデル」を使って日本の山積している問題を読者とともに考えてみよう。そこで先の「格差社会」なるものへともどろう。まずは『毎日』(2006年7月24日付)の第2面にある「縦並び社会第5部格差克服への提言①」にある記事からみていく。といいつつ、またここで忘れないうちに書き留めておきたいことがある。そ

れは『産経』（2006年7月1日付）の「主張」にある「日米首脳会談」を受けての〈「民主主義」支援は当然だ〉という小見出しとそこでの内容についてである。この「主張」におけることがらは、これを書いた人がどれほどそのことをわかっているかは別にしても、私の〈図式Ⅰ〉の(イ)の省略形で示すならば、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描かれる「世界」を守っていくことを意味しているのだ。それは「産経」がこれまでことあるごとに批判、非難してきた中国を頂点としてこの「世界」がつくられていくことを意味しているのだ。またその「主張」のいうように、「民主主義」を守るのは当然だとする際、そのことは、私のモデルの〈図式Ⅱ〉の(エ)の（文明）として位置づけられてきた先進諸国と日本において $[民高 \rightarrow 経 \rightarrow 分解 \rightarrow 民低]$ へと導かれる流れを推進していくことを「応援」といった支持表明を意味しているのだ。

そのいわれている「民主主義」を守ることが同時に「格差社会」の進行をススめるとしたら、やはりこれも面倒な話となってくるだろう。

これもまた忘れないうちにここで指摘しておくのだが、結局のところ、日本の政・財・官界のリーダーらが声高に叫んでいる「愛国心」とかそれをもとにした「ナショナリズム」の高揚とかといった「モノ」は、「金」でつくられるものでしかないのだ。すなわち私の〈図式Ⅰ〉や〈図式Ⅱ〉にある「経済発展」をもとにして稼いだお金でどうにでもなる「代物」^{しるもの}なのだ。まさに札束で頬を叩きながらつくられるしかない「愛国心」であり、それによってつくられる「ナショナリズム」でしかないのだ。いくら「下からのナショナリズム」だとか「健全なナショナリズム」などと呼んでも、それは、私のモデルで描いた「世界」の中で作り出されてきたものに他ならないのだ。すなわち、「覇権システム」とその「秩序」を前提として、またそれを前提として織り成されてきた「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」の中で「創造」されたものに過ぎない。決して、そうした「覇権システム」とその「秩序」を超克しようとして生みだされた「愛国心」や「ナショナリズム」ではない。そんなことを望むのは土台無理かもしれないが、もしそれをそのようなものを、「日本」と「日本人」が求めるとするならば、もう一度

いっておくのだが、「覇権システム」とその「秩序」の「外」へと一步でも出て行こうとする「心」というか「生き方」である。これこそが私のいう「愛国心」である。しかし、ヒトは食べなければならない。食べて生きていかざるをえない。またまた「振出し」に戻ってしまう。

(3)

それでは少し「心」を持ち直して、「格差社会」について、『毎日』の記事を参考にしながら論を進めるとしよう。と言いつつまだ前のところにこだわっている。またできもしないようなことを述べてしまった。「覇権システム」とその「秩序」から、その「内」から一步でも「外」へ歩めなんてことを語ってしまった。自分の本の宣伝のためにまた紹介しておくのだが、拙著『覇権システム下の「民主主義」論』でも私はなんとかその「方策」を紹介していたが、やはりそれはガンジーとか、『イワンの馬鹿』のイワンのようなものしかできないようなことだ。まさに私のような一般人が「神」になるようなことを求めている。とはいえ、その「神」は、「日本」と「日本人」にとっては望ましい「目標」であり、「英霊」よりはましな目標であると思うのだ。また靖国神社の「英霊」さえもが、その「目標」こそが今後の「日本」と「日本人」の「目標」たりうるものであり、たとえその実現がまったく不可能であったにせよ、その途上で挫折するようなことがあったにせよ、その「生き方」を選択して前に向かって歩を進めていく姿こそが、それを見せることが、オレたち「英霊」とされたものたちへの慰労、慰藉であり、また「顕彰」することであるのだ、そう願っているし、訴えている、と私はいつも考えている。

それでもやはりその「目標」へと向かうことは、私の「モデル」(〈図式 I〉、〈図式 II〉)の「世界」の存在によって、その「世界」が今後ますます現実のものになるにしたがって、相当に大変なものとなることは明らかであるだろう。M・ヴェーバーならばおそらく私に向かって「お前は宗教家を気取ろうとしているのか」と厳しく叱責するかもしれない。彼は宗教家の説く「心情倫理」と政治家の説く「責任倫理」とを区分して、愛や道徳よりは

現実に可能なことを、それに対する責任を引き受けることを政治家となる条件と考えていた。私も「政治学者」の「端くれ」だとの自負はもっている。しかし、それでも私の提言がまったく「心情倫理」からなされたものとは思わない。私のない頭を、私なりになんとかしようとして捻って出したものなのだ。読者の中でそれが、その提言がどんなものかをもっと詳しく知りたいと思う人がいるなら、先の拙著を御一読されたい。また横道にそれてしまったか。いやそれは少し違う。はじめから横だの正面だのはきまっていない。また戻るとしよう。

先に紹介した『毎日』の「格差社会」についての記事だが、そこに二人の論客が「格差社会」についての各々の見解を述べている。一人は経済評論家の内橋克人さんで、もう一人は、ノーベル賞受賞経済学者のジョセフ・スティグリッツさんである。まずは内橋さんの見解をみていく。内橋さんの見解というか意見について要約したような「見出し」がついていて、それは、〈共争万能を超えた経済システムどう構築〉、〈「共生経済」へかじを〉とある。付言すれば、私ならば何をいうかはもう読者にはおわかりだろうが、念のために言っておきたいのだ。それは「覇権システム」とをその「秩序」をもとにつくり出されてきた先進諸国（「文明」）と中進諸国（「半開」）と後進諸国（「野蛮」）との相互間における「経済発展」と「民主主義の発展」との関係により織り成されてきた「構造」（「仕組み」）から少しでも離れていく、離れられるような社会を創造していくことである。また恥ずかしいような、できもしないような、「心情倫理」と誤解されるようなことを話してしまった。お許しを！

さてその内橋さんによると、〈バブル崩壊後の「長期構造的停滞」をもたらしたものは、狂乱的な土地投機や金融資本の節度喪失、もとをたどれば円高誘導を決めた85年のプラザ合意以降の日本政府の重大な「政策エラー」に真相があった。〉こう内橋さんは指摘しながら続けて以下のようにいう。〈ところが一部の論者は巧みに現実をスリ替え、あたかも公正や平等に価値を求める在来の価値観に不況や停滞の原因があったごとく唱え始めた。～～

～社会をむしばむ「格差」を一気に深めたものは、小泉政権が完成させた雇用・労働の解体だ。この政権は「改革」の名において、経済界の悲願であった「雇用・労働の規制緩和」の流れを一気に加速させ、不可逆で決定的なものとした。03年改正における差別的派遣労働の前面解禁（期間の上限延長）、製造業への派遣労働の解禁断行などがその核心的なものだろう。まさにここに「格差社会」の起源は発している。＞ この内橋さんの「格差社会」なるものについてのくだりを、私のモデルの〈図式Ⅱ〉の(エ)の先進諸国（文明）に該当するものと対比させながらもう少し論を掘り下げていこう。まずは省略形をと思ったが、やはりきちんとしたものを紹介しておく。その際、1970年代までの「流れ」（これは図式の(ウ)で示されるものと同じもの）と比べるためにも、二つ（①②）描いておきたい。

① <1970年代半ばまでの「民主主義」の「秩序」〈図式Ⅰ〉の図式(ア)の下での「民主化」の方向>

権威主義的性格の政治 → 経済発展 → 分厚い中間層の成長 → 民主主義の発展（高度化）

┌── I 期 ─┐ ┌── II 期 ─┐ ┌── III 期 ─┐

② <今日の「民主主義」の「秩序」（〈図式Ⅰ〉の図式(イ)の下での「民主化」の方向)>

民主主義の発展（高度化） → 経済発展 → 分厚い中間層の解体・断片化 → 民主主義の発展（低度化）

┌── I' 期 ─┐ ┌── II' 期 ─┐ ┌── III' 期 ─┐

私の「民主主義」の「秩序」に関する①②のモデルから内橋さんの見解を検討するとき、私にはどうしても「それは違うのではないか」と思われるくだりが散見されるのだ。この図式で描かれる「世界」は、単に日本政府が選択したり、あるいは小泉さんがどうこうしたりしたからといってつくられるものではない。むしろ、日本政府の85年のプラザ合意による円高誘導の決定とか、小泉政権における「改革」という名の下での一連の政策が打ち出されたのは、この図式で描かれる「世界」の形成、発展に日本政府が従っている、従わざるをえなかったその「結果」であり、決して「原因」ではないのだ。そのことの確認と理解が何よりも求められるのだ。残念なことに、内橋

さんには、また次に紹介するスティグリッツさんには理解できないと言わざるをえない。本当に「エラソー」な物言いである。御両人にはお許しを乞わねばならない。しかし、それでも私はそのように言わざるをえない。少なくとも、「民主主義」の形成、発展の歴史を、先述したように、先進諸国（「文明」）、中進諸国（「半開」）、そして後進諸国（「野蛮」）とそこに暮らす人々によって織り成された「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」によって作り出されてきた「構造」（「仕組み」）の形成、発展の歴史として捉えてきた私からすれば、内橋さんの見解には納得できないのだ。もちろん急いでいうのだが、内橋さんの説く「競争万能を超えた経済システム」に異議を申し立て、＜「共生経済」へかじを＞とることに対しては大賛成である。それはそうなのだが、どうしても「分析」が正しくないのだ。経済のプロに対して本当に失礼な言い方だが、もう一度いうと、「民主主義の発展」（「高度化」）から、「経済発展」が導かれるのだが、そうした「経済発展」を導く「政治」と「政策」が準備され、実現されるわけだが、それは、私たちが守ってきたまさに「民主主義」の下で、そういう「構造」の下で作り出されてくるのだ。それゆえ、先にも述べたが、日本政府や、小泉改革は、いわばそうした「流れ」を「後追い」したもので先にそれらをつくり出した原因でも要因でもないということだ。つまり、私たちが戦後、憲法を守り、戦後の高度経済成長を続けていきながら、「完全雇用」とより豊かな生活を追い求めていくなかで、そして「民主主義の発展」を実現していくなかで、今日の「格差社会」なるものの種がまかれ芽がでて、そしてそれが「花開く」結果となってきたからだ。つまり、私たちが考えなければならないのは、私たちの戦後の「豊かな日本社会」は、本当に「憲法」を守ることにより、「第9条」を守ることにより「民主主義」を守ることにより実現されたのかという点である。私の省略形のモデルで示すならば、私たちのこの「豊かさ」は[A→B→C]の図式で描かれる「世界」の中でつくられてきたものではなかったのか、つまり、戦後の日本は、このAの中で、「豊かさ」を手に入れることができたのだが、それを支えていたのが、この[A→B→C]の図式

のBやCの存在ではなかったかということだ。つまり、このBやCの存在をつくり出す「関係」を形成、維持するなかで、「分厚い中間層の成長」に成功したわけだが、そのとき、BやCとそこに暮らす人々は、Aに対してまさに「格差」を感じながら生活していたのではなかつたらうか。その「格差」をつくり出していたのが、このAの中における「分厚い中間層の成長」とそれをつくり出した「経済発展」であり、それを導く「権威主義的性格の政治」であったと私はみるのである。その「経済発展」が実は「水俣病」で苦しむ人々を生み出したのだ。水俣病をつくらぬような「経済発展」を私たちはめざすべきであったのだ。それに成功していれば、少なくとも今日いうところの「格差社会」とか「格差」の問題はまたちがった流れになったかもしれない。しかし、それができないような仕組みが、実は、あの「憲法」をもとにつくり出されてきたことも事実なのだ。その点について私は声を大にしてここで言っておきたい。

さらに付言しておきたいことがある。2006年6月29日の小泉首相とブッシュ大統領による日米首脳会談とそれを受けての「日米共同宣言」をめぐる日本の新聞報道において、たとえば先にも紹介した『産経』（2006年7月1日付け）もそうだが、＜両首脳は、「自由と民主主義」という普遍的価値を日米で推進するなどとした共同文書「新世紀の日米同盟」を発表した。＞にもあるように、内橋の＜公正や平等に価値を求める在来の価値観＞といった見方と同様に、たとえ「価値観」は同じものに思われても、先の私のモデルの①②に描かれるように、「民主主義」の「価値」もその「性格」もまったく異なっているのである。今の先進諸国でそれゆえ、この『産経』の「主張」にあるように、「民主主義」を守るということは、もっとも、それを言っているのは『産経』だけでなく、『朝日』も『毎日』もその他の新聞各紙もそうであり、内橋さんも例外ではないのだが、「格差社会」をますます導くことになるのだ。

(4)

もう一度いっておくと、「格差社会」の起源は、内橋さんの分析するよう

なものでは語れないものなのだ。表面上は、内橋さんのいっているように、展開しているようにみえても、それは「後追い」なのであり、原因ではないのだ。おそらく内橋さんや「格差社会」について否定的、批判的に論じている人にもわかっていただけないのを覚悟でいうけれども、私たちが守ってきた「民主主義」なるものに、その「民主主義」の構造なるものの形成、発展にこそ「格差社会」なるものの「起源」があるのである。ここでまた簡単にいっておきたい。「民主主義」を、「自由」にモノが言え、誰もが政治に、社会の問題にかかわっていく（各人が候補者を選び、また候補者となれる）そうした制度だと考えるとしよう。それをどこで私たちは実現できるのか、今度はその「場所」を考えてみよう。それは「国家」と呼ばれる「空間」であった。「主権国家」と呼ばれる「空間」がまずつくられなければ「民主主義」なるものの民も手にとることができなかつたのだ。それではその「主権国家」なるものはどのようにしてつくられてきたのか。それは、私のモデルの省略形で描いた $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれる「世界」（「構造」とか「仕組み」と私は呼んできた）がつくられることによってであった。つまり、CよりはB、BよりはAの方が「主権国家」を実現していく上で有利であり、そうした「主権国家」をつくることに成功した国家は、ますますこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」を確固たるものへとつくりあげていったのだ。そして、その「主権国家」の「主権」を国王から国民が担っていく「国民国家」が、「主権国家」をもとにしてつくり出されていったわけだが、その「国民国家」もこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式に示される「世界」が存在しなければまた実現不可能な国家であったのだ。こうした「主権国家」、「国民国家」を「空間」として、またそれらがつくり出された $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」を「空間」として、先の誰もが自由にモノを言い政治に参加できる「民主主義」なるものをはじめて手に入れることができるというわけであるから、この「民主主義」とそれをつくり出す「民主主義」の「構造」なるものは、これは想像以上に「ヤバイ」ものではないか。そう私はみてきたのだ。 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」はまさに「差別」や「排除」の構造であり、

いつも「格差」をつくり出してきたのだ。福沢諭吉は、リカードと異なって「文明」を「製物の国」の経済とみて、「半開」や「野蛮」の、とくに「野蛮」の「産物の国の経済と対置させていた。「比較優位」などとゴマカスことはしなかった。まさに「格差社会」の「起源」ではあるまいか。イヤ起源はもっと歴史を溯るのだが、「格差社会」なるものの「構造」がつくり出されていく「起源」があったのだけは事実だ。そしてこの「格差社会」の「構造」をもとにして、私たちの大切だとする「普遍的」価値として理解されてきた「民主主義」なる「価値」と、その現実の実現の歴史がはじめて実現可能となったわけである。そしてこの[A→B→C]の図式で描く「世界」が形成、発展していく中で、もう一つの私のモデルで描く<図式II>の(ウ)で描く「歴史」が、先述した①の流れがつくられてきたのだ。同時に、この<図式II>の(ウ)の「歴史」が、すなわち、①にある第I期から第II期へ、そして第III期へと「民主主義の発展」にある国家が成功していくということは、<図式I>のモデルで描く「世界」が、つまり[A→B→C]の図式で描く「世界」がつくり出されていったということを意味していたのである。

何度も語ってきたように、もし「格差社会」の「起源」を求めようとするならば、本当にその問題を考えようとするならば、「民主主義」の形成、発展の過程について考察しなければならないのだ。内橋さんには悪いけれども、内橋さんの見方ではどうしようもないと私はみる。もっとも、それにもかかわらず、内橋さんの提言は、「責任倫理」の観点からいうと、私の見方よりははるかにマシであることは、私にもわかっている。本当にじれったいのだ。それはそうなのだが、ブツブツと続く。それでは続いて、スティグリッツさんの見方を紹介しよう。彼は、私はここで簡単に「彼」なんていっているが、スティグリッツさんは「ノーベル賞受賞経済学者」なのだから、あまり気安く「彼」はなんて呼んではいけないのだ。失礼をお許しアレ。彼は、技術革新によって高い技術をもった熟練労働者に比べて、非熟練労働者は途上国との賃下げ競争にもさらされ暮らしは苦しいと診断している。そして、<格差拡大をもたらす状況が世界的にある中、政府が取るべき対策はセーフティー

ネットの整備や教育の充実、より多くの公共サービスを提供することだ。しかし、米国や日本の「小さな政府」改革は全く逆のことをしてきた。……日本は、格差拡大の結果を認識し、格差に対処する政策を採用すべきだ。小さな政府というイデオロギーが良い経済政策を生まないことを認識する必要がある。> まずはこのくだりに注目してみたい。私の<図式Ⅱ>のモデルの(エ)を、ここでは先述の②をみていただきたい。この図式からわかることは、21世紀の先進諸国における特徴は、「分厚い中間層の解体・断片化」であり、そのための「経済発展」が既に1970年代半ば以降からおこなわれているということだ。これはまさに「小さな政府」を推進していく流れなのだ。①の図式で描かれた「分厚い中間層の成長」とそれを導いた「経済発展」は既に先進諸国では「過去」の出来事となってしまっているのだ。かつてのこの「大きな政府」へと至る流れは、実は[A→B→C]の図式で描かれていた「世界」のBやCがこれから引き継ぐこととなっていて、今はその最中というところである。すなわち、[A→B→C]の図式は、1970年代から[B→C→A]へと示される図式へとその「世界」の姿を変容させるべく転換しているのだ。この「流れ」を私は理解すべきだと主張し続けてきたが、何度もいうように、わかっていただけないのだ。誰かの言葉を借りればまさに「残念」である。

確かに、内橋と同じようにこのジョセフ・スティグリッツさんの「心やさしい」気持はよくわかるのだが、たとえ、スティグリッツさんが<国民は「小さな政府」政策が、自分たちをより不安定にすることに気づき、その流れを止めるしかない。> といったとしても、またその提言は私も気持としては賛意を示したいのだが、私たちが<図式Ⅱ>の(ウ)の流れの中で、Ⅰ期からⅡ期そしてⅢ期へと「民主化」の「段階」を高い方向に歩むことができた背景には、<図式Ⅰ>の(ア)におけるように、その私たちの「大きな政府」の実現を支えてきた[A→B→C]の図式の「世界」におけるBやCの存在があり、BやCとそこに暮らす人々は、「小さな政府」どころか、自分たちの「人権」や「生命」さえも十分に保障されない生活と生命の「不安定」さの

中に置かれ続けてきたのである。さらにいうならば、このBやCが、今度は、これからは[B→C→A]の図式にある「世界」で「大きな政府」をつくり出していくために、つまり「分厚い中間層の成長」を実現していくために、Aの企業や資本がBやCへと移転していくのであり、そのためにAにおいては、「小さな政府」を求めざるをえなくなるのである。そのことは、Aの「分厚い中間層の解体・断片化」を導くことを意味するだろうし、その結果として、内橋さんがいった差別的派遣労働の全面解禁とか製造業への派遣労働の解禁断行といったことがおきるのだ。スティグリッツさんもいうように、
<米国が日本へ迫った規制緩和は、米国企業の成功のためであり、日本のためではなかった。> かもしれないものの、日本企業のため(利益)には、そのすべてとはいえないにせよ、与っていた。また、この米国の要求、要請は、[B→C→A]の図式で描かれる「世界」をつくり出していくためのものであったことをまず確認する必要があるだろう。Bの頂点にこれから位置する中国と、Aの頂点にいる米国との「覇権連合」の形成、発展の下に、この「世界」は「順調」になんとか船出をして、もうその航海もかなりのところに来ているのだ。この「順調」な航海のために、「格差社会」は招来されたのだ。そればかりではない。世界の至るところで生じている内乱(内戦)、衝突、いろいろな問題もこの「流れ」と結びつけてみなければならない、そう私は考えている。しかし、ここでもまた言わなければならない。スティグリッツさんの対処法は、「責任倫理」にもとづいたものだがと。それでもまたブツブツと続いてしまう。「ああ」、「ああーああ」とタメ息となってしまうのだ。

それではここらでもう少し「元気が出てくるような話」をなんとか探してみようか。これもまた大変なことだ。アフリカのがんばっている国を取り上げてみようか。『毎日』の特集でナイジェリアがあった。ちょっと待った。少し怪しいぞ。この特集記事は。これはまったく元気なんか出ないものではないのか。イヤもう遅い、どうせお前の人生も元気のないところではないか。そんなこと言わないで少し付き合ってみようではないか。読者にはここでま

た謝っておかねばならない。次にナイジェリアについて述べているのは、ずっとあとの頁である。どうかそこまで読み続けていただきたい。ご容赦を！

(5)

それではここからは少し趣向を変えて、私が日頃から持ち歩き、何か思いつきたびにそこに書き留めている小さな手帳から、ぜひともこれは読者にも伝えたいと思うものを取り出して、それを紹介していくことにする。これもあまり、全体的な論理構成とか、言葉の使い方（デスマス調か、デアル調かをも含めて）にも神経をめぐらさないで、思ったようにとにかく、「スラスラ」と前へ向かっていこう。とはいえ、そんなに「スラスラ」とはまったくほど遠い実情だが。おそらくここでも読者は気づかれるかもしれない。第一部、第二部と内容が重なっていることは勿論のこと、私のモデル〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉で描いた「世界」をもとに、そこから私が見ようとする考えようとする問題を考察していることに。前置きはこれくらいにして、本論ならぬ中身に入っていこう。

「環境問題」を「民主主義」（「民主化」）の観点からみるとき、何がわかるのだろうか。まずはこの問いかけに答えながら論を進めていく。私は地球温暖化をめぐる問題と「民主主義」を実現していく流れというか、「歴史」とは切っても切り離せないものだともみている。つまり地球温暖化を含めた環境問題は、「経済発展」と関係して生まれてくるものだともみている。なぜ「」をつけたか。お察しのいい読者はもうおわかりだろうが、私の図式の〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の「経済発展」を私は念頭に入れているからだ。つまり、私の図式で描く「世界」から地球温暖化はつくり出されているのだ。環境問題も当然そうなのだ。ところがこの関係性というか、関連性が残念ながらエコロジーだとかみどりを大切にという運動をしている人々にもよくわかってもらえないのだ。彼らの多くは、もうエネルギー資源が枯渇するからこれまでどおりではダメだとか、「ピーク・オイル」、石油がもうあと何年も保障されない、石油も既に底をついているとか、人にも環境にも優しくないとか、そのような理由から、環境問題を考えているのだ。原子力発電の問

題もそうなのだ。

私はこれに対して、 $[Aの経 \rightarrow Aの民] \rightarrow [Bの経 \overset{(\times)}{\rightarrow} Bの民] \rightarrow [Cの経 \overset{\times}{\rightarrow} Cの民]$ といった図式で示される「世界」では、Aの人がBやCに対して優しくできないから、Aの人が、Bの人が、Cの人を「踏み台」として生きていくような生活はダメだと考えるから、こうした「生き方」はやめよう、そうした「生き方」を支える「経済発展」はやめて、他の方法を探していこうと考えるから、それゆえそこから「環境」なのだ。地球温暖化にストップをかけるためにも、この私のモデルの〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の描く「世界」の中で生きていくことに「NO」と叫ぶ必要があると私は訴えているのだ。ところが、「民主主義」「人権」を守るためにも、地球温暖化を阻止しないといけないとか原発やプルサーマルには反対しないといけないとか主張する人々がいる。彼らのいう「民主主義」や「人権」がもし、私のモデルの〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の描く「世界」の「民主主義」「人権」であれば、これは大変だと、ダメだと私は思うのだが、現実はどうもそうらしい。だから「第9条」を「平和憲法」を守る人々と、原発反対運動とが、相互に支え合うといった構図が書けるのだ。「公害」に、水俣病に反対することと、「第9条」を守ることとは、本来は矛盾しなければならないものだ。それは「オカシイ」のだ。そう私はいうのだが、彼らからは、私の頭の方がおかしいこととなる。「第9条」や「平和憲法」が、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ (省略形) の図式で描く「世界」をもとにして作り出されてきたことを考えれば、そうした憲法を守ることが、 $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経]$ といった「経済発展」をつくり出し、その結果、Cの「民主主義の発展」を阻害してしまい、Cの人権を否定することになってしまう。そう私は考えるので、たとえAの環境が問題でなくても、イヤそうではないなあ、A、B、Cの環境が問題なくても、Aの民 $\overset{\times}{\rightarrow}$ Cの民といった図式で描かれる「世界」が作り出されることに変わりがないのであれば、やはり問題は残り続けるということだ。その意味で、環境問題は、「民主主義」の問題そのものなのだ。

したがって、戦後の「平和憲法」を担いそれを支持してきた人々が、エコ

ロジーやみどりの問題にも関心をもって、そうした運動を展開することになると、これは私にはまたまた忌^ゆ忌^ゆしいことになってしまうのだ。もう少しこれについて再度考えてみる。これまでも何度となく語ってきたが、戦後の日本国憲法は、またその「第9条」は、私の図式 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描かれる「世界」を維持、発展させていこうとする「勢力」によって「押し付け」られたものなのだ。「押し付け」られたのは、憲法を批判し、否定する旧支配層に対してであり、一般の人々はそれを支持していたから、「押し付け」憲法ではないといった議論がよくおこなわれてきたものだ。しかし、私がここでいっている「押し付け」とは、まさに先の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描く「世界」とそこで生きていくことを「押し付け」られたと私はまずいいたいのだ。これを確認することがまずは大切なのだ。つまり、 $[A \rightarrow B \rightarrow C] = [A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の民}] = [A \text{の経済発展} \rightarrow A \text{の民主主義の発展}] \rightarrow [B \text{の経済発展} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民主主義の発展}] \rightarrow [C \text{の経済発展} \xrightarrow{\times} C \text{の民主主義の発展}]$ で描かれる「世界」と、その中で生きていくことを「押し付け」られたのだ。逆から、つまりCから描く図式は、 $\langle \text{図式 I} \rangle$ を参照されたい。この「世界」とそこで生きていくことは、旧支配層 = 守旧派であろうと、なかろうとまったく関係のないことだ。すべてのものが、「覇権システム」とその「秩序」の中で生きていくことを「押し付け」られているのだ。またそのシステムと秩序を前提として織りなされる「経済発展」と「民主主義の発展」との関係のなかで作り出されてきた「構造」(「仕組み」)の中で生きていくことを「押し付け」られたのである。それゆえ、たとえ「押し付け」られた「世界」であっても、Aにいる人間にとっては、その「押し付け」はBやCにいる人々と比べて、「押し付け」られたものとは実感できないものといえたかもしれない。なぜなら、Aにいる人々が、BやCに、その構造で、その中で生きることを「押し付け」ているからだ。その「自覚」ができないままに、「平和憲法」を、「第9条」を守ってきたわけであるから、これほど「罪づくり」もないのである。「よくもまあ、そんなことが言えたわい」なのだ。本来ならば、日本の高度経済

成長を「平和憲法」と結びつけてその「オカゲ」として説く人々が多いのだが、その戦後の高度経済成長をもたらした「経済発展」は、私のモデルで描く $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の「世界」のAの「経済発展」、とくにアメリカ合衆国とのそれと密接に関係していたものだ。

(6)

この「関係」をもう少しわかりやすくいうために、今の中国を取り上げて考えることにしよう。中国の経済発展をみると、少し以前に「世界の工場」として中国が紹介されはじめたが、その中国に先進国は海外投資の形でテコ入れをおこなっている。日本は1985年の「プラザ合意」以降、とくに円高誘導の政策をとり、日本の製造業を整理縮小しながら中国をはじめとするアジアや米国へとEUへと、ロシアへと海外シフトを展開していった。それによって、日本国内のこれまでの「経済発展」の中心的役割を担ってきた「重厚長大」型産業の「リストラ」を本格的に展開していく。つまりそのような「リストラ」を展開しつつ、次のあらたなる「経済発展」を着手していくことになるのだ。誤解を恐れなくてよくわかりやすく描くならば、日本をはじめ、米国やEUなどの欧米諸国は、「金融・サービス」を中核、中心とした産業構造に特化する国へと「経済発展」の中身を示していくのに対して、中国やインド、ロシア、ブラジルなどのいわゆる「ブリックス」に代表される諸国は、「重厚長大」型産業を核とした「経済発展」に特化していく、そのような「関係」が今まさに展開中である、そう私はみているのだ。つまり私のモデルで描く $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の「世界」から、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」へと変容していつているのだ。このBのなかに先ほどのブリックスと呼ばれる諸国も入っていて、その先頭に中国が位置しているのだ。このBを、Aの覇権国である米国が支えているのだ。この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式へと「世界」が変容していく、転換していくのをAのアメリカ合衆国が積極的に支えているのだ。いわゆる米中覇権連合が形成、発展する中でその転換というか変容が生じているのだ。

また話がややこしく長くなって恐縮だが、実はこのような中国と今の日本、

米国をはじめ欧米先進諸国にみられる「関係」が、1950年代から60年代、70年代にかけて、日本と米国との間にできていたのだ。つまり、今の中国が、その経済発展が、かつての日本とその当時の日本の経済発展に該当しているのだ。それゆえ、今日の中国に対する批判、たとえば中国には自由がない、共産党の独裁だとか、経済発展に力を入れて「公害」にはまったく配慮しないで人権無視もはなはだしいとかの批判であるが、それは自民党の支配の下での日本の政治と経済発展に対してもむけられてしかるべきものなのだ。もっともこのようにいうと、すぐ反論がきて、日本と中国では「体制」が違うとか。だから私は、モデルで「権威主義的性格の政治」といった「段階」があり、そうした「政治」の下でも「経済発展」がみられることを、「体制」間の違いにかかわらず描こうとしたのだ。同時にまた、等しく「民主主義」、すなわち「自由民主主義」体制として位置づけられるにせよ、その「体制」の「前期」、「中期」、「後期」の各々の「段階」政治の「特徴」を描くことのできるモデルを思案してつくってきたのだ。また、日本が、この「権威主義的性格の政治」の下で「経済発展」に成功した「舞台」も忘れてはならない。先述したように、米国との「関係」はもとより、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」を前提としない限り、日本の高度経済成長などは実現もしなかったわけだから。そしてこの「世界」を維持、形成、発展させていく際に、Aの中の覇権国であった米国の圧倒的な軍事力とそれを下に展開されたさまざまな「システム・ポリティクス」(「Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経」に示される政治である)の成功と切り離して日本の「戦後」を語れないのだ。つまり、「平和憲法」が日本の戦後の「経済発展」をつくり出すことに成功したとみる論者らは、その「平和憲法」と $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で示す「世界」の「関係」を、彼らがそれをたとえ認識できないでいたにせよ、認めざるをえないことを意味していたのである、そう私は理解しているのだ。

それゆえ、「平和憲法」を守るということは、この図式の「世界」をもまた守るということなのだ。こんな恐ろしいことを護憲論者は主張してきたということだ。もっとも彼らはそれを認めないし、そんなことはないと反論す

るだろうが、「エラー」なことを言わせてもらおうと、私の論の方がやはり正鵠を得ていると思うのだ。またしても「エラー」だ。また話のズジが見えにくくなった。素直にそう思うので少し気分転換しておきたい。広島原爆投下から61年の記念式典があり、広島市長の「平和宣言」が『毎日』（2006年8月7日付）でも報道されていた。その「見出し」で「核兵器 決別のとき」、「岩をも通す固い意志で目覚め起て」とあったが、私はどうもこのような文言は苦手である。何か本当に「儀式」と化したかの感がある。「空虚」な言葉がさらにその「軽さ」を増していく。この広島の「儀式」は、まさに靖国のそれに匹敵している。一方は「平和」、他方は「戦争」といった連想をしてしまう。勿論のこと、このような分類はまったく誤りだが。それでもやはりそうした連想をしてしまうのだが、もっとも、それは私がそう思うのであって、読者がそうおもわないのならばそれで「イイ」のだ。話はこれから「先」なのだ。それがもっと大切な点だ。これほどに「儀式」化してしまった、そのために本来は「儀式」なのに、その「はず」だったのに、まったくそこに「重み」を感じられなくなってしまったと私は思うのだが、それは何故か、どうしてなのかということだ。

「広島」は原爆を投下された被爆した場所だ。「ヒバク」地だ。その歴史を二度と経験してはならないことを誓った、誓い続けて61年目だ。だから私はいつも思うのだ。私の住んでいる愛媛県の伊方（いかた）というところに原子力発電所がある。そこで原発のゴミを掃除しているいわゆる原発労働者は「ヒバク」していることが知られている。愛媛と広島はすぐ近くにある。広島市長ならばそれについて知っているはずだと私は思うから、まずはこの問題を取り上げて、その「ヒバク」の事実について、その真偽についての調査を、何十年かけて呼びかけるそのような「演説」でもしていれば、私はもっとよかったのにと、考えてきたのだ。身近な「出来事」には目がいなくて、いつも「人類」がとか、今回は「岩をも通す」・・・となってしまう、「君が代」の「サザレイシのイワオとなりて」といった文句を思い浮かべるハメになってしまった。言いたいことは、私のような<図式I>、<図式

II>のモデルを考えて、そこから現実の世界をみているものにとって、それでは広島は、<図式 I>のあの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の描く「世界」の中で、他の都道府県とは、そこに住んでいる人々とは、どのように違った異なった「生き方」をしているのか、61年間にわたり、どのような「生き方」をしてきたのか、そこなのだ、私が一番に目を向けなければならないと思うのは。

つまり、広島原爆投下は、「開国」以降の日本の「近代化」の「歴史」の中で起こったものであり、「あの戦争」の一環であったわけであり、それは私の図式の「世界」($[A \rightarrow B \rightarrow C]$)の中で必ず生み出されるものであるから、それを二度と経験しないためには、この図式の「世界」とは異なる、違った「世界」をつくっていく必要がある、そう私は考えている。だから、 $[A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の民}]$ といった図式で描かれる「世界」から脱け出すために、そこから一步でも「外」へと踏み出すために、「広島」は61年という歳月のなかでどのような「経済発展」をめざしてきたのか、また $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{\times} C \text{の民}$ や $[C \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow A \text{の経}] \rightarrow A \text{の民}$ や $A \text{の民} \xrightarrow{\times} C \text{の民}$ といった図式（もちろんこれらは省略形である）で示される民とは、すなわち「民主主義の発展」やそうした「民主主義」とはどれほど異なった民を、「民主主義」を、「民主主義の発展」をめざしたかが大切であったろう。

もちろん、そうした広島もこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」を「押し付け」られ、またその中に押し込められてきたわけだから、簡単に私がいうようにはいくものではない。だから私は腹が立つのだ。そんなことで済まされないだろう。確かに今までとは異なる、違う「経済発展」を、広島が、広島だけがやるのは、そう簡単ではない。私が言いたいのは、「広島」風のヤリカタがあると言いたいのだ。「広島」風で思い出すのは、「広島」風の「お好み焼」だ。その原料にこだわって、先の図式の「経済発展」とはちょっと変わった、異なったものをめざした仕組みをつくって、その原料を手に入れることはできるのではないか。また、「広島」風の「金融機関」を考えてつ

くってもいいではないか。全国のそれらとは異なる、違った金融機関がやはり広島には存在していなくてはコマルのだ。[Aの経 → Bの経 → Cの経] \xrightarrow{x} Cの民といった図式の「世界」を広島ではできるだけ少なくしなければ、広島が世界に訴えているような「平和」は実現しないし、できないと考えれば、やはり、全国のどこよりも中・小や下請企業に配慮した大企業の在り方が広島では求められるのだといって「宣言」すべきだろう。そうした「平和宣言」の方がハルカに私は重要だとみているのだ。そうした日々の営みと、その歴史の中ではじめて「儀式」がそれらしくなるのだ。

こうした「儀式」の「儀式」化、つまり「空洞化」は広島だけではない。「靖国」でもそうなのだ。つまり一体なんのために「靖国」に参るのかがまったく「日本」と「日本人」には理解されていない。私のみるところ、ほとんどすべての「日本人」は、それは小泉首相も含めて、そこに行くことのできない、資格をもたない人ばかりなのだ。「恥」を知る「日本人」ならば断じて行ってはイケナイのだ。それは「合祀」だからということではない。急いで言っておくならば、「靖国」の「A級戦犯」の合祀は存続させるべきであり、「靖国神社」も残しておく必要がある。私は<図式Ⅰ>、<図式Ⅱ>のモデルの「世界」とその中で作り出されてきた「民主主義」、「人権」、「平和」といったものを批判的に検討してきたし、またその「世界」や「民主主義」、「人権」、「平和」とは異なる別のものを創造していく必要性を訴え続けてきたから、その意味でも、「靖国」とA級戦犯は、忘れられてはならない。「覇権システム」とその「秩序」の「産物」なのだ。今なにやら日本の「空気」がアヤシイのだ。急に、「分祀」の声が強くなったかと思うと、「靖国」の解体を視野にいれた「国営化」をめざす流れがでてきたのだ。理由はすぐわかる。これについてはまた後でもふれるが、私が読者に伝えたいのは、以下の点だ。私たち「日本人」は、あの「戦争」で「平和」や「人道」に対する「罪」で裁かれたわけだが、その「平和」とか「人道」といったものは、まさに「覇権システム」とその「秩序」をもとにして織り成された「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」が作り出してきた「構造」（「仕組

み)の形成と発展のなかで「創造」された「平和」であり、「人道」であることを銘記すべきなのだ。つまり「創造」といった点では「靖国」と同じものだ。その「平和」とは、「人道」とは決して $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」と矛盾しないものなのだ。ここをハッキリと頭にタタキコメ、と「エラソー」だが私は読者に伝えておきたい。この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれる「世界」が「大航海時代」から500年近くかけてつくり出されていく中で、その「世界」を守るために創造された「平和」であり「人道」であり、「民主主義」だったのだ。 $[Aの民 \xrightarrow{X} Cの民]$ であっても、 $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経] \xrightarrow{X} Cの民$ であっても、 $[Cの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Aの経] \rightarrow Aの民$ であっても、そうした図式の該当する「世界」は「平和」であり、また「人道」にもなんらソムカナイものとされてきたのだ。こんなアホなことはないのだ。その「アホ」な「世界」をはっきりと見抜くためにも、「A級戦犯」の「合祀」が必要であり、そうした「靖国」の存在が大切なのだ。

(7)

何度もいうが、残念ながら、今の「日本」と「日本人」には「靖国」を語る資格もないし、守る資格というか頭もない。悲し過ぎるのだが、それが現実だ。ここで私が言いたかったことは、「靖国」も「儀式」のための「空虚」なタダの神社へとナリハテタということだ。なぜか。それは「東京」というところが、一番ふさわしくないところなのだ。いろいろな意味でそうだが、何よりも、私のあの図式で描く「世界」($[A \rightarrow B \rightarrow C]$ と $[B \rightarrow C \rightarrow A]$)の形成と発展に、日本において一番に「精を出す」人と組織が存在しているところであり、「靖国」の「英霊」なるものは、そうした図式で描く「世界」がつくり出す「力」と「力」の衝突とその「圧力」と「軋轢」^{アツレキ}によって人為的に生み落された「犠牲者」だからなのだ。この「犠牲者」なるものはタダの「犠牲者」ではない。彼らによって侵略され殺された「被害者」もタダの「被害者」(「犠牲者」)ではない。すべてこの図式の描く「世界」がつくり出した「加害者」(犠牲者)であり、「被害者」(犠牲者)なのだ。それゆえ大切なのは、加害者がまた加害者とならないように、あるいは被害者にならな

いように、そして被害者がまた被害者にならないように、あるいは加害者にならないように、ともにそうした「犠牲者」とならないようにすることなのだ。つまりすることなのだ。それではどのようにそれをするのかである。これについても何度も語ってきたわけだが、先の「世界」から一歩でも「外」へと抜け出ていく営みを続けていくしかない。東京でそれではどうすべきか。「広島」風との関連でいうと、「東京」風であり、それは広島のお好み焼に対比される「もんじゃ焼」である。この原料について、先の広島と同様のことが考えられよう。とにかく、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ や $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式に示される「世界」とは異なる、別の世界を創造していく営みを61年間、この東京においてもまったく背を向けてきたということなのだ。むしろ東京は、1970年代まで、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」をひたすら歩んできた「日本」の象徴であり、その意味で、靖国の「英霊」といわれる人々をもっとも裏切り続けてきた人たち（東京人）であり、その場所（首都）であったことを鑑みれば、なんともいいようがないものだ。もちろん、これは東京人に対する悪口でもなんでもない。悪口にはならない。「自覚」していないのだから。このことは、先に述べた「平和憲法」と「第9条」を、日本の戦後の経済発展に結びつけて、「人権」が保障されなかった「大日本帝国憲法」の下ではみられなかった高度経済成長が「日本国憲法」の下でみられたのはよかったし、人権尊重（保障）と、つまり「民主主義」と経済発展とは相互に関連があると説く論者にも該当する。彼らも「自覚」がなかったのだ。 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」での経済発展であり、「民主主義」であり、「憲法」なのだ。

ここでもう少し私のモデル〈図式Ⅰ〉と〈図式Ⅱ〉を使って日本の戦後の「高度経済成長」にみられる「経済発展」について語っておきたい。1950年代、60年代の日本の「経済発展」は、〈図式Ⅱ〉の(ウ)のⅠ期からⅡ期へと至る中で生じた「経済発展」であり、そうした日本の「経済発展」を支えた米国の「経済発展」は、(エ)のⅠ'期からⅡ'期へと至る流れのなかでのそれであったということである。この(ウ)のⅠ期からⅡ期へと至る流れの日本の「経

「経済発展」と(エ)のⅠ'期からⅡ'期へと至る流れの米国の「経済発展」は相互に補完した「一体的」関係にあったのだ。この点をもう少し掘り下げたいのだが、その前に、これも上述したのだが、もう少し補足してみると、今日の中国の「経済発展」は、とくに1970年代末から今日に至るそれは、(エ)のⅠ期からⅡ期へと至る流れの中でみられるものであり、それを、(エ)のⅠ'期からⅡ'期へと、そしてⅢ'期へと向かうところにいる日本やEU、さらにもっと以前にその流れをたどっていた米国の「経済発展」が、これまた相互に補完する「一体的」関係において支えているのだ。そうした「仕組み」の存在と「民主主義」あるいは「民主主義の発展」の関係は切り離すことができないのだ。したがって、戦後の日本が「平和憲法」をもち、「第9条」をもって「人権」を大切にす国家や社会になっていたにせよ、1950年代、60年代の日本は、私のモデルの(ウ)のⅠ期からⅡ期への途上であり、そこでは「経済発展」のために「権威主義的性格の政治」が求められ、そこではある種の「開発主義」の政治手法が選択されることになるのだ。それはまさに「大日本帝国憲法」下の「政治」とあまり変わらないことになるのだ。だから、「大日本帝国憲法」下でおきた「足尾鉍毒事件」とそっくりな形で「日本国憲法」下での「水俣病」となったのだ。そうした仕組みをつくり出したのは、私のモデルの<図式Ⅰ>と<図式Ⅱ>のつくり出す「世界」であったわけだが、その「世界」に、その中での「人権」侵害に対して、「日本国憲法」は、「平和憲法」は「第9条」は抵抗できない無力なものだったのだ。なぜなら、これも何度も語ってきたように、「平和憲法」「第9条」はそうした「世界」の形成、発展とその円滑な営みのために要請された、必要とされたものだったからであり、決してその逆ではなかったからだ。だから、「第9条」の下で、水俣病の「犠牲者」が生み落されたのだ。この「犠牲者」も「覇権システム」とその「秩序」をもとにしてつくり出されてきたあの「世界」([A→B→C])の「犠牲者」ということには変わりがないのであり、その意味では、靖国の「英霊」たる存在とまったく同じだ、と私はみているのだ。つまり、私たちの思考は日本人の犠牲者とか、中国人のとか、あるいは、日本人が中国

人を、米国人が日本人を殺したとか区別して語るのだが、その前にまずは、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の中の「世界」が生み出す「犠牲者」だとみるべきだと私はいいたいのだ。つまり、この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」は、まさに「一体的」な、イヤ「一つの」関係であって、そこにどこそこの国とか、人とか、といった区別は存在していないのだ。「内」と「外」とははじめから存在していないことを確認しておくことが大切なのだ。その「世界」の中に住む、生きている人が、そこでの生活の中で、「文化」を、「個別」につくり出してきたと考えてほしいのだ。つまり私たち人類は「大航海時代」からの「歴史」のなかで、本当のところもし仮に何かの「国籍」というものがあるとしたらそれは、「覇権システム」国の「覇権システム」人であるのだ。もう少しそれを言い換えて示すならば、 \langle 図式 I \rangle の描く「世界」である $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 国の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 人なのだ。使用する言語も本当は $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 国語といった単一の言語（国語）なのだ。私たちが常識としてきた「国家」（「主権国家」とか「国民国家」とか「国民」とか、「英語」「中国語」「日本語」といった言語（国語）の生みの親は、この図式の描く「世界」であり、すべてがそこから生み落されたものだということを、私は読者に伝えたい。

(8)

このようなことを踏まえてさらにもう少しだけ言いたいことがある。いわゆる「民主主義」の定義が該当するのは私の \langle 図式 I \rangle と \langle 図式 II \rangle の描く「世界」のどこか、どの「段階」なのかについて話しておきたい。よく中国を批判して、中国の政治体制は抑圧体制であり、共産党の一党独裁の政治であり、そこでは「自由」や「人権」は否定されているといわれる。それに対して、日本を含めた先進諸国は「民主主義」体制であり、「自由」や「人権」が保障される「自由民主主義」（「リベラルなデモクラシー」）の政治であるとこれまたよく言われてきたものだ。私は、このような見方というか、「比較」の問題点を私のモデル \langle 図式 I \rangle と \langle 図式 II \rangle によって、もっときちんとしたものに正す（糺す）というか、手直しして、よりもっと的確なものに

したいのだ。まず何よりも、「比較」するためにも、「関係」を描くことが大切なのだ。つまり、「今」の中国と、日本や先進国の「今」の政治体制を、「民主主義」の「段階」を「比較」するためには、今の中国と、今の日本を含む先進諸国とが、どのような「関係」の下にあるかを知らなければならないという点を、まず力説しておこう。その「関係」とは、私のモデル〈図式 I〉の(イ)の「世界」である。すなわち省略形を使って示すなら、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」だ。この「世界」で示される、みられるような「関係」がまさにこれから2、30年かけて、少なくともそれくらいは要すると思うのだが、つくられていくのだ。この(イ)で描かれる「関係」を確認するためには、当然のことながら、(ア)で描かれる $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の「世界」を知ることが大事になってくる。つまり、このような「大変な知的作業」を経験しないでは、そう簡単な「比較」もできないのだ。本当はだ。さらに、「今」の中国と、日本を含む「今」の先進諸国の「民主主義」の「的確」な「比較」をするには、〈図式 I〉の(ア)、(イ)に描かれる「世界」をモデルとして提示するといった「大変な知的作業」をもとにしてはじめて可能なのだ。そして、そこから〈図式 II〉の(ウ)、(エ)で描かれるような「世界」が、つまり「民主主義」の形成、発展の歴史のなかでの「民主主義」の「段階」がはじめて理解、確認できることになっていくのだ。これまた本当に「大変」なことだ。また「エラソー」に、自分の研究を宣伝しているわが身をみると、「男はつらいよ」ならぬ「私はイタイよ」になるが、仕方がない。自分で自分の「研究」を「イイ」と声高にでも主張し続けられない限り、誰も相手にしてくれないのだから。まさかこの21世紀の現時点において、あの毛沢東もスターリンも、さらにはヒトラーも、東条英機もいなくなったときに、「リベラルなデモクラシー」を批判し、非難し続ける研究者の「主張」など誰が相手にしてくれるか。「マスコミ」だってまともには取り上げないだろう。また中国にはこれからますます海外留学組がリーダーとなって活躍していきだろうし、私のモデルの〈図式 I〉の(イ)の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ のBの先頭に、つまり「覇権国」となって「民主主義」の形成、発展に貢献していく国へと変貌を遂げていって

いるわけだから、もう私のいっていることは、あの「靖国」の「A級戦犯」と同じようになってしまっただろう。そういえば、結局のところ「A級戦犯」も「覇権システム」とその「秩序」に、またその意味で、「民主主義」（「自由民主主義」）に歯向かい、戦ったのだから、ある意味で、私も同じことを「学問」の世界でやっているのだ。もう結果は見えている。だから、私は「スミ」の方で静かに言い続けるしかないが、それでいいではないか。それしか能のない「男」だ。

(9)

さっきの「比較」の話に戻るとしよう。「今」の中国は、〈図式Ⅰ〉の(イ)の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」が本格化していくために、換言すれば、そうした図式で描かれる「世界」が現実に中国に該当するために「努力」しているのだが、そのために、〈図式Ⅱ〉の(エ)のⅠ期からⅡ期へと「民主主義」の「段階」を上昇していくことを試みるべく、これまた「努力」しているのだ。なぜ「努力」に「」をつけているのかというと、そもそもそのような努力は私にとっては意味のないというか、もっと別の努力であってほしいと願うから、「」をつけている。何度も言ってきたから、もう読者には理解してほしいのだが、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」も、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描く「世界」もどうしようもないというか、ダメな「世界」に変わりはない。誰かの幸福のために、誰かが、その犠牲となるような「仕組み」となっているからだ、このような「仕組み」から生み出される「民主主義」なんか良いはずないだろう。イヤもう悪いのに決まっているのだ。しかし、中国だってまだ「力」がないのだ。「弱い」のだ。これから2、30年のうちに、中国は「必ず」や「覇権国」の地位を確保するだろう、と私はみている。「必ず」という表現は私はキライだが、そうなるとみている。それは私の〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の描く「世界」からそれが見えるのだ。これまたもう頭がどこか「オカシイ」と思われた読者がいたら、いると思っているが、それでいいのだ。その「覇権国」となる「中国」といえども、私の描く図式の「世界」の前では非力であり、弱いのだ。この「世界」の力に従わなければ、「覇権国」

になれないのだ。イヤ、この道は、中国が望んでもそうなれる道でもないのだ。もし拒否すれば中国といえどもこの「世界」の「圧力」によって押し潰されてしまうのだ。でも仕方がない。ここでいつも私は、夏目漱石を思い出すのだ。

漱石は、「力のないものが強いものと交際しようとするれば、強いものに従わなければならない」といった趣旨のことを、「現代日本の開化」のなかで語っている。名言である。つまり、中国がこの私のモデル〈図式Ⅱ〉の(エ)のⅠ期からⅡ期へと向かっているのも、そのためなのだ。そうした中国の歩みを導いているのは、まさに〈図式Ⅰ〉の(ア)から(イ)への、「経済発展」と「民主主義の発展」によって織り成される「関係」がつくってきた「構造」（「仕組み」）の大転換なのだ。つまり、古い「民主主義」の構造が、新しい「民主主義」の構造へと転換、変容しはじめたことによるのだ。まさに、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描く「世界」が、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描く「世界」に転換していつている。まさに進行形なのだ。そのことが、〈図式Ⅱ〉の(ウ)から(エ)への「民主主義」の形成、発展の「歴史」におけるその「方向性」と「段階」の変容、転換を引き起こしているわけだ。この〈図式Ⅰ〉と〈図式Ⅱ〉の描く「世界」はまさに同じものであり、「一つ」の「世界」である。その同じ「一つ」の「世界」をその「構造」でみるのか、「民主主義」の「構造」の形成、発展の「段階」（「方向性」）でみるのか、それによって同じ一つの「世界」も見え方が違ってくる。それが〈図式Ⅰ〉となり、また〈図式Ⅱ〉として描かれたというわけだ。もう少しわかりやすく語ってみよう。たとえば、〈図式Ⅰ〉の(ア)で描かれる「世界」の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のAは、〈図式Ⅱ〉の(ウ)のⅢ期の「段階」にあるとしたとき、BはⅡ期に、そしてCはⅠ期にそれぞれあると考えれば一番わかりやすいと思われるが、そのA、B、Cの(ア)の「関係」は、(ウ)のⅢ期、Ⅱ期、Ⅰ期の「段階」に位置している「関係」として描かれるということになるのだ。それゆえ、「大航海時代」のはじめ頃には、たとえ $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれるようなAとBとCとの間に「歴然」とした「力」の差がついていたとしても、その「関係」は(ウ)の

I期の「段階」にA、B、Cが位置づけられる、位置しているような「関係」として描かれるということを銘記しておく必要があるのだ。逆にいうならば、たとえ、〈図式II〉の(ウ)のI期の中で「民主主義」の「段階」が同じように位置しているようにA、B、Cが見えたにしても、その「段階」にある、すなわちI期の「段階」にあるA、B、Cが、〈図式I〉の(ア)においては、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描かれる「世界」をつくっているとみられるのだ。すなわち、そこでは〈図式I〉の本来の「世界」である $[A \text{の経} \rightarrow A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の民}]$ とは異なって、 $[A \text{の経} \xrightarrow{\times} A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{\times} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の民}]$ で描かれるような「世界」であったり、 $[A \text{の経} \xrightarrow{(\times)} A \text{の民}] \rightarrow [B \text{の経} \xrightarrow{(\times)} B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{\times} C \text{の経}]$ で描かれるような「世界」であったりするかもしれないのだが、それでもやはり、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描かれるように、そこには既にはっきりとした「力」の違いが存在しているということは理解してほしいのだ。

またまたややこしい話になってきたが、私のモデル—この「私のモデル」とか、「私の図式」とか、くどいほど「私」にこだわっているが、これもまた読者の寛大な受け止め方をただひたすら願うばかりである。これしかないから、それだけにこだわらないといけないから、といった風に理解していただきたい—をよくみていくと、かなりいろいろなことが理解できるのだ。「エラソー」にまたいったが、「エラソー」ついでに、簡単に1950年代、60年代の日本と米国と中国の「民主主義」についての「比較」をここで試みておく。〈図式I〉の(ア)の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描く「世界」でこの日・米・中の「民主主義」の「関係」を描くとすれば、Aは米国で、Bは日本で、Cは中国ということになるだろう。そして〈図式II〉の(ウ)でその「民主主義」の「段階」を位置づけてみると、Aの米国は、II期からIII期へと入っていく「段階」であり、Bの日本は、I期からII期へと入ってる「段階」であり、Cの中国はこのI期の「段階」にあるとして位置づけられよう。このように私はみるのだが、さらにこのI期、II期、III期を各々もう少し細分化して、前期、中期、後期と区分するならば、(ちょっとオーバーにいったかなあ、細分化

といってしまったので、まゝ、先に行こうか。) Aの米国は、Ⅱ期の後期からⅢ期の前期あたりに、Bの日本は、Ⅱ期の前期から中期あたりに、Cの中国はⅠ期の中期から後期あたりに、それぞれ該当していると私はみているのだ。この私のモデルの少し「イイ」ところは、このモデルを使うと、中国の毛沢東の下での「文化大革命」がよく理解できるというか、なにかわかってくるような「変な気」がするのである。また「エラソー」にいうのだが、1950年代の「水俣病」の公害問題に対する日本政府の対応の遅れとか、三井鉱山三池炭鉱の「三池闘争」との「関係」、そして中東問題と米国の対応、中国の1949年の中華人民共和国の成立からその後の「文化大革命」へと続く歴史さらには1964年の東京オリンピックと2008年の北京オリンピックにおける「ナショナリズム」の問題というか、国威の発揚とが、私のモデルで描く「世界」と結びつけてみれば、さらによくわかってくると私は思うのだ。やはりこれも「手前味噌」なのだが、それを割り引いても、私はそう思うのだ。ここまできると、もう付ける薬はないか。それでもなゝ。

(10)

それでももう少し上述したことについて述べておきたい。これまたその前に述べておきたいことがあるのだ。また少し私に我慢してお付き合い願いたい。このなんというか、日本において8月は、また8月15日はいつも「あの戦争」が話題となってくる。しかし、最近の調査によると、「日本」がどこで戦争したかを知らない若者が増えてきているとのことだ。「あの戦争」で「日本」は米国とも戦ったのだが、その米国、アメリカ合衆国と戦ったということを知らないらしい。読者には悪いのだが、少し私も、この「米国、アメリカ合衆国と戦った」とすぐ上に書いたのだが、もしかひょっとして、米国のことをアメリカ合衆国ということを知らない若者もいるかもしれないなゝ、また読者の中にもそのような人がいないとも限らないかもとか、思ってしまった。お許しアレ。むかしそういえば、非常勤に行って、拙著をとかで板書したら、後で学生が、「拙氏とは誰か教えてください」などと、それこそ冗談みたいなことを真顔で聞いてきたので、私もそれこそどう答えたものかと悩

んでしまって、「今はわからないから、後で調べてまた次にでも」なんてボカして言ったのを覚えているので。ついちょっと。話を戻して読者に質問してみたい。それは、よくこの時期になると、「むかしの若者はお国のために」とか「国を思い、国のために死んでいった」とかいろいろと「国のため」、「お国のため」、「国家に尽して」とか聞くのだが、それらを私のモデルで描いた〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉の「世界」と結びつけてみると、どのようなことを意味していると考えるか、といった質問である。「愛国心」とか「ナショナリズム」といったものを私のモデルの「世界」と関連づけて考えてほしい。ぜひともそうしていただくことを切に望んでいる。

それに対する私の答えは、結局のところ、「国のために」とは、「国家に尽す」とは、私のモデルの〈図式Ⅰ〉の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で描く「世界」の形成、発展に寄与する、貢献する、尽くすことを意味するのだ。決して、この「ヒドイ」、「アホ」な「世界」を、御天道様も喜んで「よくやったなぁ」と声をかけてくれるように、別の「マットウ」な「世界」に変えていくような、そうした「国のため」「国家に尽す」といったことには断じてならないのだ。本当に哀れこの上ナシといったものだ。つまり、別の「マトモ」な「世界」をつくり出していくような、そのような「国のため」、「国家に尽す」ためには、それではどのようなことをしなければならなかったのか、あるいは、してはならなかったことは何かを考えなければならなかったのだ。61年間もこのことを考えてこなかったと私は言わざるをえないのだ。右翼と呼ばれる人も、左翼とよばれる人もそうなのだ。しかし、これは日本だけではない。米国においても、英国においても、オランダやフランスにおいても、やはり「国のため」とか「国家に尽す」とか、「愛国心」とか「ナショナリズム」というものは、日本と同じような結果を意味しているわけだ。「あの戦争」の勝者と敗者の違いはあれ、同じなのだ。これ「ABCD」包囲網を構成したCの中国においても同様なのだ。これをいうとおそらく中国人には怒られるか、相手にされないかもしれないが、「靖国」の「英霊」も、「戦争記念館」の「英雄」も、結局のところ、私のモデルで描いた「世界」の形成、発展に

尽したという意味では、またその形成、発展に尽すことが日本における、中国における「国のため」に尽すということわけだったのだ。これについては、「拙著」の『覇権システム下の「民主主義」論』で、その第三章でとくに述べたのでみていただきたい。

(11)

さて、話をまた先の1950年代、60年代の日・米・中の「民主主義」の比較・関係に戻すことにしよう。私のモデルから考えてわかることは、日本がBからAへと上昇していくその「圧力」が、中国における「文化大革命」を引き起こすことになったということだ。つまり、そのためにAの米国によるCの中国をはじめ、アジアの諸国、諸地域への「圧力」が相当にかけられることを意味した。つまり、 $[Bの経 \xrightarrow{(\times)} Bの民] \rightarrow [Cの経 \xrightarrow{\times} Cの民]$ をよりスムーズに展開していくために、米国の $[Aの経 \rightarrow Aの民]$ の「圧力」が、必要となったわけだ。ベトナム戦争や、それ以前の朝鮮戦争もその「圧力」と関係しているのだ。またその「圧力」というか日本にとっては強力な「テコ入れ」だが、そのことが、日本をI期からII期へと「民主主義」の「段階」をより「高い」（「高度」な）「段階」へと押し上げていくことになったのだ。つまり、日本のBからAへと向かう流れと、I期からII期へと向かう流れは、 $[Cの経 \xrightarrow{\times} Cの民]$ の図式で描かれる「世界」をさらに拡大していく「圧力」を生み出していかざるをえない。そのことが、植民地から独立したアジアやアフリカの新興独立国が、現実には植民地時代とあまり実体は変わらない「ポスト・コロニアル」な状況を生み出していくわけだ。ところが、このCもいつまでもCの状態で満足しているわけでもないし、生きていくためには、CからBへ、BからAへと、「上昇」、「高度化」していかなければならない。そのためには、Cであっても、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」と同じような「世界」をCの中につくり出していく必要がある。あえて図式化するならば、 $[C \rightarrow C' \rightarrow C'']$ といった「世界」だろう。ソ連と中国の1940年代、50年代、60年代にかけての友好、対立、敵対の「歴史」は、まさにこの $[C \rightarrow C' \rightarrow C'']$ のモデルの「世界」の中でのリーダーシップ争

いであったとみていい。そのためには、中国も、「開国」期の日本と同様に「内戦」を経験せざるをえない。実はこの「内戦」は、すなわち、「国民党」と「共産党」の「内戦」は日本のそれ（戊辰戦争）と比較してもかなり長期に及ぶものであったから、大変なエネルギーの消耗であったわけだ。そしてやっと1949年に、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の描くCに「主権国家」として、「国民国家」として参加していける資格を再びもったわけだ。そこから先の $[C \rightarrow C' \rightarrow C'']$ で描く「世界」を中国は一方においてつくりながら、他方この $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のCにあって、Bへと、Aへとその「上昇」と「高度化」をいつもめざしていたのだ。このように私はみるわけだ。それゆえ中国は $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の「世界」のCの、一般に考えられる「ポスト・コロニアル」な植民地状態と変わらない政治的にも経済的にもBやAに従属している、それらの影響力の下に置かれているCの他の構成国と異なっているし、違うのだ。ちゃんとI期からII期へと、私のモデルの〈図式II〉の(ウ)にある「段階」を「高度化」していくために、I期の前期、中期を必死になって、まさに1911年の辛亥革命からの「歴史」をもう一度、繰り返しながら、駆け足でその「段階」を超えて、1950年代を歩んだとみていい。まさに「権威主義的性格の政治」によって「経済発展」を実現しようと「努力」していたのだ。この中国の「努力」が、アメリカを刺激して、日米関係の今日に至る「太い」パイプの形成に寄与していくのだ。またその日米関係の形成とそれともなう「圧力」か、中国へと転化され、それが西側の「圧力」から、中国の「主権国家」、「国民国家」を防衛する中国国内の「力」を高めることにつながっていくわけだ。つまり「文化大革命」だ。その革命によって、中国は、このI期からII期へと「民主主義」を「高度化」していくだけの「力」とそれに耐えられる受け皿である「主権国家」「国民国家」の建設をますます深化させていかなければならなくなったし、その歩みに際して、文化大革命は大きく貢献したとみてよいだろう。

毛沢東はなんとか中国の国家建設に「成功」し、1970年代末にはじまる「社会主義市場経済」の時代の幕開にまで導いたのだ。つまり、日本と米国

による日米関係の良好な発展の下での高度経済成長とその下での「民主主義の発展」による「圧力」が、毛沢東の下での中国の国家建設を進めていく「圧力」となり、またそれが中国自身の「力」へと転化していったわけだ。そして今度は、逆にその中国の「経済発展」が、1970年代を境として、[A→B→C]で描かれる「世界」を[B→C→A]へと図式に描かれる「世界」へと転換、変容させていったわけだ。つまり、日米関係の「良好な」発展が、今度は、[B→C→A]の図式で描く「世界」の形成、発展を導くために米中関係の「良好な」発展をもたらしたとみられるのだ。少なくとも私のモデルからはそれが理解できるのだ。なんとも言い様がない「歴史」の流れというか、「皮肉」というか。もちろん「皮肉ではない」、イヤ「当然」なのだ。

(12)

去年の二月に御茶の水書房から拙著を刊行したこともあり、同じ出版社から出している本に変なライバル心を持つ自分に気がついた。「この本はもう二刷になっている」とか、本当にツマラナイことが気になってきた。もちろんつまらないことではない。どれだけの読者が自分の書いたものを手にして読んでくれるか、このために書いているのだから。さらにホンヤさんに迷惑をかけてもいけない。晃洋書房さんにも大変に面倒をかけてきたし、今もまだ売れない本が残っている。読んでもらいたい原稿はあるものの、この悪循環をなんとかするために、今回は御茶の水さんにお世話になってしまったものの、やはり事情はまったく変わらない。こんなときに野村浩也著『無意識の植民地主義 日本人の米国基地と沖縄人』を読んだ。後をみて、「あゝこの本はもう既に何回か刷っている」と感心やらなにかモヤモヤしたものを覚えてしまう。しかし、読んでいて「同じよう」な問題意識だと思い親近感を抱いてしまった。もっとも、あくまで「同じよう」なであり、「同じ」ではないし、勝手に親近感を私がかもっているだけであり、一度もお会いしたこともないし、話もしたことがないので。ただ一番私が気にいったというか、ノートに書きとめたいと思ったところをまずは、引用しておく。手帳には勿論こんな前置きなどなくただ書きとめて、感想を書いているだけだ。＜日本人が

沖縄人に米軍基地を強制しつづけて六十年。日本人は沖縄人への基地の強制を、選挙という民主主義の手続きを通して実現してきた。沖縄人への基地の押しつけは、日本人の民主主義によって達成され、その民主主義は日本国憲法という最高法規によって正当化されているのだ。つまり、日本人の民主主義は、最初から今日まで、多数者の独裁に墮落しつづけてきたのである。沖縄人は日本国民人口の約1パーセントでしかなく、国会議員も最高で十人しか出したことのない圧倒的な少数派である。> このくだりにある、「沖縄とその米軍基地」、「日本の民主主義」、「選挙という民主主義の手続き」といったことがらを、私のあの「世界」、そう、もう何度も何度もコレデモカ、コレデモカと自己宣伝してきた、あの図式で描く「世界」をもとにして、その「世界」の中に置き直してみたいのである。もっとキショクの悪い表現を使うと、私の「世界」の中に、野村さんの「世界」を包み込んで、野村さんの言いたいことを考えてみたいのである。「気色が悪い」というよりは、これまた「エラソー」な物言いかと、また反省してしまった。

それでははじめるとしよう。私の<図式I>と<図式II>で描く「世界」で「沖縄米軍基地」と「日本の民主主義」をみるとき、1970年代をサカイとして、その「意味」が、その「意義」が異なることが理解される。また同時に、「選挙という民主主義の手続き」は同じでも、さらに言い忘れていたが、野村さんの引用したくだりにあった「日本国憲法という最高法規」も同様なのだが、たとえ表面上、形式上において「同一」のものでも、やはりその実質というか、中身はかなり異なるものになるということがわかるのだ。やはりこの話し方は、私の「世界」の方が、野村さんのそれよりも、「イイではないか」とジマンしたくてしようがないと。そうなのだ。まゝそれは素直に認めておく。もちろん私の手前ミスだ。ところで、1970年代までの[A→B→C]の図式で描く「世界」の中で、BそしてAへと「上昇」していく戦後の「日本」と「日本人」は、沖縄米軍基地と、それを「介在」させる形で、この[A→B→C]の図式で示される「世界」の形成、発展とその維持、安定に中心的な役割を担っていた米国と、まさに米国はAの中の頂点

に位置する「覇権国」であったが、「関係」づけられていたわけだ。それゆえ、「沖縄の米軍基地」と「日本の民主主義」、そして「手続き」さらには「日本国憲法という最高法規」は、実は、 $[Aの経 \rightarrow Aの民] \rightarrow [Bの経 \overset{(\times)}{\rightarrow} Bの民] \rightarrow [Cの経 \overset{\times}{\rightarrow} Cの民]$ の図式の「世界」と「関係」することによって、米国の民とは勿論のこと、Aの民とも、Bの民とも、Cの民とも「関係」しているわけだ。つまり、 $[Aの民 \overset{(\times)}{\rightarrow} Bの民 \overset{\times}{\rightarrow} Cの民]$ の図式で描かれる「世界」とカンケイしているのだ。それだけではない。 $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経]$ とも、また $[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経] \overset{\times}{\rightarrow} Cの民$ とも、それを逆に示すと $[Cの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Aの経] \rightarrow Aの民$ で図式される「世界」とカンケイしているのだ。それゆえ、マワリクドイ表現となったが、〈図式 I〉で描く「世界」と「関係」している、そこに位置している、その中の「存在」であることを確認できるのだ。誤解のないように付言すれば、ここでは後のモデル、すなわち、1970年代以降の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」のAに位置している「日本」とその下にある「沖縄」については省略しているが、私がここでいいたいことは、この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で示される「世界」の中に、1970年代以降の「沖縄米軍基地」、「日本の民主主義」、例の「手続き」そして「日本国憲法という最高法規」は位置づけられるということなのだ。このことは、これもここで省略しているが、〈図式 II〉の「世界」つまり、1970年代までの〈I期 → II期 → III期〉の通時的モデルで描かれる「民主主義の発展」の「段階」とその方向（高度化）の中で位置づけられる「沖縄米軍基地」と「日本の民主主義」、「手続き」、「日本国憲法という最高法規」の、各々のもつ「意味」と「意義」と、1970年代以降の〈I'期 → II'期 → III'期〉のモデルの中で位置づけられるそれらの「意味」と「意義」もやはり異なると、私はいいたいのだ。そこでは「低度化」の方向へと移行している。私の「世界」はまた「エラソー」な言い方をすると、野村さんの「世界」を、よりの確に、つまり野村さんが言いたいであろうことを、まさに見事なほどに「勝手」に解釈、説明できるのだ。

こうした私の「世界」から野村さんの沖縄米軍基地の解決方法を考えると

き、私なりの感想を若干、述べておきたい。野村さんの提言は、「沖縄米軍基地」を、この日本の「本土」に移転して、そのイタミをワカチアオウというものだ。どこかしら『東京に原発を』という広瀬隆さんの本のなかの意味するところと共鳴しているように私には思える。私は、この野村さんの提言にも、広瀬さんの考え方にも賛成である。しかし、残念ながら、タトエそれが実現しても、私の「あの世界」にカワリはまったくナイのだ。私のモデルで描く $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の、そして今日では $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式の「あの世界」にはまった影響するものではない。もっとも、私も「エラソー」にイイナガラ、わからないのだ。それでは「移転」はダメなのか。おそらく野村さんも、広瀬さんも、そうした「動き」を支えるナニカが大切なんだと訴えているように私には思われるのだ。なぜなら、それが無い状態では「移転」もヘッタクレもないからだ。私からすれば、その「ナニカ」が生まれることにより、「あの世界」から一人でも多くの人々が、さしあたっては私の周囲の人々が、「日本人」が、一步でも「外」へと離れていくような、そんな「ナニカ」であることを期待するのだが、ひょっとして、それを野村さんや広瀬さんも考えているのではとみているのである。その「ナニカ」と結びついた「移転」のススメだと思っている。

(13)

今日は8月16日、2006年の、である。いつも8月15日や8月16日には、日本の新聞をすべて手元に置いて、「終戦記念日」とそれにまつわる記事をチェックするのだが、今年はそれができない。母は入院中で、父も5日ほど前に救急車で市民病院へと運んだところだ。心筋梗塞でもうアブナイところであったから。この父はいつもこの時期になると食欲がなくなり、「戦友」のことを思い出すので寝れないと言っていたから、介護の心労に加えいろいろと悪いことが重なったわけだ。この父も「戦犯」である。もちろん、A級とかB級、C級といったものではなく、いわゆるフツウの軍人、少尉としての戦争犯罪者である。私からすれば、一般の「日本人」も「センパン」なのだが、どうもそのようには一般の日本国民は考えてこなかったらしい。さら

には、「東京裁判」で裁いた側の諸国民も、同罪であったと私はみるのだ。その理由は、戦争を阻止できなかったという意味で、センパンなのだ。またその見方の前提には、私たちすべてのものは、各人が望もうが、望むまいがにかかわりなく、「あの世界」のジュウニンであり、担い手であるからだ。そのこと自体が「犯罪」の構成要件を日々の暮らしにおいて作り出しているわけだから、いつも用心して、犯罪を、つまり戦争を、引き起さないように気をつけておかねばならないわけだから、そうなるとわかってその危険を放置した、防止できなかったとすれば、やはりその「罪」はすべてに該当するわけだ。とくに [A→B→C] の図式で描かれる[A]の国と、その国民の「罪」はことのほか重いはずだ。ところが、[A]は戦勝国となって裁く側にいたことから、その「罪」を「自覚」できないままで今日まで来たということなのだ。[A]の知識人とか、学者とか、マスコミ関係者のほとんどは、「あの世界」の存在を確認することもできないのだ。また「エラソー」なことを言ってしまったが。しかし、事実だから、仕方がない。

ところで、8月16日付の『毎日』の記事を参照引用しながら、私が疑問に思うところを述べてみたい。「21面」に、ココにだよ、〈戦没者追悼式天皇陛下おことば（全文）〉、〈小泉首相式辞（全文）〉が掲載されていた。「1面」ではなくなぜここかと思いながら、1面には、大見出しで〈首相終戦の日靖国参拝〉とあり、それに関する話で占められていた。「21面」にある「おことば」と「式辞」を読みながら素朴な疑問が生じた。前者のくだりに次のような指摘がある。〈……終戦以来既に61年、国民のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられました。……／ここに歴史を顧み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い、全国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。〉これに対して、後者のくだりの一部は次のようになっている。〈……先の大戦では、多くの方々が、戦場に散り、戦禍に倒れ、あるいは戦後、遠い異境の地に亡くなりました。また、我が国は、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛

を与えました。国民を代表して、深い反省とともに、犠牲となった方々に謹んで哀悼の意を表します。終戦から61年の歳月が過ぎ去りましたが、今日の平和と繁栄は、戦争によって心ならずも命を落とした方々の尊い犠牲と、戦後の国民のたゆまぬ努力の上に築かれています。・・・／我達は、過去を謙虚に振り返り、悲惨な戦争の教訓を風化させることなく次の世代に継承する責任があります。／本日、ここに、我が国は、戦争の反省を踏まえ、不戦の誓いを堅持し、平和国家日本の建設を進め、国際社会の一員として、世界の恒久平和の確立に積極的に貢献していくことを誓います。平和を大切にす国家として、世界から信頼されるよう、全力を尽くしてまいります。・・・> (なお、／は記事の段落を示している)

また例によって私の<図式Ⅰ>、<図式Ⅱ>で描く「あの世界」から、先のくだりのところを再検討してみたい。その際、「あの戦争」で命を落とした「人々」と、戦後日本のまさに「平和と繁栄」の中で命を落とした、「公害病」の患者（「水俣病」に代表される）、「薬害エイズ」患者、「過労死」を余儀なくされた企業戦士といった「人々」との関連性を求めていく観点に立って論及していきたい。まずは、ここに引用した「戦陣に散り」の「戦陣」とか、「戦場に散り」の「戦場」とは、私のモデルの図式で描かれる「世界」のどこに位置しているのだろうか。この答えは、そのものズバリまさに「あの世界」である。それでは、「終戦から61年の」、また「終戦以来既に61年」が経過した「今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられた」ところは、私のあのモデルのなかのどこなのだろう。これもまたそのものズバリ「あの世界」の中においてである。同じなのだ。付言スレバ、この天皇の「おことば」と首相の「式辞」も同じ内容であり、同一官庁か役人が作成したものだろう。イヤ、先生ともあろうモノが、憶測で語ってはイケマセンとの声が聞こえてくる。話を戻そう。つまり、「戦争」も「平和」も同じ「あの世界」を「舞台」としているのだから、これは本当に始末がワルイ。観客をオチョクツテイル。ナメテイルといっても過言ではない。しかし、観客は61年も同じ「ガクゲイカイ」を見ても何も言わない。何も思わなくなっているのか、イ

ヤそうではない。観客はよく「ウラ」の事情を知っているから、わかっているのだ。本当に。本当か。それは、先生スコシ観客をカイカブリスギだとの批判の声もちらほら。しかし、「セニハラ」はカエラレナイのだ。金のタメだ。日本であれ、中国であれ、そうなのだ。私のモデルの「あの世界」で生きていくためには、生き抜くためにはどうすればよいか。みんなよく知っているのだ。そう [A→B→C] の、つまりたとえていうと [大企業 → 中・小企業 → 下請け企業] の図式で描かれる「世界」で生き残るにはどうすればよいか、よくわかっているのだ。またここで忘れないうちに言っておく。「靖国」を日本の「文化」や「伝統」といった観点から語る識者イヤ色者がいるが、これも私の「あの世界」で生きているから、ヤハリというか、「金」のためにそういったことを平気で言い続けてきたわけだ。だから、[A→B→C] から、[B→C→A] の図式で描く「世界」に変わっていくなかで、おそらくそうした連中の多くは、「文化」や「伝統」などと言わなくなるだろう。これも悲しい話だ。そういえば、石原慎太郎もよく言うな。A級戦犯を合祀した靖国ではダメだと。やはりというか、この人も「東京オリンピック」のために、カネのために動いているのだろう。それがよくわかるから、ツマラナイのだ。

(14)

ところで、先述した引用の「くだり」にある「平和国家」の「平和」や、「世界の恒久平和」の「平和」とは、私のモデルの「あの世界」を守り抜くことによって手にできるのだから、本来ならそんな「平和」は、手にできないものだし、こちらから拒否すべきなのだが、「あの世界」の中でメシを食っているから、食わせてもらっているから、どうしようもないのだ。したがって、「あの世界」が私に押し付けてくる「平和」を拒否し、それに代わる「ヘイワ」を手にするためには、「あの世界」の「経済発展」と「民主主義の発展」とその「関係」を別のモノに置換していかなければならないのだ。確かに大変だが、それを創造していくことは不可能ではないのだ。2006年8月6日の広島市長の「平和宣言」での「岩をも通す固い意志」があれば、イヤ別

に岩など通さなくてもよいのだ、ナンジャクなイシでもいいのだ。できるのだ。61年もあれば少しはその準備ができていたし、できたはずなのだ。ところが、「広島」や「長崎」そして「靖国」は、みな念仏を唱えるだけで「実践」をしないままに今日に至っただけなのだ。そう私自身とまったく変わらないのだ。しかし、私は死ぬまでに、「広島」、「長崎」、「靖国」の「儀式」とは異なる「実践」を読者の方々にお見せしよう、お見せすることができると、心底オモッテイルのだ。乞う御期待！ それにしても、戦後の「水俣病」や「薬害エイズ」あるいはカロウシの「犠牲者」は、「今日の平和と繁栄」の中で、それと引き換えに「命を落とした」のではないのか。そうだとすれば、「戦争によって心ならずも命を落とした方々の尊い犠牲」となんら変わるものではないではないのか。なぜ同じように、戦前も戦後もこうした「犠牲者」がでてくるのだろうか。「近代化」の「歴史」をこうした観点からもう一度、見直すべきだと私はいいたいのだ。とくに、戦後の「第9条」の下での「人権」を大切にした「平和憲法」の下で戦後の高度経済成長は、はじめて可能となったのであり、大日本帝国憲法の下ではそれは無理だったのだと、これまでシタリガオで主張してきた、ネボケタ「左翼」とその御用学者たちにはモウセイしてほしいのだ。そこでの「平和」と「水俣病」「薬害エイズ」、「カロウシ」、そして今日の「格差社会」の「犠牲者」とはどのように結びついていったのかを、もっとマジメに学問的に研究していただきたいのだ。

しかし、小泉さんもよく言うよな。『私達は、過去を謙虚に振り返り、悲惨な戦争の教訓を風化させることなく次の世代に継承する責任があります。』なんて。私の語る「あの世界」を次の世代に継承する責任があるところで言っていて、しかもその「世界」は、1970年代以降は、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描かれる「世界」の「A」に位置する「日本」と、そこでの $[経 \xrightarrow{x} 民]$ の「世界」での「生活」であるのだ。一部の少数の富裕層と大多数の貧困層に「二極分解」していく「日本」の現実を、若い世代に継承する責任をもっていると小泉さんは語っているわけだから、本当にナメタ物言いなのだ。バカ

にしている、されているのだ。若い世代よ、イヤ私も含めた世代も、もっと、イカレヨ。こんな社会を継承することしかできないのなら、私はやはりハジを知るべしなのだ。残念というだけではやはりダメなのだ。それはもとより、小泉さんだけの責任ではない。私たち「日本」と「日本人」の「自覚」のなさの責任なのだ。日本には古来から、もっとも本当にムカシからかどうかはワカラナイのだが、「恥を知れ」といった言葉があったはずだ。これはやはり相当にヤバイと言えるほどのものではないだろうか。また「エラソー」に私は言ってしまったが、やはりそう思い考えるのだ。

(15)

今日はなんの日か。61年目の「終戦記念日」である。朝のニュースで小泉さんが、失礼、小泉総理大臣が、「内閣総理大臣 小泉純一郎」としてあの靖国神社に参拝したと報道していた。当然ながら中国、韓国は、小泉さんの参拝を厳しく批判した。その理由は、中国、韓国を侵略した「日本」の最高責任者ら、「いわゆるA級戦犯」を合祀した靖国神社に一国の総理大臣が参拝するということが、未だにかつての「戦争責任」を認め、反省していないばかりか、中国や韓国をはじめ「日本」により侵略されたアジア諸国民の気持を傷つけ、逆撫ですることだということである。それに対して、小泉さんは、記者会見をひらいて、今回の参拝は、A級戦犯だけでなく、他のすべての戦没者に対して哀悼の誠を、意を表しただけであり、それでもって日本が軍国主義を復活させようとしているとかの批判はあたらないと述べている。そして、今後も日本は中国、韓国と「未来志向」の観点から友好関係を築いていきたい旨のことを言及していた。先に「いわゆるA級戦犯」と指摘したのは、少し前に買った小林よしのり著『いわゆるA級戦犯』を念頭に置いていたからなのだが、小林さんにならって、ここで「ゴーマンかましていいですか」と、まゝほんのちょっとした「ジャブ」ですが、まずは挨拶がわりに話しておきたいことがある。私の「世界」の中に、小林さんの「世界」を包み込んで、少々またなにか気色が悪いと今まさに私自身も感じましたが、そう、包み込んで、小林さんの主張を再検討してみたい。

その前に、中国や韓国が次期の日本の総理が靖国神社に参拝するのを条件付きで1回だけ許してもいいといった新聞報道があったが、イヤハヤびっくりした。なにか「取引き」マガイのことを、白日堂堂とされて、私の気持ちというか心情というか、同じことだが、何か少し傷つけられたような、サカナデされたようで、悲しいというかシラケてしまった。「日本人」の私がいいうのもなんだが、本当に「日本人」がそれこそギャフンとして、下を向いたまま、茫然自失の状態で立ち上がれない「批判」をしようと思えばやはり次のようにいうべきである。＜小泉さん、あなたは靖国神社に参拝にいて、戦没者に哀悼の意を表したいと語るけれど、小泉さん、そして「日本人」は、そもそもその「資格」をもっているかをよく胸に手をあてて問うてみた方がいい。靖国神社のいわゆる「英霊」たる存在となった「犠牲者」は、あの村田先生が自身のモデルで語っている「あの世界」の下で生み出された「犠牲者」である。「あの世界」の「犠牲者」であることはもちろんのことだが、その戦争も「あの世界」が生み出した、つくり出したものなのだ。したがって、小泉さんたち「日本人」は、「あの世界」を二度とつくり出さないように取組まねばならなかったのだ。[A→B→C]の、すなわち[Aの経→Aの民]→[Bの経^(x)→Bの民]→[Cの経^x→Cの民]の図式で描かれる「世界」を、その世界の中で織り成される「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」をつくり出さないよう、そうした「関係」の形成、発展が導かれないよう、「日本人」の知恵(チエ)を絞らねばならなかったのだ。そうした努力を「日本人」は戦後まったくといってよいほどしてこなかったのだ。それどころか、「日本国憲法」と「第9条」のもとで、戦後ますます「あの世界」の形成と発展、そして維持、安定のために、米国とまさに「一心同体」のごとく寄与、貢献してきたのだ。そしてそれによって、「あの戦争」の「犠牲者」を、「あの世界」のジュンキョウシャにしてしまったのだ。なんとという愚かしい哀悼の誠であろうか。今の「日本」の中であの靖国神社に参拝できる「日本人」など誰一人いないのだ。「日本人」よ、靖国にも参拝しようとするならば、できるだけ速やかに「あの世界」から脱け出す方策を

練ってそれを「日本」の「国策」として世界に宣言することだ。そしてその国策を「実践」して、その成果を日本だけでなく中国や韓国さらには他のアジア諸国とそこに暮らす人々に報告できたアカツキに、メデタク参拝できるとわれわれは考えるのだが、小泉さん、そして「日本人」の皆さんは、どう思うか。>

こうした問いかけを、中国や韓国が小泉さんや、「日本人」には決してしてこないのは明白である。なぜなら、そのことは、自らのこれからの「豊かさ」を否定することになるからである。つまり、私がここで述べたそうした「日本」と「日本人」に対する靖国参拝をめぐる中国や韓国の「批判」は、それ自体、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の、そして1970年代以降においては $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「あの世界」の否定につながってしまうのだ。「ゴーマンかましていいですか。」その否定を、そう、否定を、中国や韓国ができれば、それは本当にタイシタモノダなのだが、それはできもしない無理な注文だ。だから、どこかやはりもどかしいものを、中国や韓国の批判は抱え続けていくわけだ。それは「日本」も同様だ。決して小泉さんは言わない。そうだ、村田先生のいうように、「あの世界」に代わる、別の異なる「世界」をめざして、「日本」と「日本人」はススムことが大切だと。もちろんケイザイ界も、経団連、経済同友会も、当然だがそんなことは「曖にも出さない」のだ。その日本の財界が、「あの世界」の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で示されるBの先頭を走るであろう、覇権国となるであろう中国を支えるわけだから、「オイ、中国よ、お前も結局はオナジアナノムジナだ。」と言わざるをえない。私は言いたい。このクサッタ、朽ち果ててしまった感のある「日本」と「日本人」に対してまともな批判をしてくれる国はないものかと。と同時に、そんなことは自分たちでしなければならない。「日本」と「日本人」のオロカシサを批判、非難するのは私たち「日本人」であり、「日本」の責任なのだから。それが「愛国心」の源であるはずだから。しかし、これがまた難しい。オソロシク困難なことなのだ。ナニシロ、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 、あるいは $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描かれる「関係」の中で、国とか、国家とか、愛国心というものは

形成され、発展してきたからだ。オカシナコトを言うようだが、「日本」は、「日本人」だけによってつくられないのだ。それは、中国も韓国も同じである、つまり何度もいうように、何度もいうように、私のモデルで描くあの「世界」の中で、それと一緒につくられるのだ。もっといえば、それゆえ、たとえ、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式の $[B]$ の中に「日本」があるとしても、その $[B]$ の残りの諸国との「関係」、さらには $[A]$ 、 $[C]$ との「関係」を抜きにしては、「日本」を語ることはできないのだ。これは「日本人」についても該当することだ。それゆえ、「国策」と先に言及したが、その「国策」も「あの世界」の「関係」抜きにしてはそもそもつくり出せないものである。それくらいにイリクンダ「世界」といえよう。

(16)

こうした私の話をもとに、それではそろそろ小林さんの「世界」について考察してみよう。小林さんは、『いわゆるA級戦犯』のなかで、「自衛戦争」とか、東条英機と天皇について言及している。ここで、私の「世界」からそれらをもう少し検討してみたい。「あの世界」からみて「自衛戦争」とは一体いかなることを意味しているのだろうか。「日本」の「自衛戦争」は、当然ながら、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で語る「世界」の中でおきたのだが、それでは、日本は、何（誰）から、何を、「自衛」しようとしていたのだろうか。「あの世界」の $[B]$ の中に位置していた「日本」は、 $[A]$ から、その $[A]$ の $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経}] \xrightarrow{(\times)} B$ の「民主主義の発展」の図式で描かれる「世界」から、 $[B]$ に位置した「日本」の $[経 \xrightarrow{(\times)} 民]$ の図式で示される「世界」が順調に形成、発展していくことを「防衛」しようとしたわけだ。その「防衛」戦争を「自衛戦争」と呼んでいるのだ。また同時に、 $[B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{\times} C$ の「民主主義の発展」の図式で描かれる「世界」が誰にもジャマされないように、「防衛」する必要があったのだが、これも実は「自衛」戦争の重要な部分というか側面であったわけだ。ここにオモシロイことがわかる。「日本」は、自分たちよりも「力」のある「A」からも、また自分たちよりも「力」のない「C」からも「日本」の「利益」を、すなわち $[A \rightarrow B$

→C]の図式で描く「世界」の中において「日本」の[経^(X)民]の図式で示される「空間」を「自衛」しなければならなかったのである。こうしてみると、結局のところ、こうした日本の「自衛戦争」は、そうした「戦争」を、「あの戦争」を導くことになった主たる原因を構成した「あの世界」を皮肉なことに、「自衛」する、「防衛」するものであったということである。つまり、どこかの国から、連合国からというよりは、また、自国民の「尊い命」を守るということよりは、東条英機が一心に努めた天皇を守るというよりは、まずは何よりも「あの世界」とその「世界」の形成と発展のもととなった「経済発展」と「民主主義の発展」によって織り成された「関係」を、「防衛」するための、すなわちそのこと自体がまさに「自衛」を意味した戦争であったということだ。

それでは以下、小林さんの本についてもう少し言及してみよう。小林さんの本を読んで私が思ったことは、「ゴーマンかまして」言うならば、「それで小林さんあなたは何がイイタイのか」ということなのだ。結局のところ、私は「その先」をもっと聞いてみたいのだろう。つまり、小林さんは、私からすれば、私の「あの世界」とまったく向き合っていないのだ。それなのに「A級戦犯」だとか、「靖国神社」とか、「合祀」とか、「東京裁判」だとか、「愛国心」だとかを語っているわけだから不思議なのだ。私からすれば、小林さんも広島市長の秋葉さんと同様に、本当はまったく何も語っていないと、「戦争」と「平和」について語っていないとみてしまうのだ。言葉だけが、何か一人歩きしているのだ。しかしそれにもかかわらず、小林さんの本は、私なんかと比べられないほどよく読まれているし、秋葉さんも支持する人々が多いのだから、やはり不思議なのだ。たとえば、「東京裁判」は「勝者の裁き」でオカシイというとき、私もそれはやはりオカシイと思う一人ではあるのだが、そのオカシイことをしたアメリカ合衆国にまるでイソギンチャクのようにクツイテ離れない「日本」と「日本人」の戦後の歩みの方がやはりもっとオカシイと私は思うのだ。そのオカシイ、ミットモナイ生き方、生

活をしてきた「私」なんぞどうして「靖国」へなど行けようかと私なんぞは、マズ思ってしまうのだが、その「カイロ」がどうも見事に切れていて、そうした自己批判をしないで、アメリカ批判や、「東京裁判」を批判するから、私にはヤハリわからないのだ。アメリカ合衆国や「東京裁判」の批判ではナイハズだ。私の描く「あの世界」を批判することがまず先ではないのか、それがヤハリないことには、まったく何を言っているのかわからないわけなのだ。「あの世界」と「A級戦犯」といわれた人たちはどのような「格闘」をしてきたのか、そして戦後の「日本人」はその後そのカクトウをどうしたのかと、問うべきではないのか。そこを問わないで、アイマイにして、「戦争」や「平和」や「特攻隊」を語るものだから、私には、正直ナニモノも語っていない、論じていないと思えるのだ。また「エラソー」にかましてしまった。本当にワカリキッタ「世界」なのだ。「あの世界」は。自分のしたくない、危ないことを、誰かにさせるのだ、そのような仕組みの下で、他人（ヒト）様を犠牲にして自分だけが都合よく生きヌケル方法（スベ）を私たちは見つけてきたわけだ。そのこと自体を「裁く」必要があるハズなのだ。その裁きを経験することなく「東京裁判」云々は言えないし、言っても説得力がないのだ。

(17)

今日の『毎日』（2006年8月17日付）の「1面」にスーダンのダルフル地方の「ダルフル紛争」がとりあげられていた。紙面中央に写真が大きく掲載され、＜住んでいた村がアラブ系民兵に襲われ、多くの村人が殺された」と語る母。やせ細った我が子を抱く彼女の瞳は何を見てきたのだろうか＝スーダン・南ダルフル州のオタシュキャンプで先月30日、貝塚太一写す＞とあった。その写真の下に、小見出しで「もどらぬ平和」「あふれる不安」とあったが、私が非常に気になったのは、この「もどらぬ平和」という文句であった。そもそもここで言われている、考えられている「平和」とは一体なんなのだろうか。それは「戦争」がない、「紛争」がない状態を指してのことだと推察されるのだ。たとえば、「和平協定なんて紙切れ。以前より危険

は増している」のくだりを説明して、「今年5月、スーダン政府と反政府勢力の一派が和平合意に達したが、治安が回復する兆しは見え、……」とあるように、やはりなんらかの戦闘行為がみられない状態を、「平和」といっているのだろう。だから「平和」がもどるとは、「戦争」とか、「紛争」のような戦闘が目に見えない状態を指しているのだ、そう私は理解したのだ。それでは、私の「あの世界」のなかで、この「もどらぬ平和」を、あるいは「もどってきた平和」なるものを考えてみたいのだ。その前に『広辞苑』で念のために「平和」の意味（定義）を確認しておく。「平和」①やすらかにやわらぐこと。おだやかで変りのないこと。②戦争がなくて世が安穩であること。本当にヘイワなことだ。私のモデルの「あの世界」を示す図式 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ や $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で語られる「世界」は、いつも「力」と「力」のぶつかり合いのなかで形成され、発展していく世界だが、またその世界の中ではいつも殺人事件や、公害患者やカロウシや格差社会の問題が生み出されているわけだが、それにもかかわらず、この『広辞苑』の定義する「平和」が「あの世界」の中でも手に入れることができるのだ。ともかく「和平」の「合意」が実現すれば、戦闘行為が停止すれば「平和」がもどることを、「平和」になるとのことであれば、私の「あの世界」も、いつも「目に見える」「戦争」や「紛争」にはならないから、「平和」がそこで実現した、もどったと言えるわけだ。しかし、私はやはりこれはオカシイとみているのだ。「目に見える」ように、逆にいえば、「目につかない」ようにいつも「あの世界」のマスコミは、その中での「平和」の演出をいつも操作できるからである。だから、「広島」、「長崎」、「戦没者記念式典」、「靖国」が「儀式」（イヤ「儀式」の「儀式化」）となるのだ。

私が「あの世界」を提示することで読者にわかってほしいのは、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で語られる「世界」は、いつも「命」と「命」をかけた「戦闘」状態の中であって、それは「平和」の「定義」とはほど遠いところにあるということなのだ。しかし、私たちは、この「世界」の中で生きながら、その世界を守るために、守らされるために、「平和」の「式典」

を挙行しているのだ。まさに虚構以外のナニモノでもない。だから、「戦争」と「平和」が同じ構造（「仕組み」）の下で、すなわち「あの世界」において、繰り返されることになるとしても、そのヒミツに気がつかないのだ。そしてそれを、その虚構の世界をインペイするのが、まさに「民主主義」なのだ。そう私はみている。先の記事のダルフル紛争に関しても、私の「あの世界」の、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で語られる $[C]$ に位置するスーダンの「平和」について語っているのだが、読者は、あるいは記者は、そのスーダンとスーダンが位置している $[C]$ における「平和」が、 $[B]$ の「平和」とどのように「関係」しているのか、あるいは、 $[A]$ の「平和」とはどう「関係」しているかを、いつも考えることのできる視点というか、思考の枠組みをもっていなければならないのだ。つまり、それは、 $[B]$ ($[B]$ の平和) \rightarrow $[C]$ ($[C]$ の平和) \rightarrow $[A]$ ($[A]$ の平和) として「関係」していることを意味しているのだ。つまり、 $[B]$ のスーダンのダルフルにおいて「もどらぬ平和」といった状態が見えたとすれば、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の「関係」している「平和」の「世界」の「平和」とダルフルの「平和」とは一体どのような関係の下に置かれているかを問うことを意味しているはずなのだ。そのことは、私の「あの世界」の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の、つまり $[B]$ の経 \rightarrow $[B]$ の民 \rightarrow $[C]$ の経 $\xrightarrow{(\times)}$ $[C]$ の民 \rightarrow $[A]$ の経 $\xrightarrow{\times}$ $[A]$ の民 の図式で描く「経済発展」と「民主主義の発展」とによって織り成される構造と「平和」が、ダルフルの「もどらぬ平和」が、どのように「関係」しているかを問うことにつながるはずなのだ。その意味では、「もどらぬ平和」とは、ただタンに戦闘行為が終わらないという表面的な出来事ではなく、 $[B]$ の経 \rightarrow $[C]$ の経 $[B]$ の民 $\xrightarrow{(\times)}$ $[C]$ の民、 $[C]$ の経 \rightarrow $[A]$ の経 $\xrightarrow{\times}$ $[A]$ の民、 $[B]$ の経 \rightarrow $[C]$ の経 $\xrightarrow{(\times)}$ $[C]$ の民といった図式で描かれる「関係」の形成と発展とが、つまり $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で示される「あの世界」の形成、発展、そしてその維持、安定とが大きく、というより、まさにそれが、生み出しているのだ。原因なのだ。そこが重要なところだと私は考えている。それは、ダルフルの「もどらぬ平和」と $[B]$ の民 $\xrightarrow{(\times)}$ $[C]$ の民 $\xrightarrow{\times}$ $[A]$ の民 の図式で示される「民主主義の発

展」とそこでの「民主主義」の在り方というか有様の問題でもあるわけだ。

またまた長くなったが、この「1面」の写真を見て、あゝ悲惨な母子がいるとか、カワイソウニとか、私たちは日本にいて「平和」なのに、この人たちは「戦争」(紛争)の中であって大変だから、なんとかしてタスケテアゲタイ、援助シタイとか思われる読者がいるとすれば、その「読者」の人にこそ私はまずは自分の話を聞いてほしいのだ。つまり今まで述べたことを考えてほしいのだ。私を含めて、読者の一人、一人もやはりスーダンから遠いこの「日本」に住みながら、「もどらぬ平和」にかかわっているということ。つまり、援助してそこに目に見える形で「平和」がもどってきたように思われても、「あの世界」の中の「平和」である以上、いつもそれは「戦争」とセナカアワセの「平和」であるわけだ。そうした援助とは異なるエンジョを私たちは試みるべきである。そのためには、私たちのこれまで学習してきた「平和」といった考え方を、まさに「コペルニクス的大転換」といった発想の下で変えていかねばならないのだ。しかし、これがホンマに難しいのだ。というのも、この「平和」なる「見方」は、あの「市民革命」とその下での「普遍的人権」、「民主主義」、「立憲主義」などなどのあらゆる「近代」なるものの「思考」と結びついていて、それこそ、「日本」の小、中、高校の授業でほとんどのものが、ミゴトなほどに「洗脳」されてしまい、「あの世界」の従順な「世界人」(「世界シミン」)へと、まさに「強制的同質化」されてしまうのだから。「平和学」とかいう「学」も、結局のところ、「民主主義」をどのように理解するかにすべてがかかってくると私はみているが、その意味で「平和学」は、私の「あの世界」の形成と発展を担い、支えるウソの「学」にならざるをえないと、また「エラソー」に言わざるをえない。私からすれば、マジメにリョウシンの的に「平和」を語る人ほど恐ろしいのだ。というのも、それだけ、「あの世界」を守っていくことを、その人が意図しまいが、結果的にそうしているからだ。

(18)

今までスーダンのダルフル地方の紛争を取り上げてきたので、少しアフ

リカについてみることにしよう。これも『毎日』（2006年5月9日から13日と21、22日）の「記事」なのだが、ナイジェリアの「石油」をめぐる連載を読んでの感想を書いている。イヤこれから書くところだ。読者のみなさん、やっとナイジェリアがここに出てきました。ここまで本当にお待たせしました、スイマセン。私がこのなかでとくに注目したのは、「怒りの油田ナイジェリア報告②」である。ここには小見出しとして、「村は失業者の山」、「進まぬ産業多角化」がある。白戸圭一さんが報告しているが、そこで白戸さんはまずナイジェリアの歴史を語っている。ナイジェリアはパーム油生産国であり、アフリカ最大の人を養うためにも＜政府は農業を土台として雇用増につながる製造業を育成し、産業の多角化を進めるべきだった。しかし、ナイジェリアは石油に依存する道を選んだ。60～70年代の油田開発で産業構造は激変した。その結果、政府歳入（04年）の70％を原油・天然ガスの利益に頼り、貿易に至っては総輸出の94.2％を原油・天然ガスが占める。＞とある。まさにあの福沢諭吉の「製物の国」と「産物の国」の後者の有様を髣髴とさせるくんだりとなっている。もし白戸さんにこの福沢の視点が少しでもあれば、このナイジェリアの油田や産業の多角化がなぜすすまないのかを、＜文明－半開－野蛮＞の「関係」の視点から描くこともできたであろうと私はみている。そうした「関係」を前提としないから、イキオイ、こうしたイビツな産業構造をつくったのは誰なのか、誰に責任があるのかを問うならば、それはナイジェリア政府にとなってしまうのだ。すなわち、記事にもあるとおり、ナイジェリア政府が産業の多角化を進める道をセンタクする代わりに、石油に依存する産業構造をつくる道を選択したと結論づけるのだ。勿論、これはその通りなのだ。しかし、私のモデルで描く「あの世界」の存在が、それではナイジェリア政府が産業の多角化を選択することを許したかを考えれば、それは土台ムリな注文ではないかと言わざるをえないのだ。こうした例は枚挙に遑（いとま）が無い。「開国」以降の日本の歴史をみてもわかるように、「産業の多角化」を実現するためには、＜図式 I＞で描く $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の、あるいは $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の C の「存在」から脱け出せるような「力」がなけ

れば、そもそもそんなことは実現不可能なのだ。なぜなら、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の[A]や[B]は、[C]に対して[Aの経 \rightarrow Bの経 \rightarrow Cの経]で示されるような「関係」を押し付け、Cを「産物の国」として、[A]や[B]の都合のよい状態に置き続けようとするだろうし、事実、1970年代までそうしてきたのだから。また、1970年代以降は、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」が次第に形成、発展していく中で、やはり[C]は、[Bの経 \rightarrow Cの経 \rightarrow Aの経]で示されるような「関係」の下に置かれ、[B]の「製物の国」に都合のよい「産物の国」に置かれたままである。この $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式のAは、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の[C]とは異なり、「製物の国」を一応のところ「卒業」して、今では「金融サービスの国」となっていて、Cよりはなお「格段」に高い「経済発展」の段階にあるのだ。このような「関係」の中にナイジェリアの政府は置かれているのだ。またこのような「関係」と結びついたナイジェリアの抑圧政権なのだということを、とくに先進国に暮す人々は「自覚」しておく必要がある。今まさに進行形の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」の「安定」した発展のために、とくにその[B]グループの先頭を走るであろう中国のために、またその中国に多額の海外直接投資をしている[A]のために、[C]のナイジェリアの石油は今後ますます必要とされることは必至であり、そのためにナイジェリアで産業の多角化の道が選択され、製造業が発展してイクことなど、図式の $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の[B]や[A]にとってはまさにトンデモナイ話なのだ。19世紀のはじめにオスマントルコの下で「独立」を試みたムハメド・アリーのエジプトに、このナイジェリアの「明日」をみることができるといえるのだ。これについては、拙著『覇権システム下の「民主主義」論—何が「英霊」をうみだしたか』(61-74頁)を参照してイタダキタイ。

私が次に気になったのは、この後の「怒りの油田ナイジェリア報告③」である。そこの小見出しは、「噴出事故と過酷な弾圧」、「少数民族、闘い続く」とある。ごく簡単にいうと、このナイジェリアの油田の出る産油地帯には少数民族が住んでいたのに、政府は油井を掘るために彼らの土地を奪いメチャ

クチャにした挙句、彼らの抵抗を弾圧したと書いてある。白戸さんの記事を読みつつ、ここでも、この少数民族の闘っている「政府」の背後にいる「私」を「自覚」せずにはおれない。少数民族は、かつては[A→B→C]の、そして今は、[B→C→A]の図式で描かれる[A]にいた「私」のダンアツを受け続けているのだ。そのダンアツを続ける私は、Aの「民主主義の発展」の「民主主義」社会の中であって、ナイジェリアの政府の弾圧を非難、批判しているのだ。これほどタチの悪い生き方はナイと知りながら、今もダンアツし続けている私なのだ。この私の手にした「民主主義」でもって、私の父や母は「東京裁判」で裁かれたのだ。そう、「人道に対する罪」、「平和に対する罪」という罪状で。そこには「文明に対する罪」も存在していたと「民主主義」国はフソンにも思っていたわけだ。そしてアロウコトカ、今この私は、その「不遜」なる「生き方」を「自覚」しながらもこの「世界」を支えているのだ。

(19)

『毎日』(2006年8月17日付)の「社説」の横に<「視点」小泉時代考><「勝ち」「負け」拡大で国家の品格揺らぐ>(論説委員 近藤寛明)の記事を読んでの感想。正直なところ、記者ももう少しフミコンデほしい。私の「あの世界」の、<図式I>、<図式II>の、とくに後のモデルの「世界」をベンキョウしていたらもっと違ったものが書けたのに。残念だ。また「エラーソー」に言ってしまった。しかし、この私の物言いはアタッテイルことを読者に、とくにこの<視点>を読んだ方々に伝えたいので、少し書きとめておく。そこでは、小泉さんの<「格差のない社会は逆にヘンではないか。格差があっても必ずしも悪いことではない(06年3月 参院予算委で小泉純一郎首相)を取り上げて、まずはジャブをクリダシテイルのだが、これがあまりキカナイ。<首相に言われなくたって、競争あるところには格差は生じる。格差もイロイロだ。所得、資産、教育、国と地方、世代間、官と民、企業間……。貧富の格差を示す指標は、小泉時代以前と比べて拡大していないという指摘もあるが、生活者の実感としては格差はますます広がって

かし、この記事は、私が見ているように、もう一つの「世界」を、すなわち、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれる「世界」の中で、その「歩み」が実現したという点を看過しているというか、見るができないでいるのだ。もし私のような「見方」があるならば、この記事のくだりは、みんなが中流になって、格差を縮めようとして、そのために $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で示される「世界」の形成と発展に寄与した、貢献したということになるわけだ。つまり、「日本」と「日本人」がみんな一丸となって、 $[B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{x} C$ の民やあるいは $[A \text{の経} \rightarrow B \text{の経} \rightarrow C \text{の経}] \xrightarrow{x} C$ の民や、また $[A \text{の民} \rightarrow^x B \text{の民}] \xrightarrow{(x)} C$ の民や、 $[B \text{の民} \xrightarrow{x} C \text{の民}]$ の図式で描かれる「世界」をつくることに努力したということ、記事は述べているのだ。これは本当に恐ろしいことなのだ。つまり、ごくわかりやすくいうと、自分達の豊かさのために、他国や他地域の豊かさを犠牲とする仕組みを一丸となってつくってきたと語っているからだ。 $[A \text{の民} \xrightarrow{x} C \text{の民}]$ 、 $[B \text{の民} \xrightarrow{x} C \text{の民}]$ の図式で示される「世界」をつくることによって、みんな中流を、そして格差を縮める社会をめざしていたわけだ。ここにこそ、今日の私たちが直面することになる格差社会の原因があるのだ。誰かを踏み台にして上昇していく社会は、必ずその社会の中で、必ず踏み台にされる人々を、犠牲者をつくり出すということが、ここからもわかるはずだ。

この〈視点〉の記事では、〈小泉時代の特徴の一つは、自己責任論で理論武装し、市場原理主義と規制緩和に身をゆだね、結果として招来する社会の二極分化に目をつむってきたことだ。〉と書いているが、それは確かに状況の推移を述べている点ではそうなのだが、このくだりも、私のモデルの〈図式Ⅱ〉の(Ⅱ)の「世界」から見直すことがまずは大切なのだ。つまり上の図式にあるように、「文明」は、先進国は、1970年代以前には、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のAに位置していたし、日本も、BからAへと上昇していったが、1970年代以降から今日にかけて、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式のAに今や位置づけられるように歩んでいるのだ。と同時に、〈Ⅰ'期 → Ⅱ'期 → Ⅲ'期〉へと「民主主義の発展」の歩みが「低度化」しているわけだ。この「歩み」の中で、二

極分化が生じているのだ。それゆえ、もしこの二極分化とそこから導かれる格差社会に真正面から向き合おうとするのならば、私の図式で描く「世界」とまずは向き合うことが必要となるはずだ。つまり、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で示される「世界」と、換言すれば、 $[B \text{の経} \rightarrow B \text{の民}] \rightarrow [C \text{の経} \xrightarrow{(\times)} C \text{の民}] \rightarrow [A \text{の経} \xrightarrow{\times} A \text{の民}]$ で描かれる「世界」を十分に理解しなければならない。そのためには、1970年代以前の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ で示される「世界」についても、その形成と発展の「歴史」についても勉強しなければならない。付言すれば、この「世界」の形成、発展の「歴史」の中で、「あの戦争」はおきたのである。そして「東京裁判」、「A級戦犯」、「靖国」、「合祀」「分祀」等々の問題もその「世界」からすべて派生しているわけだ。そして、その「世界」が、今度は、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で描かれる「世界」へと1970年代以来、変容し始めているわけだ。そしてこのBの先頭に中国が位置しようとしているのだ。そしてこの歩みの中で、先の「戦争責任」、「歴史認識」の問題も再燃してくるわけだが、やはり「世界」の変容の中で、これらの問題の意味と意義は、変らざるをえない。それは、「競争」と「格差」のもつ意味と意義が変わっていくのと呼応している。そして何よりも、この図式 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ で語られる「世界」の中で問題となっている「格差社会」が生み出されてくるのだ。ここからもわかるように、私の〈図式I〉〈図式II〉の「世界」において、この「格差社会」の問題は、「靖国」のそれとも相互に関係しているということがわかりいただけたと思うのだ。

ただこの〈視点〉の記事を読みながら、「日本」と「日本人」の前途はやはり暗いと感じた。小泉さんの改革を批判する目が欠落している。それはまた「民主主義」なるものをキチンと理解できていないことを意味している。少なくとも、また「エラソー」にいうのだが、私の「民主主義」論を読むべしと訴えたい。これではあまりにもオソマツキワマリナイ。この記事の最後がまた悲しいほど何も語っていないのだ。紙面のムダと思うのだが、引用しておこう。〈だが、もっと大切なことがありそうだ。勉強が嫌いな子、金もうけに縁遠い人、運動の苦手な人、出世から見放された人、その他大勢の

「普通の人々」がそれぞれの価値観を認められる社会の実現である。普通の人々が日々の暮らしに誇りを持てる精神文化がこの国にも根付いてほしい。国家の品格を左右するのは一握りの勝ち組ではなく普通の人々なのだ。> よくわかるし、共感する記事だ。しかし、記者がこんなフツウのことをフツウに書いてイイモノカと思うのだ。ああまた「エラソー」に言ってしまった。この記事のはじめのところで小泉さんの話を批判して次のように述べていた。

<……当たり前のことをことさら強調する。そもそも反論・反証できないようなレトリックなのだ。> これはこの記事にもそのまま適用できよう。今の「日本」と「日本人」に大切なことは、「格差社会」の「格差」が、実は私たちの戦後の豊かさを得る仕組みにその原因があることを知り、それをもとにして、私の図式で描く $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の「世界」の $[A]$ にこれからますます置かれ続けていくことを「自覚」して、まずは「国家の品格」とか「精神文化」といった話へといくのではなく、この「世界」がこれからも否応なく続いていくことを「前提」とした「セーフティネット」づくりを考えることであろう。そして同時に、こうした「世界」から一歩でも離れることのできる方策を練ることだろう。その際、こうした「方策」に沿った「セーフティネット」は何かを提示することを忘れてはならない。こうした観点から、この<視点>の記事は書かれるべきだと思うが、それを望むことはセンナイことだろう。なぜなら、私も含めてみなこの $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 、 $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で語られる「世界」の中で生きてきたし、これからもそうなのだから。だとしたら、その「現実」をショウジキに語って然るべきなのだ。新聞社も企業であり、広告スポンサーの存在抜きには語れないことを、そしてマスコミそれ自体が $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で描く「世界」の中でまさに生き残りをかけて戦わねばならないことを踏まえて、モノを伝えるべきだろう。

〈第三部〉「民主主義」へと向かう歩み（「民主化」）を 「比較」という「意味」と「意義」

（1）

私のこれまでの研究はある時期から大きく変わっていった。それは神戸市外国語大学・外国語学部の国際関係学科で学生とともに勉学するようになったからである。とにかくはじめの頃はいつも悩んでいたし、いつもビクビクしていたものだ。ひょっとして学生から、「先生、カンケイとしてのミンシュシュギとはどのようなものですか。」といった質問が出たらコマルなあと、思うようになったからだ。そのことは、私が「法学部」（「法文学部」）という伝統的な学部で学んできたことと関係している。「法学部」の「民主主義」と、国際関係学科あるいは国際関係学部の「民主主義」とはやはり異なる内容となるのではないのか、こうした素朴な疑問というかオボロゲな考えが私の頭の中でメグリはじめたのだ。そしていつしかそれが頭の中ゼンタイを占めるようになっていたのだ。話をもう少し戻すとしよう。法学部の政治学では、とくに政治史においては、イギリスの民主主義、フランスの民主主義、ドイツの民主主義、日本の民主主義と、各々を個別に取り上げて、「民主主義」へと向かう歩みをみていくわけだ。しかし、そこには「ルール」というか「キマリ」があって、まず「民主主義」という目標地点（ゴール）が設定されていて、コレコレシカジカの条件を満たしたら、それを「民主主義」として、あるいはそれに「近い」状態として「想定」して、それを「物差し」として、各国の「民主主義」へと向かう歩みを、すなわち、「民主化」の「歴史」を「測定」しようとなっているのだ。

ここで問題となるのは、「ゴール」を「想定」といってもはじめから何もない手探りの状態から「民主主義」ナルモノを浅学、イヤ失礼、先学は教えたわけでは決してなかったという点なのだ。つまりやはりそこには模範とされたモデルが存在していたわけだ。一般には、「市民革命」なるものの「歴史」を経験したとされるイギリス、フランス、アメリカの「民主主義」

ナルモノの「歴史」がイチオウのところ「民主主義」かそれに近いとされたのだ。このくだりをもっと正確に言い直すならば、イギリス、フランス、アメリカの「市民革命」といわれる「歴史」を経験した欧米諸国のその後の歩みをもとに、その「歴史」から「民主主義」として今日私たちが「想定」している「民主主義」を構成するとされるもろもろの「条件」を取り出して、それらを再構成する「作業」を経て、「物差し」としての「民主主義」が考案された次第である。その代表的例の一つに、R・ダールの「ポリアーキー」という「概念」がある。またM・ヴェーバーや、J・シュンペーターの「民主主義」ナルモノの「定義」もそうした作業を踏まえてつくられたものだと、私はみているのだ。それゆえ問題となってくるのは、こうした「物差し」の妥当性である。なぜなら、リンカーンの「人民の、人民による、人民のための政治」に示される民主主義への人民の「参加」をもとに考えるとき、この「物差し」とされる「民主主義」の「定義」をつくる際に、英米仏の欧米諸国以外の、とりわけ非欧米諸国の人々の「定義」づくりへの「参加」がなされていないままに、この種の「民主主義」を各国、各地域の「民主化」を「測定」する「物差し」として採用することは、採用してきたことは、はたして許されるのだろうか、妥当なのかということである。私はここに相当にコダワリ続けてきたわけだが、日本はもとより、イヤもとに戻して、日本の研究者の中で誰も気がついてくれないのだ。イヤまた失礼、政治思想（哲学）を研究している千葉真さんだけがわかってくれているようだ。今でも私は忘れられない。千葉さんが、といっても一度もお会いしたこともないし、話をしたこともないのだが、岩波書店の〈思考のフロンティア〉の中の『デモクラシー』という本の中で、拙著『史的システムとしての民主主義』を取り上げ紹介していただいた。正直ウレシイというよりも驚いてしまったのだ。「エラーソー」に、どこか魯迅の「阿Q正伝」の阿Qのようになんでも自分の都合のよいように解釈してきた私だから、誰もどうせわかってくれないと半ばアキラメながら、半ばそれでも誰かに期待していたから、本当にウレシカッタのだが、後が続かない。まゝ、当然な結果だ。この私の「民主主義」論の

主張が理解されていたなら、またここでもいうが、もっとマシな記者がでてくるし、靖国や中国への、米国への対応もまた変わってくるはずなのに、クヤシーよなあ。

「民主主義」の、「物差し」とされる「民主主義」の「定義」づくりに非西洋諸国が排除されているということは、まさに「近代化」の「歴史」をそのまま反映しているのだ。つまり、私たちは、欧米の「近代化」に「成功」したとされる諸国を目標として、模範として、「近代化」の「歴史」を歩むことが当然とされたし、またヨキコトとされたから、その政治的「近代化」の「物差し」として、欧米「産」の「民主主義」が採用されるということはある程度、予想されることだし、またそうした「近代化」を進めていく人々や企業や国家は、アリトアラユル手段を使って、それを正当化、合法化できるのだからこれもまた仕方のないセンナイことなのだ。それはそうなのだが、イヤだからこそなのだが、そうした「民主主義」を「物差し」として使うことからでてくる問題点というか危険性について（日常生活を営む上での「危険」である。）ヤハリ問うておかねばならない、そう私は思うのだ。このように私が今日の社会科学が当然のこのように採用している「民主主義」の問題点に気がつくようになったのは、それを「関係」として考えるようになったからなのだ。「思想」のレベルにおいても、「歴史（現実）」のレベルにおいても「関係」の存在を探求していくうちにつれて、私はやがて「関係」としての「民主主義」ナルモノを考案したのだ。ここでそれをゴク簡単にいっておくと、〈図式Ⅰ〉、〈図式Ⅱ〉で何度も私が紹介してきた「あの世界」である。これについては、また後に取り上げよう。たとえば、私の研究のスタートは、19-20世紀転換期のイギリス自由党について、とくにその「政策」（「リベラリズム」）に関してであった。そのため、イギリスとアイルランド、イギリスとインドについては、それに関する資料はタクサン読んでいたはずなのに、以下の問いかけを私自身が自分に発するようになったのは、なんと30を過ぎてからなのだ。

その問いかけとは、なぜ「民主主義」を実践しているイギリスは、それを

アイルランドやインドにも許そうとしないのか。彼らもまた独立を、自由を、人権を手にしようと努力しているのに、その両国の願いをこの「民主主義の母国」とされるイギリスは踏みにじってなんら恥ないのだ。なぜなのだ。この問いかけに答えるのに私は数年間、苦しみ続けたものだ。だって、もしこのイギリスの「民主主義」はやはりオカシイし、それはダメだとなったら、私は何を手がかりにして、イギリスを、自由党を語ればイイのか、そう思うと、その不安から、自分を安心させ、納得させる「答」を探していたのだ。その「答」は、「民主主義」と「帝国主義」とはチガウというものであり、「民主主義」と「民主主義国」とはまた異なるというものだった。この「答」を手にして、しばらくは「精神の安定」を得たのだが、それでもどうしても次の問いかけの前では絶句せざるをえない自分に気がついたのだ。19世紀の後半からイギリスは「大衆民主主義の時代」を迎えるようになり、「大英帝国下の民主主義」といった言葉でこの時期の「民主主義」を論じることを「政治学」は当り前のこととしていた。この「大英帝国」の「植民地」のインドの「民主主義」の歩みはどのように描けるのかという問いかけがフト私の頭を駆けめぐったとき、「ああ、そうだ」、この「大英帝国」として、そこに「植民地」のインドを組み込んでいるため、はじめからインドの「民主主義」の歩みなど語れないようにしているのではないか。このことは、イギリスから、大英帝国からインドをみている、ミオロシテイル、ミサゲテイルそんな語り方なのだ。「水と油」として「帝国主義」と「民主主義」の「関係」を、はたしてインドの側から正当化するだろうか。セン教授（アマーティア・セン）ならノーベル賞のためにそう言うかもしれないが、オットー、失礼。（なおセンの「民主主義」の理解の仕方については、『日本経済新聞』1997年9月8日付け「民主主義、世界的に興隆」（20世紀とは何だったのか⑥）がわかりやすい。残念ながら民主主義の国イギリスのインドに対する植民地支配について驚くほどアッケラカランに不問に付しているのだ。）セン氏の民主主義論についてはずっと前の頁で紹介しているのでそれも参照していただきたい。やはりこのあたりはアヤシイ。そう考えるようになるや、私

の「民主主義」論は、フツウの研究者からはそれこそジョウキを逸しているように思えたであろう。何度もいわれた。〈村田君、そもそも「民主主義」と「帝国主義」の「概念」がチガウのだ〉からと。そんなことは言われなくてもわかる。そうではなく、そんな「常識」がわかるのなら、なぜ「大英帝国下」としての「帝国」の下での「民主主義」といったように、チガウハズの「概念」の下で二つのことがらが「関係」づけられるにいたっているかに気づくジョウシキもあるだろうと、逆に私は思ってしまふのだ。しかし、そこへは目が向かないで、イギリスの「帝国主義」は、日本と同じ「帝国主義」でも、「民主主義」をつくり出しているのだから、ヤハリどこか違ってイイモノなのだといった理解の仕方をしてしまふのだから、私なんぞ、ツケイルスキもない。

(2)

そもそも「概念」などというものは一体どこの誰がつくり出したのか。また何をもとにして、材料としてつくったのか。「辞書」や「事典」で示される「定義」や「意味」は誰がつくるのだろうか。それは当然ながら「人間」である。たとえば新しい「事典」をつくることになって、「民主主義」の「項目」を担当することになった「研究者」はおそらく「民主主義」についてこれまでどのような「定義」や「意味」が与えられてきたかを調べるだろう。そしてその「定義」のもとになった「ことがら」についてもおそらく調べるだろう。すると、例のイギリスの、フランスの、アメリカのとか、あるいは、古代ギリシャのポリスのといった「歴史」がそこにカンケイしていることに気づくのだ。つまり、「民主主義」なるものは、当然ながら、「創造」された「概念」であり、またそれは「人間」によってつくられた営為の産物である「歴史」をもとにして、そこから「研究者」が「民主主義」ナルモノを「想定」して世の中に示されるわけだ。つまり、「民主主義」と「民主主義国」とはチガウけれども、その「事典」の、「辞書」の「民主主義」が「定義」されるためには、そのもとになる「歴史」があって、その「歴史」をもとにはじめて「民主主義」なる用語ができるわけなのだ。だから、その

「歴史」の中の「民主主義」は、当然どこかの人間が、人間集団が、国家が、その「担い手」とならなり限り「創造」されないシロモノなのだ。それゆえ、「民主主義」と「民主主義国」とはチガウものであれ、「民主主義」ナルモノの背後にそうした「歴史」が抜きガタク存在していることはキモニメイジルべしなのである。そこからまた、「担い手」である人間や人間集団や国家は、あるいはエライ思想家もその思想家によってツムギダサレル思想も、まずはそうした人間や人間集団や、国家あるいは思想家が「存在」することによって、つまり生存し続けることによってはじめて「創造」されるのだ。この点をジュウジュウ押さえておくことが大事なのだ。

「生存」のためには、食べなければならない。胃袋を満たさなければならない。「自給自足」の世界でもない限り、その「胃袋」はまさに「関係」をとおして、満たされることになるだろう。まさに「大航海時代」以降、そうした「関係」はつくられてきたわけだが、それはいわゆる「グローバル」な世界であった。私はその「関係」を描くために、「経済発展」という用語を使い、そして先進国、中進国、後進国といった「三つの地域」にその「経済発展」をわけ、それらの「関係」を描くことのできる「モデル」を考えはじめたのだ。いずれにせよ、「事典」や「辞書」の中にある「民主主義」なるものの定義や意味のもとになった「歴史」を知ろうとして勉強していくうちに、[Aの経→Bの経→Cの経]といった「関係」の存在に気がつくようになったのだ。「思えば遠くに来たものだ」のセリフではないが、本当に遠くに来てしまったわけだ。またこの「関係」を考える際に、私にもっともインパクトを与えたのは、I・ウォーラースティンでもA・フランクでも、その他の学者でもなかった。福沢諭吉である。その著作を読むにつれ、私の「構想」は練られ、またキタエラレタわけだ。また「エラソー」なことをカマシテしまった。とくに「製物の国」と「産物の国」との「関係」は刺激的であったし、どういうわけか新鮮なものに思われた。そしてそこから「文明」－「半開」－「野蛮」の構図も、私のモデルと非常に似ていて興味を覚えたのだ。私は既に、『イギリス病の政治学』を世に問うて以来、S・M・リップセッ

トの「経済発展」と「民主主義」との「関係」についての有名なくだりに気をとられ、それをなんとか、自分なりの言葉で表現できないものかと思案していたのだが、ある時トツゼンヒラメイタのだ。それが一番はじめのモデルとなった〔経済発展→民主主義の発展〕で描かれる「関係」である。この頃は「リプセット・モデル」などと言っていたが、正確には「村田モデル」であり、その後いろいろと、カイリョウして、名実ともに私のモデルとすることにセイコウしたわけだ。「エラソー」にまた言ってしまったが。この間、2、3年は費やしたであろう。とにかくイロイロと図式をつくってみた。今でも鮮明に覚えているが、〔経→民〕の図式が、また別の〔経^x→民〕へとつながるように「→」の印をつけた瞬間であった。この二つの図式で描く「世界」をつくるのにヤハリ数ヵ月もかかっていたのだ。なかなか、それが思いつかなかったからだ。今から思い出すとナツカシイ。ここにきて、少し自分の書いているものが、何かもう「遺稿集」になるかのような思いがしてきた。正直、スコブル体調は悪い。今はとにかく必死である。目もヤハリ、緑内障がナニカもっと進行しているようなのだ。目の前が暗くなっていくのがわかりだした。またアセルのだ。とにかくなんとか書きトメておこうとの、伝えたいものをどうすればツタエラレルか、それだけ考えて書いている。

そうこうしている間に、私の「民主主義」論のようなものが次第に見えてきたわけだ。『民主化の先進国がたどる経済衰退』を刊行した頃にはハッキリとコレナンダという思いを手にてできていた。しかし同時にそうした思いが強まるとともに、逆に「落ち込み」もヒドイものになっていった。とにかくわかってもらえない。孤独をますます感じてきた。それを少なくしてくれたのが、イヤしてくれたのが、外大の学生であった。授業が楽しくなった。ココでしか聞いてクレナイのだから、トニカク、伝えよう、伝えておこうと、ヒタスラ集中したものだ。その中で私の「物差し」ができあがったのだ。従来の「民主主義」の「物差し」に代わる私のが。以下、それを図式で示しながら、「比較」についても少し語っていこう。

もう読者のみなさんにはおわかりだろうと思うのだが、私の「物差し」とは、ここまでも何十回、何百回となく話をしてきた「あの世界」、そう〈図式Ⅰ〉(の [ア] と [イ])、〈図式Ⅱ〉(の [ウ] と [エ]) である。とくに、これまでの「民主主義」の歩みを、すなわち「民主化」の「比較」研究に採用された「物差し」を、私の「物差し」を使って説明すると、「比較政治学」の「民主化」研究における「物差し」は、〈図式Ⅰ〉の $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ 、あるいは $[B \rightarrow C \rightarrow A]$ の図式で示される [A] とか [B] を表わす [経→民] のみであり、私のモデルのもう一つの〈図式Ⅱ〉の「世界」がまったく欠落したものと要約できるのだ。また「エラソー」に語ったが仕方がない。これもまたジジツなのだから。したがって、「民主主義」を「比較」するにしても、1970年代以前の「民主主義」とそれ以後の「民主主義」の「段階」と歩みの「方向」というか、「向き」(ベクトル) がまったくわからない、示すことのできないものなのだ。とくに、「ポスト・ポリアーキー」を説明することが非常に難しい「物差し」なのである。「民主主義の発展」がいつも「高度化」以外にないものと考えていたのかどうかは別にせよ、「低度化」についてはほとんど語られないままなのだ。せいぜいが「民主主義」の「低滞」とか、「足踏み」といった表現となるのだ。しかも、この「高度化」と「低度化」の「民主主義」の「関係」も示せないのだ。それもそのはずである。「物差し」が [経→民] であり、つまり [経済発展→民主主義の発展] として語られる「民主主義」の「歩み」であり、はじめから「関係」としてつくられた「物差し」となっていないのだ。これもよく考えると、イヤ考えないでもおかしいことだ。

たとえば福沢諭吉は『文明論之概略』において「文明—半開—野蛮」といった「関係」のなかで、「文明」を描き、またその「文明」の「経済発展」を「製物の国」として、その他の「産物の国」との「関係」についても論じていたからなのだ。その意味で、たとえば、「文明」を [経→民] として、「野蛮」を $[経 \overset{x}{\rightarrow} 民]$ として、またそこから、「半開」を $[経 \overset{(x)}{\rightarrow} 民]$ として描くとすれば、そこに $[経 \rightarrow 民] \rightarrow [経 \overset{(x)}{\rightarrow} 民] \rightarrow [経 \overset{x}{\rightarrow} 民]$ 図式に示さ

れる「文明」－「半開」－「野蛮」の「経済発展」と「民主主義の発展」の「関係」モデルを手にする事ができていたカモシレナイのだ。しかし、最初からある種の「先入観」があり、「民主主義」ナルモノは「文明」の、いわゆる「先進国」の「産物」であり、それはまた「近代」の創造物だと一方的に理解していたのだろう。よく「近代の超克」とかの議論において、戦時中の「日本」においてそんなことを語るのはチャンチャラおかしいといった批判がなされたが、それも「近代」の理解の仕方の特徴を示していると私はみているのだ。つまり、「日本」は未だ「文明」ナルモノも「経験」していないのに、「近代」の「超克」を語るのはまだハイ、ハヤスギルと考えての批判なのだろう。しかし、この「批判」はオカシイのだ。そもそも「近代」ナルモノは「文明」だけでつukれないのだ。「文明」は、〈文明－半開－野蛮〉の「関係」の中であつukられるのだ。それゆえ「文明」が「近代」の「段階」に位置するようになるということは、この「関係」の中にある「半開」「野蛮」も、また「文明」とは異なる、違った「意味」での「近代」を担うような「段階」にアルと見るべきだし、見なければならぬのだ。つまり「半開」や「野蛮」にいる「人間」が、「近代の超克」という言葉を発するとき、その意味は、〈文明－半開－野蛮〉の「仕組み」を、別のものに代えたいとの「希望」であり「思い」なのだ。つまり、私のモデルの「あの世界」から抜け出したいとの気持ちを表現しているわけだ。戦時中において、ステニ「日本」と「日本人」は、「近代」ナルモノを担っていたのだ。それは確かに「文明」とは異なる内容であり、「段階」にあつたが、担っていたのだ。「近代」はあくまでも〈文明－半開－野蛮〉といった「一つの関係」として実現されたものであり、「文明」だけによって、創造されえないものなのだ。つまり、その意味で、「近代」の一つの構成物とされる「政治的近代化」のゴールであるとされてきた「民主主義」もまさにそうした「関係」のサンプルなのだ。残念ながら、この点をほとんどの社会学者、人文科学者は理解できない。それだけではない。いわゆる「国際関係」論とか「学」も、「関係」をうたいながら、その実体は「一国」枠の「民主主義」を基本としてい

なのだ。社会科学者、人文科学者は理解できないままなのだ。また「エラソー」なことをいってしまった。

(4)

たとえば従来の「近代」(化)像を、私の図式を使って示すと次のようになるのではないか。

{ 「近代」ナルモノ
 [経→民] の図式で描かれる「世界」
 その「担い手」は「文明」である

[図表①]

これに対して私の「近代」(化)像を同じく私の図式を使ってみると次のようになる。

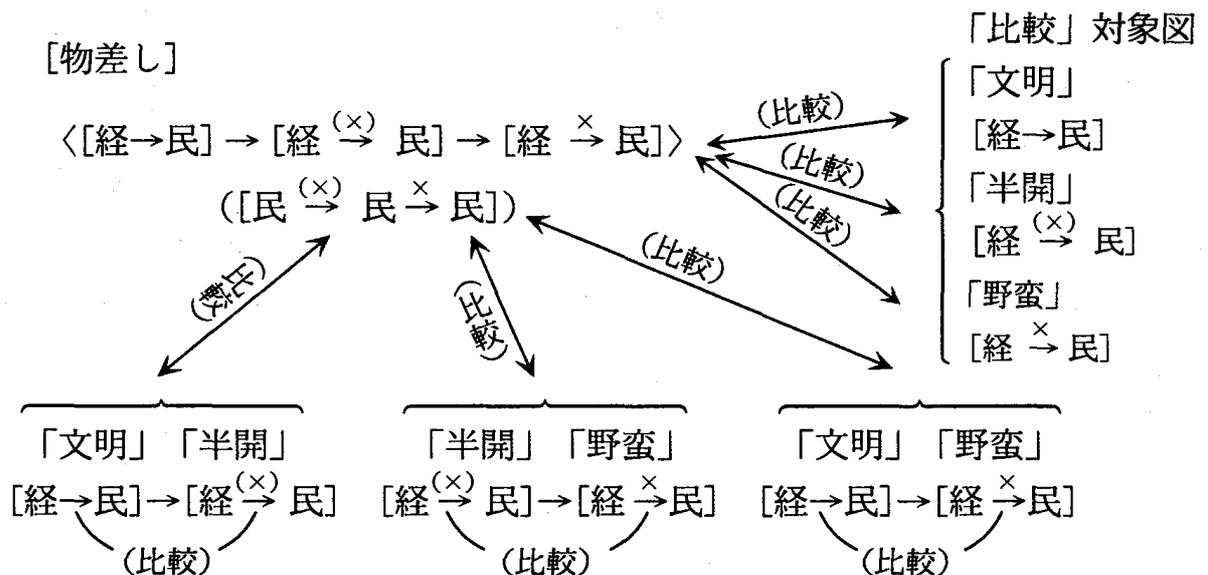
{ 「近代」ナルモノ
 [経→民] → [経^(×)→民] → [経[×]→民] の図式で描かれる「世界」
 その「担い手」は「文明」「半開」「野蛮」

[図表②]

この二つの図式というか図表をもとにさらに「民主化」の「比較」について考えてみよう。この[図表①]をもとにして「民主化」を「比較」する作業をおこなうとき、その結果はアラカジメ予想がつく。たとえば、「半開」のある国の「民主化」の「段階」は、[経→民]で描かれる「民」ではないとされる。つまり、「民主化」の「段階」が十分ではないとされる。このことは、「野蛮」においても同じような結果となる。そこでは、[経→民]の「民」の、すなわち「民主主義の発展」の「民主主義」についてはナンラ問題はなく、問題があるのは、「半開」「野蛮」の方にあるとみられるわけだ。付言すれば、[経→民]の「経」にも、すなわち「経済発展」にも問題はないとされ、問題はやはり「半開」「野蛮」の側にあるとみられてしまうのがオチであろう。ここには、福沢のアノ「関係」(「製物」と「産物」の国のカ

ンケイ) を見ようとしていた「目」はもはやないのだ。当然ながら、このカンケイから [経→民] の「民」の問題点をナントカシテ発見しようなんて意欲も意志も感じることはできないのだ。もっとも、政治学の、比較政治学の「民主化」研究者のほとんどは、「民主主義」にナンラ問題を見ていないのだ。オットー、これは少タイイスギてしまった。いろいろなものがタトエあるとしても、「物差し」として採用することには、問題があるとみていないのだ。

これに対して、「図表②」をもとにして「民主化」の「比較」をするならば、「物差し」とされる「民主主義」それ自体のなかに、「文明」「半開」「野蛮」のそれぞれの「特徴」を含み、しかも「比較」する前に、「関係」として描き直した上で、そこから「比較」する作業へと向かっていくので、「物差し」として使われている「民主主義」それ自体の「問題点」と、その「物差し」で測定される「文明」「半開」「野蛮」(つまり今日的表現を使えば「先進国」、「中進国」「後進国」となるうが) の「民主主義」の「問題点」とが、それぞれ個別にはではなく、「関係」として理解できるようになるのだ。私は、「比較」から「関係」へ、「関係」をもとにした「比較」へと、「民主化」研究は一步サキへと進めるべきだと言いたいのだ。まあ、それはともかくとして、今すぐ上で語った内容をこれまた図に表しておこう。



付言すれば、この私の「物差し」は「構造」それ自体には変わりのないものの、その「構造」の「担い手」、が1970年代以降次第に変わってきているこ

とに注意してほしい。また、先述したように、1970年代を一つの境として、それ以前と以後において、「民主主義」の「発展」の「段階」と向き（「ベクトル」）とが変化していることにも注意するよう、ここで再度、言っておきたい。これについては、〈図式Ⅰ〉と〈図式Ⅱ〉を参照していただきたい。私のモデルを使うことによって、「民主化」の比較研究はさらに充実したものになることをここでまた「エラソー」に述べているのだ。それにしても自分でジュウジツしたとは、ないだろうが、それもまた仕方のないことだ。私のモデルを使うと、一口に「戦後民主主義」といっても、それが1950年代60年代、そして80年代90年代、さらに今日どのような「発展」の「段階」にあり、またその方向性（「高度化」か「低度化」かどうか）がどうなっているかをある程度、コレは少しヒカエメな言い方をしているのだが、わかるであろうし、またその日本の「民主主義」を、他の国や地域のそれと「関係」づけながら「比較」することも可能なのだ。とにかく読者に〈図式Ⅰ〉と〈図式Ⅱ〉の私のモデルを使って、実際にいまここで言ったことを確認してほしいのだ。なお、これについては、この「エッセー」において、私自身も少しだけだが述べてはいるので、それも参照してほしい。

(5)

19-20世紀転換期における「多角的貿易決済機構」からみた 「民主主義の発展」における「比較」と「関係」

なにかイカメシイ題目だが、内容はカミクダイタものになっている。どうかもう少し私にお付き合い願いたい。山川出版から『イギリス史3』（村岡健次・木畑洋一編）が刊行されているが、その中に、「第5章 帝国主義時代の到来」（秋田茂 担当）がある。その〈4「社会帝国主義」〉のなかで、この本題にもあるように、〈「多角的貿易決済機構」の形成〉という項目があり、「多角的貿易決済機構」についての説明がおこなわれているのだ。以下に引用しておく。〈ところで、1890年代なかば以降、世界経済はいっそうグロー

バルな発展をとげ、世界資本主義体制の一体化が進展するが、その過程は、イギリスを中心に以下のように要約できる。(一) イギリスは、第一次産品国からの食糧・原料輸入をいっそう増大させるとともに、あらたにドイツ、アメリカ合衆国から工業製品(資本財)を輸入、恒常的輸入超過状態にあった、(二) いまやイギリスにかわり、ドイツ、アメリカ合衆国の第一次産品国にたいする食糧・原料需要が世界市場の再編を規定するにいたり、両国とも第一次産品国、とくにインドにたいし貿易赤字をだした、(三) インドをはじめとする第一次産品国は、ドイツ、アメリカ合衆国への食糧・原料輸出で獲得した貿易黒字で、イギリスから工業製品(消費財)を輸入した、(四) ヨーロッパおよびアメリカ大陸での工業製品輸出市場を喪失したイギリスは、いまやインド、中近東、極東に消費財輸出を集中し、その地域でのみ貿易黒字を獲得した。このような特徴を有する世界資本主義体制のもとで、支配的決済手段であるスターリング手形を媒介として(一)から(四)にいたるポンド資金の世界循環システム、いわゆるイギリスを中心国とする「多角的貿易決済機構」が20世紀初頭に確立されたのである。この多角的貿易決済機構を維持していくうえでは、(一) イギリス本国が、保護主義を採用したドイツ、アメリカ合衆国にたいして開放的な自由輸入体制を維持すること(いわゆる自由貿易の逆説)、(二) インドへの消費財の集中的輸出により、インドが欧米諸国から稼いだ膨大な貿易黒字を吸い上げること——以上二点が必須条件となり、とりわけインドとの貿易は、「多角的貿易決済機構の鍵」(S・B・ソウル)ともいうべき地位を占めたのである。)

このくだりの中にも福沢諭吉の「製物の国」と「産物の国」との関係さらには、その「製物の国」を卒業して「金融、サービスの国」へと変貌を遂げていくイギリスの姿を、またそのイギリスと「製物の国」の中心的存在となっている当時のドイツ、アメリカ合衆国との関係を垣間見ることができるのである。ここに紹介した「多角的貿易決済機構」ナルモノを、私のモデル〈図式I〉と〈図式II〉で捉え直すとき、どのようなことがわかるのか、それについて以下に述べてみたい。まずは、イギリスを[A]とするとき、ド

イツ、アメリカ合衆国は [B] として、そしてインド、中近東、極東は [C] として位置づけられよう。まさに [Aの経→Bの経→Cの経] の図式で描かれる「世界」が、ここでいわれた「多角的貿易決済機構」のもとでの「世界資本主義体制の一体化」の「進展」によって形成、発展しているのだ。したがって、私の関心は、こうした [Aの経→Bの経→Cの経] といった図式で描かれる「世界」を前提としたときに、[A]、[B]、[C] において、「民主主義の発展」はどのような「段階」にあるのかに向けられる。それは「同じ」あるいは「同じような」段階か、それとも異なるのか。こうした点を踏まえて考察した結果、やはり、私のモデルの〈図式I〉で描くような「世界」がここにおいても「確認」できるのだ。すなわち、[Aの経→Aの民] → [Bの経^(x)→Bの民] → [Cの経^x→Cの民] で示される「世界」である。「民主主義の発展」という観点からこの「多角的貿易決済機構」を担うそれぞれの国や地域の「民主主義の発展」における「発展」の「段階」とそれぞれの「関係」をみるとき、[Aの民^(x)→Bの民^x→Cの民] といった図式で示される「世界」が存在しているのだ。私がこうしたモデルを使っていたいことは、もし、[C] において「民主主義」をより「望ましい」方向に「発展」させようとするのなら、まずナニヨリモ、こうした「世界」の存在こそを知るべきであるという点である。また、イギリスは、「開放的な自由輸入体制」を、ドイツ、アメリカ合衆国は「保護主義を採用」していて、ここには「自由貿易の逆説」がみられると秋田は指摘しているが、インドや中近東、極東、さらにはラテンアメリカの第一次産品国は、「開放的」な「輸出体制」と「輸入体制」を「採用」していることになるだろう。そうした、「内向き」の「閉鎖的」な「保護主義」の「採用」と「外向き」の「開放的」な「自由主義」の「採用」を、「民主主義の発展」における「高度化」といった観点からみるとき、すなわち、私のモデルの〈図式II〉から考えるとき、そこには以下のような重要な「法則」が、つまりキマリがあるのだ。もしある国家が、「民主主義の発展」を（より）「高度化」しようとするならば、それは「内向き」の「閉鎖的」な「保護主義」を採用しなければならない。逆にい

うと、こうした「路線」を「採用」できる国は、「産物の国」ではない。それは「製物の国」なのだ。つまり、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれる「世界」において、 $[C]$ よりも $[B]$ に、 $[B]$ よりも $[A]$ に位置する国ほど、それを採用できるわけだ。そうした「力」関係によって「内向き」、「外向き」の「路線」の「採用」は決定されるのだ。いわゆる「市民革命」を経験し、その後に覇権国となったオランダ、イギリス、アメリカ合衆国、そしてそれに劣らぬ強大国となったフランスも、その程度差はあるものの、やはり「内向き」のヘイサ的な「保護主義」の「路線」を採用するのだ。私のモデルの〈図式Ⅱ〉で描く $[権威主義的性格の政治 \rightarrow 経済発展]$ のいわゆる第Ⅰ期の「段階」から、 $[経済発展 \rightarrow 分厚い中間層の成長]$ という第Ⅱ期の「段階」へと「上昇」していく、「高度化」していくためには、必ず「内向き」の「保護主義」政策が不可欠なのだ。つまりこの第Ⅰ期から第Ⅱ期へと「移行」できた国が「製物の国」となり、これに対して、ずっと第Ⅰ期のままだにスエ置かれた国や地域が「産物の国」となって「開放的」な「自由主義」を「採用」せざるをえない「関係」を強要されるのだ。そして、この私の〈図式Ⅱ〉で描く、 $[分厚い中間層の成長 \rightarrow 民主主義の発展(高度化)]$ といった第Ⅲ期に入っていくにつれ、上にみたイギリスのように、次第に「開放的」な「自由主義」路線を採用していくのであるが、ひとしく「開放的」で「自由主義」といっても、第Ⅰ期→第Ⅱ期→第Ⅲ期といった「段階」の「高度化」を経験したイギリスと、秋田さんの「くだり」で紹介されたインド、中近東、極東の、またラテンアメリカの「第一次産品国」のそれとはまさにニテヒナルモノなのだ。

いずれにせよ、ここでもみたように「多角的貿易決済機構」の形成と発展は、私の図式で描く「あの世界」の中において展開していったわけだ。そしてそのことがまた「あの世界」の形成と発展、そしてその安定に寄与したのだが、その意味でも、「多角的貿易決済機構」の成立は、「覇権システム」とその「秩序」を前提として織り成された「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」の中に置き直されて考察されるべき「研究」対象である、と私

は考えているのだ。

(6)

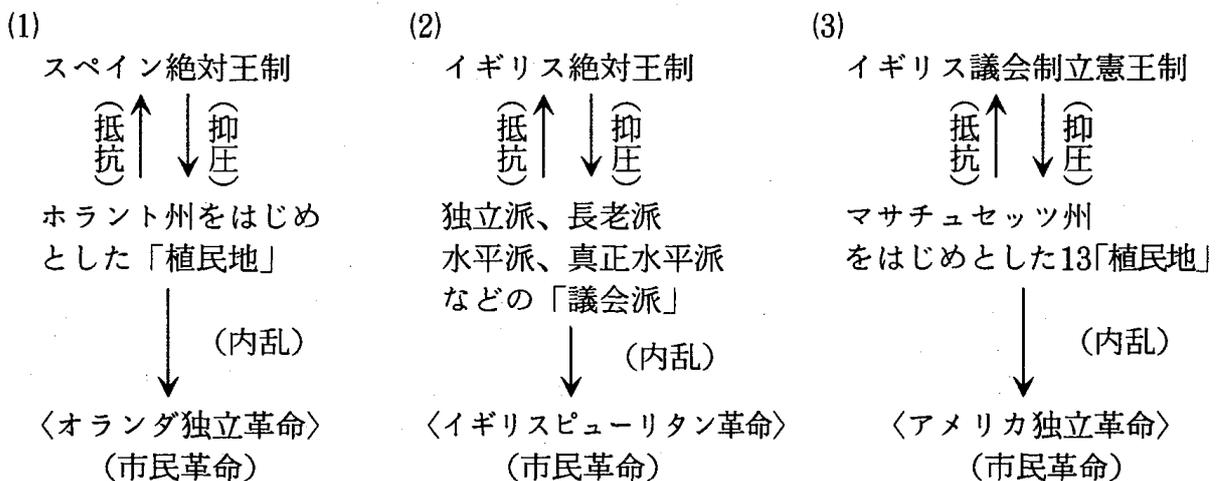
「あの戦争」は「テロ」だったのかそれとも「レジスタンス」だったのか。

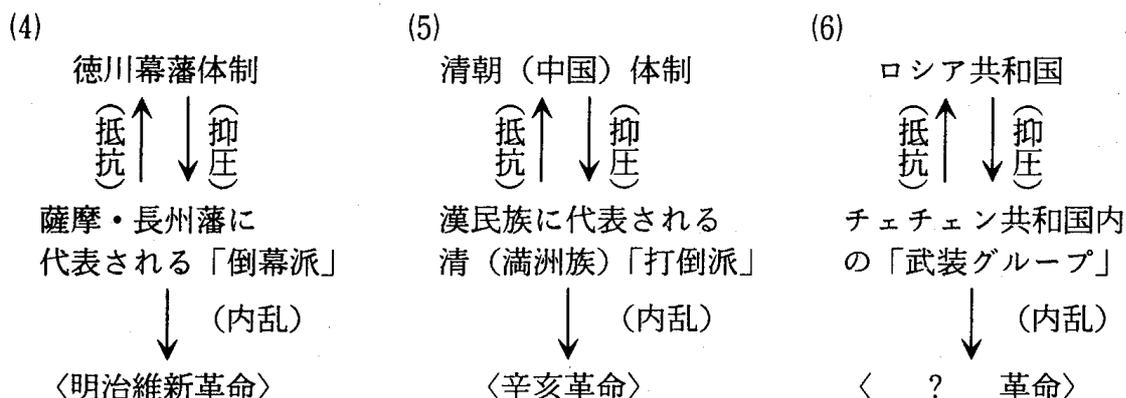
まずは『広辞苑』で「テロ」、「レジスタンス」そして「ゲリラ」の意味を調べておく。「テロ」は〈テロル・テロリズムの略〉とあるので、次に「テロル」をみる。「テロル」は〈(恐怖の意) あらゆる暴力手段に訴えて政治的敵対者を威嚇すること。テロ。〉次に「レジスタンス」をみると、〈抵抗運動。特に第二次大戦中のフランスにおける対独抵抗運動を指す。〉とある。それでは最後に、「ゲリラ」をみってみる。〈(もとスペイン語で小戦争の意。ナポレオンI世のスペイン征服当時、スペイン軍のしばしば用いた戦法に由来する語) 奇襲して敵を混乱させるなど、遊撃戦を行う小部隊。また、その遊撃戦法。〉。イラクのフセイン大統領とその下にあるイラクを2001年の9月11日のいわゆる「テロ」攻撃からアメリカ合衆国を「自衛」するという名目ではじめられたイラクに対して「戦争」をシカケタこと(少なくともイラク「との」戦争にはほど遠いものを私は感じているのだが)をみて、いろいろな「意見」がだされたが、その中で、アメリカ合衆国も「テロ国家」であることを世界中に知らしめたといった見方に私はチョットダケ興味をもった。結論を先どりしていうと、私は「あの世界」に住んでいるわけで、その中に「テロ国家」とされるアメリカ合衆国も含まれているのだから、私の「世界」はこれは相当な、イヤ一番の最強の「テロ」国家ナラヌ「テロ」システムということになるだろう。また同時に、そのシステムというか「覇権システム」内には、あらゆる暴力手段を含む圧倒的な軍事力とならんで、「人権」、「平和」、「民主主義」といった「ソフト」の「ヘゲモニー」も独占しているのだから、もう何がナンダカワカラナイ状態になってしまう。しかし、ヤハリとかやっぱりとでも言おうか、こうしたことを議論の前提にする必要があるのだ、と私は読者に伝えておきたいのだ。

先の『広辞苑』の「ゲリラ」のところで、ナポレオンI世の「無法」な「力」に対抗したスペインのといっただけを讀むにつけ、そのスペインの

「大航海時代」からの「無法」な「力」に対抗したラテンアメリカの……を
 考えてしまうのだ。また「レジスタンス」のくだりでもそうだ。対独抵抗運
 動としてのフランスの「レジスタンス」を考えたとき、そのフランスの「民
 主主義」の下での植民地や従属地状態に置かれ続けたアジア、アフリカの人々
 のフランスに対する「レジスタンス」と、この辞書のそれとはどうツナガル
 のか、ツナガラナイのか。このように考えてくると、やはり、私の「あの世
 界」からこうした「テロ」とか、「ゲリラ」とか、「レジスタンス」は見直す
 べきだし、そこから理解した方がもっとマシな「世界」が見えてくるかもし
 れない。少なくとも私はそう考えている。ところで、「本題」に入ろう。「あ
 の戦争」は、「テロ」戦争か。「ゲリラ」か。あるいは、「レジスタンス」と
 しての「戦争」なのか。ここで「ゲリラ」はちょっと次元がコトナルことが
 わかるので、「テロ」か「レジスタンス」かということになる。この後者
 をもう少し「翻訳」して「自衛」の意味も込めて使ってみることにする。も
 ちろん、強引な論の展開はさげたい。そうは言っても、これまでもカナリゴ
 インであったことを思えば、何をイマサラの声か。

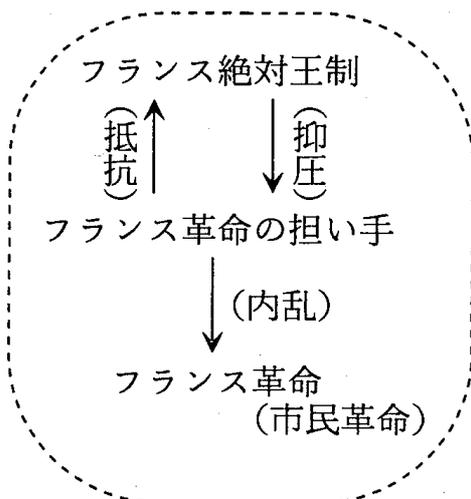
ココから少し私も「マジ」になって話をしてみたいと思う。もちろん、こ
 れまでも真面目に真剣であったことにカワリないのだが、もう少し、腰を入
 れて取り組もうとのキモチの表明である。話はこれから「二段階」の形をと
 って進められる。簡単にいうと、私の「あの世界」から見た場合と、そうで
 ない場合の「二段階」である。まずは、「そうでない場合」からの話だ。ワカ
 リヤスク図を書いてみる。(1)~(6)を参照)





ここに描いた(1)~(6)の「革命」((6)はまだ、というより今はツブされかかっているが)は、「そうでない場合」の話であるわけだが、この(1)~(6)は、「覇権システム」とその「秩序」を前提とした私の「あの世界」の中での「出来事」なのだ。つまり、〈図式I〉の[A→B→C]で描く「世界」の形成、発展と切り離せないものなのだ。というより、それどころか、この「世界」の形成、発展と密接に結びついた「出来事」だということを次の「二段階」目の話で述べてみたいのだ。そのためというか、その準備のために、下記のような図を書いてみた。

[Aの経→Aの民] → [Bの経^(x)→Bの民] → [Cの経^x→Cの民]



なおまだ私の図式で描く[A→B→C]の「世界」はその形式、発展トジョウにあって、なおハッキリと図式[Aの経→Aの民]に示されるように「民主主義」の「高度化」は実現していないのだが、それでも、もうこの頃には、

[Aの民^(x)→Bの民^x→Cの民] といった図式で描かれる「発展」段階の高低は確認できるようになっている。それは [Aの経→Bの経→Cの経] の図式で描かれる「世界」がオボロゲなるもののできつつあるのと対応している。Cの多くは、AやBの植民地や従属地となっていて、フランスもこうした「関係」の中で、「フランス革命」を実現できたわけであり、(この点については、西川潤著『飢えの構造〔増補版〕—近代と非ヨーロッパ世界—』ダイヤモンド社1984年の12-18頁にも述べられているとおりでである。しかし、残念ながら、その後の「民主主義」の「関係」については言及されていない。これは本山美彦著『南と北—崩れ行く第三世界』筑摩書房1991年の16-18頁にも垣間見れる) その意味で「革命」は、Aのイギリスの「経」が、つまり「経済発展」が、Bのフランスの「経」に「圧力」をもたらし、それによって、[Aの経→Bの経]^(x) Bの「民」といったフランスの「民」を、「民主主義の発展」をジャマする形となっているのを、ナントカシテ克服させる形となって、生み出されたと私はみているのだ。もっとも、この頃のイギリスもフランスも [A→B→C] のAに属していたのかもしれない。しかし、その場合でも、イギリスはフランスより先にあって、その「関係」は [Aの経→Bの経]^(x) Bの「民」であったと私は理解しているのだ。

イズレニセヨ、このフランス革命によって、私の図式で描く [A→B→C] の「世界」はマスマスその形成、発展の度合いを強めていく、深めていくのである。付言すれば、先の図の(6)の「チェチェン紛争」は、[B→C→A] で描く「世界」のBに位置しているロシア共和国の中で生じていると私は見ているのだ。その意味で、ソビエト崩壊の後ロシア共和国は、日本やイギリス、アメリカのようにAに位置していないと私はみるのだ。まさに「ブリックス」と呼ばれるように、中国、インド、ブラジルとともに、ロシアはこのBグループを構成していると私はみている。

(7)

さて、話をもとに戻すとしよう。つまり、オランダの独立革命は、スペイ

ンからのものであったとしても、それは、その当時の [A→B→C] の図式で描かれる「覇権システム」とその「秩序」をもとにして形成、発展してきた「あの世界」の「抑圧」に対する「抵抗」として、同時に理解されると私は言いたいのである。その意味で、スペインはそうした「世界」の先頭に立って「あの世界」の形成、発展をリードしているのだ。オランダの「独立」戦争は、スペインからの「独立」だけではなく、実は「あの世界」から「独立」するための戦争であり革命であったということだ。その場合の「独立」とは、[A→B→C] の図式で示す「世界」のなかで自分に都合のよい「自己決定権」(自由)を手に握ることである。すなわち、「主権国家」としてそしてやがては「国民国家」として「独立」することをサイテイゲン意味しているのだ。

このように考えていくと、イギリスの「市民革命」ナルモノも、オランダを頂点とした当時の「覇権システム」とその「秩序」の「抑圧」(つまり [オランダの経→イギリスの経] ^(x) → イギリスの「民」の「関係」におけるヨクアツ) に対する「抵抗」として生み出されたとみることができるのだ。同様にアメリカの「独立」戦争も、こうしたスペイン(ポルトガル)、オランダ、そしてイギリスを頂点とした歴代の覇権国が中心となって作り出してきた「覇権システム」とその「秩序」のもとで形成、発展してきた「あの世界」から、イヤ正確にいうと、やはり「あの世界」の下での「独立」を試みた「戦争」であり、「市民革命」であったとみられるのだ。いずれにせよ、アメリカの「独立」戦争はイギリス本国からの「独立」ということもさることながら、「あの世界」における「独立」でもあったのだ。その「独立」によって、つまり「主権国家」として「独立」することによって、[A→B→C] で描かれる「世界」の形成、発展に大きく貢献していくのだ。やがてアメリカ合衆国は、スペイン、オランダ、イギリスの覇権国が中心となってつくり出してきた「覇権システム」とその「秩序」を継承すべく「覇権国」へとになっていくのである。そしてまさに、こうしたイギリスからアメリカへの「覇権国」のバトンの引き渡しと引き継ぎの中で「あの戦争」はおこったのだ。も

し「あの戦争」をきちんと理解しようとするれば、やはりこうした「流れ」の中で「日本」と「日本人」の「独立」をめざす歩みをとらえる必要があるわけだ。

日本の明治維新の「革命」によって、「日本」は誕生したわけだが、なお「独立」は十分なものではなかった。なお「不平等条約」の下に置かれ、その意味で「自己決定権を、換言すれば、政治的自由、経済的自由を手にはできないままにあったのだ。日本が名実ともに「独立」をはたすのは、1911年のことだ。しかしこれはあくまで「サイテイゲン」のことなのだ。「日本」はこの「サイテイゲン」の目標である「主権国家」を実現する際に、もう既に[A→B→C]の図式で描かれるCの地域や国を植民地化、従属化してメイワクどころでない犠牲を強いているのだ。もっともこれは「日本」だけではない。スペイン、オランダ、イギリス、アメリカ、イヤそれだけではないのだ。あの北欧の民主主義国とか福祉国家のリソウキョウとしてみなされているスウェーデンやノルウェー、デンマークもやはり相当にヤバイことをしてきたのだ。そんなことはいいだろう。問題は「日本」だ。「あの世界」において「独立」するためには、「主権国家」として「独立」するだけではやはりだめなのだ。きちんとした「国民」を育成し、その下での「国家」を、つまり「国民国家」を建設していかなければならない。そのためには、国民経済を確立しないとダメだから、やはり[A→B→C]の図式で描く「世界」の[A]をめざしていかなければならない。まさにココでもあの福沢諭吉の〈文明—半開—野蛮〉の「文明」を目標とすることを要請されるのだ。これは大変なことだ。このタイヘンなことを、スペインからはじまって、オランダ、イギリス、フランス、アメリカなどの大国は、覇権国を実現してきたのだ。当然ながら、「日本」にだってできないことはない。しかし、それができなかったのだ。戦前にはできなかったのだ。[A→B→C]の図式で描く「世界」の中で、日本はじっとガマンしておれなかったのだ。[B]から[A]をめざすべく日夜フントウし続けたのだ。[A]と、[C]にその多くが置かれていた植民地や従属地の領有（権）をめぐり、熾烈な「争い」を、すなわ

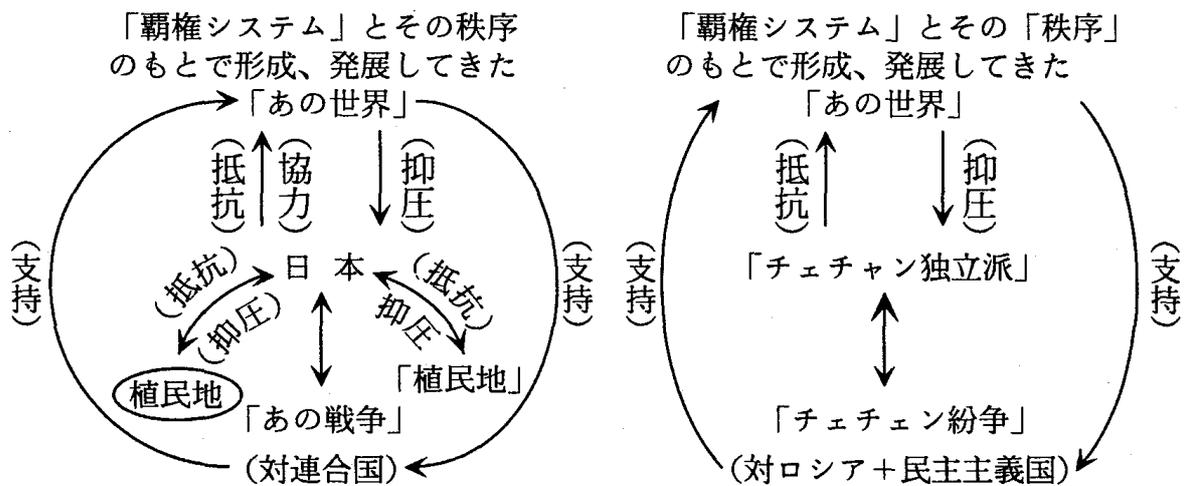
ち「戦争」を展開したのだ。当然のことだが、[B]に位置する「日本」には不利な「戦争」であった。その「戦争」は「日本」が[C]に対しての影響力を行使するという意味では「テロ」であり、その意味で[A]の「民主主義」国であるアメリカ、イギリス、フランス、オランダも[C]に対しては「テロ」であったし、自らが[C]に対する「テロ」をしかけていたわけなのだ。そして、[A]に対しては、当然ながらそれは「自衛」であったし、[A]にとっても、日本から自分たちの利益をヨウゴするための「自衛」戦争であったのだ。そして何りも、[A]や[B]にとっては、「テロ」だろうが、「自衛」だろうが、そんなことよりも、[A→B→C]で描かれる「世界」を「保全」するために遂行される「戦争」であったということなのだ。[C]に位置する諸国や植民地、従属地とそこに暮らす人々にとっては、[A]の「民主主義」であろうが、[B]の「ファシズム」であろうが、それらの[C]への対応の仕方はいつも「テロ」として理解されても当然だと、私はみている。こうした「関係」で描かれる「世界」はいつも存在しているわけだから、ブッシュが9.11以降の「テロ」との戦いというとき、私たちの側でステに相手にそうした「関係」を押し付けているところの「テロ」を、「自覚」「ジカイ」しておく必要がある。それと同じように、「あの戦争」を「自衛」戦争というとき、その「自衛」は、結局のところ、メグリメグッテ「あの世界」を、つまり[A→B→C]で、あるいは[B→C]で、示される「関係」を守っていくための、そのような意味での「自衛」であったことをまずは確認しておいた方がいい。本当にナサケナイ話だが、「自衛」だなんていいながら、自分以外の誰かを自分の利益のタメニ、巻き込んでその他人の命を犠牲にしながら、それをハッキリと見てわかったアトデモ、それでも「ジェイ」と、「日本」と「日本人」が言うのならば、もう「日本」や「日本人」は滅びた方がいいのだ。

(8)

最後に、それでは「あの戦争」は「レジスタンス」の戦いであったのか。その場合も、どのような意味での、形での「レジスタンス」かをやはりみる

ことが大切だろう。[A→B→C] のあの「世界」のAからの「圧力」に「抵抗」したから「レジスタンス」だと一方で強弁しながら、他方でそのAと一緒にツルミながら、つまり[Aの経→Bの経] → Cの「経」や[Aの民^(x)→Bの民] ^x→ Cの「民」の図式に示されるような「圧力」をかけていて、ナンノ「抵抗」なのか。なんの「レジスタンス」か。

ここでオマケとして図を二つ書いておく。よく見て考えてほしい。



「日本」はかつて「あの世界」と戦ったが、「チェチェン独立派」が「同じような戦い」を「あの世界」に対して遂行しているときに、「あの世界」の先頭に立ってそれを抑圧し、封じ込めるべく、「チェチェン独立派」を「テロ」の推進者として批判、非難している。そう考えると、やはりというべきか「同じような戦い」ではなかったのだ。「解放」戦争などではなかったのだ。そうみるのがムリはナイ。「解放」とは、誰から、何からの「カイホウ」なのか。当然ながら、私のモデルの「あの世界」からの「解放」である。つまり、[Aの経→Bの経] → Cの「経」の、[Aの民^(x)→Bの民] ^x→ Cの「民」の図式に示される「関係」からの「解放」を意味しない限り、それはまったくのデタラメだ。もちろん私はそれを「完全」にしなければアカンなんてことは言っていない。それをメザシたか、目標としたかで判断している。こうみてもヤッパリ、アカンということなのだ。「大東亜共栄圏」ナンテ、夢のまた「ユメ」だったと言わざるをえない。付言すると、「東アジア

共同体」などという話がススデルようだが、それは私のモデルでいう [B → C → A] の図式の「世界」と見事にマッチした [B] の「世界」の東アジア共同体であり、かつての「大東亜共栄圏」の盟主が日本であれば、今度のソレは中国だということなのだ。ホンマに「歴史」というものはクリカエスらしい。一度目は多くの反対にあうが、二度目はもう疲れてしまうのか、アットという間に「イインジャナイノ」という「流れ」というか、「フンイキ」になるから、ナオノコト、恐ろしいのだ。「圧倒的なお金」の前では、同じこともチガッタ結果となるのだ。もうヤル気もなくなったな。しかしヤハリここでメゲルわけにはイカン。

(9)

「小泉首相の8.15靖国神社参拝について」のアンケートについての「雑感」—— 参拝反対派の反対理由で最も多かった「中国や韓国などとの友好関係に影響する」を私の「あの世界」からみると、その「友好関係」はどのように語れるだろうか。

少々タイトルが長くなったが、私の意図するところは、「あの世界」を前提とした「友好関係」なのか、それともそれとは異なる「世界」を想定した「友好関係」なのかということ念頭に置いて考えてみようということだ。結論を先にいうと、「友好」とは、おそらく真剣に考えていないところから出されたお付き合いを意味してのことだと私は見ている。この「反対派」もイイカゲンな「反対」なので。つまり、中国や韓国がもし首相の靖国参拝に反対しなかったら、首相の参拝は認めてもいいとの考え方をしている「反対派」だと、多くはそうだと私はみているのだ。つまり、たとえ中国や韓国が認めても、それを許したら「友好」にヒビが入るからヤメロといった「反対派」はかなり少数だと思うのである。ナンダロな。この「友好」とは。相手に言われてのことなんだよな。そんなわかりきったことに、また大事な紙面をサクのもナンダと思ったが、やはりこれも大切なことだと考え直して、以下続けてみよう。念のために『広辞苑』で「友好」を引いてみた。〈友達

としてのよしみ。友達として仲のよいこと。多く、国家や団体などの組織間についていう。〉とある。つまり、私の「あの世界」を前提としてもまったくかまわない、ナンノ「問題」もないとされる「友好」なのだ。それでは一体ダレの「友好」なのか。日本の経済界と中国のそれとのユウコウなのか。そうだ。しかしそれはセンジツメテ考えると、自分たちの（私もそこに当然ながら含まれている）「オマンマ」の妨げをヨーク考えての「友好」となるのだ。しかしヤハリそこにはオカシナモノが見え隠れしている。なぜなら首相の「靖国参拝」をダシに使っているからだ。お金をモウケルために、「友好」は大切であり、必要であり、本来そこには首相が参拝しようとするまいが関係のないものではないか。中国との「友好」に関係なく、「日本人」が結着をつける問題なのだ。「靖国」は。それをこれまで「日本人」自身で解決できないものだから、イヤ解決してこなかったクセに、「友好」などとウマイ逃げ「口上」を見つけただけなのだ。

「日本」と「日本人」はオソマツ過ぎるほどに、自分たちの問題に向き合わないできたのだ。アンケート結果を見ても、「参拝すべきではなかった」(41.8%)のうち、「中国や韓国などとの友好関係に影響する」が反対理由のトップ(55.4%)を占め、「A級戦犯が祭られている」(26.4%)、「政教分離を定めた憲法に違反する恐れがある」(17.0%)を、大きく引き離しているのだ。本当にナサケナイではないか。なぜ中国や韓国を反対理由にもってくるのか。それならば、また「エラソー」にかましたい。「あの世界」を容認したままの「日本」にいる「日本人」には、「参拝」する「資格」なんてサラサラないのだと。なぜこういわないのだ。おかしいのだ。「友好」なんてことをヌカスなんて。ヒキョウなんだ。ヒトゴトにしているのだ。それじゃなんかねえ。私の「あの世界」の[B→C→A]で描かれる図式の[Bの経→Cの経→Aの経]^x→Aの民を許す「友好」をしようというのかい。「自業自得」とは私も思うが、それにしても、ヤハリこんな仕組みとまったく向き合わないで、またどこかの国で第二、第三の「靖国」や「戦争記念館」を創造する「流れ」に加担しながら、「反対」とは、あまりにも芸がなさ過ぎな

世界」と関連づけてみると、 $[Aの経 \rightarrow Aの民] \rightarrow [Cの経 \overset{x}{\rightarrow} Cの民]$ の図式で簡単に示される「民主主義」であり、こうした「世界」をもとに形成、発展してきた[A]として位置する「連合国」なのだ。もちろん「連合国」を構成したのは「民主主義」を掲げた[A]だけではない。[C]グループに位置していた中国も存在していた。しかしここでは「民主主義」を掲げた「連合国」をみている。それで[A]としていっているのだが、この[A]の「民主主義」は、 $[Aの経 \rightarrow Cの経] \overset{x}{\rightarrow} Cの「民」、[Cの経 \rightarrow Aの経] \rightarrow Aの「民」といった図式で描かれるように、あまりホメラレタものではない。むしろこんな「民主主義」を「物差し」にして「敗者」が裁かれるならば、ヤハリ裁くことのできないものが残ってしまうのは当然だろう。すなわち、 $[Cの経 \rightarrow Aの経] = 「帝国主義」 \rightarrow 「民主主義」 = Aの「民」として示される「関係」はまったく裁かれることなく不問にフサレタのだから、アキレタものだ。私のモデルの「あの世界」からはこうした「関係」がよく見えるのだ。「東京裁判」の「問題点」は、私からすれば、この「勝者」のグループを構成した「連合国」と「敗者」のグループを構成した「枢軸国」とが裁判の結果、見事なテウチをして、私の図式で描く「裁いた側」の「世界」と、「裁かれた側」の「世界」とがガッタイする形で、私のモデルの「あの世界」に再度フッキしていったというイカサマというかマヤカシに求められるし（なぜなら、「あの世界」に突入する以前は相互にナントカ仲よく「あの世界」の中にうまくおさまっていたからだ。）、そこが問題だと問わねばならなかったのだ。「勝者の裁き」だから「問題」があるのではなく、その「勝者」と「裁き」を生み出したその背後の「関係」がヤハリ問題だったわけだ。$$

その「敗者」も、21世紀のこの地点でも、「戦争」には正義も悪もアツタモノではない。ただ勝った側が、そのルールで敗けた側を裁くだけだとイイハナツだけで、まったく反省のイロもみえない。これはホンマに悲しいことだが、事実だ。「敗者」の問題点も、とくに「日本」の場合、あれは「自衛」

だったとか、「独立自尊」の戦いだったといいながら、[Bの経^(x) Bの民] → [Cの経^x Cの民] に示されるように、[Bの経→Cの経]^x Cの「民」、[Cの経→Bの経]^(x) Bの「民」にある「関係」をもとに、「自衛」だとか「独立自尊」などとヘイキで語っているわけだから、これもまたオソマツなものだ。こうした「関係」抜きに、つまり「他人様」の生き方とか、生命を犠牲にしないとやっていけない「自分」をジェイするとか、「尊ぶ」ということの「意味」がわかっていないのだ。そしてアロウコトカ、「裁いた側」とヒツツイテ、私のモデルの「あの世界」にまたナニクワヌ顔をしながらデ戻りながら、ヌケヌケとあの裁判は「勝者」のそれであり…とホザキ続けている。それを不問に付して、まったく批判もしないモノタチが、本当にタチの悪いことに、「国家」の品とか「品格」などとヌカスから、あぁもうしんどい、めんどいとなってくる。アカン、そこで踏みトドラナイト。

このようにみてくるとき、「民主化」の「比較」研究の作業は、イツモ「あの戦争」と「東京裁判」をヒキズルものなのだ。少なくとも、私にとっては苦しいものである。こうした思いが、いつも私の「民主化」研究にはツキマトッテいる。それゆえ、そんな思いとナニモカンケイナイ「研究」が私のマワリに「雨後の筍(たけのこ)」のようにみられるのは、正直ヤリキレナイのだ。「日本」とか「日本人」とかの「自覚」をもった「民主化」研究を望むことはモハヤ無理なのかもしれない。口を開けば、チホウのように「世界市民」だの、「市民文化」だの、私からすれば、そんな「念仏」は、夏のホンノ一瞬のこのようにしてほしいのだ。(合掌)

(11)

やっと何かオワリのようなものが見えてきた。というより、終わりにしなければならぬから終わらすのだが。「エッセー」なんていってもやはり私のコダワリみたいなものがある、なかなかジユウカッタツの「域」へと入っていけない「もどかしさ」を感じながら、それでもなんとかここまで来てしまった。ヤハリまたここでも〈結びに代えて〉とくるのだから、ワレながら笑ってしまう。まあ仕方がない。この「終わり」をなんとか次の「作品」につなげればいいのだ。それしかないだろう。ナルヨウニシカならないのだ。そうだ。ここで何を書きたいのか、何を最後にもってくるのかを、読者に話しておかねば。エー、もう読者はアキテしまって一人イナクナリ、二人、……、ツイニは、作者の話し手の私だけしか残っていないよ。なーんて。ウソだろう。それは授業だけにしてオクレと私はいいたいもんだ。そうだ。ここでは私がその授業で配布した講義ノートからの「抜粋」したのをぜひとも紹介しておきたいのだ。そう、これが「トドメダー」てやつを。またリキンド。まだムダな力が抜けていない。本当に感心するよ。それでは、まずはじめに2005年1月11日の「比較政治学」のノートからゴ笑覧アレ。くれぐれも言っておくけど、「昇天」メサルルことの無きように。

あと残すところ今日も入れて3回となりました。といっても1月は実質的に1回くらいしか落ち着いて話しができませんと考えています。そうはいいまでも、これまでかなりの議論を重ねてきましたから、材料といいますか、題材はでそろったとみています。とくに私がみなさんに示しました「民主化」の発展モデルは、これから何を勉強されるときでも、頭のどこかに置いてください。

それでは今日は、正月1日の新聞、3日の新聞、『論座』（2月号）その他を参照しながら、話を進めていきます。

日中、日米、日米中関係ならびに中国について取りあげている記事ないし論考から始めます。

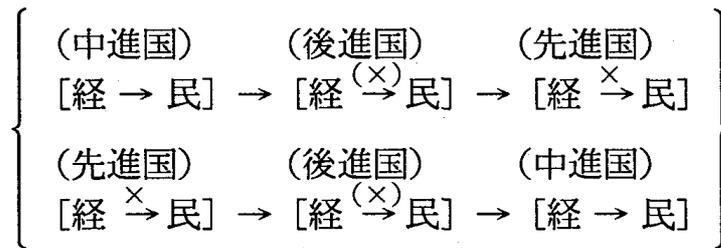
〈朝日〉の「社説」——アジアに夢を追い求め 2005年の始まり——

少しその記事を引用してみます。

「東アジア共同体」(構想)をという声が行き交っている東アジアの国々でそんな提言や研究会などが相次ぎ、東南アジア諸国連合(ASEAN)と日中韓3国の首脳たちは今年、マレーシアで「東アジアサミット」を聞くことになった。05年を「東アジア共同体元年」と呼ぶ声すら聞かれる。しかしそうした流れに逆行するような「ナショナリズムの悪循環」もみられる。孫文は1924年、神戸市で「大アジア主義」と題する演説をした。道徳を重んじる「王道」の東洋文化が「霸道」の西洋文化よりも勝るとして、アジアの独立と復興を訴えたのだ。

それが「大東亜共栄圏」という名の日本の野望に形を変えてしまったのは、アジアの悲劇だった。戦後60年にしてアジア諸国で語られる新たな共同体は、真の「共栄」を求めるものとして正面から受け止める必要がある。しかし、地域の政治に目を転ずれば、とても生やさしい現実ではない。北朝鮮の異常さは変わらず、～膨れ続ける中国の軍事力は不気味だ。～日本はといえば、自分たちの過去を顧みず、中国をなじるばかりの言論も横行。両国が平和友好条約を結んでいることなど忘れたような悪循環である。～言語や文化などアジアの多様性も加わって、共同体など夢物語だという声もある。しかし、である。東アジアの先行きが不安だからこそ、できることから一緒に進める意味がある。『反米』に走るのではない。日本がアジアにしっかりした基盤をつくることは、健全な日米関係にとっても決して悪いことではない。～同じ知恵を、いま日中両国が使えないものか。天然ガスなどの海底資源を共同開発・管理する仕組みをつくり、明日の平和につなげるのだ。日本にとって決してひとつとでない中国の深刻な環境汚染も、一緒に対処したらいい。～>

ここにある記事のくだりを、私は「民主化」モデルを念頭に置きながら読んでいます。つまり以下のようなモデルです。



この図式で描かれる「世界がこれから50年間の流れのなかでつくられていくと考えています。(50年後にはこの図式で描かれるような世界となっている、と私はみています。) この中進国の先頭に中国は位置づけられると私はみています。北朝鮮は、もし朝鮮半島が統一されていないときは、この後進国に位置します。日本や米国は、先進国に位置づけられ、 $[\text{経}^{\times} \text{民}]$ に示される「役割」を担うことになります。「東アジア共同体」とか、「アジア共同体」といっても、それを担う国家は、大別して $[\text{経} \rightarrow \text{民}]$ の(図式で描かれる)「役割」を担う国、 $[\text{経}^{(\times)} \text{民}]$ の、また $[\text{経}^{\times} \text{民}]$ の「役割」をそれぞれ担う国に分類されます。そうした三つに大別される「経済発展」と「民主主義の発展」との「関係」から成る「役割」の「関係」が先の「共同体」をつくり出すと私はみています。と同時に、そうした「共同体」の背後にこのような「関係」が存在しているとみています。

それゆえ、『朝日』の「社説」にある「明日の平和」とか「日本がアジアにしっかりした基盤をつくることは、健全な日米関係にとっても決して悪いことではない」といったくだりは、あまりにも「現実」をとらえていない論として私にはみえるのです。というのも、 $[(\text{中進国の}) \text{民主主義の発展}^{\times} \rightarrow (\text{先進国の}) \text{民主主義の発展}]$ で描かれる世界を前提とした「平和」とは一体どのようなものかと考えるからです。

私は『朝日』の「社説」にあるように、この先の明るい未来を語ることを否定しようとするものではありません。逆にそうした望ましい「共同体」をつくるのであれば、もう少し「現実」も直視すべきではないかと述べているだけです。

(12)

ところで1日の『朝日』で興味深い記事は、国際経済学者のポール・クルー

グマンの「未来を語る〈1〉世界経済はどこへ」でした。彼はそこでインタビューに答えて以下のように語っています。「中国の成長がすべてを変えようとしている。たとえば南米のチリですら、最大の貿易相手国はいまや米国ではなく、中国だ。やがて中国は米国をしのぐ世界最大の経済国家になるだろう。」「アジア域内の重心は徐々に変化していく。現在は日本と中国は対等の立場だが、10年後にはアジア経済の中心は中国で、日本は格下のパートナーになるのではないか。」このように語っているクルーグマンは、かつては『フォーリン・アフェアーズ』誌で、中国の経済発展の可能性について懐疑的な見解を示していたのです。おもしろいというか、あまりにも無責任な、イイカゲンなものです。クルーグマン（米プリンストン大学教授）と同様にJ・ケネス・ガルブレイス（米ハーバード大学名誉教授）も興味深いことを述べています。『毎日新聞』—語るⅠ戦後60年の節目に—（1日）で以下のようにくだりがあります。

「～この先の10年が、これまでの10年と同じように続いたら、世界の話題は中国に移り、日本はその陰に入るだろう。国民総生産（GNP）を基準にしたら、もはや日本の成功はあり得ない。戦後の努力は報われたのだから、これからは世界から敬服されることに、さらに力を注ぐべきだ。」「～最近になって気付いたのだが、私の人生における大きな誤りの一つは、中国が世界経済にとって永久的な重荷（障害）にあると考えていたことだ。しかし、それは誤りだと知った。そのことは（世界中の）どこもが中国のようになれることを示している。～」「私はイラク戦争に初めから反対してきた。『イラクの民主化』の名の下にもたらされたイラクの人々の損害は、戦争前よりはるかに大きい。」

ここにあるガルブレイスの話は、いろいろなことを考えさせられます。いろいろあるのですが、中国の発展とイラク戦争の関係について。また、本当に「どこもが中国のようになれる」のでしょうか。「日本のこれからの役割」について、「健全で平和的な経済を維持することだ。幸い、その方向に進んでいると思う。」とガルブレイスは述べていますが、この点についてもどう

でしょうか。

これらについても私は先の「民主化」の発展モデルでやはり考えてしまいますから、少し懐疑的にならざるをえませんね。というのも、私の図式は、1970年代以前においても、また以後においても、世界全体がいつも \langle [経→民] \rightarrow [経^(x)→民] \rightarrow [経^x→民] \rangle で描かれる仕組みにあることを示していますからどの国も「健全で平和な経済」だけでなく政治からもほど遠いところにあることを示していますから。ですから、[ある国の民主主義の発展 \rightarrow ^x 他国の民主主義の発展] に示される関係を生み出さないためにはどのようにすべきか、また今なにが可能かを考える必要があります。何度もこれまで繰り返し述べてきましたように、「自由」、「民主主義」、「公正」の（普遍的）価値を守る、大切にするといったことだけでは一步も前に進まないということをもうそろそろお気づきいただきたいのです。われわれが守っている「民主主義」は、いつも上述したような「関係」からつくり出されてきたものですから、一方のそれを守ることが、他方にはそれを守ることが許さないのです。

もとより私も「自由」、「民主主義」「公正」といった諸価値の大切さはわかっております。しかし、[Aの民主主義の発展^(x)→Bの民主主義の発展^x→Cの民主主義の発展]をつくり出す「自由」「民主主義」「公正」といった価値もあれば、それに対して[Aの民主主義の発展→Bの民主主義の発展→Cの民主主義の発展]に示される「関係」をつくり出す「自由」「民主主義」「公正」といった価値もあります。またそれに関連して、わたしたちは何かを食べて、何かを生産して、消費して生きていかざるをえませんから、当然そこには「経済発展」が介在していますし、さらにそれらを担う人々とその集団の存在を自覚しなければなりません。それは国家であり、国の伝統であり文化といったこともかかわることになります。それは、「普遍的価値」と「国柄」の関係を問うことにわれわれを導きますね。それらを考えますと私の図式にもありますように $\langle \rightarrow \rangle$ はありえても、 $\langle = \rangle$ には決してなりえないことがわかるのではないのでしょうか。

(13)

この「普遍的価値」と「国柄」について高橋哲哉さんは次のように述べています。〈「デモクラシーの行方 高橋哲哉 テッサ・モーリス＝スズキ年
始対談④〉

（『愛媛新聞』1／4）「改憲派は現憲法が日本の『国柄』に合わないという。『自由』と『権利』は何十回もでてくるのに、『義務』と『責任』は少しだから戦後の日本人は墮落したそうです。しかし『自由・平等・正義』という『普遍的価値』が『国柄』に合わないのなら、『国柄』の方がおかしいと思うのが普通ではないでしょうか。」

このくだりは、多国籍企業やトヨタの奥田会長も喜ぶところでしょうね。

私はこの「普遍的価値」が[Aの民主主義の発展^(X)→Bの民主主義の発展^X→Cの民主主義の発展]を導くものであったということを問題にしているのです。ですから、そうした「価値」の問題を正すためにはやはり「国柄」は大切になるのだと、すなわち「文化」や「伝統」はまたその関連から「保守主義」は、重要だとみています。この点に関して、高橋やスズキはあまりにも簡単に論じているのではないのでしょうか。ところで、この「普遍的価値」のすぐ後には、「ポツダム宣言」のなかに述べられた「価値」があることに気がつきませんか。さらに「東京裁判」で開陳された「文明」「人道」といった「価値」が。ですから問いたいのですね。それでは、そうした「価値」はどのようにして作り出されたのでしょうか。そうした「自由」「民主主義」はどのようにして実現されてきたのかと。

また、そうした「価値」を掲げる人々は、どのような生活をしているのかと。何を食べているのかと。急いで付言しますと、これは「保守主義」にも当然ながら該当します。「保守主義」も、そして「文化」や「伝統」も私のモデルの「あの世界」のなかで形成、発展、変容してきました。この点をキチント押さえておく必要があります。「保守主義」すなわち「国柄」も相当に問題があることは言うまでもありません。

ところで、これに対して「国柄」（伝統）はいつも「分が悪い」ように思

いませんか。西洋文化 vs イスラム文化などはその代表的なものです。一番いいことは、「普遍的価値」がいつもすばらしいから「国柄」にまさるのではありません。そうした「価値」を実現させる破壊的かつ圧倒的力（暴力）にわれわれは屈伏しているだけなのです。力には容易にかたがたしません。しかもそうした力のあるものが、悲しい現実なのですが、見事なほどに、見事とってしまうほどに、「普遍的価値」を独占してしまうのです。

それゆえ「国柄」は、それを主張することは、何か格好の悪いものに見えてしまう、思われてしまうのですね。ましてやそこに「暴力」に対して「暴力」をもって対抗していくことになると、これまでの歴史が教えているように、「排外主義的ナショナリズム」だとか「盲目主義的愛国主義」だとか、あるいは「テロリスト」になってしまいがちです。一方の「暴力」は「民主化」を導くものだから大目に見られるのに対して、他方の「暴力」はただ破壊をもたらすものだと扱われるのです。この両者の「関係」を問える「民主化」の議論が必要だと私は思うのですが、そうではないようですね。

たとえば、『論座』2月号「第二期ブッシュ政権の大戦略を検証するー「現状」の破壊から新秩序の構築へ」（ジョン・ルイス・ギャディス論文）の訳注に次のようなくだりがあります。「研究者の多くは、アラブ世界のテロリストの最終目的は自国の政権を倒すことにあるとみている。強権的で抑圧的な政府によって反政府運動を粉砕されたイスラム過激派は、国内での活動の継続は難しいと判断し、外国で活動するようになった。ジョセフ・ナイをはじめとする研究者がテロは本質的に『イスラム世界の内戦』であると位置づけているのはこうした理由からだ。そして～などの中東専門家の多くが、アラブ世界には、不満を表明し問題を解決していくための道筋としての民主主義が存在しないために、行き場を失った社会の不満が、エジプトやサウジなどの抑圧政権を支持しているアメリカに飛び火し、9・11が起きたと分析している。テロをなくすには、イスラム社会の民主化が必要だと言われているのはこのためだ。～」

このくだりは、重要な論点を含んでいます。確かにここでいわれている

ように、「不満を表明し問題を解決していくための道筋としての民主主義」がアラブ世界に存在していないともいえますが、それは同時に、「エジプトやサウジなどの抑圧政権を支持しているアメリカ」の「民主主義」と、どのように関係しているのでしょうか。具体的にいいますと、たとえ「道筋としての民主主義」社会が実現しても、もとよりそれは大切なことですが、それでも「抑圧政権」を支持する「民主主義」社会となっているアメリカのことを考えますと、やはり少し考えざるをえません。すなわち、あるときには「抑圧政権」を支持していく、そのことによって利益を受ける「民主主義」の仕組みが存在しているのではないかと。つまり、アメリカだけに限定されない、「民主主義」それ自体の形成、発展にそうした「抑圧」を必要とする仕組みがあるのではないかと。「パクスブリタニカ」「パクスアメリカーナ」とは、まさに「外」と「内」との「抑圧」とが「民主主義」を介在させて一体化したものといえるのではありませんか。最近では、中国の「人権抑圧」を批判しながらも、「政経分離」として中国経済との太いパイプを持ち続ける先進国（米国や日本、EU）の「民主主義」とは一体なんなののでしょうか。「道筋としての民主主義」と「政経分離」をタテにして各地域、各国の「抑圧」に目をつぶる「民主主義」とは両立するものであることを、わたしたちの「民主化」の歩みは証明しているのではありませんか。換言すれば、「抑圧政権」を支持する「民主主義政権」もかなりの「抑圧政権」ですね。それでは、なぜ「抑圧政権」を支持してきたのでしょうか。なぜ「民主主義」はそうした「抑圧」に手を貸すのでしょうか。これについて逆の視点から考えさせてくれる「記事」とに、以下のものがありました。それは簡単にいいますと「民主主義の発展」と「経済発展」との「関係」について考えることになるでしょうが。

(14)

『産経新聞』（1月3日）の福井晴敏（『亡国のイージス』の作者）と宮嶋茂樹（フリーカメラマン）との「対談」において、福井が「自衛隊の派遣については選択の余地はなかった。日米安保の問題もあるがそれより大事なのが、

小泉首相は口が裂けても言わないけれど…。』というとき、宮嶋は「石油ですか?」と答えている。福井はそれを受けて続けて「そうですね。イラク戦争後に米国の意向を受けた政権ができて、不参加を理由に石油を回してもらえないと（日本は）干上がっちゃう。反対するには、十年後に電気を使う生活を一切やめる覚悟が必要だった。『人道的』という側面だけで考えると、また大やけどをする。」と述べている。付言しますと、私の4～5才頃、母の実家がある瀬戸内海の小さい島（青島）に休みになると遊びに行ったものですが、電気はまだなかったのですね。そのような生活も非現実的ではありませんよ。むしろ「ネット自殺」が繰り返されている「現実」を「現実」として受け入れざるをえないわたしたちはやはり相当に「現実」感覚を失っているのでは。

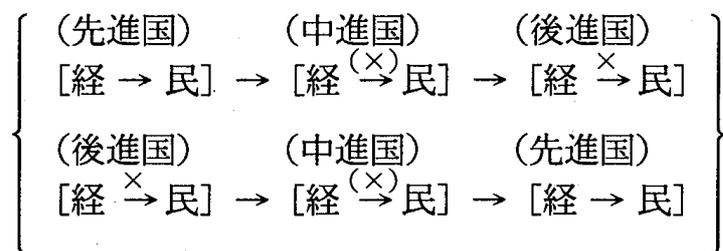
ところで、この福井のいうように「干上がっちゃう」ということは「経済発展」も「民主主義の発展」も大変にしんどいということになることは、確かでしょう。同時に、干上がらないために、われわれが打つ「一手」は、誰かを、どこかの国を「干上がっちゃう」状態にし続けているかもしれませんね。自分が「干上がっちゃう」から、相手がそうなるでも仕方がないというとき、みなさんはそんな勝手なことをというのでしょうか。またそれがわかっているでも生きるためには仕方がないというのでしょうか。決してそれをすばらしいことだとはいわないでしょう。おそらく多数の人は?。われわれは、そうして「経済発展」を「民主主義の発展」を実現してきたのではありませんか。それはすばらしいものとはいえませんが、まあ仕方がないことだと認めたのではありませんか。「道筋としての民主主義」だって腹をすかしたままでは実現しないでしょう。

そんなことを考えますと、先のガルブレイスの「健全で平和的な経済を維持すること」がどんなに難しいかわかるでしょう。

建国時のアメリカ合衆国の人々はインディアン虐殺をしたのはやはり「干上がっちゃう」からでしょうか。私はそうは思いませんよ。先ほどの福井の「干上がっちゃう」でもう少し再考されてもよいのではありませんか。なぜ

なら、もう既に「干上がっちゃっている人々が、世界中のいたるところに存在しているからですね。彼らの存在とわたしたちの「関係」はどうなっているのでしょうかね。

そのためにも、私の「民主化」モデルの1970年代までの歩みを考えるきっかけとして頂きたいですね。先進国は先頭になって下記の図式で描かれる「世界」をつくってきましたが、その過程で、「干上がっちゃう」地域や国がでてきたのも疑いないと私はみえています。



「干上がっちゃう」仕組みを前提として、わたしたちの「経済発展」や「民主主義の発展」は実現してきたわけです。福沢諭吉の「脱亜入欧」は「干上がっちゃう」ことを避けようとした試みともいえますが、そのことは、どこかの国や地域とそこに暮らす人々を「干上がっちゃう」状態に追いやることになったのではないのでしょうか。これらを踏まえて、それでは、「日本人」と「日本」は2005年以降の世界のなかでどのような「生き方」をめざすべきなのでしょう。どのような「生き方」が選択肢としてあるのでしょうか。以下、こうした点について、日米中関係とのからみのなかで論究している記事を紹介してみましょう。その「たたき台」(叩き台)として『読売新聞』(1/1)の「社説」〈「脱戦後」国家戦略を構築せよ—対応を誤れば日本は衰退する〉からいくつか論点をひろってみます。

みなさんはもうおわかりでしょうが、こうした試みをする際にも、私の「民主化」モデルを念頭に置いてくださいよ。もしそうすれば、この『読売』の「社説」のサブ・タイトルの「対応を～」のくだりから考えてしまいますね。対応を誤るかどうかに関係なく、私の「民主化」モデルは、「先進国」の「衰退」を一般的傾向として示しています。それは「不可避」といえるで

しょう。つまりそれは「護憲」であれ「改憲」であれ、あるいはまた「創憲」であっても免れない流れなのです。したがって、それを前提として、そうした「衰退」をどの程度くい止められるか、くい止めるためにはどうすればよいのか、何がより適した代案かを考える必要があります。もう既に日本は「衰退」期にあるのにもかかわらず、それをみないで、こうしたサブ・タイトルをつけるのは、少し？ですね。

(15)

さて、「社説」では「1945年に生まれた人たちも、今年、還暦を迎える」として「戦後」60年を経た今日が「新たな歴史的激動期」にあると指摘しています。そうした日本に対する懸念として次のようなくだりがあります。〈こうした世界的激動への国家的対応を誤れば、日本は衰退の道を進む。変化の先行きを見据えた中長期的国家戦略を構築し、着実、強力に推進しなくてはならない。～しかし、日本が内外戦略ともに迅速適切に対応できるかどうかについては懸念もある。現実の日本には、いまだに「戦後」思想を脱却できない“守旧”勢力が存在するからだ。〉

このような“守旧”勢力はどのようにしてつくられたのでしょうか。これについて「社説」では、〈…文字通り「戦後」の数年間に、連合軍総司令部（GHQ）の大がかりで巧妙な検閲・言論統制、マスコミ操作によって培養された「戦後民主主義」の残滓（ざんし）である。…〉のくだりでその一端をうかがい知れます。またこの後のくだりには、〈GHQが作成した現行憲法前文は、「平和を愛する諸国民」を信頼しさえすれば国の安全は保てるとする趣旨になっている。これに「戦力放棄」の九条二項が重なり、世界の真像とはかかわりなく一国平和主義が貫徹できるかのような「戦後」的幻想を生んだ。～首相および政治全体が、「戦後民主主義」的な軍事アレルギー感傷と一線を画す時である。〉とあります。

ところで、このGHQと「戦後民主主義」との関係を考えるとき、当然そのGHQの後には米国があって、米国と、米国の「民主主義」と日本の「戦後民主主義」との関係についてみることとなります。それはまた、今の米国

や日本の「民主主義」とイラクの「民主主義」との関係を考える際にもかかわる問題です。つまり、そこには米国や（当時の）先進国の「世界戦略」が存在していることを前提にする必要があるでしょう。いいたいのは、GHQと米国を切り離して語っているこの「社説」のインチキ？（お許しアレ）です。GHQが単独で、日本に「民主主義」を押しつけることはできません。それはやはり、米国の存在を、あるいは「覇権システム」の存在を、前提としています。それゆえ「覇権システム」とその「秩序」の形成、発展の歴史をみる必要があります。そこからわかることは、「戦後民主主義」の日本への「押しつけ」は、GHQというよりも、米国の「世界戦略」の一環として理解されるべき問題ではないでしょうか。そう考えますと、この「社説」のなかにある今日の米国の「世界戦略の再編」と、「戦後民主主義」は、結びつけて考える必要がでてくるのではありませんか。これをもっとはっきりいえば、わたしたち「日本人」と「日本」は、ずっと米国とそれ以前の覇権国を中心としてつくられてきた「世界戦略」にそって、忠実に生きてきたといえるのではありませんか。もちろん、私もその戦略を支えてきた、支えるように生きてきたのです。つまり、「戦後民主主義」を日本に押しつけた「世界戦略」と、その「戦後民主主義」を日本から取り上げようとしている「世界戦略」とは矛盾することのない、断絶することのない一環したものなのです。

これらのことを別の観点からみますと、「日本」と「日本人」はこれまで「主体的」に「戦後民主主義」を守ってきたわけではないし、これから先もそうだと私はみるのです。同様に、これから先に日本が「改憲」して第9条を変えらるゝとしても、それもまた「主体的」に変えていったとは思われないのです。いつもそうせざるをえない「圧力」の下で、それに対抗できないままに何かに従っているだけではないかと思います。ただ厄介なことは、「世界戦略」に抗して、逆らって「主体的」な路線を選択することは極めて困難であるということです。つまり「覇権システム」とその「秩序」を前提として作りだされてきた「民主主義」（「史的システムとしての民主主義」）の「構造から脱け出すことは容易ではありません。つまり、「戦後民主主義」を

守っても脱け出すことはできません。というのも、「戦後民主主義」はまさに「世界戦略」によって作り出されたものですから。「覇権システム」とその「秩序」の安定と米国の、というより、米国のなかの特定利害グループの、あるいは今日では中国のそれとの「覇権連合」の形成と発展により利害を共有するグループの、といった方がいいかもしれませんが、その「覇権」の安定にとって日本の「戦後民主主義」の歩みは必要不可欠でした。私はそうみるのです。いま、その変容が求められている、迫られているのも、こうした「民主主義」の構造転換が関係しています。当然そうした転換を導いているのは、もう何度も言及しました「覇権システム」とその「秩序」であるとみています。

1970年代以降の、いわゆる世界的「民主化」の傾向も、こうした仕組みが関係しているとみるのです。少し急いで先まで話しますと、そうした「民主化」と中国の覇権国化の「関係」が見えてくるのではないのでしょうか。

こうしてきますと、私は、「日本」と「日本人」の〈「脱戦後」国家戦略〉という青写真を描くとすれば、『産経』や『読売』では十分ではないといわざるをえません。それでは『朝日』はどうか。これもまた十分なものになりえないのです。

もっとも、これは誰がそうしても十分ではありえないと思います。そこには、やはり「民主主義」と「覇権システム」との「関係」をきちんと理解できていないといった事情が大きく関係していると考えます。あまりにも簡単な、きちんとみてこなかった「民主主義」の見方に問題があったといたいのです。その意味でも今後ますます、「民主主義」（「民主化」）研究のより一層の発展が望まれますが、最後にこの一点だけは強調しておきたいのです。私たちのいま手にしている「民主主義」は、「覇権システム」とその「秩序」を前提として作りだされてきたものだということです。どのような議論をするにも、これをまずきちんとおさえておきたい、おかねばならないと述べて、これで一応終わりといたします。

次に紹介したいのは2006年度前期の「国際政治論」(2006年5月8日)からのものです。

それでは先週の講義のなかで示しましたモデルから話を続けたいと思います。私はこれまでの研究のなかでいわゆる世の中の仕組みを簡潔に描くために、またその際、「民主主義」についても理解する手がかりとなるように、そうしたモデルを自分なりにつくってきました。いわゆる「史的システム」としての「民主主義」に関するモデルです。(なお火曜日の3限目に502教室で比較政治学を講義していますので、もしよければこちらにも顔を見せてください。少し内容は異なりますが、話し手は同じですから、同じような話となっていくと思います。)

私はこのモデルを使って国際社会の歩みを見ていきますし、また同時に政治や政治学の問題も、このモデルで分析していきます。このモデルをいろいろと思案してつくっていくのに20年以上も要しました。まだまだこれからですが。これからイヤというほど何回もでてきますので、よく聞いて頭の中にタタキコンデください。このモデルがあっているとか、ないとか、私には向かない、向くとか、そんなことは横において(オイテ)とにかく一つの見方として、このような捉え方がある、捉え方もあるといった程度でお付き合いをお願いしたい。

$$\left\{ \begin{array}{l} [\text{経} \rightarrow \text{民}] \rightarrow [\text{経} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\text{経} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}] \\ [\text{経} \overset{\times}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\text{経} \overset{(\times)}{\rightarrow} \text{民}] \rightarrow [\text{経} \rightarrow \text{民}] \end{array} \right\}$$

いちばん左側の図式には、国際社会のレベルでは、たとえば、先進国が、国内社会のレベルでは、たとえば大企業が、それぞれ想定されます。つまりいろいろな「担い手」が想定されます。

- ・この図式は、「共時態」モデルです。
- ・「ゼロ・サム」モデルでもありませんし、しかし「ノン・ゼロ・サム」だからといっても喜べません。
- ・国際社会は、こうした図式で描かれるモデルでみることができると私はみ

ています。国際社会の担い手たちは、いつもこうしたモデルで描く「世界」を形成し、発展させてきたといえます。ただし、基本的な仕組みは変わらないものの、それぞれの三つの図式にある担い手はいつも不変ではありませんでした。

このモデルは、一つの方向性を示すことに重点があることに注意して下さい。たとえば、1960年代の[経→民]と、1980年代のそれとは異なるでしょうし、また1850年代の[経^x→民]と1950年代の[経^x→民]の程度は異なるでしょう。しかし、それにもかかわらず、一方で[経→民]で描かれる「世界」がつくられていくには、他方で[経^x→民]で描かれる「世界」が必要であるということ、またその間に[経^(x)→民]で描かれる「世界」が生まれていくことも確かであるということをこのモデルは示しています。また、全体としては[経→民]で描かれる「世界」に住んでいる人々も、それではすべてが同じ条件に置かれているかといえどももちろんちがいます。そうした人々は、じつは[経→民]の図式で描かれる「世界④」の中であって、[経→民] → [経^(x)→民] → [経^x→民]で描かれる「世界(ABC)」をさらにそうした「世界④」の中につくっているのです。同様に、[経^x→民]の図式で描かれる「世界」の人がすべて[経^x→民]に該当するかというところではありません。さらにまた[経^x→民]の中にあっても、[経→民] → [経^(x)→民] → [経^x→民]で描かれる「世界」は確かに存在します。ただ、[経→民]の「世界」に該当するところにみられる[経^x→民]の状態は、[経^x→民]の「世界」に該当する[経^x→民]の状態とはやはり異なるものと考えられますし、少し以前の頃では実際そうでありました。(もっともやはり厳密にはいろいろ考えられます。)

(17)

前回の話で水俣病についてふれましたが、それに関連させて話を続けます。その前に、その時に私が「人権」で一番大切なのは何かと質問しましたね。その答として「生存権」といわれましたが、それは「正解」です。私は「財産権」(私的所有権)といたしました。付言すればそれと営業通商(の自由)

権です。これは「不正解」ですね。

ただし、私がみなさんに考えていただきたいことがあります。もし、私が先に示したモデルのような「世界」がつくられ、そうした「世界」をつくってきた覇権国や強大国、そこに属する企業や「市民」、学者etcが、「生存権」が大切な人権だとわたしたちに教えてきたとすれば、それはやはりおかしいのではないか。「生存権」よりも財産権、営業通商の権利が一番大切なのではないか。なぜなら、「水俣」がそれを一番よく示しているのではないかと、そう私は思うのです。

テキストにある「こんな男女に誰がしたか」に述べてあることは、これから私が述べることですから、テキストをお持ちの方は、今日の講義を聞いた後で序章のところを読んでおいてください。水俣病に苦しむ人々、薬害エイズ、アスベスト（石綿）に苦しむ人々。こうした公害に苦しむ人々をつくり出した仕組みを考えていくとき、テキストの序章にあります「こんな男に誰がしたのか」「こんな女に誰がしたのか」といった人々をつくり出した仕組みと類似していることに私は気がつくと同時に、驚くのです。つまり、私たちは「二度と戦争はしません」、「二度と繰り返しません」と誓いましたが、（もっとも誓っただけですが）すぐまた（水俣病が認定されるのは1956年ですからそれ以前に、53年頃から、病気に苦しむ人々は生まれています。1945年から10年もたっていません。）「こんな男女に誰がしたのか」を問わねばならない、換言すれば、「二度とこのような公害はおこさない」と誓わなければならない事態が生み出されています。その意味ではひょっとしてまったく変（わ）っていないのかもしれませんが。大日本帝国憲法から日本国憲法の世の中になっても、軍国主義体制の社会から民主主義の社会へと向かい始めて、占領下から独立国へと生まれ変（わ）っても、やはり「こんな男女に誰がしたのか」という叫び声がかかしこに聞こえてくるのですから。

このことは、「生存権」という「人権」が大切にされないままにあることを示しているとも言えるでしょう。あるいは、そうした事態になることが、それを導くことが予想される「仕組み」と矛盾しない「生存権」かもしれま

せん。先述しましたように、そうした「こんな男女に誰がしたか」という人々をつくり出していく「仕組み」を形式、発展させていった人々や企業や諸国が中心となってつくってきた「人権」(生存権)であるとすれば、矛盾しないかもしれません。

水俣病を論じるとき、当然のことですが、その批判されるものとして、水俣病とわかりながらそれを放置してきた国(の責任)が、官庁(通産省、厚生省など)があげられます。しかし、その際、なぜ国や官庁がそうした原因と結果をわかりながら、何十年も放置してきたのか、企業の活動を認めてきたのか、こうした点については十分に論じません。それは日本の軍国主義体制を指導した軍人たちは、なぜ多くの戦争犠牲者を出すことをわかりながら「戦争」を継続(放置)したのかについて十分に論及してこなかったのと同じです。なぜ問わないのでしょうか。

わたしたちの「歴史」をふり返ってみますと、「戦争」によって多くの人々(内外ともに)を巻き込みながら、また巻き込まれながら、その悲惨さを前にしてもう二度と…誓いました。そして日本国憲法と第9条の下に「平和国家」をつくろうと誓ったのですね。5月3日は憲法記念日でしたので、いろいろな集会や講演会があり、新聞もその特集を組んでいました。みなさんは国際関係や国際政治を語るとき、平和国家と第9条の問題についてその立場はいずれであれ、連想すると思います。私がみなさんに問いたいのは、「平和憲法」をもった戦後日本において、なぜわたしたちは水俣病を阻止できなかったのでしょうか。水俣病で苦しみ死んでいく人々をなぜ救うことができなかったのでしょうか。よく新聞の投書欄で、読者の人が投稿してそこで日本は戦後、平和憲法のおかげで「戦争」に巻き込まれることもなく、また軍事大国にもならないで、そのお金を経済にまわすことができたので経済も発展することができたのだ。平和憲法を守ることが大切だ。…といった類の記事を読みます。また逆に、これまで日本が「平和」であったのは、「戦争」に巻き込まれなかったのは、また経済発展ができたのは、米国のおかげであり、その米国が今いろいろ苦しんでいる時にいつまでも米国にのみオンブす

るのは悪いから、そろそろ自分たちもそれなりの軍事力をもって国民を守ることを考えるべきだ。…。このような記事もよく見かけます。ところで、こうした議論を、先の「水俣病」との関連で見直していただきたいのです。

水俣病で死んでいった1500名をこえる人々を「戦死者」として見ることはできないのでしょうか。なにもどこかの国から攻撃されたわけでも、「テロ」の犠牲者でもありません。単刀直入に言えば、「日本人」が「日本人」を殺しているのです。そしてそれを隣の、私を含めた多くの人々が、日本人が傍観しているのですね。国家はその「人殺し」を放置しているのです。こうした「戦争」が日本国内で続いていたにもかかわらず、先の投書欄のような論争が繰りひろげられてきたのです。

(18)

それでは次に後3回の講義で使った資料を紹介しておきます。まず6月5日(第8回目)の分です。

前回の続きを今日もと考えていますが、いろいろと話をしまして時間をとってしまいましたが、先週の「たとえ話」、少しわかっていただけましたか。福沢の『文明論之概略』を長谷川さんは解説しながら、丸山眞男氏の「自主的に加入する」云々といった点を、日本が西欧の国際システムに入っていくかどうかはそもそも自主的などといえるものではなく、「強制」的なものであったのであり、それをどうやって後から「自主的」に加入したんだと言えるようにできるか、といった大変な難事であったと話をしているのですね。ところで私たちはその日本にいて生をうけるのですから、私たち一人一人もここで長谷川さんが説くような流れにある「歴史」を「体験」しているはずなのです。たとえば、受験(教育)を考えてもそうですね。もう既にわたしたちの前にルールがしかかれていたわけですし、わたしたちはそこに意識するしないにかかわらず、無理矢理に押し込められるわけです。そこでいい点をとれるものが、後から自信たっぷりに、こうした仕組みの問題点はあるが、(受験レース(競争)であり受験戦争ですから)そこでもまれて、その苦しきからはい上がって、切り開いて強くなることも人生には必要だったという

とき、まさにそれは「自主的」になっていくわけです。ですからこの「自主的」にもいろいろ程度（偏差値）があります。私の図式にたとえて[A→B→C]のCにいるものが、このようなことをいうとしたら、それはよほどどうかしているはずだと思うのです。ですから、それをなんとか「ガマン」するか「あきらめる」といった方向ができていくわけでしょう。「国家建設」（国造り）にも同様に競争があり、その仕組みの中で上位にいけるものと、それがうまくいかないものがでてくるわけです。そのうまくいかない国が、「国際秩序」を積極的に支持するというとき、そこには相当の無理があるわけですね。たとえばそれは「冷戦」の崩壊後に新しい世界の「秩序」が生まれたとしても、その「秩序」はやはり「先進国—中進国—後進国」といった序列を前提としています。その序列を崩壊（解体）させるものではありません。ところで先の話の中の受験レースの「落後（伍）者」はおもしろくないでしょうね。もっとも、わたしたちは本人の気持ちもわからないままに「それで人生が終わったわけではない」とか「受験がすべてではない」などいってしまいます。当然なのですが、そのとおりなのですが、（そうはいっても、受験レースにおいて「敗北」すると、経済的自己決定権、政治的自己決定権、（社会的～）を自分の手に握ることが不利となるのですが）その受験レースと国家（間）レースとが密接な「関係」にあったとすれば、話はまた変わります。国造りがうまくいかないことは、その国民にとっては生活ができないことを意味します。うまくいった（成功した）国が、それに失敗した国に、「国造りがすべてではない」となぐさめを言ったとしても、それはなんにもなりません。国造りのためには「人材」が必要です。その「人材」をわたしたちは、先の受験システムをとおして供給してきたわけです。またそこで供給された人がリーダーとなってそうした受験システムを維持し発展させながら、社会全体にその文化を浸透させていくのです。したがって、官僚になって国を動かしてみようと思うものにとってこの受験レースからはずれることは、ある意味で、人生が終わってしまうことになるのですね。（やはり強引に論をはこび過ぎたのか？）その受けとめ方にも程度差はあるでしょう

が、もしある人が暮（ら）している国家が、ことのほか教育に熱心であれば、その国の中で住んでいるある人にとってレースからはずれてしまうことは、国家からは相手にされないということを意味します。もちろん、周囲の人々はやさしい人も多くいますし（?）、先のようなはげましもあり、また普通一般の人々はいろいろな生活（レース）が存在しますから、このような受けとめ方はおそらくしないでしょう。ただここまで長々と書いてきたのは、もしこのように相手にされない一人として「あなた」自身が扱われたと仮定しまして、（当然それは会社でも、その他の組織でもそうですが、）そこから先の福沢の話にもどるとき、「あなた」にそれほどの苦しい思いをさせる「西欧的国家システム」とは何であり、そのシステムの何がそうした苦しい思いをさせるのかを頭のどこかに置いてほしいのです。そうした観点からこの長谷川論文を読みますと、必ず、読者である「あなた」と「日本国」と「西欧的国家システム」との「関係」が少し見えてくるのではと想ったりします。もしそれが見えますと、「あなた」を中心として、（基点）として、隣（り）の人と、その人々の団体と、その団体の集合である国（構成する人間関係）と、そこからさらに「西欧的国家システム」へと、そして「覇権システム」へとつながる流れがみえてくる、いや感じるができると思うのです。

(19)

それでは次は、6月12日（第9回目）です。

本日のノートは病院のベットの横のイスを机として書いてますので、字が「少し」汚くなるかもしれませんがご容赦ください。

まず福沢の『文明論之概略』を解説した長谷川さんの「論説」は、「西欧的国家システム」の中で「開国」した「日本」が生きていくことの苛酷さを「難病」としての「外国交際」として描いていました。前回（8回目）のノートで私は受験教育を例にとりあげて、私たちの身の回りにある「苛酷さ」と私たち自身がいろいろな人々と「日本」の中において交際する「対人」関係としての「対人」交際が、実は（本当は）いかに「難病」であるかをみなさん

に考えていただきたかったのです。私たちは、「日本」の中において「日本」をある時は、「国民国家」として、いわば他の国家とは異なる「閉じた」空間としてみたり、またある時は、それを「グローバル化」時代の欧米先進諸国や日本がおかれている「開かれた」空間としてみています。そうした「見方」はいずれも「日本」が中心にあるかのように、日本を中心として、そこから「世界」を、この場合は、「西歐的国家システム」というよりも、「覇権システム」とその「秩序」を前提として形成、発展してきた「経済発展」と「民主主義の発展」との関係によって織り成された構造（仕組み）を見ているのですが、それは逆ではないかと私は思うのです。つまり、私たちはいつもそうした構造の中にいるわけですから、つまり $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のモデルで描く「世界」の中にいるわけですから、その意味からすれば、個人であろうと、それが国家であろうと、企業であろうと、またそれらがいわゆるどこの「国籍」をもっていようが、「すべて同じ」の「世界」を担う「人」であり「集団」なのです。そこからみると「難病」の状況に直面しているのは、その「世界」の中で生きているもの、暮らしているものすべてなのです。長くなりましたが、その意味で受験生（学校）も、企業人（企業）も、国家（国下）も、「同じ」性質の「難病」に向きあっているのです。Aの受験生（企業人、国民）であれ、Bの企業人であれ、Cの国民であれ、同じ状態にあるのです。ところで、このように考えますと、「開国」に際して日本が受け入れることを余儀なくされた「条約」は、つまり、「関税自主権」を奪われ、「治外法権」を認めさせられた（押しつけられた）「条約」は、あるものにとってはいつも「不平等」であり、またあるものにとっては「平等」なものなのです。たとえ $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のCからAにいても、そのAの中にもより優位なところにいるものと、より劣位なところにいるものが存在している。それはA, B, Cも同じ構図である。Aの中にもB, Cに対しては優位している場合でも、Aの中で「不平等」を感じている。Aの優位なるものは、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の図式で描かれる「世界」を対内的対外的につくり出すことに成功した。そのための「手段」として「ナショナリズム」が使われる。

もっとわかりやすくいうと、私たちは私たち自身の「生命」と「財産」を守りながら生きていますが、私たちの人間関係をみると、その個人（人間）が属している国家（地域）関係をみると、そのいうところの「生命」と「財産」はすべて同じではありません。またその扱われ方も、一様ではありません。ある者は、ある国は、それを「不平等」と感じたり、また同様に他の者や他の国は「平等」と感じたりするのです。ですから幕末期の「日本」と米国、その他の列強諸国と結んだ「条約」も「日本」と「日本人」の側から見れば、「不平等」と感じているのですが、相手側からみれば、それは別に「不平等」といえるものではなく、まさに「文明」の側にあっては当然のものなのでしょう。たとえ「(不) 平等」と彼らがいわないにせよ、当然とみていたわけです。だからその中で「不利な」ものが、劣位にあるものが生きていくことは至難の業なのです。学校でも、「できる子」の基準に「できない子」があわせるような教育がおこなわれますから「できない子」は追いつくのに大変で、結局そのなかでついていけない子は「必ず」生まれますから、その人たちはおもしろくなくなって「ドロップ・アウト」したようになってしまいます。それは企業もそうでしょう。大企業の基準（ルール）に従って、中・小の、下請けの企業は（従って）生きいくことを強いられます。それゆえそこで働く人々も、正社員であったり、パートであったり、派遣であったりします。そのことは、われわれ一人一人も「法の下での平等」とか一人の市民としてなどといわれても、やはり、受験生や企業人や国民（Aの国民とBのそれ）と同様に、「力」のあるものもいれば、そうでないものもいるわけです。つまり、「力」のない個人がこの世の中で生きていくということは、いつも「力」のあるものとの「交際」において「関税自主権」を奪われ、「治外法権」を押しつけられていることを、まさしく「難病」に直面し、そのまま「持病」として抱え続けて生きていかなければならないのです。その意味でもこの「論説」はいいのです。関税自主権、「治外法権」を本当に身近な内容にかみくだいて話をすれば、どのようなことになりますかね。ヨダンですがこれまでの点を踏まえて「アラブ民族主義」

と「イスラム原理主義」、あるいは「日本・ナショナリズム」と「伊予エスニック・グループ」はそれぞれ[A→B→C]とどのような関係にあると考えますか。

(20)

それでは6月19日(第10回目)を紹介します。アレ「デス・マス」調になっている。気にしないで先にイキマス。

前は休講にしまい本当に残念でした。この教室というか、大学の中でしかほとんど私のような話を聞いてくださるところはありませんから、私としては、自分の精神(的)衛生上からも、休みたくはないのですが。(今日も、机の上で書いてません。病院の中で書いてます。) それでは、今日で長谷川さんの話をまとめてみたいと思います。前回(12回)のノートの終わりの方に書いたのですが、「関税自主権」、治外法権)をもっと身近なわかりやすい言葉に置き換えたらどうですかと聞きましたね。それと「アラブ民族主義」と「イスラム原理主義」(ええ)(ごめんなさい。ここで気がつきました。休講でノートをコピーして配っていません。)
「関税自主権」は「経済的自己決定権」つまり「経済的自由」に、「治外法権」は「政治的自己決定権」つまり、「政治的自由」に置き換えることができると私はみています。この「自由」を国家がどの程度自身の手を得ることができるかで、「不平等」であるとかないとか、といった状態が生まれるのです。「開国」の条約によって日本はその「自由」を「制限」されたことによって「不平等」と「感じた」のです。こうした日本という「国家」が「自由」を「制限」されていると感じたことは、実は、今も私たちのまわりにも多くいてるのではありませんか。あまり好きな言葉ではありませんが、「格差社会」の中で「勝ち組」「負け組」とかいわれますが、この「負け組」は「勝ち組」よりも「自由」は「制限」されていると思いませんか。そうみてくると、いつも私たちは「開国」期の「不平等」条約を押しつける、押しつけられる「出来事」を、何も1853年、54年とかいわないでも、日々のまさに日常生活のなかで、繰り返し経験しているわけです。その意味では、毎日の生活の中で「不平等」を感じた人々は、

「明治維新」を、またそのために「内戦」をおこして、旧幕府体制を崩壊に導くことが望まれるわけですが、どういうわけか、それはおきません。というのも、かつての幕府を倒して、明治維新を断行して新政府を樹立した人たちが、彼らに対して彼らもまたかつての旧幕府と同じように、旧体制となって列強の圧力に対抗できない、それゆえそうした体制の下では自分たちの生活を守れないと感じた人たちが第2、第3の「明治維新」をおこそうとするとき、そうした動きをつぶしてしまうからなのです。そのために、つぶされた人々は、つぶす側の人たちと比べて、政治的経済的自由が、つまり自己決定権が「制限」された状態に置かれています。それは、 $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ のBやCに置かれた状態を意味します。CがBに対して、BがAに対して日々の「明治維新」を行っているのですが、まったくそれがうまくいかないで失敗するのは、たとえばいうと、日本の社民党や共産党が小泉自民党体制に対して、「明治維新」をおこそうとしてそれがいつも失敗して、政権をひっくりかえせない状態に似ています。逆にいうと、何も二度、三度も明治維新をおこさなくてもいいと思う、現体制に満足している人々が、それに反対する勢力をおさえることに成功していえるといえます。そこには、国の内部に、政治的、経済的自己決定権を自己の手中に握ることのできる人とそうでない人とが、またその決定権（自由）の範囲がより広い人とより狭い人とが存在していることを示しています。それゆえ、より広範囲な人々は、それに満足するでしょうし、より狭い人々はさらにより広い、大きな自由を得ようとするでしょうが、それが $[A \rightarrow B \rightarrow C]$ の仕組みの中でしか得られないとすれば、なかなか大変です。そうした状況に、国際関係の力学が働きますから。

少し話を別の方向に移しますと、たとえば米軍基地を抱える沖縄の政治的、経済的自己決定権は、やはり相当に制限されているわけですが、この沖縄が米国に対して（「開国」を迫り、長期間にわたって「不平等」状態に置かれ続けている沖縄をつくったのですが）明治維新をおこそうとして、そのために「内戦」（内乱）をおこそうとしても、その見込みはありませんし、旧幕府勢力である小泉政権は、その米国の支持を得て盤石でありますから、まっ

たくそうしたことは実現できそうもありません。今の47都道府県でかつての薩長連合勢力をつくる動きはありません。しかし、今の日本をみていて、「明治維新」が必要とされている時期はまさにこの時期ではないかと思うのです。これほど「グローバル化」という「列強」の外圧のもとにさらされ続けている「日本」は、「日本人」はそれを必要としている、と私は思うのです。しかしやはり「感じた」状態になっていないようです。

(21)

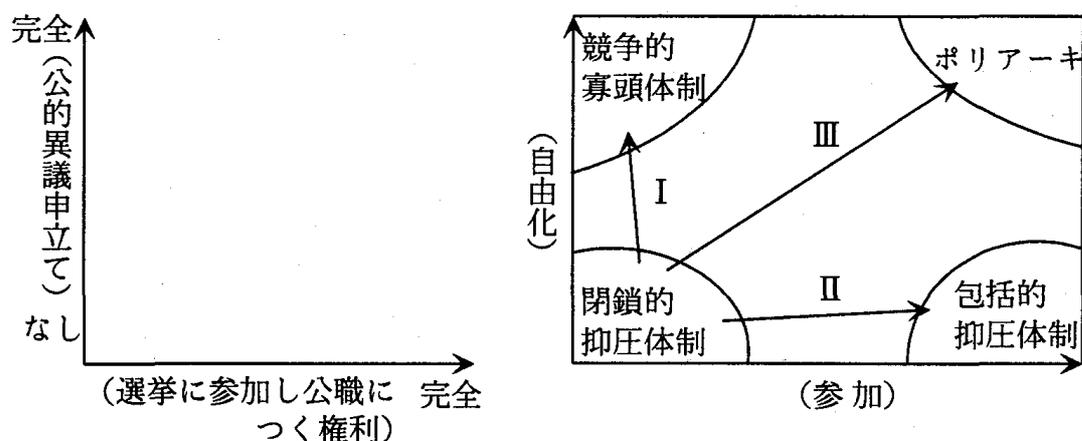
それではもう本当の「終わり」にしたいと思うので、あと2回の「比較政治学」での話を紹介しておくだけにしたい。はじめに2006年6月27日（第12回目）を、次に7月4日（第13回目）を載せておく。

今回からまたテキストにもどり、「ポリアーキー」について考えていきます。これまでの図式を使って話をしましょう。たとえば、比較しようとする対象の国がA, B, Cの三ヶ国あるとします。「民主主義」（「民主化」）の歩みを測定する「物差し」を使ってみると、Aが「民主主義」をほぼ実現していると「測定」しました。それに対して、Bはその「物差し」を使ってみると、Aの半分の歩みと測定されました。Cは、まったく歩みを測定できないことがわかりました。ここで使った「物差し」は「ポリアーキー」というものです。

「ポリアーキー」という（比較）政治学の「概念」は、R・ダールという学者が、「民主主義」という用語に置き換えて打ち出したものです。話せば長くなりますが、この「ポリアーキー」は「公的異議申し立て」（「自由化」）と「参加」（「包括性」）の二つの次元から構成されています。

〈「民主化」の二つの理論的次元〉

〈自由化、包括性、民主化〉



「ポリアーキー」（「民主化」の歩み）と「帝国主義」とが「独立」した、「関係」のないものとして理解されています。これに対し、私がこれまで語ってきたのは、この右上の図のポリアーキーを示すところに位置するAが、Cを植民地や従属地とすることによって、Cがポリアーキーにまで到達できなくしている状態をつくっているとき、この物差しでは、Aを批判することもできないし、そうしたAのポリアーキーの問題点を考えることも、検討することもできない。さらには、Aのみならず、ポリアーキーそれ自体とCの植民地化、従属化が関係しているのかといったこともまったくこの図からはみることとはできない、ということでした。このポリアーキーの状態にAが入っていくためには、その受け皿である「国家」や、担い手の「国民」が前提となりますが、またその関連で国民経済の建設の問題が含まれますが、これについてもこの図では十分に考えることはできません。※ダールの図で描かれる「自由化」と「参加」を実現する「舞台」である「平時は物を売買し、事あれば戦争するという世の中」が（「ポリアーキー」と）切り離されている。つまり「国際関係」という「舞台」がモデルで描かれないままで、モデルから切り離されている。

さらに、そもそもこのポリアーキーの二つの次元と、ポリアーキーなるものは、どのようにして作りだされたものなのでしょうか。当然ながら、ダールのポリアーキーのモデルにもやはりなんらかの歴史的想定なり前提が存在しています。それをもとに仮説的概念であるポリアーキーはつくられたので

すね。

それについてみる場合、以下の見方が参考になると思われます。(これについてはテキストの159-172頁を見てください。これは後期に話すことですが、少し話しておきます。)

〈(「民主化」の「歴史」についての三つの代表的見方〉

・E・J・ホブズボームの見方

(i)

- ① 「市民革命」と「産業革命」を達成できた国—イギリス、アメリカ、フランス
- ② 「市民革命」は挫折、「産業革命」は達成できた国—ドイツ、イタリア、ロシア、日本、スペイン、ポルトガル、東欧諸国
- ③ 両方の革命とも未完の国—インド、中国などのアジア諸国（地域）とアフリカ、ラテンアメリカなどの植民地、半植民地

(ii) B・ムーアの見解

- ① ブルジョア革命からブルジョア・デモクラシーへ→イギリス、アメリカ、フランス
- ② 「上からの革命」を経てファシスト独裁へと至る「保守革命」→ドイツ、日本
- ③ 「農民革命」から共産主義へ→ロシア、中国

(iii) I・ウォーラースティンの見解

- ① 中 枢 イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ
- ② 半周辺 イタリア、ロシア、東欧諸国、日本（外部）
- ③ 周 辺 アフリカ諸国、インド、中国、ラテンアメリカの植民地、半植民地

これらの見方から、わたしたちの「歴史」の見方には共通したものがあることに気がつきます。やはり「基準」が存在しています。①を「基準」として、そこから②③を見ているように思われます。(もっとも(iii)の場合は少し異なっていますが。) わたしがみなさんに語ってきたのは、これらの見方と

は異なるものです。わたしのモデルで使った図式を使って説明しますと以下のようになります。

①は「経済発展 → 民主主義の発展」に置き換えることができます。

②は「経済発展^(x) → 民主主義の発展」 //

③は「経済発展^x → 民主主義の発展」 //

そして従来は、この「経→民」を基準（物差し）として、そこから②と③をみて、比較してきたと私はみます。

これに対して、私の物差し（基準）は、これまで何度となく、みなさんに示してきた「あの世界」なのです。（共時態モデルです。）

「経→民」 → 「経^(x)→民」 → 「経^x→民」を物差しとして①については（「経^x→民」 → 「経^(x)→民」 → 「経→民」）「経→民」 ②については「経^(x)→民」 ③については「経^x→民」とそれぞれの「民主化」の歩みを比較して描くことができます。つまり、そこでは、①②③の「関係」を前提とした「比較」となっています。先ほどのホブズボームの見解を私のモデルで見直しますと、〈「経→民」 → 「経^(x)→民」 → 「経^x→民」〉を物差しとして、「経→民」に示されるように「市民革命」と「産業革命」をうまく実現できたイギリス、アメリカ、フランスと、「経^x→民」に示されるように両方ともうまく実現できなかったアジア、アフリカ、ラテンアメリカの植民地、半植民地となった諸国とが、「関係」の枠のなかで比較されることによって、両革命を実現できた国とそれができなかった国との比較（①と③の比較）が、全体としての「関係」（史）の中で比較できることとなります。

ところで、先述の「ポリアーキー」なるものがEJホブズボームの①であり、B・ムーアの①であり、I・ウォーラースティンの①であるとき、また私の図式の「経→民」の「民主主義の発展」として描かれているとすれば、それは「関係」として描かれていないこととなります。

すなわち、次のようにまとめることができます。

① 「ポリアーキー」として位置づけられる国 → 「経→民」として描かれる。

② 「ポリアーキー」として十分には位置づけられない国 → 「経^(x)→民」 //

③ 「ポリアーキー」としてまったく位置づけられない国→ [経^x→民] "

私のモデルで描く「世界」([経→民] → [経^(x)→民] → [経^x→民]) からそれを物差しとして上の①②③を位置づけ直すことの大切さを私はこれまでみなさんに述べてきたわけです。そうするとき、従来は、ポリアーキーに到達した、より望ましい「正常な」(ノーマルな)「民主化」の「発展」(歩み)とされたものが、[経^(x)→民] → [経^x→民] と結びつけられていたこと、つまりそれらを前提として、はじめて [経→民] が、すなわち「ポリアーキー」とされる状態が実現できたことが理解されると同時に、その「正常な」とされたものの問題点が考慮される必要性を気づかせることになる、そう私はみています。つまり、「ポリアーキー」概念ではそのことがわからない、理解できにくいのです。それで、[経→民] として、それをさらに [経^(x)→民]、[経^x→民] と結びつけることによって、みていくことを私はテキストでも述べています。それは、③についても、[経^x→民] の歩みについても同様だとみています。

(22)

前回お話ししたことを少しだけ、ほんの少しだけ見方を変えて説明します。本当に簡単にいうと私たちのこれまでの、そして今の「民主化」の歩みを「比較」する作業はインチキだと、私はいつているのです。その理由は、たとえばAとCの「民主化」を比較するとき、その比較の「物差し」というか測定基準として、Aを使って、それでAをみて、Cをみているということだからです。つまりAを「物差し」として、それでAとCを比較するのです。これは公正ではありません。ではなぜこうなるのでしょうか。それはわたしたちのこれまでの「近代化」の「歴史」とその見方、理解の仕方が写っています。

どうしても、イギリスであるとか、フランスであるとか、アメリカ(合)であるとか、そうした西欧(洋)の歩みがはじめに話のもとになってしまいます。そこからそれ以外の地域や国をみてしまいます。もちろん、二国間の

比較ができないとか、おかしいとか私はいっているのではありません。ただし、比較する人が、既に先入観なり、あるいはものの見方として採用しているものをまったく吟味したり、考察することなく、たとえば「民主主義」はいいとか、あるいはそれに代（わ）るすばらしいものがない段階で「民主主義」を批判してもはじまらないとかいった理由で、もし「民主主義」をみて、理解して二国を比較してしまうと、それはおかしな比較になるといいたいのです。なぜなら、その程度の「知識」や理解のレベルで、「民主主義」を比較研究したなんてアホなことはいわないでほしいのです。

たとえば、仮にAは「民主主義」を実現したが、Cはそれができなかったことがわかったとします。それを、その結果を次にどのように教えるかが大切です。たとえば、Aはよかったが、Cは問題だとか、ダメだというだけでは、なんのために比較の作業をしたのかということになりかねません。「普通の」研究者なら、そのAを測定した「物差し」が、つまりAを「民主主義」(の国)としてよかったと評価した「物差し」の妥当性について考えるのではないのでしょうか。ここで少し私のことをお話しします。私は「日本」で生まれ、育った「日本人」です。私の父や戦争に行った軍人は「デモクラシー」の「文明」をもった国によって裁かれました。「平和に対する罪」「人道に対する罪」といった罪状です。私は一生この負い目を背負って生きています。ですから私の「民主主義」や比較研究は、こうした感情抜きには考えられません。それゆえ「物差し」に対する私の目は厳しいものとなりますし、それは仕方のないことです。中国に行って「戦争記念館」を出た後で、私は思わずつらい気持ちになりました。それはこの負い目をまた背おうと感じたからです。一方は「民主主義」の国となれなかったという「負い目」で、他方は「侵略」したという「負い目」です。ですから、私の頭はこの「民主主義」なるものと、「侵略」なるものでいつも一杯でした。とてもじゃありませんが、正面を向いて歩く自信がもてません。ですが小泉さんのような神経にはなれません。簡単にもう過去のことだからではすまされません。「民主主義」なるものが私のまわりにある限り、それから離れることはできないのです。

R・ダールの「ポリアーキー」は、あたかも客観的な西欧でもない非西欧の「歴史」とも直接には関係のない、学問的仮説概念の構築といったよそおいをこらしていますが、やはり私は、そこに何かわりきれないものを感じてしまいます。ダール以上に、日本の研究者やアジアの研究者、そしてとくにこれからは中国の優秀なエリート研究者もそうになっていくことは必至でしょうが、彼らに対して、情けないさを感じてしまいます。結局、西欧のどこか「特定の歴史」、「特殊な歴史」をポリアーキーとして「普遍的」なものとして位置づけ直して、それを「物差し」としてその西欧の「特定の国」の「特殊な歴史」を「正常な」、「普遍的」な「民主化」のコースとしてみて、そこからアジアやアフリカ、ラテンアメリカ諸国や、西欧、東欧、中欧の他の国の「民主化」の歩みを比較検証する作業を続けているのではないかと、私はみてきました。付言しますと、R・ダールは「ポリアーキー」を著（わ）した後に、いろいろと悩み続けて「ポリアーキー」の問題点をいろいろと検証しています。もっともその問題点に対する見方は私のそれとは異なっています。今日の発達した資本主義社会の中で「ポリアーキー」の実現が困難だということをダールは強調するのですね。それに対して、私はその「ポリアーキー」なるものがたとえ実現されてもやはり問題だと、つまり「ポリアーキー」それ自体の問題点を私は問い続けているのです。

結びに代えて

あとがき

〈はじめに〉でも書いたと思うが、今回は私にとっては初めての試みともいえる「エッセー」に挑戦した私であったが、大変というかシンドイものであった。なにしろ、母の介護をしながら、その横で時間をみつけては書いていく作業が基本であったから。その後にはまたトンデモナイことが起きた。父の入院である。救急車で父に付き添いながら病院に着くまでの間にもイロイロと考えてしまった。もうダメかもしれないと。医者からも、もうあと1、2時間の命だから、カクゴをと言われたときは、ナニガナダカワからなかったことを思い出している。思えば、この六月も、母はもうダメだと思っていた。もう何回も、これでダメなんだ、終わりなんだとを繰り返してきたが、運よくそれを乗り越えてきた。医者もよくがんばってくれている。看護師も、とにかく医療の現場にいる人々すべてには頭が下がる思いである。それに比べたら、私の「仕事」など。そうは思いつつも、やはりそれなりにアルのだ。もっとも私は書くことが好きだし、「研究」は仕事だと思ったことがない。「楽しい」ものだ。しかし、その「楽しい」研究のためにヤハリ、精神はかなりイカレルし、おかしくなる。研究が楽しくなればなるだけ、私の心はサム一方である。落ち込むばかりである。暗いのだ。私の持病である頭の悪さに追い付き、抜き去ったかの感のある緑内障には悩まされ続け、そのクラサも加わってくる。

ところで、一つの発見が私の中にあった。それは「介護」の「問題」とは、あくまで「夫婦」の問題ではないかということだった。たとえベッドにその一方が、あるいは両方が横たわっていても、主人公はあくまで「介護」されている側であり、する側ではないということだ。それをもう少し踏み込んでいくと、「夫婦」の「心」の、「心」と「心」の「関係」の「歴史」がまずあって、その「歴史」が、場所（トコロ）を異にして、人間関係を変えて、「介護」される、するところの「現場」で繰り返されているのではないかと何度

も考えるようになったのだ。当然ながらそこへ「親子」の、そして「兄弟」の、さらに各々の「フウフ」の「関係」が重なってくるというものだ。やはりそこにも「心」の、「心」と「心」の「関係」がツキマトウ。もちろん、「心」は一人歩きできない。いくら「武士は食わねど高楊枝」だなんて言っても食べないことには、その「心」も動かない。一人一人その「食べ方」、「胃袋」の満たし方は異なっているが、それでも「夫婦」は家庭を持ち、家族を養い養われるのだから、同じような食べ方をしてきたであろうし、私の家族はそうであった。しかし、それにもかかわらず、見事といってよいほど「心」は、「性格」は、まったく同じとならない。それでいいと思うし、だから「介護」においてきちんとした「協力」関係ができないとボヤクこともしばしばなのだ。とにかく「介護」の問題はメグリメグッテ、「心」の、「性格」の問題だと考えるようになった。

そんなことを思いつつ、私の「研究」テーマである「民主主義」ナルモノを頭に浮かべ考えていたわけだ。この「民主主義」を「心」と置き換えてみたらどうなるか。もちろんそんな試みはオカシクなると思いつつも、病院にいるときは、考えているのだ。「民主主義」という「心」は、どのような「食べ方」、「胃袋」の満たし方でつくられるのだろうか。そもそも各国、各地域の料理はチガウのだし、同じモノを食べることはできない。しかし、日本の中ではどうだ。同じモノを食べていないか。イヤ、問題なのは、どの程度、腹の中を満たせるかなのだ。つまりは、お金があるかないかの問題なのだ。経済的余裕があるか、ないかの。そのお金はどうやって手にするのか。それは「経済発展」をめぐる問題へとつながるのではないか。それでは、同じ「経済発展」ならば、同じ「心」を、すなわち、「民主主義」を得ることは可能かどうか。しかし、福沢諭吉の〈文明—半開—野蛮〉の「関係」をもとに、どうやって同じような「経済発展」が可能か。ああでもない、こうでもないとしばらく頭の中でイッタリキタリしているとき、父の一声。〈邦夫、お前はいつもブツブツと「あの世界」からどうしたら「解放」できるかほざいているが、そんなことより、早くこのオレをココ（病院）から、ベッドか

ら「カイホウ」してくれ。〉おそらくそう言っている。そう聞こえた。私はまた性コリモナク、「あの世界」からの「解放」と「病院」からの「カイホウ」とはどのような「関係」があるのだろうか。また考えはじめていた。

「あとがき」の次は何？

〈補 論〉

(1)

〈あとがき〉を書いたあとでもやはりまだ終わっていない。はじめからそんなことはわかっているのだが、とくに今回のように、「エッセー」を書いたあとではなおさら、そのような気がする。まとめようとか、このような企画でとかをまったく考えないで、といってもそれはやはり無理なのだが、できるだけ自然に語るというか、述べてきたので、そうなったのだろう。もとより「研究」に始まりはあれど、終わりなどはないから、いつまでも「一応」の「区切り」である。単なる区切りだから、〈終わり〉の次はやはりまた何かが始まるというか、ずっと何かが続いているというか、まあ、そんな状態なのだ。そのような意味で、私の授業というか、講義で話したものを、この後に紹介しておきたい。その中には『アソシエ』（御茶の水書房 2005年No. 16号）所収の拙論〈中国の「ナショナリズム」に関する一試論 丸山眞男の「幸福な結婚」論を手掛かりとして〉のもとになった講義ノート（原稿）も入っている。まずはそれらを以下に紹介しておく。

これまでの流れを整理しておきます。中国の反日デモ、愛国（主義）運動を、「民主化」の流れ（「民主主義」へと向う動き）の中で捉え直す目的で、これまで〈Nationalism in the Third World〉について紹介してきました。つまり、あくまでも目標としているのは、「民主主義」に向けての動き（「民主化」）と反日・愛国運動がどのように関係しているのかを考察することです。結論を先取りしていえば、もしわたしたちが現在の枠組みのなかで、す

なわち「覇権システム」とその「秩序」を前提としてつくりだされてきた「民主主義」の（仕組み）なかで、中国の「民主主義」の実現を望んでいるとすれば、中国の反日・愛国デモを甘受しなければならないということです。当然のことながら、そこから対立や衝突が生起するでしょうし、また生起してきました。もう少し踏み込んでいうならば、中国の反日・愛国運動は、日本の過去の侵略とそれをめぐる「歴史認識」、「靖国問題」「教科書問題」と結びつけて論じられてきましたが、実は、それらの問題がそれでは何故生みだされてきたかと問うならば、そのさらに奥には、「民主主義」（「民主化」）実現に際して導きだされた、「民主主義」の構造とそれが抱え続けてきた問題が存在するということなのです。これを見ないで、日中友好や日中両国民の友功などありえないと私はみています。われわれが問わねばならないのは、それゆえ、反日・愛国運動をめぐる問題ではなく、「民主主義」の形成、発展における「歴史」そのものであるのです。現実には残念ながら、いつも表面的、皮相的次元で議論がとどまって、先へと行きません。そのためにも、こうした視点から、まずは「ナショナリズム」の問題を取り上げてみましょう。なぜなら、「民主主義」が実現するためには、その「受け皿」が必要だったからです。その「受け皿」はこれまで「ネーション・スラート」（「民族国家」）でありましたし、その「受け皿」をつくるために、「民族主義」（ナショナリズム）は必要とされてきたからです。

（前回、配布しました河合秀和氏の比較政治の枠組みをみても、「国家主義」「自由主義」「民主主義」「社会主義」に示されるように、「国家主義」がはじめに位置づけられています。しかし、氏の枠組みの問題点はこれらが「一国」枠として、静態的に適用されているために、中国がたとえば「国家主義」の段階にあるとき、日本や他の国はどの段階にあるのかを「関係」的に描くことができません。もう少しいうなら、氏の四つの主義が各々どのように関連し合っているかが、またどのような「近代化」の流れのなかにあるのかが、わかりにくい嫌いがあります。「国家主義」と「自由主義」「民主主義」「社会主義」は、対立するだけでなく、相互に補完的な関係にある。矛盾しない

場合も考える必要。)

(p.279) 〈Nationalism in the Third World〉のところで、小見出しから1～2行目 Without question, the most striking political feature of Third World countries is their enthusiastic nationalism. とあります。

「民主主義」の実現に向けて、どうしてもこの「nationalism」が必要不可欠となってきます。第三世界のリーダーはこの「ナショナリズム」をもとに「民主主義」の実現をめざすわけですが、そのために彼らは豊かさをまずは確保しなければなりません。つまり「腹」がへってはいけません。その腹をみたすことが、国民経済(〈「民族国家」としての経済〉)を発展させることにつながります。このことは、第三世界の「Economic Nationalism」を導くことになります。と同時に、そのためにも「植民地」状態から独立国として戦後国際政治の舞台に登場した第三世界の(諸国は彼らの「独立」を、すなわち「民族国家」(としての独立)を死守しなければなりません。ここで考えなければならないのは、われわれ先進国に住む人間と比べて、なお21世紀の今日においても、かつての第三世界の諸国にとってこの「民族国家」の役割は大きいという点です。またそこから「民族国家」を死守するためには、この「民族」の統一を実現して、その統一を長期間にわたり維持していかなければなりません。つまり、もし、この「民族」すなわち「ネーション」が一つだけであれば問題はありませんが、普通、多くの国には多くのネーションが、あるいはエスニック・グループが存在しています。その「力」関係もそこではいつも顕在化しています。すなわち、支配的な「ネーション」(エスニック・グループ)もあれば、それに従う「ネーション」も見られます。従う側からみれば、大きな「強制力」を受け続けていくことを意味します。たとえば中国国内には多くの「民族」が存在していますが、その中でも支配的なそれは漢民族です。漢族という「ネーション」が中心となって他の多くのネーション(エスニック・グループ)を従属させて「中華人民共和国」という「国家」(「民族国家」そしてそれをもとにして「国民国家」をつくってきたわけです。

(2)

中国という国家が外に対して経済的ナショナリズムに訴えるとき、そのナショナリズムのために中国国内では不協和音がおきているのです。その不協和音を静める、押さえるために、権力（暴力）が要請されます。外に対して、外からの干渉、介入を避けるためにも、また内に対して結束を固めるためにもその「権力」は常に要請されます。こうして国家を存続させながら、「民主主義」の実現が可能となるわけですから、「民主主義」は、その内に差別や抑圧をともなっていることがわかります。イギリスをみても、そこではイングランドが中心となって、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドを従えるから「多民族複合国家」をつくってきたわけです。その多民族から一つのイギリス「国民」が生み出されてきたのです。そしてこうした仕組みの下でイギリスの「民主主義」を担う「受け皿」と「担い手」がつくられてきたのです。

こうした視点からの比較が可能ですし、ぜひともこの比較の軸を大切にしたいと思います。すなわち、どのようにして「民族」が統合されてきたか、その要因（原因）として一番大きな力は何か。どのようにしてそこから「国民国家」の統一へと向かったか、また「国民経済」へは。またどのような過程をへてそこから「民主主義」の実現がみられたか。またどのような「民主化」の歩みがみられたのか。

こうした視点を加味しながら、先の資料にもどります。

このようにみますと、英文の280頁（p.280）のくだりも別の文脈で理解できる（する方が適切だと）と思います。

（下から10行目）…Too often a Third World country becomes an independent state without a nation to serve as its foundation.~

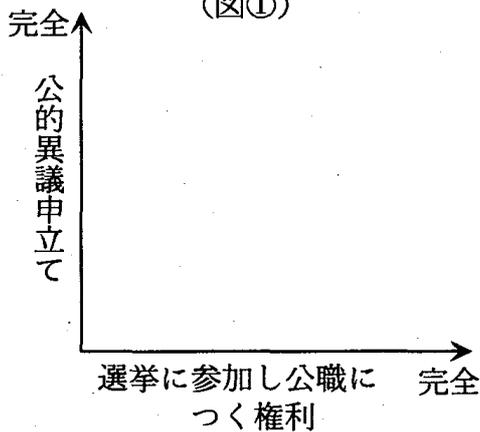
As a result, while nationalistic appeals may serve to unify the people, local customs and identities, may continue to divide them.

This situation creates a political paradox. Not only must the emerging states maintain their independence, sometimes against

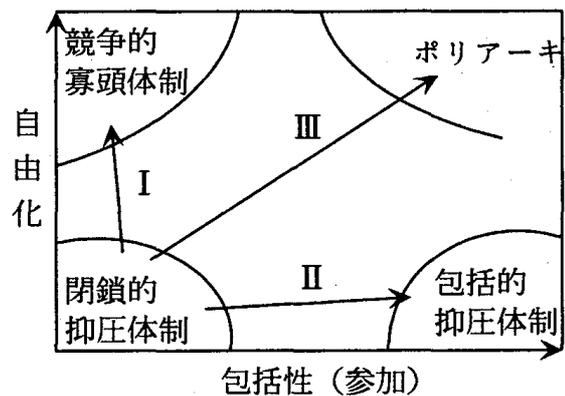
incredible economic and political odds, but at the same time they must also build a nation. Hence, though the emerging states are often the strongest supporters of nationalism in international affairs, they also often suffer the greatest disunity and separatism within their own borders.……このくだりはこれでそのとおりだと考えられますが、もう少し何かがこの内容には加味される方がいいと思います。つまり、何のために「nationalism」が必要とされてきたのかという点です。それを前提とすれば、〈the greatest disunity〉や〈separatism〉にもかかわらず、それらを逆に放置しないで、まとめようとしていく動きが強力に働いてきます。それによって今度はその動きに反対したり、抵抗する動きが生まれ、不統一や分離の流れがでてきます。しかし、問題は、それにもかかわらず、なんとかそれらを押さえようとするまた動きがでてくるのです。なぜか、なぜ中国国内で人権が抑圧されてくるのか、プーチンはなぜチェチェンを抑圧するのか。なぜエスニック・グループの人権が抑圧されるのか、前回、比較する際の問題についてそれまでの話を踏まえて論じました。今回は、具体的に中国の「歴史」をみながら、そこに中国の「民主主義」へと至る歩み（「民主化」）を探し出すことにしましょう。しかし、何度も申してきましたが、中国の「歴史」のなかから、何が「民主化」と結びつき、何が「民主主義」の実現に関係しているかがわかるためには、あらかじめわれわれがその中国の歴史から取り出したある種の出来事なり運動が「民主化」なり「民主主義」のレールのなかに該当していると判断できる「物差し」をもっていなければならないのです。そしてこの「物差し」は勝手きままに変えられるものであってはならないのです。なぜなら「比較」することができません。比較をするためには、同じ「物差し」で測定する必要があります。このことは「比較政治」に関係する学問が、好むと好まざるとにかかわらず、結局のところ一つの「物差し」を前提としてなされていることを、そうならざるをえないことを示しています。当然この「物差し」は「厳正」かつ「中立」でなければなりません。ところが、自然科学ならいざしらず、社会科学において

は、その中立も生身の人間がつくるのですから、相当に難しくなります。よく「ダブル・スタンダード」という言葉をききますが、それも似たような事情から派生するのでしょう。それでもなんとかしてそれらしきものを用意しないと事ははじまりません。それゆえ、この比較の「物差し」づくりが長い間にわたり続けられてきたのです。一方は「学問」の世界で、他方は「現実政治」の世界においてこの営みは行われてきたのです。両方の世界は時に緊張感をもちつつ、「現実政治」に「学問」の世界が奉仕するような関係の下で続いてきたのです。そして完成されたのが「ポリアーキー」という「物差し」でした。以下の図①と図②をみて下さい。

〈「民主化」の二つの理論的次元〉
(図①)



〈自由化、包括性、民主化〉(図②)



(R・ダール『ポリアーキー』三一書房
5-8頁。)

(3)

この図式と河合秀和氏の「国家主義」「自由主義」「民主主義」「社会主義」の枠組み、ならびに英文資料のナショナリズム、さらに前回プリントの「民族国家」「国民国家」「国民経済」とを結びつけてもう少し述べておきます。

急いで付け加えておきますが、このポリアーキーの図式に示されていることがらの背後には、これにはありませんが、その「受け皿」としての「民族国家」(「国民国家」)が存在しているということです。それは同時に河合氏のいう「国家主義」(いわゆる「ナショナリズム」)の動きが、ポリアーキーが成立するまで、そして成立した後も決して消滅しないことを示しています。

「社会主義」を担う「受け皿」は国家（「民族国家」）ですから、やはり「社会主義」が誕生しても国家主義が存続することになります。それゆえ考えられることは、「自由主義」の「段階」にある「国家主義」とその段階になお入っていない「国家主義」とは違う（だろう）ということです。そして「自由主義」「民主主義」の「段階」を迎えた「国家主義」は、それを経験していない「国家主義」とは異なるということです。たとえば、絶対王制下の「国家主義」と市民革命を経験した「国家主義」とは異なるとされています。それは権力の不当な介入を制限できる「国家」を後者の段階においてつくるのが可能となったことを示します。これまでよく言及されてきた「上からのナショナリズム」「下からのナショナリズム」とを比較する際、前者の例としてプロシア、明治期の日本、あるいは革命前のロシアが、後者の例として、市民革命を経験したイギリス、フランス、アメリカ合衆国がそれぞれ引きあいに出されるのもこうした「国家主義」との関係を示しています。

ここで『広辞苑』の定義を書いておきます。「国家主義」：（国家を人間社会の中で第一義的に考え、その権威と意思とに絶対の優位を認める立場。全体主義的な傾向をもち、偏狭な民族主義・国粹主義と結びつく。）また「ナショナリズム」：（民族国家の統一・独立・発展を推し進めることを強調する思想または運動。民族主義・国家主義・国民主義・国粹主義などと訳され、種々ニュアンスが異なる。）「国粹主義」（自国の歴史・文化・政治を貫く民族性や国体の優秀性を主張し、民族固有の長所や美質と見なされるものの維持・顕揚をはかる思潮や運動。超国家主義と結びつきやすい。）「超国家主義」：（国家主義の極端なもの。上からの強権的な国家の編成と対外進出の主張が特徴。日本では1930年代半ばから40年代前半に顕著。ウルトラナショナリズム。）「国民主義」：（nationalism）国民の利益や権利を擁護し確立しようとする立場から近代国家の形成を目ざす理想・運動。ナショナリズム。）

少しややこしい話になりましたが、この「ナショナリズム」を前提としながら、ダールの図式に示されるⅠ、Ⅱ、Ⅲの「ポリアーキー」へと至る歴史は実現していくのです。ですから、「ポリアーキー」の実現の「段階」に応

じて、「ナショナリズム」が、「国家主義」になったり、「国粹主義」になったり、「超国家主義」になることが考えられますし、同時に「上から」になったり、「下から」になったりするとも考えられるわけです。それでは、中国の「歴史」においてこの『広辞苑』にある「国家主義」はいつ生まれるのでしょうか。この「国家主義」はヨーロッパの近代を想定した定義ではないでしょうか。たとえば絶対王制。ところが、中国においてこのような動きは清（帝国）においては見られなかったのではないのでしょうか。換言すれば、清が解体することによってはじめて「国家主義」なるものがつくられる素地が形成されたと私はみるのです。

(4)

ところで、われわれは今、「民主主義」の世の中に住んでいます。つまり「ポリアーキー」化した社会に住んでいますから、清帝国の解体は「民主主義」になるためには望ましいことだとみるでしょう。それは徳川幕府体制の解体をみる際も、さらには、戦前、戦中の「大日本帝国」体制の解体においてもそうでしょう。「民主主義」が望ましい「物差し」となることによって、清朝下の中国の解体は望ましいものとして位置づけられます。そしてそこから「ナショナリズム」の方向がよりよいものとされます。そのために「国家主義」も「清」帝国よりはましである、よりよいとして歓迎されるのです。ひょっとすれば、徳川幕府体制よりも1930、40年代半ばの「超国家主義」の方がより望ましいとさえ考えられるのかもしれませんが。なぜなら「民主主義」へと向かう歩みにおいては、その地点により近いところに位置しているからです。（丸山眞男の「日本のナショナリズム」のなかにある「下から」の「ファシズム」の「下から」には多分にそのニュアンスを感じてしまうのです。）これらは今の地点から、「民主主義」社会が望ましいという観点からみている結果ではないのでしょうか。簡単にいえば、「前近代」社会として位置づけられてきたからです。ここでもう少しだけ「比較」の「物差し」を用意しておきましょう。従来、「近代史」は次のように三類型化されてきました。そして①をもとに②③が比較され位置づけられてきました。①が「物差

し」です。

- ① 政治的近代化（民主主義の発展）と経済的近代化（資本主義の発展）の両方に成功した諸国（地域）はじめ「市民革命」（民主化）を実現し、後に「産業革命」（産業化）を実現。
- ② 政治的近代化には失敗、経済的近代化には成功した諸国、諸地域
- ③ そのいずれにも失敗した諸国、諸地域

この類型でいうとR・ダールのポリアーキーは①に属するのです。逆にいうと、R・ダールの「ポリアーキー」はこの①の近代史（「近代化」の歴史）をもとに、そこから「自由化」の歴史と「参加」の歴史をとり出してつくられた概念だといえます。これに対して私の「物差し」は何かを示しておきましょう。

それは、①を〔経済発展→民主主義の発展〕〔経→民〕に、②を〔経^(x)民〕に、そして③を〔経^x民〕として、それらを相互に結びつけ関係論的に描いたものです。すなわち①②③を各々独立した一国（地域）枠として描くのではなく、関係論に置き換えたモデルです。なお詳しくは拙著、拙稿を参照して下さい。

$$\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{1}[\text{経} \rightarrow \text{民}] \rightarrow \textcircled{2}[\text{経}^{(x)}\text{民}] \rightarrow \textcircled{3}[\text{経}^x\text{民}] \\ \textcircled{3}[\text{経}^x\text{民}] \rightarrow \textcircled{2}[\text{経}^{(x)}\text{民}] \rightarrow \textcircled{1}[\text{経} \rightarrow \text{民}] \end{array} \right\}$$

私は「ナショナリズム」はこうした仕組みを前提としてつくられ、またこうした仕組みを支えてきたとみています。それは、「民主主義」「国家主義」「国民主義」「国粹主義」「超国家主義」のいずれにおいてもそうだとみています。

たとえば、先の『広辞苑』の「国家主義」と私の図式で描かれる「民主主義」の世界をみるときどのようなことがそこから考えられるでしょうか。ここで簡単に述べておくと、清帝国や徳川幕藩体制は、この私のモデルで描く世界に入っていません。つまり、そこには「国家主義」は生まれていません。その前に補足しますと、わたしたちは、「フランス革命」－「民族国家」（ナ

シヨナリズム) - 「自由・平等・友愛」 - 「あるべき、目標とされる近代化像」とみるために、「ナシヨナリズム」を、またそれを前提とした「民主主義」(「民主化」)をどうしても当然のこととして、なかでも先の①に示した「近代化」を成功例としてみてしまいます。もし、ここで、そうした成功した「近代化」が、私の図式にあるように、そうでない諸国(諸地域)と関係しながらつくられるとすれば、すなわち、そうした①の成功は②や③の失敗と表裏一体の関係にあるとしたら、またそこから、①のナシヨナリズムの「健全さ」は②や③のいびつな「国家主義」や「超国家主義」を生みだしている仕組みに関係しているとすれば、話はそんなに単純ではなくなります。その意味では、清や徳川幕藩体制は、そうした世界とは無縁のものとして、大胆にいうならば、逆にそうしたいびつさを防止する仕組みであったともいえるのです。もっともそこには、また異なるいびつさがあったこともこれは否定できません。

(5)

ところでフランス革命は1789年におこりましたが、その契機となったのはいわゆるイギリスの「産業革命」とそれにとまなうイギリスの産業上の優越に対抗するために、フランスが「挙国一致」の対応を迫られたとみることができます。フランスの「ナシヨナリズム」について、たとえば丸山は「日本におけるナシヨナリズム」のところで、「近代ナシヨナリズム、とくに『フランス革命の児』(G.P.グーチ)としてのそれは決して単なる環境への情緒的依存ではなく、むしろ他面において、『国民の存在は日々の一般投票である』という有名なE・ルナンの言葉に表徴されるような高度の自発性と主体性を伴っている。これこそナシヨナリズムが人民主権の原理と結びついたことによって得た最も貴重な歴史的収穫であった(だから日本でも明治初期の自由民権運動の担ったナシヨナリズムには不徹底ながらこの側面が現れている)。」と指摘しています。このフランスの「近代ナシヨナリズム」すなわち「人民主権の原理と結びついた」、つまり「民主主義」(「民主化」)の動きと結びついたナシヨナリズムが、私の「物差し」の①を、イギリスや他の

先進諸国と死守するために、またそのためには②や③の資本主義と民主主義の発展を阻害、阻止する役割を担ったという側面を看過すべきではないと私は主張したいのです。そうした文脈の中で日本のナショナリズムの「不徹底」さを、日本の天皇制や封建勢力と結びつけて論じるだけでなく、この私の「物差し」の②ないし③に位置した諸国、諸地域と①との「関係」がつくり出す「経済発展」と「民主主義の発展」の世界的仕組み（構造）と結びつけて考察されるべきことを強調したいのです。

それでは長くなりましたが、ここで英文資料をもとに中国の「民主主義」の歴史をみてみましょう。その際、先の丸山の「ナショナリズム」論をもとにすれば、また私の図式を前提とすれば、「国民主義」であろうが「国家主義」であろうがやはりそれは問題を残すものであることは否定できません。誤解を恐れずにいうならば、これからの「ナショナリズム」（論）は、もしそれが求められるとすれば、「覇権システム」とその「秩序」を前提としてつくり出されてきた先の構造を別の何かに、つまり例として〈[経→民] → [経→民] → 「経→民」〉に代えていく運動と結びつくものへと展開すべきであるとみています。私の「伊予エスニック・共同体」はそうした意味での「ナショナリズム」（論）と結びつくものであり、旧来のそれとは、つまり先の構造を結果的に擁護していく「ナショナリズム」（論）とは異なるものです。こうした点から中国の「民主化」の歩みを概観してみましょう。英文資料の中国のくだりと河合氏の資料とは重なる内容ですので、両方参考にしながら進めていきます。現在を語るためには、まず過去を知らねばなりません。それは中国についても該当することです。英文でも中国の20世紀の政治発展に最も関連した諸側面を要約して論が展開されています。たとえば、中華帝国（それは歴史上もっとも成功をおさめた政治システムの一つでした）が、儒教の教えに基づき統治されていたこと、儒教は道德律のみならず政治理論であったこと、道德上の行為と秩序づけられた国家とは等置されていたと紹介されています。そしてそこでの孔子の役割、なかでも中国の為政者に対する、貴族（知識人）階級に対する影響力について述べられています。興

味深いところでは、22頁の下から8行目のところに、〈Government service was considered the most important earthly pursuit, so that civil servants were socially superior to everyone except the emperor himself. The Western idea that a government official is a servant of people is alien to Chinese culture.〉とありますが、こうした公務員の国民といいますか人々に対する意識は、21世紀の中国においてもなお根強く存在していると思います。そこには、教育が儒教社会において非常に重要だとみられていたことが関係しています。そうした教育は、科挙と結びつき、その試験に合格したものが中国の官僚となり、またそうした官僚による政治は、官僚層と地方の郷紳層との社会的結合をもたらしたのですが、これについては、河合氏の22頁の2段落、3段落目にあります。河合氏も言及していますが、19世紀の半ばにイギリスで文官公務員制改革の際に、モデルとなったのがこの中国の科挙をもとにした官僚制であったのです。ちなみに（因みに）日本は中国から多くのものを輸入しましたが科挙の制度だけは導入しなかったのです。ただ、河合氏のこの3段落目のくだりは、戦後、日本の公務員（官僚）試験にも何か似通ったものを私はみてしまいます。

(6)

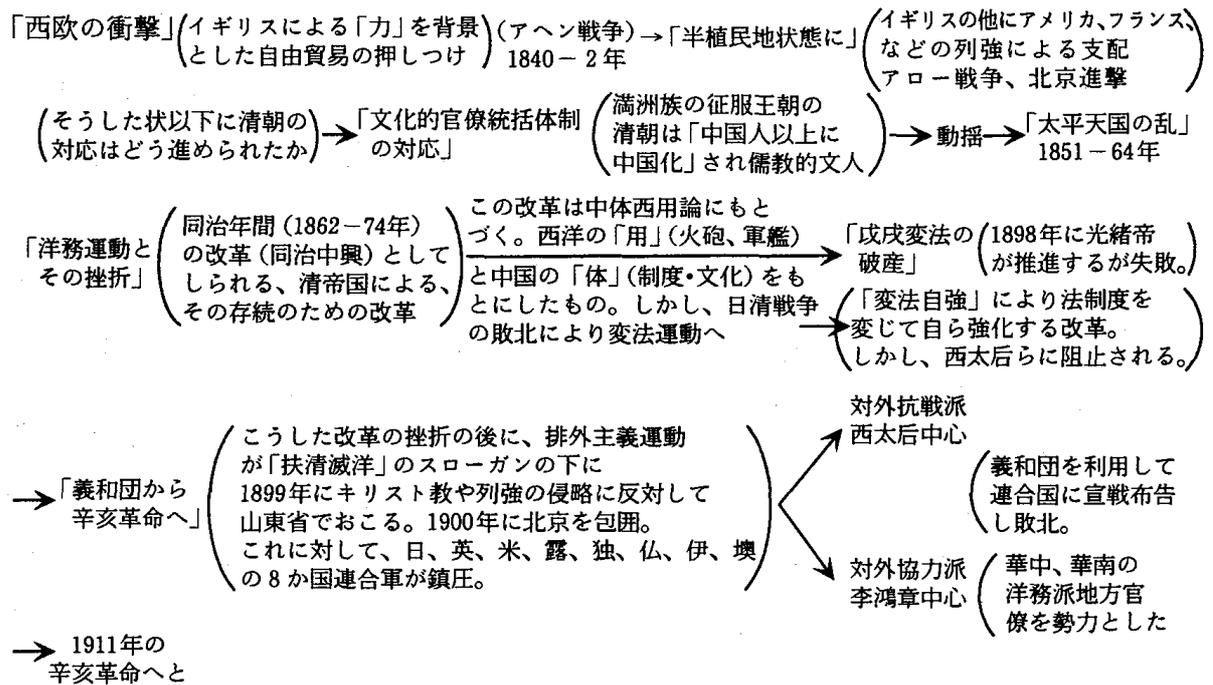
ところで河合氏は4段落目で、「この文人郷紳層が人々の90%以上を占める農民層と官僚機構とを媒介した。官僚層－郷紳層－農民層に至るこのような階層秩序は、王朝の交代にもかかわらず基本的に変わることなく、統一された中国という概念を持続させたのである。」と述べていますが、まさに、「この二千年不易不動の中国に致命的な衝撃を与えたのは、19世紀以降の西欧世界との接触であった。」のです。英文資料222頁の1段落目はこれに呼応した内容です。要約しますと、中華帝国社会は階層化されていて、上は皇帝から、官僚、知識人と、そして大多数の小作人がそうした階層を支えている。商人や職人層は大切な役割を担っていたものの、政治的権力はなかった。こうした社会政治的配置の下で、中国の人々は進んだ文明と秩序だった社会の恩恵に与っていたのに対して、西洋 (the West) は無知と社会的混乱の

なかに沈んでいた、とあります。そして、14世紀から15世紀の間に、後の西洋の政治的経済的發展に導く改革が着手されたのに対して、逆に中国 (the Orient) はそうした改革をすることなく、ひたすら伝統を重んじ続けてしまった、と。

そのことが、〈As a result the West surpassed the East in developing a modern technology and political doctrines …〉に導いたと、そして東洋の抵抗は、〈the pressure of the West's technological superiority〉に屈してしまいナショナリズムや後のマルクス主義のような西洋のイデオロギーが中国古代の哲学にとって代って支持を得るに至った。それで結局のところ 〈Though these Western ideas were modified somewhat, the fact remains that the East was captivated by Western institutions, economic styles, and idea systems.〉

この結論にあるように、中国の後の「発展」は、まさにcaptivate(d) (心を奪う 魅惑する) どころか、西洋の「発展」を押しつけられるのです。その押しつけを拒否したいのですが、拒否できないままに、受容していったのです。私は少なくともそうみるのです。何度も話をしましたように、漱石のいう「強い者と交際しなければいいが、交際しなければならない。そうであれば強い者に従わざるをえない。」といった趣旨のように、なってしまうのです。ですから、この英文は少々、いや大いに「虚偽である」と私はいいたいのです。(しかし、同時に、「西洋のやる事はいい」と自身を信じさせることによってしか、心の安定を保てないこともまた確かでしょうね。したがってどちらに足場を築くかで解釈は違ってきます。しかし、政治家ならいざしらず、研究する者はやはり掘り下げて分析する勇気をもつべきでしょう。もっとも私は最近それを失いつつありますが。)

ところで、ここから少し河合氏の資料をもとに「民主化」の流れを要約しておきます。



※これらの流れは河合氏も指摘するように、「まず国家主義を確立することに向けられていた」と。ここで河合氏は「清王朝が二千年以上も持続した官僚制と文化的正統性に支えられていただけに、むしろそれを破壊することに捧げられた近代史の前半であった。しかもその過程は、一方では欧米（やがて日本の）帝国主義の侵略に抵抗し、他方で民族の反乱を鎮圧する過程であった。そこではすでに見た英米仏のように、自由主義、民主主義、社会主義（アメリカではきわめて弱かったが）が国家秩序の構成要素として組み込まれることはなかった。ドイツと日本の場合のように、「たんに形式的にも国家の構成要素となりえなかった。」「康有為の上書に見たように、議会制度が提案された場合にも、徹底して富国強兵—国家主義—のための手段としてだけ評価されていた。」(232頁)と述べています。ここは非常に重要なくだりです。なぜなら、国家秩序の構成要素として自由主義、民主主義、社会主義を組み込むことのできた国家が、なぜ清を半植民地にしたのか。またそうした国家の「侵略」を受けた清のような国家は、それは近代国民国家ではまだなかったが、そうした侵略に抵抗するためには、富国強兵の選択肢以外に何か取りえたのだろうか。これに関連して、日本の明治期の侵略の歩みに対して、「小英国主義」にならった「小日本主義」の方向があったと主張する論

者もいたが、それを考察する以前に、その前になぜこうした「民主化」の進んだ国家が、このような「抑圧」をしていくのか。またその抑圧に対して、日本もプロシアも、ロシアも類似の「近代化」路線を、たとえそれが①のように両方成功できないとしても、同じような方向をたどらざるをえないのか。それは③によっても、つまり中国においても同じだとみれば、こうした問題をみていく必要があるでしょう。

(7)

さて、中国は辛亥革命を経て、「(1912年1月)中華民国の成立と(1919年)5・4運動」(233頁)

を、そして「国民党と共産党」の二つの政党が「国共合作」、(1921年に李大釗(りたいしょう) 陳独秀らが中心に創立。)「国共内戦」(1924年第1次)そして(27年)

↓
1914年孫文が
日本で中華革命党を
組織し、19年に国民
党となる。

して「国共合作」を経験して、
(1937年第2次
「抗日民族統一戦線」と呼ばれる。)

中国共産党が日本帝国主義に勝利するのです。そして、第21次世界大戦中に不平等条約の撤廃に成功し、国際的地位を高め、戦後は英米仏ソとともに国連の常任理事国となります。

1949年の中華人民共和国の成立以来、〈「人民民主専制」体制〉をとり、権力集中の下に国家建設が進められていく。(238頁)に、中国とソ連との対比があります。ソ連では共産党以外の政党は禁止されている。ソ連では国家公務員試験制度がある程度導入されている。いわゆる「ノーメンクラトゥラ」(共産党の承認を得なければ任命できない高級官僚)を除いては、国家と党の分離が進んでいたのに対して、中国では、「党と国家、それに軍隊の3つがまだ不可分」との指摘。中国をみるときは、イギリス、フランスなどのヨーロッパ諸国が、現在では約22~24カ国含まれていることに注意する必要。その意味では、中国をどうみるのか、そのうちの1~3カ国を中国とみるか。あるいは、額面通りの全体を中国とするか。人口規模により、そのコントロールは権力の集中を必要とする程度が異なる。

前回の話は少しややこしいものだと思いますが、非常に大切なところなので、5/24日に配布したR・ダールの「ポリアーキー」論、また政治的近代化、経済的近代化に関する三つの近代化の（歴史）類型（その中の①）に関係した話なのです。さらには今のイラクやロシア、あるいはミャンマー（ビルマ）の「民主化」とも関連しているのです。その意味で、丸山の「ナショナリズム」と「民主主義」についての見解を、別の英文資料（配布していないのも含む）また私のモデルと結びつけながら、さらに検討していきます。

(8)

まず丸山は「国権論」（尊攘論から発展）と「民権論」（公議輿論から発展）から、すなわち、前者を「政治的集中の原理というものが、中央集権的な統一国家の建設への要素となり、またそれが対外的には国権拡張、つまり国権論となって発展して行く」いわゆる「ナショナリズム」として、また後者を「政治的底辺に向って拡大して行く動向が、御承知のような五箇条の御誓文における万機公論となり、それがさらに自由民権論へと発展して行き、憲法制定に至る一連の過程を形成する」ことにみられる「デモクラシー」として位置づけることにより、その両者の関係について検討するのです。明治期はたとえ不十分だとしてもそれ以降の時期と異なり両者のバランスがみられ、その意味で「健康さ、健全さを認識」できる時代であり、また「明治政府の前進性、進歩性」がみられた、と丸山は指摘しています。しかし、〈「民権」と「国権」との不均衡的な発展が絶えず警戒され、そしてまた絶えずそれではいけないということが、朝野共に意識されながら、そういう線をずるずる辿って行き、ついに今度のカタストロフになった〉と丸山はみたのです。続けてその悲劇の原因として、「一つは勿論日本の国内構造の物質に根ざしていた」こと、「同時に、他方国際環境というものが非常に悪かったということ」、すなわち、「日本がちょうど一人前の国家になった時に、世界が帝国主義的な段階に入ったという事情」を挙げています。このくだりのすぐ後で、丸山自身はどの程度気づいているかわかりませんが、重要な指摘をしていま

す。〈例えば明治十年代の自由民権論者が、国際間の関係というものをどう
 いうふうに見ていたかという、全く弱肉強食の世の中と見ていた。万国公
 法などというものは何にもならぬ、それは強い国が弱い国を脅嚇する手段に
 過ぎないといっている。つまり国内においては、彼等は天賦人権を信じてい
 る。すなわち自然的な力、現実持っている力というものの崇拜ではなくして、
 或る一つの抽象的な道理というか、価値の妥当を信ずる立場であります。
 ところがこの立場を、彼等は国際間には全く適用していない、国際間には全
 く実力の赤裸々な腕力関係しかないというのが、多くの自由民権論者の考え
 方でありました。福沢が、「理のためには「アフリカ」の黒奴にも恐れ入り、
 道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず」ということを『学問のすゝ
 め』でいってる、これが本来あるべき自由民権論者の考え方であります。と
 ころがその福沢ですら〜〉

ここには、現実の、事実としての「自由民権」と理念としての「自由民権」
 が述べられています。丸山は、「本来あるべき自由民権」について、どこか
 らその理念をとってきたのでしょうか。必ずどこかにその手がかりをつかむ
 ことができると思います。たとえば、先に引用したくだりにある「勿論維新
 政府の強行した近代化というものは決して正常的なというか、健全な意味に
 おける近代化とはいえないのでありますが」にもその手がかりをえることが
 できます。つまり、丸山の頭には、正常な、健全な近代化の歩みがあり、そ
 れが「本来あるべき」自由民権のすなわち自由民主主義へと向かう歩みだと
 されているのです。それを探していきますと、ありますね。そうです。「幸
 福な結婚の歴史」のところ。日本の場合は、「ナショナリズム」が「社
 会革命」（としての「民主化」）と「内面的に結合」できなかつたことを指摘
 して、「西欧の古典的ナショナリズムのような人民主権ないし一般にブルジョ
 ア・デモクラシーの諸原則との幸福な結婚の歴史をほとんどろくに知らなかつ
 た」というくだりです。「日本のナショナリズムは早期から、国民的解放の
 原理と決別し、逆にそれを国家的統一の名においてチェックした」とありま
 すが、この「国民的解放の原理」が民主主義に置き換えられます。「国家的

統一の名において」つまり「ナショナリズム」の流れに「民主主義」が圧倒されその中で身動きできない状況に置かれていたとみられるのです。丸山は、また以下のように述べています。「日本が明治維新において中央集権的民族国家の樹立に成功して以後、ナショナリズムは日本の支配的な政治権力のうちに結晶し、今度の敗戦まで、日本の国家体制とそのダイナミックスにとって、いわば体臭ともいえるほど、内在的な性格をなして来た。」それではなぜこのような事態になったのか、これについて丸山は、「…ヨーロッパおよび他の極東諸国（とくに中国）のナショナリズムとの比較において、明治以後の日本ナショナリズムにその特殊な刻印を押した歴史的状況を」概観することで答えています。

(9)

ここは非常に私にとって興味があり、また強引な論理だと思われるところですが、とにかく「ヨーロッパにおける民族意識は最初から一つの国際社会…のなかでの構成員たることを自明の前提として成長して行った。宗教的文化的共同体としてヨーロッパが一つの世界であるという伝統は民族国家への多元的分裂の後も脈々として続いていた」のに、「ところが東洋にはヨーロッパ的意味での国際社会というものは昔から存在しなかった。…東洋諸国はむしろ、ヨーロッパ的「国際社会」に外から、多かれ少かれ強制的に引き込まれた」と述べます。ここには、なぜ人権を大切にするヨーロッパが、中世的普遍社会の伝統を受け継いだ後の民族国家が、さらにはナショナリズムとデモクラシーとの「幸福な結婚」をした、つまり正常かつ健全な近代化の歩みをとげたヨーロッパの民族諸国が、なぜ多くの植民地、従属地をアジアにもつくり出し、「通商の自由」という「自由貿易」の原則名の下に、日本や中国に不平等条約を押しつけたのか、(そこには「アヘン」を媒介しながら強引に商売を自身に有利に展開したイギリスをはじめ、そのイギリスに追随したフランスやアメリカのやり方が含まれますが)といった大切な問題にはまったくふれないで、いきなり次の問いへとわれわれを導くのです。すなわち、「そこで東洋諸国における素朴な民族感情はどこでもまず最初にこのような

外部から一体として迫るヨーロッパ世界の圧力に対するリアクションとして発生」し、その対応を主として担ったのは、「中国でも日本でも旧国家における特権的支配者」だった。それゆえ「彼らの〈民族意識〉はなににより伝統的な政治＝社会体制をヨーロッパのキリスト教と産業主義の浸潤から防衛するという意味を持っていた」ことから、その「ナショナリズム」は「前近代的な」それであり、それは「攘夷思想」に示されていたが、圧倒的なヨーロッパの力の前で彼らの選択したのは、ヨーロッパ文明の採用を「物質文明」に限定して、個人主義とか自由民主主義とかいった思想的＝政治的諸原理の浸潤を可能な限り防止することだと述べている。私はこれらの点についてもう少し掘り下げる必要性を感じている。というのも、不平等条約を締結して、「通商の自由」といった「自由」の下に「自由な貿易」がはじまったということは、それに伴って私的（有）財産権といった「基本的人権」の「押し付け」を経験したとみるのです。またそれを介在させて、それと結びついた他の「人権」も実は「開国」以後日本や中国にはまさに普遍的権として、少なくともイギリス人、アメリカ人、フランス人の「外国人」が滞在することによってそれらの「人権」を受け入れていたとみれるのです。残念ながら、現地に住む人間にはまだその「表」の側面は見えませんでした。そうした「人権」は外から押し付けられたままで、自分自身のものとして自らの手に享受できていなかったわけです。ここで今日的话题を二つ紹介しておきます。その一つは、次の新聞記事です。

(10)

東ティモールで以前に、国連東ティモール暫定統治機構主導の「ゼロからの国造り」が進むなかで、「住民の多くが胸に抱くのは、進出著しいオーストラリア資本に植民地化されてしまうのではないかとの不安や、将来の国家の中軸となるべき独立派組織への不信」がみられると述べられています。そこには、まさに「ナショナリズム」と「デモクラシー」に関係した出来事が述べられているのです。オーストラリア企業が低賃金労働者を求めて、また有利な投資の機会を求めて東ティモールに「進出」してきたが、それに対して

住民は無防備の状態に置かれ、彼らを守る立場にある「国家」が十分に確立されていない。しかもその中心的な指導層となるはずの「東ティモール民族抵抗評議会」が支援物資を横領したりすることが批判されている状態。そこではなお「住民主役」意識が欠如していると指摘されています。これらの記事にある各々の記述はまさに清朝末期の中国や幕末期の日本に重なるものとして理解できるかもしれません。まさに「小見出し」にある「東ティモール産みの苦しみ」です。しかし、そこに注目すべき箇所があります。それは先の評議会の幹部の発言として紹介されています。「国家の枠組みが未整備の段階での、市場原理導入には無理がある。国内産業育成のためにも規制が必要だ。このままでは、また植民地になってしまう」と「懸念を口にした。」この「市場原理」は通商の自由とそれと密接に関連した「基本的人権」が導入されることを示しています。例えば、先の私有財産権をはじめ契約の自由、職業選択の自由をはじめ、外国企業の関係者、現地の人間にも適用されるでしょう。しかし、それはなお国家が建設途上にある人々にとっては不利となります。自由貿易が強者の論理となってそのまま適用されてしまいます。それゆえ「規制」としての国家による介入が求められます。保護する力が必要となります。つまり、その規制は国家権力の集中的統一を求めるでしょう。いわゆる「国権」としての「ナショナリズム」を求めています。(2000年2月7日、『読売新聞』)

このような視点で清や徳川幕藩体制をみとるとき、先の丸山の見方とはまた異なる世界がみえてくるでしょう。それを述べる前に、もう一つの新聞記事(ミャンマーの事例)を紹介します。それは「ミャンマー軍政 弾圧強化」(2000、2、18、『読売』)です。ミャンマー民主化運動の指導者であるアウン・サン・スーチー氏がインタビューに答えて、「現行の対ミャンマー外国投資は軍政を利するだけと批判しながら、ミャンマーが1997年に東南アジア諸国連合(ASEAN)加盟を果たした後、軍政の民主化運動弾圧はかえって強化されたとの見解」が紹介されています。ここにも非常に重要な、丸山氏の「ナショナリズム」と「民主主義」との関係に関連した問題があります。

論を展開する前に、もう少しスーチー氏の話を紹介しておきます。「我々はビジネスに何ら反対していない。国民民主連盟（NLD）は政策綱領で、市場経済を擁護している。しかし、現在の我が国は真の市場主義経済はない。軍政と結びついた一部によってゆがめられている。我々が今、外国投資に反対するのは、現時点では投資すべきではないと考えるからだ。投資の利益は、軍政と一部の特権階級のものになるだけだ。波及効果はあまりに小さく、国民に渡る前にすべてなくなる。」のくだりもいろいろと考えさせられます。幕末期や清朝末期の不平等条約下の自由貿易原則の下の経済は、「真の市場主義経済」ではないのでしょうか。また今の中国と先進諸国の投資は、スーチー氏はどうみるでしょうか。抑圧体制下の中国に外国投資が多くなされていますね。それも民主主義諸国からの投資ですね。また、ミャンマーへの投資を中国、韓国は行っています。

ここには、実は、丸山が対象として描いた日本の「ナショナリズム」と「不幸な」結婚の物語りは、今日の東ティモールやミャンマーにおいても、また中国やイラクにも該当する話であることがわかります。丸山が日本と比較した戦後の中国における「ナショナリズム」と「社会革命」の結合から60年後の今の地点を、丸山はどのようにみるのでしょうか。私には、社会主義市場経済（化）への道を歩み出した今日の中国は、第一の開国期、あるいは第二の開国期の日本と重なってみえるのです。これまでの少なくとも「閉鎖的」な世界から「外」へ出ていかざるをえません。そこでは「ナショナリズム」と「デモクラシー」は「幸福な結婚」とはたしてなるのでしょうか。

(11)

前期も今回で終了します。本日は丸山眞男氏の「デモクラシー」と「ナショナリズム」の「幸福な結婚」に關することがらを中心に話を展開していきます。この「幸福な結婚」観は、「近代化」における代表的な見方—すなわち政治的近代化の目標とされる「民主主義」（民主化）と経済的近代化の目標とされる「資本主義（産業化）—と関連しています。この「民主化」と「産業化」の実現に成功した国が「幸福な結婚」を経験したことになるのです。

逆にいうと、「幸福な結婚」ができたからこそ資本主義の良好な発展を経験したということになるでしょう。その意味では、「民主化」(を経て) → 「産業化」という図式に示される歴史を、「幸福な結婚」を経験する(した)国はたどることになる(なった)とみられてきたのです。この代表的な国として、イギリス、フランス、アメリカ合衆国があげられています。これに対して、「不幸な結婚」を経験しますと、「デモクラシー」が容易に実現できなくなりますから、「デモクラシー」抜きの、つまり「人権」が十分に保障されないまま、「ナショナリズム」の歩みのなかで「産業化」が「資本主義」化が推進されることとなります。そうした歩みから、やがて「民主化」が実現されることを待つわけです。それゆえ図式は「産業化」→「民主化」となります。こうした国は、政治的近代化が、つまり「民主化」の実現には成功しなかったが、経済的近代化には成功した国となるわけです。この代表的な国として、プロシヤ、ロシア、日本があげられています。

わたしが、前期においてみなさんに提起した問題は大変に重要なものです。この問題はたとえば、今の中国においても適用されます。簡単にいいますと、人権の保障が先か、経済発展が先か、国がある程度豊かにならないと人々の生活も、人権も保障できないのではないか。市民社会が育成されないところでの経済発展は抑圧を伴う、したがって人権を保障しながら経済発展を実現する必要がある。このように考えると、中国は「幸福な結婚」を経験でなかった。etc. これらの問題について考えていく必要があります。中国でも丸山のいう「幸福な結婚」が経験できないとすると、それでは一体、そこにはどのようなことが関与していたかをみる必要があります。これは、中国が「憲法愛国主義」の歴史を十分に経験することがなかったともいえるのです。ここでの「憲法」は普遍化された(される)「人権」を前提としたものであり、そうでない明治期の「憲法」などは想定していません。かつてのプロシヤもプロシヤ憲法の下に愛国主義が結びついていました。

〈憲法愛国主義は、予めルール化された「手続き」に従って愛国主義(ナショナリズム)を制御しようとした〉ものです。これは別言すれば、「民主的愛

国主義ということになるでしょう。ここでいう「民主」的とはあくまでも「自由主義的民主主義」の意味です。この自由主義があくまでもこの「民主」の中心的要素ですから、それを強調すると、「liberal nationalism」ということになります。それはフランス革命にその起源をさかのぼれるもので、その革命的価値の多くを具現化するものです。いわゆる「普遍的人権」を尊重して、それを守れるルールをつくり、そうした「手続き」を大切にしながら、愛国主義を制御するということを意味します。しかし、現実にはフランス革命は愛国主義を制御できたのでしょうか。イギリス、アメリカ合衆国においてはどうかでしょうか。「思想」のレベルと「現実」のレベルとの混同は避けなければなりません。同時に、このことはその「思想」のレベルの設定がどのようなものでも許されるということの意味しないということを私は強調しておきたいのです。もしそれが許されてしまいますと、イギリス、フランス、アメリカ合衆国といった「市民革命」とそこでの「理念」があまりにも理想化され、神聖化されてしまい、そのために、無理な比較をすることになってしまうと考えるからです。端的にいいますと、はじめから、「前提」が、比較の「物差し」が誤っているにもかかわらず、それを不問に付していると言いたいのです。先のイギリスも、フランスもアメリカも、革命と同時に、愛国主義が制御できない状態になりました。こうした「歴史」をもっと見つめる必要があります。つまり、丸山がいうようになっていません。むしろ「民権」(人権)の保障は、「国権」の(外への)拡張によっておこなわれていることに注意を向けるべきでしょう。いわゆる「expansionist nationalism」と「liberal nationalism」とは簡単に切り離すことのできないものだったのです。※幕末期の日本、アヘン戦争以降の中国に対する「列強」の干渉は、「憲法愛国主義」がその名のおりにできなくなっていることを示している。

(12)

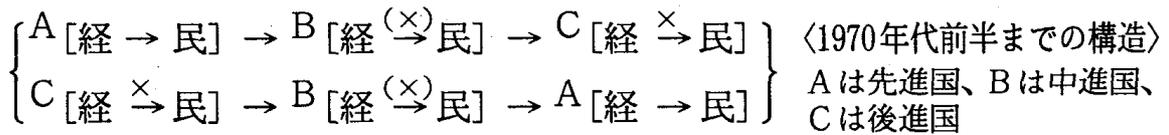
さて、ここでもう少し先の「憲法愛国主義」を定義し直すことにします。それは、「憲法」にもとづいて「国づくり」をしていくということです。つ

まり「普遍的人権」を重視した政治をもとに、国家建設を行う。この国家建設には、国民経済の確立と発展も含まれますし、「国民文化」の創造も入ります。ですから、中国における「憲法愛国主義」がその十分な展開をみないということは、中国では「人権」を、「民権」を大切にしながら経済発展が行われていないということを語っていることにもなります。あるいは、世界的な、普遍化された「人権」を、それを基準とした政治がなされない（不在の）状況の下で、国づくりが行われていることになります。逆にいうと、そうした国づくり（愛国主義）が「民権」を抑圧して推進されている、あるいはそうした国づくりには、中国的人権はあるものの、すなわち、「アジア的価値」とか「アジア的人権」ですが、普遍化された人権は存在していない。といった見方ができるでしょう。しかし、これもまた奇妙なことになります。たとえば、中国の国づくりに、経済発展に、普遍的人権で守られた先進国の人々が関与したモノやカネあるいはそうした先進国の人々自身もかかわっている、協力している。先進国の人々や企業は、「安い」人件費を利用しているが、そのことは「アジア的人権」をアジアたらしめることに寄与している。同時に先進国からアジアへの、中国への雇用移転により、普遍化された人権が、労働権が守られない状況もでてきている。このようなことを考えますと、やはり、「憲法愛国主義」がうまく歩みをみた国と、つまり丸山のいう「幸福な結婚」を経験した国と、そうでない国との「関係」を問うことが大切となります。そしてそこから、「関係」としての「憲法愛国主義」といった論の展開が必要となってくると思うのです。つまり、「普遍的人権」を、それを世界に向かって発信してきたいわゆる「市民革命」の母国と、それを受容してきた諸国との「関係」のなかで再度問い直すことが必要ではないかと主張しているのです。またその関連から、そうした母国の「愛国主義」とそれ以外の諸国の「愛国主義」との「関係」を問いながら、「憲法愛国主義」の「愛国主義」を再検討することが必要であるといいたいのです。「思想」、「価値」を、「関係」として問うことが重要ではないでしょうか。これまでの議論は、そうした「関係」を問わないものであったといわざるをえません。そ

のことは「市民革命」の母国に都合のよい「価値」を与えてきたと私はみています。

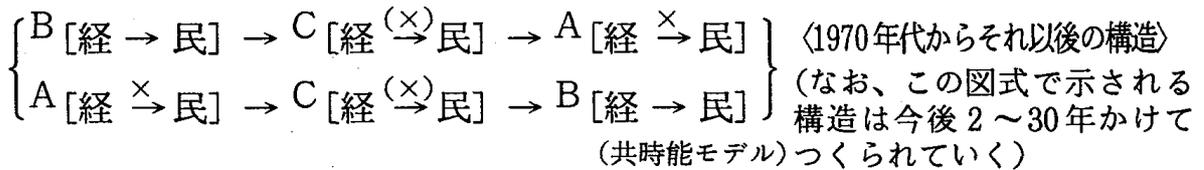
ところで、こうした「デモクラシー」と「ナショナリズム」の問題は、今日にいたってもなお十分な論の掘り下げには至っていません。ただいえることは、それにもかかわらず、われわれは、ユルゲン・ハバーマスの「憲法愛国主義」に代表される見解から、あまり遠くへだたった地点に立つことができないということです。そのことの意味は、これまで私がくどくどと「幸福な結婚」に込められた多くの「不幸」な問題を『告発』してきたにもかかわらず、なお丸山氏の世界の妥当性、有効性が揺らぐことなくみられているということです。中国に対して、経済は自由化されているにもかかわらず、政治はなお抑圧体制との批判、あるいは、反日愛国主義にみられるナショナリズムの未成熟さといった批判も、その基準となっている「物差し」は、丸山的なものであることはまちがいないでしょう。

ところで、拙著をとおしてこれまで私が論及してきたことは、こうした「憲法愛国主義」—ここでの「憲法」は「リベラル・デモクラシー」とそれに結びつく普遍的人権（価値）に体现された憲法であって、明治期やプロシアのそれではないが—は、実は歴代の覇権国が中心となって作りあげてきた覇権システムとその「秩序」を前提として作り出されてきた「民主主義」、すなわち「自由民主主義」の世界システムの構造と切り離せないものであるという点です。つまり、明治期やプロシアの欽定憲法（the imperial Constitution）と対比される「近代憲法」としての「憲法愛国主義」の「憲法」は、覇権国、覇権システムを維持するものであったということを、忘れてはならないのです。その意味では、「憲法愛国主義」は覇権システムとその「秩序」を前提として作り出されてきた「史的システム」としての「民主主義」の枠の中で位置づけ理解されるべきものなのです。



(共時能モデル) 「憲法愛国主義」はこのA、B、Cの関係をもとにして、Aにみられる。→仮にこの憲法が愛国主義を制御できたとき、ここにはこうした「関係」をもとにしていたことが理由として考えられる。

この図で示される世界ができるのに約300年(～500年)近くかかっている。



「憲法愛国主義」はこのB、C、Aの関係をもとにして、AとやがてBにみられる。

〔権威主義的性格の政治 → 経済発展 → 分厚い中間層の成長 → 民主主義の高度化〕



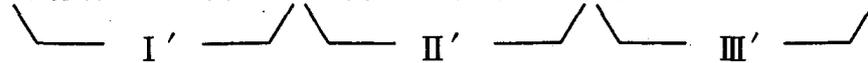
(A、B、Cのすべてに共通した民主化の発展に関する流れ) (通時的モデル)
AがⅢ期にあるときCはⅠ期に位置づけられる。換言すると、CがⅠ期(1970年代前半まで)にあることによってAがⅢ期の段階に位置することができる。こうした「関係」のなかで「憲法愛国主義」は可能。

〔権威主義的性格の政治 → 経済発展 → 分厚い中間層の成長 → 民主主義の高度化〕



(B、Cに共通した民主化の発転に関する流れ) (1970年代前半以降) 通時的モデル

〔民主主義の高度化 → 経済発展 → 分厚い中間層の解体 → 民主主義の低度化〕



(Aに共通した民主主義の発展に関する流れ)

ヒトマズここで終わりとしておこう。読者のみなさん、お付き合いアリガトウございました。

村 田 邦 夫 (むらた くにお)

神戸市外国語大学教授

研 究 叢 書 第 41 冊

2007年3月25日 印刷

2007年3月31日 発行

発行所 神戸市西区学園東町9-1
神戸市外国語大学外国学研究所

印刷所 神戸市兵庫区荒田町3丁目2番19号
有限会社 わかばやし印刷

Monograph Series in Foreign Studies Vol.41

ON DEMOCRACY FOR JAPANESE

MURATA Kunio

Kobe City University of Foreign Studies

2006